
Doors To The Another World

藍原 流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Doors To The Another World

【Nコード】

N0573M

【作者名】

藍原 流星

【あらすじ】

今日から大山第一高校に通う事になる俺こと大原拓真は入学式当日に思い切り寝過ごしてしまう。

学校に向け駆けていく最中、一人の少女と思い切りぶつかってしまふ。

「大いなる風の精霊、シルフィード、我との誓約の下に標的を瞬く

間に切り刻め！ 真空の刃【エアカッター】！」

彼女は確かにそう言った。そして指差した。もちろん、何も起こらない。

その後、ソイツを無視して駆けていくが、ペア決めで再び会い、そのまま強制的にパートナーにさせられるわ、自室に戻れば態度が一変、スタンガンで強制的に襲われるわ、もう大変！

おまけにソイツこと大山香織は忽然と消え、自室にはさっきまで無かった大きな扉が現れる。

好奇心のままその扉を潜り抜ければ、そこは上空二千メートルは下らない大空の中だった――。

笑いあり、ハーレムありの主人公最強、並行世界を救う妄想まみれのファンタジー！

ブローグ 大原家にて（前書き）

なんだかんだあって修正第一弾。後々の章も順次修正予定。

プロローグ 大原家にて

ついに高校入学の当日か……。

俺は微睡む意識でそう思っていた、そんなどこの家庭でもある瞬間を悉くぶち壊す闖入者が一人……。

「すーぱーいもーとぶれす！」

その声と同時に繰り出される微睡みに浸かっていた意識を完全に覚醒させるボディプレス、無論、黙っているはずがない。

「稜！ 何度言えば、お前は理解するんだ！ 鳩尾に当たってめちやくちや痛い——」

「じゃあ、あばら骨に当たって、みんな粉々つてのが良いのかな？」

と、とんでもないことをさらりと口走る彼女の名は、大原^{おおはら}稜^{りょう}、俺の妹だ。

「それよりは鳩尾に当たって、激しい腹痛の方がいいよね？ お兄ちゃん」

悪意を感じられないが、俺の為にしてくれているんだ、あまり文句は言っちゃいけない。が……

「痛く無いようには出来ないのか？」

「何を甘ったれた事言ってるの！ お兄ちゃん！ これはね、すごい痛みでお兄ちゃんにすつきり目覚めて貰おうとしているんだよ？ 痛くなきゃお兄ちゃん起きないもん！」

突如として声を荒げる稜、これは呆れるしかない。
ん？ 自分の寝起きの悪さを認める？ …… 知らん。

「ああ、そうかい、だもつと平和的な起こし方は無いのか？」

「じゃあ、お兄ちゃんが起きるまでずーっとデイープキスしたりしちゃう？」

「いや、それは……………、また機会があったらやってくれよ……………」

「え、いいの？ やった！ って、ん？ どーしたの？ お兄ちゃん」

「いや、何でもないよ、うん」

はあ、なんて女だ……………いくら俺しか愛せない、俗に言うブラザーコンプレックスとか言うやつだったとしても、ここまでされるとさすがに……………いや、何でもない。

はあ、過去に起きたことを、記憶を整理しようっと。

何故かムラムラした感情を落ち着かせる為に。

時は少し遡り、十年前。

その時はまだ孤児院のお世話になっていた頃だ。

孤児院にはさらに一年前に、両親が交通事故で死んでしまい、養う人物がいなくなり餓死寸前の俺達をお隣のご老人が見つけて、しばらく養ってくれたが、やがてご老人方も亡くなり、近くの孤児院に引き渡された。

で、ある時その孤児院で事件が起きた。

孤児院の子供、そこで働いていた人が皆殺しにされたのだ。

俺達は何とか生き残ったが俺の兄が殺され、妹を守る為、額に一生残る傷を負った。

それからあまり覚えていない。

まあ、こいつだけでも守ってみせる！　って心に決めたことだけは覚えているんだがな……。

で、彼女を安全地帯から一步も出さずにひたすら通信教育を続ける毎日、休み時間には俺がありったけの愛情を注いだからな……、ブラコン娘になるのも仕方無いのかもな……。

「……ちゃん！　お兄ちゃん！　どうしたの？　ぼーっとして」

「あ、ああ……、昔の事を思い出してた」

不安そうな稜の顔が綻び、満開の笑みが咲き乱れる。次いで稜が顔を胸に預けてくる。

俺は優しく頭を撫でてやる、すると稜は我慢できずに唇を軽く重ねた後に、抱きつく。それも拒まず抱き締めてやると、すっかり安心しきった声で過去を振り返る。

「……あの頃は大変だったもんね。それにしても、もう8時半なんだけど？」

いきなり素っ頓狂な時刻を口走られ、俺は驚き時計をみる、見事に8時半を指していた。

「おつ、おい！　なんでこんな時間になっっているんだよ！　5時に起こしたんじゃないのかよ！」

「それなんだけど、あまりにもお兄ちゃんの隣りが気持ち良くて目覚まし時計のアラームに気付かず寝ちゃった！　私、寝坊しちゃったね」

彼女は「てへ」とか言って、誤魔化そうとしている、俺は完全に絶望した。何故なら絶対に遅刻するからだ。

「でもでも、朝ご飯はしっかり食べてもらっからね？　だってお兄ちゃんがだあい好きだもん」

「それは無理だと思うな。うん」

「なんでだよーお兄ちゃんのい・け・ずー！」

……………？

「…………お前はたまに俺ですら意味の分からんことを言って困らせるま、それが稜の可愛いところだけだな。…………よし、じゃあな、稜、行ってくる。元気にしてろよ？」

俺は離れてくれた稜にキスをして、うんと抱き締める。

そのあと急いで着替え、食パンを頬張り、玄関の前で見送る稜の少なくとも三年間は味わえないであろう胸の感触を手のひらで存分に味わった後、新しい学校、大山第一高校に向かって猪突猛進の勢いでひた走る。

俺の激動に満ちた、高校生活が始まろうとしているのだ。

ブログ 大原家にて（後書き）

どうだったでしょうか。

次回から本格的に始動し始めます！ お楽しみ！

プロローグ2 美少女との出会い（前書き）

注意！

この作品にはちよっぴり過激な表現がありますが、決してR-15、18作品ではないと思います。

プロローグ2 美少女との出会い

とある街道、現在の時刻は推測して8時45分、三人組の女生徒とすれ違う。

「きゃあ！ エッチ！」

「いやあー！！ ヘンタイ！」

「なんてこと……！」

その際発生した風でスカートが捲れたのだろっ、ドリル巻きの女生徒を筆頭にぎゃいぎゃい騒いでいるが、

「すまん！ そんなつもりはなかったんだ！ 俺は急ぐ！ またな！」

と軽く詫びを入れて再び駆け出す。

「ちよっ！ コラっ！ 待ちなさい！」

「待て！ へんたい！」

「女生徒の敵！」

ふう、危ない、危ない。ああ言うのはすぐに離れるのが無難だよ、全く。パンツなんかには興味ない……よ？

その他に、色々と考え事をしていると、曲がり角で謎の美少女とすごい勢いでぶつかった。

「いったーい！ ちよっと！ 気を付けなさいよね！ 平民のくせに、生意気なのよ！」

「うるせえ！それはこっちの台詞だ！なあに貴族ぶってるのか分らんが、曲がり角にさしかかったら一度は確認しやがれ！」

自分はとうなんだって言うツツコミは禁止ね。

「う、うるさい！ うるさい！ うるさい！ いいわ！ こうなったら貴族の……じゃない、私の恐ろしさを思い知らせてやるわ！」

うわぁ……、また変なのに出逢っちゃった。今度は俺でもわかるオタクかラノベ中毒者かよ。

「……今、私をオタクだなんだと思ったわね？」
鋭っ！ 心読んだんじゃ……？

「さ、さあね？」

明らかに動揺した。読んだ。読みました。超能力者いました。

「バレたら仕方ない、始末するわ！」

えええええ！ ま、マズい！ 殺される！

「大いなる風の精霊、シルフィード、我との誓約の下に標的を瞬く間に切り刻め！ 真空の刃【エアカッター】！」

彼女は突然俺を指差す。俺は反射で身構える。しかし何も起こらない。

当然だ。こんな魔法も超能力も無い世界、何か起きたほうがおかしい。

彼女は「ああ、昨日アニメ見て寝てなかったんだっけ」と呟くと、

こちらに近づき一言、「ム力つく！」と、大胆にも水色の下着をさらけ出しながらのかかと落としを俺の脳天に喰らわせる。意外と強烈な一撃に混乱しそうになり、狩猟本能が表にでそうになる。

「てめえ、何しやが——」

「土下座」

俺は一瞬だけ、ほんの一瞬だけ思考回路が全停止する。

「もう一度言うわ、土下座しなさい。五秒以内にしないと次は蹴りが飛ぶわよ？」

怒気が籠もった謎のオタク少女の言葉に俺は訳も分からず、土下座した。なのに強烈な蹴りが飛んできた。

「何で蹴る！ 土下座しただろう！」

「土下座してなさい！」

オタク少女はそう言って土下座している俺の頭を踏みつける。

……泣かす！ 後で絶対泣かす！

「何故って言ったわね？理由は五秒たったし、なによりパンツを見られたからよ」

「2・5秒しか経ってねえよ！ それにパンツも……」

そこで俺は口ごもる。脳裏に鮮明に浮かび上がる水色の下着……。よし、ここは沈黙で通そう。

「パンツもなんだって？」

「……………」

「パンツは？」

「
.....
「パ・ン・ツ・は!!」

.....ダメだ、これ以上沈黙を続けると殺される!! 死にたくない
俺は決心して真実を話す。

「
.....見ました」

「あれ？ 何かしら？ 何かの声が聞こえるわ」

そう言ってるお前の足はさっきから俺の足をぐりぐりと踏みつけて
いるがな！

「それはかかと落として攻撃したあなたが悪いと.....あべしっ！」

「あれ？ なんか空から声が聞こえるわね」

「いだい！ ちがうちがう！ 下！ 下！」

「蟻は黙ってなさい！」

言下、オタク少女の踏みにじる力が一段と強くなった。

「ギイヤアアアアアア！」

「くたばったら遅刻するわよ？」

そう言いながら、美少女は頭、主に後頭部を蹴りまくっている。
まさに殺りたい放題である。終いにや殺されるぞ.....。

「分かってる！ 分かってるから！ 蹴るな！ええい！ これ
でも喰らえ！」

頭に来た俺はさっきから蹴りまくってる足を掴み、そのまま引っ張
る。バカ女は案の定、倒れる。そのまま追撃しようとして上にのし掛か

ると、これまた案の定、蹴り飛ばされる。

「ふん！ 私にのし掛かるうなんて平民ごときが百万年早いのよ！」

「誰が平民じゃクソバカチン」

すぐさま飛び起き、制服に付いた砂を払って走り去ろうとした、その瞬間、またしてもあの声が聞こえてきた。

「あーっ！ スカート捲り魔、発見！」

「下着覗き魔でもあるわ！」

「全校女子生徒の敵！」

はぁ、さっきのあばずれ共だ……。

「本当に捲ったの？ ヘンタイ」

「やった前提で話を進めるな！ やってないから！」

香織にその時の状況を説明しようと思ったが、この状況じゃ何言っただって信じて貰えないだろう。

「覚悟しなさい！ か弱き乙女を傷付ける輩は！」

「月に代わって——」

「天誅する！」

彼女たちは、皆それぞれの方向からドロップキックを繰り出してきた。

「ちよっ！ まって！ 誤解だ！」

「『『問答無用！』』」

いや、避けようとするれば避けたのだが、かわせば何か嫌なことが起こりそうだし……、受けようか、かなり痛そうだけど。

「ギイヤアアアアア！」

そのまま、色んな部位に当たり、俺は呆気なく悶絶した。
予想通りの結果だった。

第一章 始まりの扉（前書き）

注意！この作品はちょっぴり過激な表現がありますが、決してR -
15 / 18 作品じゃないと思います

第一章 始まりの扉

——おにいちゃん、今日もいっぱいちゅうしてくる約束でしょ？
——なあに、まだ5時だから寝たいだつて？

——もう、そんなねぼすけなおにいちゃんにはお仕置きしなくちゃだね。

——おにいちゃん、起きてよ、おにいちゃんってば、ちゅうするからね、ちゅう！

——もう、お口にぶつちゅう、ってやっても起きないなんて！
もう！——

「……拓真！ いい加減、起きなさい！」

「うわっ！ お、おはようございます。あなたは誰ですか？ なんて名前？」

「大山香織よ、よろしく」

俺はよろしく、とつぶやき、辺りを見回す。

ここはどうやらパーティー会場らしい。

いや、よく考えるとみんな制服を着ている、つまりここは学校か。

さすがは大山第一高校、と言った所か、なかなかデカイ体育館だ。

その体育館は煌びやかな装飾をされている、これがアイツの言つてたペア決めパーティーか。

「そうよ」

「なんか言ったか？」

「別に何も」

あつそ、とつぶやき再び辺りを見回す。

さつきからわいわいがやがやとパーティーらしいざわめきが続いて

いるが、そのほとんどが口説き文句なのである。男も女もみーんな求愛している。

下らん。それが俺が最初に思った事だ。まあ、羨ましくないって言えば嘘になるが。

「どうしたの？ 女を口説きにいかないの？」

「ああ。下らん、面倒、興味なし」

「つまり、あんたは金が欲しいのね。よくいるわ、そんな人も。こは異性も金も手に入られるからね。欲望にまみれた学校って言っても過言じゃないわね」

「そうか。流石は現代社会を完全に引っ張っている大山財閥が作つたとされる学校、やることなすことハンパないな。あ、まだ名乗ってなかったな、俺の名前は大原拓真、拓真って呼んでくれ、でもってあんたはどう呼んで欲しいんだ？」

「呼び方がわからないからってあんたは無いでしょ。香織でいいわ」

「そうか。よろしくな、香織」

「ええ、よろしくね、拓真」

俺は、香織と固く握手を交わした。香織曰わくこれがパートナー契約の一番控えめな表現らしい。

ちなみに、一番過激なのは……俺の口からは言えないことだ。次の瞬間、不意に香織が引き寄せる。

そのまま俺は香織に抱かれる形になった。

「え！？ えええっ！？」

「あら、これだけで慌てちゃって。可愛いわねえ」

「う……、うるせえ！」

香織はにやにやと笑い始めた。

……なんだろう、凄く気味悪い。

「ねえ、あんたに妹っている？」

「いるよ、それがどうした」

香織は「ふーん」と呟き、にやにや笑う。一体、妹がどうしたと言
うんだ。

「ま、いいわ、って何やってんの？ 拓真」

香織は自分から抱き寄せたくせに突き飛ばした、俺のせいにして。

……理不尽も甚だしいと言うものだ。

「それにしても一樹の姿が見えねえなあ、一緒の高校に進学したん
だけだなあ」

「一樹？ 一樹って大山一樹のことでしょ？」

「ああ、そうだが、ってか、何で知ってんの？」

「同じ家に住んでいる家族みたいなものだからよ」

……へえ、そうなのか……ってええ！？

俺は驚きで目を見開く。

「うふふふ。それより挨拶に行つてらっしゃい、その内に荷物を
移しておくわ。見られたくないものもあるし」

「……そうか、じゃあまた後でな」

香織は自分の部屋に駆けていった。

そう、この学校は全寮制なのだ。

しかも、ペアとは絶対に一緒に生活せねばならないのだ。女と同居
面倒だし、ありえない。

そんな風に俺が悩んでいると、五人の集団が現れる。

「あつ！ 拓真さん！ お久しぶりです！」

「本当だな！ 拓真！」

「会いたかったわ！ ダーリン！」

「久しぶりだな、拓真」

「…久しぶり」

上から日野桜、大山一樹、谷川真理亜、榊原海斗、森野愛子だ。

コイツ等は中学以来の友人だ。

特に真理亜なんか……、いや、今は止めておこう。思い出しただけで自己嫌悪に陥る。

「おお！ お前達か！ 久しぶりだな！ いやぁ変わってないなあ！」

「そんな！ 拓真さん1ヶ月じゃ何も変わりませんよ」

「そうか、そうだったな！ ハハハハハ！」

こうして五人と雑談に花を咲かせている内に時刻は六時を回った。

「おっと、もう行かなきゃ」

「そうか頑張れよ拓真！ 俺達はいつもお前の味方だからな！」

「おーい香織い！ いるかあ！ 入るぜ！」

しかし中には誰もいない。しかし、荷物は俺のも含めて片付けてある。トイレにでも行ったのだろうと思い、部屋に入る。

と、同時に扉が閉まる。扉の鍵は掛けられ、そばには、香織もいて、その手には、スタンガンが持たれていた。

「そ、それってスタンガンだよな？」

「そうよ」

「シャレにならないよそれ！ 今すぐその物騒な物を捨てろ！」

しかし、香織はニヤニヤ笑うだけで、捨てようとしなない。

「いやよ。だってこれは——」

香織はたった三步で近づき、抱き竦める。

「あなたの自由をうばうものよ？」

俺は必死で抵抗した。だが、香織の現実離れした力に全ては無意味に終わる。

「や、止める！ 止めるんだ！ 香織」

「お休み、拓真、良い夢を」

香織はその手に持っているスタンガンで俺の意識を奪った。

「くっそお……何だっただんだ？」

未だ痺れる体に鞭を打ちながら、辺りを見回す。

俺の部屋らしいが、正面にデカイ扉がある。

その扉からはなんとも神々しい光が漏れ出していた。

「何だこれ？…俺の部屋にこんなの、あったか？」

いや、ある訳ない。だって光が漏れ出してるんだよ？

こんな所に空間があるわけないし、あったとしても光が漏れ出す程
明るくないはずだ。

「じゃあどこに繋がってるんだ？」

宇宙？ 大空？ それともこことは違う世界？

そう考えると自然と体が動き出す。

好奇心がそうさせているのだろう。とにかく、入ってみたい。そんな
気持ちに駆られる。

考えに考え抜き、謎の扉に入ることにした。

俺はゆっくりと扉を開き、入っていく。視界が真っ白く輝いた後に、
地面が消える感覚に襲われ、大空が現れる。

「嘘っ……っ！」

俺は高度2000メートルから、真っ逆様に落ちていった。

第二章 異世界の竜使い（前書き）

注意！

この作品はちよっぴり過激な表現が含まれていますが、決してR - 15、18作品じゃないと思います

遂に異世界進出！

これから拓真はどうなってしまうのか！

第二章 異世界の竜使い

「そんなバカな事があるかよ！ う、うわああああ！！」

まさか好奇心が死を招くとは思ってもよらなかった。

好奇心で開けた扉が天空に繋がってるとは誰が思っただろうか？

誰一人思わないだろう。なにせ、現実では絶対に有り得ないからだ。そして俺こと大原拓真はそんな現実離れした状況で死に至ろうとしている。

「ああ、俺は死ぬのかなあ、まだやり残した事が沢山あるというのに。ああ、稜。なのに、これは無いだろう！」

はあ、もう喚くのやめよ。疲れる上に虚しくなる。

にしても、何でこうなったかなあ？ いや考える意味無いか。だって非科学的だからね。

そんな事考えてると地面が見えて来た。

飛行機でも飛んでいるのかな？

そう思ったその時、何者かの咆哮を耳にする。

「ギイヤアアアア！」

へ？ 何だあれ？ ドラゴン？

「ん？ あそこにいる淑女諸君を助けたまえ！ 我が僕よ！」

おお！ 助けてくれるのか！ あのおっさん！ 何か女と間違えられてる気がするが、気にはしない、助けてくれ！
そして、龍の背中に着地。

……やっぱり、どこのファンタジーが言うように龍の鱗は固いな。
背中が痛いや。

「あ、ありがとうございます！ おかげで助かりました！」
「……………」

あれ、何？ この目線？ 何か刺々しいんだけど？
俺が不可解な目線を感じたその時、龍使いのおっさんはとんでもない事を口にする。

「お前、女じゃない。落ちろ」

「はあ！？ 何言ってるんだよ！？ おっさん又ケてんじゃないの！？」

「又ケてなどいない、自分は教師だぞ。お前が女の子だと思って助けたのに……、はあ、女だったらそのまま、下着姿にしてやったのに……………」

えええええええええ！ それ、性犯罪だよ！？

しかも、教師で！ アカン、お前教師止めてしまえ。即刻！

そう思っている最中、変態教師はさらにとんでもない事を口にする。

「落ちないんだったら無理矢理にでも落とす」

もうここまで来たら人を辞めてしまった方が良いと思う。

そして、変態教師は手をかざし一言。「レビテーション」と呟くと、俺の体が重力のしがらみから解放され宙に浮いていき、そのままドラゴンの背から離れていく。

「落ちろ」

変態ジジイがそう呟くと、俺の体に重力が戻り、また落ちていく。

「この変態教師！ 覚えてろよ！」

「男を覚える事など究極の無駄」

あの変態教師に“情け”の二文字はあるのだろうか？ いや、無い。あるはずない。

にしても、何なんだろうか、このファンタジーな生物たちは！
それに空飛ぶほつきやら絨毯やら、劇場版ドラ●もんで見たような風景が広がっているじゃねえか！

「え、え？！えええええ！？」

ふ、船が、飛んでるう！？ まるで、某ライトノベルみたいじゃねえか！

「てか、迫って来る！ うわ！ うわっ！ 止まれえ！」

すると、空飛ぶ船が何故か止まったではないか！この隙に……
その時、轟音と何かが飛んでくる音、さらには、何かの影が迫ったため、その方向に振り向くと、絶望の厚い雲が心を覆う。

「う、嘘……だろ？大砲撃って来るなんて！それも人間相手に！」

とか言っても状況が変わる訳じゃ無い。素直に落ちよう。

「うおおおおお！当たってたまるかああああ！」

爆音が重なる最中、俺はがむしゃらになって落ちる。落ちる、落ちる、落ちる。落ちなきや弾丸の餌食になる。こんな半分ファンタジーな世界で死んでたまるか。

地面が眼前に迫る。なのにどうしよう、止まらない。このままだと死ぬ。

「うわあああああつ！」

さよなら、俺の親友たち。さよなら、大山香織。俺、死にます。

「勝手に死なせないわよ！ バカ！ 烈風の息吹【ウィンドブロー】」

声が聞こえた瞬間、下から激しい風、確か上昇気流が吹いてきた。そのためか、安全に着陸出来そうだ。

「・・・つてあれ？」

前言撤回。大怪我する。出力が足りない。

「おい！もう少し出力を上げられないのか！」

「ご……ん……………以上……………は無理……………よ」

風のせいでよく聞こえなかったが、言いたいことは分かった。つまり、大怪我確定な訳だ。

「そんなの嫌だああああ！！」

そして、激突、全体に激痛が走る。

「いつつ…俺、生きてる？」

「ええ、生きてるわよ」

「そつ…ありがとつ…香…織…」

「ちよっ！拓真！へ……………所さわ……………き……………へん…い…」

香織がギャーギャー騒いでいたが、ほとんど聞こえぬまま気絶した。

第三章 拓真の火炎魔法（前書き）

本文が長くなりました。

まあ戦闘シーンあるから、仕方ないよね。

注意！

この作品では、ちょっぴり過激な表現が使われています、でも、今回はちょっぴりどころじゃすまないかも。苦手なひとは目次に戻って、次の話から読もう。

V S 香織！魔法を使う相手に拓真、絶対絶命！？

第三章 拓真の火炎魔法

……誰かの声が聞こえる。頬に痛覚を感じる事から、俺は死んでないのか、良かった。

さて、今、頬をぺちぺち叩いているのは恐らく香織だろう。アイツのことだ、しばらくして起きなければ殴ってでも起こすだろう。そろそろ起きなければ。

「……！ たくま！ 拓真！ 気絶しないで！ せめてその穢らしい手を離してから気絶しなさい！」

「……、人様が気持ち良く気絶しようって時に、なんだ？」

「違う！ アンタは人じゃない！」

なっ……、まさかの人権損害発言！？

「はあ！？ どっからどう見ても人だ——」

「あんたは私の奴隷でしょ！」

俺は言葉を失った。あまりのバカバカしさに。いつ俺が私有財産になったんだ。

「それにしても、俺がいつお前の奴隷になったんだ？」

「私とパートナーになった時よ、奴隷君」

……理不尽過ぎる、そんなバカなことが許されるのだろうか？ いや、許されない。もう捕まっても仕方ないのである。

「捕まる？ ナメんじゃないわよ。私は天下の大山財閥、その跡取

りの大山香織よ、警察なんてナンボのもんじゃない！」

ああ、金持ちだったのね、なら今までの理不尽さも納得がつく。
金持ちに口クな奴はいないって言うのは本当だったのか。
香織も、「あ、言っちゃった」みたいな顔してるし……。

「今のはその……、そうだったら——」

「嘔吐くの下手すぎ、それに、スタンガンのこと——」

「それは忘れなきゃ、だ・め・よ？」

「はい、すいませんでした」

香織の笑顔に、どす黒いものが漂っていて……、恐すぎる！！

「しかも、アンタはいつまでお、押し倒してるの？　いつまでその穢らわしい手は私の神聖なる胸をこう、手で包み込むように、もみじゃない握ってんの？　こっ、このヘンタイ！」

「馬鹿馬鹿しい、俺がそんなことなど……おふぁー！」

香織は俺の股間を蹴り上げる。無論、俺は悶える。

「て、テメエ！　何す——」

「誰に向かつて、『テメエ』っていつてんのかしら？　奴隷のくせに生意気よ！」

香織は俺の顔を某ライトノベルのメインヒロインのように踏みつける。その時に制服のスカート丈が短いからか、ちらっと水色のストライプの下着が……ってあれ？　今、踏みつける強さが強くなった気が……。

「……今、アンタの目線が私の水色のしましまにぶつかった気がする

るわ。見たわよね？」

「……すまん」

「はあ！？ 私のスカート覗いて『すまん』で済ませるつもりなの！？ 有り得ない！ 傍観料払いなさいよ！！」

さつきからげしげし踏みつけていた香織の足は俺の顔を蹴り飛ばす。
『てめえ！ 何すんだ！』と言うまえに、どす黒い『殺気』という
オーラが俺の背筋を凍らせる。

いや本当に冷気が漂っているんじゃない？

「女の子って怒らせると恐いんだよ？ 特にスカート覗いてすまん
で済ませるくそバカチンには情けなんて掛けないから」

直後、春なのに凍えるように冷たい風が吹き荒び、水晶のように透
き通った氷の竜が香織の足元から飛び出し、頭上で蜷局巻いている。
そのときの顔は驚くくらいに笑顔だ。香織は怒れば怒るほど弾ける
ような笑顔になるらしい。

「パンツさえ見なければ、ごめんなさいですんだかも知れないのに
ね……」

嘘だ。下着を見ようが見まいが凍殺するつもりだ。もうここまでキ
レたら逃げるしかない。逃げなければ生き残れない。俺は香織に背
を向け、走り出した。

「そうこなくっちゃつまらないわ」

香織は不敵に笑っている、気味が悪い。

「我と契約せし大いなる氷の巨竜よ、わが声に応えよ。今こそ、そ

の姿我に示せ！ 吹雪の巨竜【ブリザード・ドラゴン】！」

言下、香織の足元の魔法陣が一際強く輝き、そこから何体も氷の竜
が追加で現れる。

その氷の竜は俺に猪突猛進の勢いで襲い掛かる！

「ちよつ！ まっ！ マジかよぉ！」

俺は焦りからか、派手にすつころぶ。それが幸いしてか、俺の前で
轟音と共に巨竜が氷塊に変わる。あ、ありえねえ…

「運が良いわね。でも、次は外さないわよ！」

香織が俺に向かって指差せば、二匹の氷竜が襲ってくる。退路を塞
がれた俺はとつさに前転してかわす。まさに紙一重つてところだっ
た。

「さあ、お仕置きの時間よ、奴隷君。凍って頭を冷やしなさい！」

「悪いが、女に殴られて喜ぶほど変態じゃないんでね、香織。テメ
エに一発、拳骨を見舞いしてやるよ」

「だったの一発よけただけで調子に乗らないで」

この時、香織は初めて怒りに顔を歪ませる、そして四方八方から氷
の竜が襲いかかる。

それをなんとか避け続ける。

「ええい、ちよこまかとうざったい！」

魔法陣が更に強く輝き出す。氷竜の一秒ごとの射出が理不尽な程に
増える。

それを避け続ける途中、氷の竜が右手を掠り、右手が氷に包まれた

が、気にせず駆ける。

「ワケのわからん魔法みたいなの使ってんじゃねえぞ、コラ！」

氷に包まれた右手を香織に向かって振り抜く。しかし香織は後方に飛び退き空振りに終わる。

何か冷気を感じ、ふと上を見上げると、四体の氷竜が上空から襲いかかる。

それを前転してなんとかかわし、再び駆け出そうとしたその時、右足が動かないことに気づく。

「げっ！ さっきの氷塊に足を取られたか！」

それを良いことに香織は氷の竜を約20匹放ち、四方八方から襲わせる。

俺は死を覚悟した。絶対絶命ってこのことを言うのか？

そう思っている間にも、氷の竜は一斉に着弾し、俺を中心にうず高い、水晶のように透き通った氷山が出来上がる。

クソ、意識が遠退く。息が出来ない。このままじゃ……、死ぬぞ……。

嫌だ、死にたくない。俺にはまだ、やらなきゃならねえ事があるんだ……！

“ならば貴様は力を求めるか”

はは、遂には幻聴まで聞こえるようになったか。眼前にだんだんと

黒炎が集まり、人の姿を成す幻覚も見えてきた。
俺も、もう終わりか……。

“ 我は貴様を気に入った。圧倒的不利な状況にも関わらず立ち向かうその心、貴様をこのまま死なすのは勿体無い、貴様に我の力を少しやろう、貴様になら扱えよう、その資質を持つが故に ”

黒炎から成す人らしきモノの手が俺の頬に触れる。

幻覚なはずなのに感覚がある。分厚い氷山に閉じ込められているのにも関わらずだ。

“ 我が力を求める者よ、心の内にて我が真名を叫べ。我が名は冥王―― ”

力を分けやがれ冥王、ハーデース！

心の中でそう叫んだ後、全身が炎に灼かれるような痛みを感じる。次いで全身から激しい炎が吹きだし、氷山が一瞬にして吹き飛ぶ。

「信じられない！ 有り得ないわ！ 拓真が！ 蜥蜴魔法【リザードマジック】を使えるなんて！」

“ 次に炎魔法の基本中の基本、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を教える。基本的に魔法は呪文【ルーン】無くとも放てるが、呪文があれば威力は上がる。右手を突き出し、我の言葉を輪唱せよ―― ”

「古より伝説として伝えられし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を与えよ、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

突き出した右手が恐ろしい程に熱くなり、右手に炎の球体が現れた

直後、とてつもなく太い炎のレーザーとなって正面10キロを焦土に変えた。

香織は魔法で弾いたらしい。焦土と化した住宅地の中、香織の周りは炎を放つ前の状態のままだ。

そして、香織は感嘆の声を上げる

「しかも、超高位魔法の一つ、蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】を呪文付きで出すなんて！ かなりの魔力を要するはずなのに！」

「これが魔法か。頭が割れるように痛いがとても面白い、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

言下、赤い魔法陣が香織に向けて突き出した手のひらの先に現れ、そこから、赤い一筋の炎が吹き出す。

「舐めないで！ 天馬の翼【ペガサス・ウイング】！」

すると、香織の背中から翼が生えてきて、その翼が香織を守ったではないか！

「言つとくけど、さつき習得したばかりの小手先の魔法じゃ、私に傷一つ付けられないわ！」

「ならば、獄炎の剣【インフェルノ・ソード】！」

「インフェルノ？ 当てずっぽうで言ったのだろうけど、それって高位魔法よ？ 超高位魔法【リザードシリーズ】を放ったら普通の人は100%打ち止めよ？ そんな魔力残っているワケないわ！」

「ごちゃごちゃうるさい香織を無視し、手にとてつもない炎を纏う剣を想像する。」

一瞬遅れて炎が手にまとわりつき、剣の形になる。

「出来たぜ？」

「嘘！ 有り得ない！ 私だって魔力増強器五つ使って三回が限界なのに！」

「出来ちまった物に文句言われてもなあ……。じゃあ、俺の番だ。」

『宮本流剣技』！」

そう言うのと、俺は空高く跳び、剣を構え、

「秘式一ノ型『一刀両断』！」

そのまま振り落とす。普通の剣じゃ、間違いなく粉々になるため、宮本流剣技に正式には書かれて無いが、秘伝の書っぽい本には書かれていた型である。

妖刀を使ったのか、これを喰らうと例外無く真つ二つに叩き斬るまさに必殺の剣技なのだ。

手応えを感じ、そのまま地面に叩きつける、その時の衝撃のせいか、剣にまとわりつく炎のせいかわからんが土埃が舞い、香織の姿を隠す。

しかし、さっき言った通り手応えを感じたため、俺の勝利は確定だった。

「勝負あつたぜ！」

だが、そこには血痕一つ無く、アスファルトがひび割れていただけだった。

「あれ？ 手応えあつたのにな？」

「後ろよ！ 天馬の息吹【ペガサス・ブレス】！」

次の瞬間、俺は激しく吹く風に吹き飛ばされる。

「んなるっ！」

掛け声と共にバック転の要領で、手を付き華麗に着地する。

それと同時に天馬の息吹「ペガサスブレス」が襲いかかるが、とっさに二本目の剣を作り出し、二本の剣を盾代わりにして防ぐ。

「香織、最初に言っただよな？ テメエに一発、拳骨を見舞いしてやるよって、実現の時だ」

二本の剣を炎に戻し、拳に纏わせる。

そして、例のダメダメ主人公みたいに炎の勢いで加速する。

「その高慢ちきな態度、叩き直してやるあ！」

香織の前で二回転し、威力を上げた後、香織に渾身の一撃を放つ。
が、あっさり受け流される。

「あら、アンタそんなことも出来るんだ？ でも及ばない。全然及ばない。全てにおいてね」

突然ニヤリと笑う香織、その不気味な笑いに恐怖心を抱き、表情を強ばらせる俺。

「な、ななっ、なっ、何をす、す、すっ、するつもりなんだ？」

「慌てちゃって、この笑いが怖い？ 不安？ そうね、そうかもね」

言下、香織は突如として俺をガバツと抱き締める。

大きく柔らかいナニかが自分の胸の中で潰れ、鼓動が数倍早くなる。

「えっ、ちよっ、なんで!？」

「ふふ、拓真、アンタのその意外とカワイイところを見たら下着見られたことなんかどうでも良くなったわ。アンタの意外とカワイイところ、嫌いじゃないのよ」

「……………」

「だんまりか……、ところで拓真、アンタは魔力の回復方法知ってる……、ワケないよね。私のように心が満たされれば回復する人もいれば、アンタみたいに女の子にキスされれば回復する人もいる、覚えておいた方がいいわね……。拓真……」

香織の声音が変わったと思った次の瞬間、香織の大きな胸が視界いっぱいになり、柔らかな感覚に混乱させられる。

「今だけなんだから、私の大きな胸に包まれるのは」

それも落ち着き、明らかに母性本能全開な香織の母親な一面に気が付き、少し涙が出てきた。

幼ない頃に亡くした母親のぬくもりに似ていたんだろう。俺は香織の胸の中で、いつの間にか眠ってしまった。

第三章 拓真の火炎魔法（後書き）

感想、表現指摘、アドバイス等ありましたら書いて下さると幸いです。

特に、香織がどうしたら、ツンデレっぽくなるか。
是非お願いします。

第四章 大山家の豪邸（前書き）

また長くなりました。頑張つて読んでくださいね。ヒロイン大量入荷しましたお好みのヒロインが見つかりますように。

注意！

この作品はちょっぴり過激な表現があったり無かったりします。苦手な人は気をつけて。

第四章 大山家の豪邸

「お……おお、おはよ、拓真、私の胸で赤子のように眠って、気持ち良かったみたいね！」

目覚めて最初に見たのは、香織の母性愛溢れる笑顔だった。とりあえず辺りを見回すとそこは見たことの無い建物の中だった。

「おい、香織、ここはどこだ？」

「・・・・・・・・・・」

香織は正座してぶつぶつ言っている。正座していると言うことは、膝枕でもしてくれたのか。

「あー、いらん世話焼かしちまったな、すまない」

「別にいらん世話なんかじゃ無いわよ。奴隷の管理も主人の役目だからね」

言動の割には顔が赤い、どうしようもない狼少女なんだな、コンチクショウ！ と自己完結し、凄いきれい笑顔で言った。

「ありがとう」

「べ、別に感謝されるようなことしてないわよ！ あんたを心配したわけでもないし、ただ人として最低限のことをしただけ！」

あー、うん……きつとラノベの読み過ぎなんだよな、うん。元々の性格はきつと、まだマシなんだろうな、きつと。

「なんか『ツンデレヤッホーイ！』って心の声が聞こえた気がする

けど」

「言つてねえよ。で、ここはどこだ？」

「私の家よ、広いでしょ」

全貌をこの目で見たわけではないから、大まかなことしか言えないが、それでもデイスニーランドくらいはありそうだ。

「いいや、二倍や」

不意に後ろから、女性の声。

声のした方向へ振り向くと、赤い髪に赤い目をした二十代前半の女性が、タオルを首に掛けただけの何もかも見えてしまっている、本当にあられもない姿でこちらに笑いながら近づいてきた。

「おう、香織も面食いになったもんやね、なかなか格好エエやつ連れてきたやん、はい、アメちゃん。ポケットん中沢山いれとくさかい、後でじっくり食べたつてな。にしても、ホンマに格好エエやつやな！ 夜な夜な襲つてやろうかなあ？」

「そんな価値無いわよ、紅音姉さん」

意外とナイスバディな露出狂、紅音はニヤリと笑い、

「またあ、取られまいと嘘をつくう、やらしい奴やなあ！」

と、俺の背中をバシバシ叩く。

香織も負けじと笑顔で背中をバシバシ叩く。

その状態で雑談を始めるから金持ちは驚きだ。

その内に俺の我慢も限界に達し……。

「ぬうああ！ 叩くな！ その赤い髪の女の人、叩く前に雑談

に興じる前に、服を着てくださいよ！ 服を！」

「えー、エエやん、めんどくさい。それとも何や？ あたしの裸がエロ過ぎて直視できないんか？」

そう言った直後、紅音は肩に手を回し、頬擦りをする。

意外と大きな胸を押し付けられて、混乱する思考、マズい……、色々マズいよ？

「そついやまだ名前を聞いてへんかったな、わいは大山紅音、水属性の魔法が得意な香織の一つ上の姉さんや。自分の名前はなんて言うん？」

「お、大原拓真、火属性」

「へえ、火属性か……、どうりで簡単に手込めに出来そうな雰囲気
を醸し出していたんやな」

「はあ！？ 嘘だ！」

「冗談やて、冗談。アメリカンジョークよ。It's A Joke
e!..」

わ、笑えねえ……、紅音のジョークは現実になりそうで怖い。

「まあ、彼は見たところ免疫がないと思うわ、だから——」

「拓真が寝静まった時にやると」

ニュアンスが違うぞー。紅音さん、ニュアンスが違うからねー？

「エエねん、これでエエねん、じっくりといたぶるようにじっくり
て、最後はこつてりと搾り切る。ちゃんと付いて来てえな」

……今日は眠れそうにないな。

「ところで拓真、あんた、突然火属性の魔法使い始めたけど、一体拓真の体に何が起きたの？」

「わかんね。さっき思い出そうと思ったが、全然思い出せねえんだ」
「ふうん、せえなんや……、そりゃあけったいな話やね」

いやいや、けったいで話をつけられても困る。

こっちは日常生活の中で突然、炎が噴き出す恐れがあるんだぞ、楽天的になれねえよ。

「おい、その香織の彼氏！ 今から俺が香織の彼氏に相應しいか確かめてやるよ！」

次の瞬間、俺の横に風切り音なる。振り向けば、土塊の矛がすぐ後ろの壁に突き刺さっていた。

頬に生暖かい感触がある。血だ。

奇襲か、汚え手使いやがって。

左腕で頬に付いた血を拭い、両手に炎の迸る日本刀を想像、見事に成功し某狩猟ゲームのように構える。

「上等！ 返り討ちにしてやるあ！！」

言下、斜め右上に向かって二回、斜め左下に向かって二回、刀を振るい、四つの衝撃波を放つ。

かなり奥で衝撃波が爆ぜた感じがした。

その後、奥から棍棒をもった茶髪の女性が飛び付いてきた。

振り下ろされる棍棒を日本刀で受け、鳩尾目掛け蹴りを入れる。見事にヒットし、棍棒を持つ女性は吹き飛び背中から着地する。

女性は咳き込みながらも、よろける足取り整えつつ立ち上がる。

「二人とも、喧嘩は宜しく無いわね」

次の瞬間、階段付近から、黒い髪をしたスタイルの良い一人の女性が現れた。

「あなたが香織の彼氏さんの拓真さんね。よろしくね。私は大山楓。おおやまかへで類い希な闇属性よ」

楓はにやりと誘うような微笑を浮かべる。

「おいおい、楓の姉貴、邪魔しないでくれるか？」

「ごめんなさい、詩音。続けて、でも、家の中を壊したら、私の足の裏を舐めてね？」

そう言いながら、ニヤニヤ笑う楓。

優しそうな雰囲気と裏腹に、かなりのドSらしい。

「分かったよ。俺の名は大山詩音、おおやましおん大山家の次女であり、土属性使いだ。岩石の衝撃【スパイク・インパクト】おおお！」

詩音と呼ばれた女の足元に魔法陣が現れ、そこから岩石が現れ、襲ってくる。

辛うじてかわしたが、全身切り傷だらけだ。

「くっ！ 火炎の矢【ファイア・アロー】！」

俺の手のひらから、無数の炎の矢が、放たれる。全弾命中してもそんなに聞いてないような……

「当然だ！ 土は全ての属性の中で、一番打たれ強いんだぜ？」

「なら、獄炎の飛刃【インフェルノエッジ】！」

俺は燃え盛る二対の剣を振るい、2つの衝撃波を放つ。零距离からの衝撃波に詩音と言ったやつも驚き、服が少し裂かれる。

「宮本流剣技、攻式式の型、『疾風怒涛』！」

俺は、詩音が装備していた棍棒を目にも留まらぬ速さで切り刻む。あつという間に切り刻まれた己の武器を見て、詩音は愕然としている。ざまあみる。

「は、ははははは！ 面白い、面白いぜ！ この俺と対等に殺り合える男がいたなんてな！ この世界も捨てたもんじゃないな！ だが、こつからが本調子だ！ 土巨獣の棍棒【ヘビモスロッド】！」

詩音が手を横に翳すと、土気色の棍棒が現れる。そして、ニヤリと笑った後に振りかぶる。

そのまま頭にクリーンヒット、地面に叩き伏せられた。

「ぐっ……がはっ！」

ダメだ、全身がピクリとも動かねえ……。

薄れゆく意識の中、ぎゃんぎゃん騒ぐ大山四姉妹、その会話を早く治癒魔法でも唱えろよ、と思いながら聞くことにした。

「当たった……？ は、はは、はっはっは！ ど、どうだ、俺の必殺技、脳天かち割りのお味はよあ！」

「バカッ！ やり過ぎよ！ 頭から血を流しているじゃない！」

「しゃあないなあ、わいが治癒魔法を掛けたるさかい、待ってや……？ あれ、傷が無い？」

まさか、まだズキズキ痛むんだけどね。
でも体は動くみたいだ、起き上がってみるか。

「ちよっ！？ 拓真！？ 大丈夫なの！？」

「ああ、頭が少し痛むがな」

「良かった……、心配したんだからね！」

「そうか、ありがとな」

「な、何言ってるのよ、ここここ、これはひ、人として最低限の心構えよ！」ふん！ とそっぽを向く香織、よく見ると顔が真っ赤だ。
あれだろ、素直じゃない。うん、所謂、ツンデレだな。

「まあ、二人とも、立ち話も難だし、応接室に行きましょうか？」

につこりと楓さんが笑う、他のみんなも行くような雰囲気だったため、俺もついて行くことにした。

「なあ、さつき詩音が言ってた『この世界』ってどどういう意味なんだ？」

これは応接室に入ってから第一声である。俺が詩音と戦った時に生じた疑問だ。

「あんたねえ、本当に空飛ぶ絨毯や船とか、ドラゴンが存在すると思ってるの？」

まあ、いるわけ無いよなあ、普通は。

「はあ、本当にニブいわね、本当に彼女持ちなの？」

「そんな話した覚えはないよ！？ それに、とうせ彼女いない歴〃年齢だよ！」

「えっ、あ、そうよね、こんなのに彼女なんているわけ無いわよね」
アレ？ 何故だろう、さつき香織、一瞬だけ態度がしおらしく感じ
たのだが……？ 気のせいだろう。

「おやおや？ 顔赤いで、何に顔染めてんねや、言うてみ？」
「拓真のことが好きだからこそ赤くなるんだよなあ？ 香織」

先程までタオル一枚で、今は辛うじて明らかに見せるタイプの下着
を着けてる紅音と、さつきまでボロボロの服を着ていてついさつき
新しい服に着替えた詩音に茶々を入れられる香織。

「ちがう！ ちがう！ 好きじゃないもん！お姉様は——」

「ハイハイ、女の子特性、照れ隠し。本当は『拓真にハグハグ、ペ
ロペロ、チュパチュパしたいの！』って思ってるんだろ香織？ 好
きなんだろ？」

「詩音さん、有り得ないですよ、こんなにも嫌われているんですよ
？」

今だって、齒をむき出しにして、威嚇してるんだよ？

「お前、可哀想だなあ、彼女いなかっただろう、一度も。本心読め
てない」

「悪かったな」

「だがもう悩む必要は無いぞ！ 拓真、俺が彼女兼支配者になって
やるからよ」

俺は詩音にえもいわれぬ怒りを覚えた。

コンニャロウ、ミスったと見せかけて燃やしてやろうか。

「そう怒らないでください。彼女はああいう人なので。お詫びと言
つてはなんですが、私が拓真さんに愛を込めた口付けを――」
楓が俺とキスをしようと抱き寄せようとすると、香織は割って入り、
引き離す。

「ダメ！ 私が許さない！ ファーストキスは渡さないわ！」

「おや？好きじゃ無かったんやないの？ ファーストキスを奪わせ
ないなんて、ますます怪しいのぉ」

「うぐぐ……でもダメ！ きつと倒れる、うん。倒れるわ！刺激的
過ぎるもの」

「では、お任せします、香織さん」

「え！ わ、私が、拓真に、き、キス！？」

いきなり任された謝罪のキスに先程より酷く慌てふためく香織。顔
なんか真っ赤だ。

「いいですよ香織ちゃん、嫌なら私が口付けを交わすだけですか
ら」

ああ、止めてくれ。俺は楓さんとキスがしたい。俺はどちらかと言
うとオトナのおねーさんがすきだ。

「烈風の一撃【ウィンド・ブレイク】」

香織がそう呟いた瞬間、香織からものすごい風が吹き荒れ、大きく
後方に吹き飛ばされた。

……冗談の通じない奴め。

「……とってつけたような言い訳を……やります、私にキ、キスを

させてください」

「……ちえっ」

「『ちえっ』?」

「うっん、なんでもないわ。じゃ、任せるわね、香織ちゃん」

さつき、楓さんが舌打ちしたような……

「拓真」

「はい、何でしょうか」

「気になるところがあるだろうけど、今は私だけを見て」

香織は耳まで、リンゴのように真っ赤になってる。なんだか可愛らしいな。

「可愛らしいじゃない、可愛いの」

「そうでしたそうでした」

「じゃ、じゃあ、キ、キスするわね。言っとくけど、このキスにはお詫び意外の意味は無いんだから、本当だからね！　こんな事が無い限り、キスなんてしなかったんだからね！」

と、ごたごたと御託を気が済むまで語り尽くした後、どうしてもよかったが、お詫びとしてのキスを交わした。

最初は本当に軽く触れるだけのキスだったが、時間が経つにつれ、緊張がほぐれたのか、一度唇を離し、意を決したように深呼吸し軽く目を瞑ると、今度は情熱的に唇を押し付けたり……。固いような柔らかいような色気に包まれて、息が出来なくなる。

まるで一酸化炭素みたいに意識をゆっくりとだが、着実に意識を奪っていき……。

第四章 大山家の豪邸（後書き）

感想、アドバイスなど是非、お願いします。
特に香織がどうしたらツンデレっぽくなるか。

第五章 真理亜の潜入（前書き）

ついにR - 15規定しなければならなくなった。

真理亜がえっちいからだ。まあ、こういうキャラは物語を引き立ててくれる……気がするから。

ついに物語が動き出します。ちと遅すぎやしないかね？

真理亜の艶やかなるスパイが誕生？する。

第五章 真理亜の潜入

一方、拓真達が元いた世界では……

「うーん、ここにもいないわね、ダーリン。とついでに大山香織ちゃん」

現在、大原拓真、大山香織は行方不明とされ、特に香織は全ての警察が総動員で搜索に当たっている。

それくらいの価値が何故あるのかはまたいずれ話になるだろう。まあ大豪邸を持っているのだから理由は分かるだろうが。

「それにしても、変な機械がいつぱいあるわねえ。町じゃ見かけ無けれど、一体何に使うのかしら」

藤宮真理亜は見張りにかなり厳重に注意しながら搜索していく。

それから数分、ふと一人の警備員らしき人物の足音が聞こえてくる。周りには見たことのない機械が隙間なく並べられている。真理亜は隠れることすらままならず警備員に遭遇した。

「そこにいるのは誰だ！」

真理亜はブラウスの胸のボタンを2、3個外す。胸の谷間どこるかふくよかな乳房すら見え隠れしている。

色仕掛けで警備員を誘惑し切り抜ける策のようだ。

「あら、すいません。迷子になったみたいで……」

「ここは立ち入り禁止だ故に最新鋭のセキュリティシステムを採用しているんだ。どうやって入ってきた？ それに、その服は何だ

？ はしたない」

「そんなこと言わないでくださる？ 私はあなたのようなイイ男を落とすために一生懸命なんだから」

「い、色仕掛けでオトそうという魂胆か！？ しかし、自分にはきかないぞ」

真理亜はふうん、と言いたげに、イタズラっぽく笑い、警備員に自らのたわわと実った果実を景気良く腕に押し付ける。

「なっ、なな、何をする！」

「おや、とても動揺しているご様子。下半身もこんなにしちゃって……、いやらしいお方、いつもやっているんじゃないですか？ コレ」

真理亜は右手の親指と人差し指で輪っかを作り、その中に左手の人差し指を入れたり出したりを繰り返す。

警備員は激昂し、真理亜を突き飛ばした。

「お、お、大人をからかうなよ！！ 撃ち殺してやる。侵入者を排除せよとのあの方の命令もあるからな」

「やれるものならやってみなさいよ。まあ、どうせ無理でしょうけど」

警備員は怒りに顔を歪ませ懷から拳銃を取り出すと、それを真理亜に向け発砲。

最新鋭の拳銃より放たれた鋼鉄をも軽々と貫く弾丸が真理亜の胸に風穴を穿つ……、と思われたが弾丸は真理亜の手前数センチで忽然と消え去った。

警備員は突然の出来事に呆然としている。

「な……、何が起きているんだ？」

「ナイシヨ。でもって、これはお返し。爆炎！」

真理亜がそう叫ぶと、警備員の数センチ前の空間が爆せて、警備員が軽く吹っ飛ぶ。そのまま警備員は気絶してしまった。

「しばらく眠ってなさい。全く、どいつもこいつも、全然ダメ。ああ、ダーリン……」

真理亜はその場に横になり、下半身に手をあてがいビクビクと震えてしまう。端から見たら変態としか思われないう。

「ああん、ダーリン……、もつと舐めてえ……」

真理亜は完全に発情して、拓真をやらしい妄想の相手になっていた。そんな中、再び足音が聞こえてくる。

数秒後、さっきの警備員とは違いか細い声が淫乱嬢の名を呼ぶ。

「真理亜、真理亜。藤宮真理亜。私よ。新垣愛子」

しかし、真理亜の耳には彼女の呼び掛けが耳に入っていない。

真理亜は謔言のようにダーリンなどと繰り返している。

「ダーリン、ひい、もつと、もつと奥……くああ……」

「……完全に彼女の世界にのめり込んでいる。しばらく放っておく」

そう言って愛子は何処からか分厚い本を持ち出し、読書を開始する。しかし、隣には嬌声と卑猥な水音を撒き散らす真理亜の存在。当然読書に集中出来るわけが無く……。

「……………」

「ああん、ダーリン、もつと激しくぅ！」

「……………」

「ああああ、そこ、そこがいいの、ダーリン、いつでもいいの、いつでもだしていいからぁ〜！」

「うるさい！」

その叫び声は彼女には届く事はない。

彼女は頬を朱色に染め、かなり濃厚な妄想に入り浸っている。

下着は絶えず滴る真理亜の謎の液体で完全に濡れそぼち、スカートまでびしょびしょになっている。

「イク！ ダメ！ もう我慢出来ない！ ひぁっ、ああ、ああああっ！」

真理亜が絶叫する。愛子はたまらないといった様子で耳を塞いでいた。

「やっと終わった。しかし、真理亜に気絶して欲しくない。……、覚醒の雨」

真理亜の上に雨雲が生成される。その雨雲は真理亜に冷やかな雨を浴びせる。

数秒後、真理亜のぐったりとした態度が一変、シャキッと立ち上がり、深呼吸をする。

「ごめんなさい、愛子、思いつ切り発情してたわね……」

「拓真が行方不明になってから度々起こる……。それ程、彼との性交は心地良いものなの？」

「ええ！ もちろん——」

真理亜がそう言いかけた時、二人とは違う足音が聞こえてくる。
数秒後、二人は警備員十数人と遭遇してしまう。

「手を上げる！ お前達は包囲されている！」

「あら、これまた物騒な人達、一人ずつベッドでお相手差し上げますわよ？」

「ふざけたこと言わない。真理亜の悪い癖。無駄な殺生は避けたい、大人しく身を引いて」

愛子の言葉に警備員十数人は激怒、大小様々な声で罵声を浴びせる。

「何を言うか！ 殺されるのは貴様等だぞ！ いいから大人しく手を上げる！」

「あなた達に私達に触れることすら出来ない」

「ぐうつ……！ 撃て！ 撃てエエエ！」

その声に合わせて、大小様々な銃声が響き渡る。

しかし、二人は落ち着き払って一言一言呟く。

すると二人と弾丸の間に雪を伴った風が吹き荒れ、弾丸を弾き飛ばした。

「あら、もう終わりかしら？ 情けないわね」

「……雪風壁」

そう愛子が呟くと、先ほどの雪を伴う風が、散り散りに成り行く包囲網を囲むように吹き荒れる。

「あの水は……、仕方ない。凍烈風」

愛子は再び呟く。すると、真理亜の近くの酸っぱい匂いを放つ水溜まりが細々とした氷の塊になり、警備員達の様々な部位を殴打する。警備員は次々と倒れ、微かに動くことしかできなくなっている。

「あら、もう終わりかしら？ 情けないわね」

「あなたは何もしてない」

「あら、警備員一人を気絶させたわ」

「私の働きには及ばない」

二人がそうやって張り合っている中、隅っこで一人の中学生らしき少年が怯えていた

「うわわわわ…」

「あら、その君、私とベッドで良いことしない？」

「け、けけっけっ、結構です！」

警備員は真理亜に背を向けて逃げ去った。

「冗談の通じない人」

真理亜がそう呟くと、トランシーバーが音声を受信する。

「こちら海斗、真理亜、応答せよ、真理亜応答せよ！ どうぞ」

「二度言われなくても分かるわよ。で、そっちは何か手掛かり見つけたの？」

「いや、こっちは何とも言えない状態だ。どうぞ」

「だったら連絡しないでって言ってるでしょ！ 拓真がいるわけじゃないんだし！」

真理亜はくだらない報告に声を荒げる。

どうやら拓真以外に興味がないようだ。

「だが、緊急事態が発生したんだ。どうぞ」

「つまらないことだったら、本当に壊すわよ？ このトランシーバ

「人が沢山倒れてる。どうぞ」

真理亜はあからさまにため息を吐いた。
拓真が見つかった。それだけを期待していたのに、それにかすりすらしない雑多な情報だったからだ。

「興味ないわ」

「え？」

「最後に一つ、言って良いかしら？」

真理亜はあえて怒りを押し殺した声でトランシーバーに声を送る。
数秒して、ああ、と返答を聞くと、大きく息を吸う。そして一言、

「ダーリンが見つかったって言う情報以外、いらないのよおおおお！」

と叫び、トランシーバーを叩きつけた。

流石は大山財閥が最新鋭の科学を集めて作った代物、なかなか壊れない。

しかし直後に真理亜の十八番、鎗炎を繰り出した。

科学の粋を集めたトランシーバーも、科学の理を超えた力を受け、粉々に吹き飛ぶ。

「ああ、もう！ こっちも駄目、あっちはもっと駄目！ 何処に行けば良いのよ！！」

「もっと効率の良い方法は無いの？」

「効率の良い……、ね……、あつ！」

真理亜の悩み顔が一変。満面の笑みになり、愛子も期待に目を輝か

す。

「そうよ、拓真の居る場所に異空間の扉を開けばいいんじゃない！」

「そんなことが出来るの？」

「当たり前でしょ、私を誰だと思ってんのよ」

真理亜は愛子の顔が若干笑ったような気がした。

他人が見れば、特に変わって無いと思われがちだが、これは愛子と長い間付き合ってきた真理亜だからこそ分かるような微々たる顔の動きを読み取ったのだ。

「好きなのね？ 拓真のこと」

愛子は顔を俯かせる。

「やっぱり。でも渡さないわよ？ 欲しかったら力づくで奪ってみなさい？」

愛子はまっすぐ真理亜を見て「望むところ」と答える。

「ふふふ、本気みたいね。じゃ、ダーリンを呼び出すわよ！ 呼び出す間は開けといてね、愛子」

愛子の「了解」の声を聞き、真理亜は満足した様子で扉を潜っていた。

ふと、愛子が周りの様子を伺う、周りには警備員が囲むように配置されている。

「真理亜、拓真を連れて、早く来て」

愛子は遠くなる真理亜の背中にそう言った。

第五章 真理亜の潜入（後書き）

俺こと大原拓真は真理亜に連れられて元の世界に戻るのだが、そこで俺が見たものは次々と倒れゆく、一般生徒の姿と両刃の剣を持った教師の姿だった。

次回、『拓真の帰還』

……と次回予告をつけてみました。

内容とタイトルは変更する可能性があります。

感想、アドバイスなどは是非ともよろしくお願いします。

第六章 拓真の帰還（前書き）

お久しぶりです。R - 18 規制されないように頑張っ
て書いたら、間が開きました。すいません。

今回は拓真が色んな所でハーレムに……大丈夫なのか？

第六章 拓真の帰還

はあ、異世界初めての朝……か。
情けねえ……、キスされて気絶して朝を迎えるなんてよ……。
それに、夢オチって訳じゃあ……ない。一晚寝たら元の世界に戻っていると思ったのに……それに。

「何なんだよお前ら、下着姿で俺の隣に寝そべりやがって……」

しかも、みんながみんなエロい下着……、確かランジェリー？ ベ
ビードールとか言うのもあるよ……。

うう……、健全な男子高校生の目には毒だな。

「うう……、中に出すの？ たっぷり出して、私を孕ませてよね！」

——香織の夢の中でナニやってんだよ、俺。

只今の時刻、6時55分。

いつもは稜にぎゅっとされているんだけど……。稜がないから
いつもより長く寝ちまった。

もうそろそろ起こすか。

「うう……、拓真、優しくシてえ……」

うう……、く……。こんなにも無防備な所を見せ付けられて、何か
イタズラしないと勿体ないぞって内なる煩惱が言ってる……。

「……テメエ、寝ている所を襲ったらどうなるか分かってんだろっ
なあ？ テメエの頭のお花畑を満開にしてやるからな……ムニャ」

ダメだ！ そんな事したら絶対に嫌われる！ 侮蔑の目を向けられる！

「悩んでいるなら実行あるのみやで、拓真……一緒に気持ち良くなるうや」

「おいでえ、私が愛でてあげるからあ」

……………、胸だけなら、良いよね？

流石に寝ている人の唇を奪う卑怯なことは出来ないし、下半身に触れるほど淫らな人間じゃない。胸だけ、そう、胸だけ。嫌われるの覚悟だ、女の胸なんかそうそうさわれるもんじゃない！

「じゃ、じゃあ最初は楓さんから……」

一番年上だし、胸も一番大きいから……。

ベッドの上を音を立てぬよう滑るように移動し楓さんの近くに座り込む。

「神様、仏様、八百万の神々、そして稜、本当にごめんなさい！俺は稜以外の胸を触ります！ えい！」

むにゅうううう……。

柔らかい……、稜なんかと比べ物にならないくらいに……。

そう思ったまさにその時、楓さんの頬が赤らみ「んっ……！」と艶めかしい声をだす。

その瞬間に全身が火に炙られたように熱くなり、下半身が痛み出した。

俺はその事から己の愚かさと卑猥さに恐怖し、初期位置で震え上がっていた。

——稜以外の胸を触っただけでこの反応が!?　なんていやらしいんだよ俺!　こんな所香織達に見られたら……、鎮まれこの煩惱!　愚かな事をしてしまったぞ、稜以外の胸はもう絶対に――

「根性なしやなあ……、どれ、わいの胸を揉んでみい」

突如として紅音の声が聞こえ、後ろに振り向かされた瞬間、無理矢理俺の手を紅音の胸に押し付けられた。

「あ、紅音さん!？」

「女の胸ってな、こうやって円を描くようにこね回すんがお互いに気持ちいいんやで……ほら、わいの顔、赤いやろ?　それはわいが拓真を感じてるんや……、ほら、自分でこね回してみ?」

紅音は俺の手を動かすのを止める。

本当は今すぐにでも手を離れたかったが、さっき紅音が言った通り柔らかくて、暖かくて、心地よかった。

もっと触りたい。膨れ上がる欲望に負け、紅音の胸を再びこね回し始めた。

もみもみ……もみもみ……。

「せえや、拓真、気持ちいいやろ、うつとりするやろ、わいはかなり気持ちいいで……!」

むにゅむにゅ……むにゅむにゅ……。

「あつ、はあ、エエで、最高や、ますます好きになった!　抱かせてや!」

えっ、と言う間も無く紅音は押し倒すような形で抱きついてきた……、なんで？

「わいはなあ、拓真、お前に一目惚れしてん、大好きやねん、せやからなあ拓真——」

紅音はふざけた様子もなく、真剣な顔をこちらに向けて、こう言った。

「わいと一つになろうや、拓真」

直後、紅音の顔が迫って来て唇にしつとりとした何かが触れる。恐らく唇……。

そう思ったのも束の間、唇の間から舌が割って入ってきた。

「んっ……！！」

「んふ、ちゅふ……」

——なんて濃厚なキスなんだ、意識が飛んでいきそうだ……！！

「……ぷあ、後は本番だけや、さあ、服を脱ぎ——」

瞬間、紅音が消えた……。のでは無く壁に叩き付けられた。逆方向を見ればそこには怒りに震える香織の姿が……。

「何すんねや！ エエ雰囲気やったるがい！」

「紅音お姉様は黙ってて。拓真、なんで紅音に抱かれているのかな……？」

「いや、コレにはふかいワケが——」

「皆まで言わなくていいわ、分かっているから」

——だったら問い掛けてくるなよ！

「あなた、コレがどういうことか分かってるのかしら？ 婚約者が二人いるわけなのよ？」

「誰と誰さ？ 婚約届を出した覚えは無いんだが」

「私と紅音お姉様よ」

「なんで？」

「ふあ、ファーストキスをあんたに捧げたからよ」

なんだそれ？ キスしただけで婚約成立ってどんだけアブノーマルな婚約よ？

「あの……、拓真の婚約者に私も追加で」

「同じく。無性にキスしたくなったんだよな。全く、拓真の寝顔は反則だぜ」

「はあ！？ こ、これで婚約者が四人……、仕方ないわね……。寝ている時に考えついた例の作戦、発動するしかないわね……」

何だよ、例の作戦って……、香織は深く息を吸い込んで叫んだ。

「これより！ これより大原拓真ハーレム化計画を執行する！」

「で、これが足掛かりか、大原拓真ハーレム化計画の」

「そうよ、女性に対する耐性が一般ピープルと比べても少ないのよね」

「そうそう。だから俺達がともすれば裸になりそうな服装で拓真を囲み、ナマ乳の感触を克服してもらおうじゃないかと」

「気分はどうかしら？ さぞかしツライでしょうね」

「ムラムラするやる？ 大丈夫、勃ったら又いてやるさかい」

そんな問題じゃねえよ、と俺は言いたい。

ピンク色の息が詰まるスイートルームで、バスタオル一枚巻くだけの、いつ弾けて裸になるか分からない格好で、囲まれているだけではなく、胸を押し付けられ、胸板から頬まで舐められ、吸われのとある生徒会の変態主人公が見たら一瞬で狂い殺せるくらいのハーレムの中心に俺はいるんだから、そんな心配よりも俺の精神が死ぬかどうかを心配すべきだと思う。

「なんでこうなんだ？ なんでこうなるんだ？ 俺が何かしたか？」

「わいらにキスしてもうたからや」

「そう。拓真さん、大山家ではファーストキスの相手がどの様な関係であれ、生涯のパートナーになる訳なのよ」

いや、されたんですけど。無理矢理唇奪われたんだけど！

「男だったらゴチャゴチャ言わねえでしっかり女を犯す！ そうだろ？」

「ちげえだろ！」

「なんや甲斐性ないのお」

「うるせえ！ 犯罪的な甲斐性なら俺はいらねえ！」

「あら、何度も孕ませたくせによく言うじゃない」

一同は声のする方へ振り向く。そこには、真理亜がバスタオル一枚巻くだけの姿で扉にもたれ掛かっていた。

「ま、真理亜……？　なんでここに……、ここはいつもと違う別世界なはずだが……」

「言っただしょ？　私はダーリンのいるところなら何処へでも行けるって。シャワー気持ちよかったわよ、香織」

真理亜は香織に見せ付けるように投げキッスをした、恐らく俺に。その瞬間、左から強烈な殺気が猛獣となって俺を喰らわんと強靱な顎門あぎとを開いているような錯覚に陥るのだが、気のせいだろう、きつと気のせい。

「あーれえ？　拓真君、私達をやる前に真理亜とやってたんだ？　しかも何度と無く」

「いや、仕方ないだろ、真理亜と出会ったのは香織と出会う前なんだから」

「そうよ、ダーリンと出会う前からあなたの負けなのよ！　香織！」「なによなによ！　さっきから聞いていればダーリンダーリンって、そんなに仲が良いならあっちでにやんにやんすれば良いじゃない！」

直後、香織は腕を振るう。竜の上で感じたのと同じように重力のしからみから解放され、真理亜の近くで背中から落とされた。

「香織……」

「浮気者！　サイテー！　あんたなんか何処にでも行けば良いのよ！　バカッ！！」

とりつく島もないとはよく言ったものだ。

香織は再び腕を振るい俺と真理亜を吹き飛ばしてしまった。さらに扉まで閉めてしまったため、完全に打つ手を無くしてしまった。

「ああ……香織」

「そんなツンツンのことなんかほつといて、私と遊びましょうよ」

「そういうもんじゃ——なっ、なんて格好なんだよ！ タオルを巻き直せ！」

さっきの烈風のせいだろうか、真理亜のタオルが滅茶苦茶になつて、太ももや胸の谷間なんかも見え隠れし、なんて言うかもう、裸よりエロかった。

「なあにい、私のこの姿を見て欲情してんの？ もうダーリンったら、見たいなら見たいって言ってくれればいつだって見せてあげるのにい。ほら、ほらあ、ちゃんと目に焼き付けて？」

真理亜のやつ……、調子に乗ってタオルをひらひらしてきやがった。おかげで見えなかった所も見えちゃって……。

「鼻血出ているわよ？」

見まい見まいとそっぽを向いていたつもりだったがいつの間にか凝視していたようだ。情けねえ。

そう思った、その瞬間だった。いきなり扉がバン！ と荒々しく開かれ、中から幼児を殺せるくらいにどす黒い笑みを浮かべる香織が現れた。

「あ、いや、香織、それはだね、香織には持っていないものを真理亜は持っているから、ほら、香織には香織の可愛さがあるから——」

「立ちなさい」

「だから、ホントはね、なんだかんだ言って香織の事が一番好きなんだよ？ キスした時凄くドキドキしてさ、香織こそ運命の人だっと思ってたんだよ？ 本当だよ——」

「知ってる。あんたの考えているコトは全部お見通し。だから真理亜にエロい目線を投げかけているのも知ってるの。下らない言い訳は要らないから立ちなさい」

最高裁判長、大山香織は被告人大原拓真を婚約条例一条、“婚約者以外の裸を見るべからず”を違反したため死刑判決。

「控訴します！」

「被告人の控訴を棄却します」

死刑宣告。大原拓真を極刑に処す。

——んなムチャクチャな！

「歯を食いしばりなさい、少しは痛くなくなるかも知れないわ」

直後、香織は大きく拳を振り上げ振り下ろす。とっさの判断で避けるも、「避けるな！」の叫びと共に無数の空気の刃【エアカッター】。

体に無数の細かな切り傷が出来るが、叫ぶ間もなく香織の渾身の蹴りが鳩尾を捉える。

そのまま吹っ飛ばされて着地する間もなく香織の風魔法で引き寄せられる。

一体何がしたいんだ。

「劣情は抜けたかしら？」

「ああ、しっかりと痛みの上に書きされたよコンチクショウ」

「あんたが悪いんだからね！」と厳しい言葉を浴びせて真理亜に向き直る香織。

「ところで真理亜、寝静まった所で襲うあんただからこんな時間に現れるなんておかしいわね。何かあるんでしょ？」

「相変わらず無駄に鋭いわねえ。そうよ、私の本当の目的はダーリンの搜索。ついでに香織の搜索もね」

「ついでって何よ！」

「だってえ、ダーリン以外に興味ないもの。ま、あんなに探していなかったんじゃ、流石に飽きて来ちゃったのよね。だから探しものしてるつもりはヤメにして直に会いに行く事にしたのよ」

つかつかと俺に歩み寄り、壁にもたれながらも立つ俺をギュツと抱きしめる。

最初は痛かったが、時が経つにつれ痛みが引き、傷も癒えていた。

「すげえや、真理亜ってなんでもアリなんだな」

「愛の力に不可能はないわよ、おーっほっほっほ！ さあダーリン、もっと愛を体で感じ合いましょう！」

「お楽しみの所悪いけど、至急の事なんじゃないの？」

「あ、そうだったわね！ じゃあ、早速愛子の元へと戻るわよ！」

あれから、真理亜の空間魔法で、元の世界に戻れたが、状況は最悪のようだ、無表情のはずの愛子が苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「遅い、真理亜。翠氷壁すいひょうへきがもう限界に達しようとしている」

愛子が言つとおり、俺達を囲んでいる氷の壁は一面ヒビだらけである。

「愛子、無事だったか！」

「感動の再会は後、強い衝撃に備えて」

へ？ と呆けた声を出すもんだから、香織が即座に叱咤した。

「バカ！！ 前からロケットランチャーが飛んでくるわ！ 伏せて！」

その瞬間、大きな発砲音を聞き、数秒後にはそれよりも大きな爆発音が轟き渡る。

「……くっ！」

その衝撃で割れた氷が愛子を傷付けた。
俺は立ちほだかる何かに怒りを覚える。

「そんな物騒なもんぶつ放した挙げ句少女に怪我を負わせるたあ、
テメエらどんな見してんだ！」

「侵入者は例外なく殺せとのあの方からのご命令だ。我らはあの方
の忠実な下部故に彼女らを殺さねばならない」

「そう……かよ、アツタマ来たぞ！ 良心の一欠片もないお前らに
生きる価値なしと見做す！ ならばその魂、我が業火にて燃やし尽
くさん！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

眼前に大きな炎球が現れ、瞬間巨大な炎のレーザーになり、眼前を
燃やし尽くす。

「香織！ 二人を連れて空を飛べ！」

「命令しないで！」

そう言つて香織は二人に飛行のスペルを唱え、上空に飛んだ。
……これで本気が出せる。

「うおおおおお！」

蜥蜴の尻尾をゆっくりとだが着実に回していく。そうやって回していく内に勢いが付いちやつて……、止まらなくなった。

「うおおあああ！ 誰か止めてくれ！」

「なにやってんのよ、あのバカ……」

「私に任せて。封水牢ふうすいろう！」

小気味良い快音と共に俺の体は一瞬で水に包まれた。
つまり、それは息が出来ない事を意味している。

「あがごげ……」

「拓真！」

「愛子、ダーリンが苦しんでるわよ！」

「ダーリン……、真理亜の呼び方はよく分からない。解除」

乾いた爆発音と共に水が弾け飛び、咳き込むと同時に飲み込んでしまった水を吐き出す。

いやあ、死ぬかと思った。

「拓真、大丈夫？」

「ああ、なんとかな。ありがと香織」

香織は手を差し伸べ、立たせる。

「手荒な事をして申し訳ない。あなたを止めるにはこれしか考え付かなかった」

「良いんだよ、ありがとな愛子」

俺は愛子の頭を撫でてやる。相変わらずの無表情だが、心の中では笑っていることを信じたい。

「それにしてもここの機械は頑丈だなあ、俺の蜥蜴の尻尾を喰らっても壊れないなんて」

「本当……まるで科学の理を超えた力を使っているみたい」

「ねえ、もつと奥に進んでみない？ こんな有り得ない機械の謎も分かるかも」

「そうね、なんか悔しいけど香織の言う通りね」

かくして、俺達は謎の機械室を探索する事にした。

約10分後、いきなり開けた所に出る。

精密機械が密集しているのを見ると、ここは司令室か何かか？

「それにしても薄気味悪いわねえホント、今にも何か起こりそうよね」

「見て。扉がある」

愛子が指を指す先には、光溢れる扉が存在していた。

「登りの階段があるってことは、あれは出口か？」

「みたいね。どこに繋がっているのかしら？」

俺達は一步ずつ扉に近く。すると、真理亜が扉の向こうの異変に気づく。

「待つて！ 誰かがこっちに向かってくるわ！」

「マジかよ！ よし、待ち伏せしよう。扉が開けられた瞬間に一斉放火だ！」

徐々に足音が近くなり、二人の表情が固くなる。そして、扉が開かれる。

「今だっ！ 蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】！」

「燃やし尽くせ！ 鎗炎！」

「流水葬波」

扉の向こうの人影は慌てふためき、魔法を唱える。

「う、うわ！ 待て！ 魔破雷壁！」

扉の向こうの人影は地面に手をつける。すると、稲妻が迸り、人影を守る。人影は抗議の声を上げた。

「な、何をするんですか！ 僕を殺す気ですか！」

——えっ？ この声……、どっかで聞いた事がある。

「アナタは……、紛らわしい」

「なんだ、足音の正体はあなたなのか」

二人はとても落胆した声をあげる。
なにが起きたんだと覗いて見れば、そこには……

「へ？ おお！ 一樹じゃねえか！ どうした？」

一樹がいた。一樹はずり落ちたメガネを上げて、とても深刻な顔で肩に掴み掛かる。

「それはこっちのセリフだよ！ どうして二週間も行方をくらましたのさ！」

「はあ？ 二週間？ こちとら、一晚寝ただけだぜ？」

「拓真さあん！」

そう叫びながら迫ってくるのは坂田桜だった。桜はそのまま抱き付いて来る。

「拓真さん！ 私、あなたが誘拐されたかと思いました！ 心配で心配で、夜も眠れなかったんですから！」

嘘……、そこまで深刻な状況に……！？

「そうよ！ お兄ちゃん！ 稜、本当に心配したんだから！」

そう声を荒げるのは、俺の妹、稜である。

「稜……、ダメじゃないか！ ちゃんと家にいなきゃ！ ヘンな人に何かヘンな事されなかったか？」

「おにいちゃん！ 私の心配なんてしなくていいの！ おにいちゃんにもしもの事があつたら私……」

「稜……、お前……」

「ブラコンにシスコン……、有り得ない……、なんか引くわ」

なんか香織にガツツリと心を抉られた気がするが……、まあ仕方ない事なのだろう。

この歳になってお互いに慕い合い、愛し合っているのは最早……、異常な事なのだから。

「もうたくさん、たくさん泣いたんだから！　もう、とにかく唇奪ってやる！」

そう言うと、稜は俺に向かって突進してくる。

「待つて！　キスはもう——」

待つてくれるわけなかった。稜は両手で顔を挟み込むと、周りに人がいるのに、キスをする。舌も入れてきた。……何故だろう。周りの女達の視線がやけに痛い……。

そうだよな、軽蔑の目を向けるの仕方の無いこと、嫌悪の念を抱くのは仕方の無いこと。ならばその目も念も全て受け入れよう。

そう思考が在らぬ方向に一人歩きし、自虐的になる俺だが、現実はその180度違っていた。

「あんたってば、損な人生してんわね、私という猛烈に魅力的な女の子がいるじゃない？　妹萌えも卒業して、私とその、き、キス……、キスしてあげてもいいわよ！？」

「拓真、妹とキスしたんだから、私達ともキスしても罰は当たらないんじゃない？」

「そうですよ、私達にもディープキスさせてください」

「……………、拓真……………」

みんながみんな、様々な形でキスをせがんできたのだ。

愛子まで羨望の目で見てる気が……、あくまで気のせいかも知れな

いが。

「駄目、拓真の唇は稜が独占するから。おにいちゃんは私の物なんだから！」

「きゃあああああ！」

稜がそう言ってキスを再開しようとした瞬間、突然の悲鳴に稜はキスするのを止め、代わりに抱きついてきた。

「おにいちゃん……、稜、怖い」

「心配するな、俺が付いてる」

「ちよつと！ そのブラコンにシスコン！ さっきから兄妹同士いちゃいちゃチュツチュと本当に苛つくのよ！ さつさと離れなさい！」

「まあまあ、落ち着いて。それより、さっきの悲鳴は運動場から聞こえましたね、もしかしたら謎の生徒仮死状態事件の真相が分かるかも知れません」

「だな、さあ立った。悲鳴が聞こえた運動場へ行くぜ！」

俺は謎の仮死状態事件が気になって、運動場に走り出そうとしたが、しかし一樹に止められた。

「ダメだよ！ 君が行ったって仮死状態になるだけだよ！ 君はここで待機していてください！」

「なんだ、そう言うことか」

「そう言うことかって……、拓真君！ 僕はあなたのことを思っているのです！ 僕はここ最近の仮死状態事件で多くの友達が生死の狭間をさまよっている状態なんだ！ 君まで仮死状態になったら僕はどうすれば……」

「大丈夫だ、俺はもう普通の平凡男子高校生じゃない、火の魔法使い、大原拓真だ」

一樹の前で炎の球を作ってみせる。

その瞬間、一樹の懇願の声が感嘆の声に変わった。

「すごい……こんな炎、見たこと無い。少しの混じり気のない純粋な炎は」

「俺にはコレがある。だから負けない。仮死状態になる前に消し炭にしてやるよ！」

「ぐわあ！ 何だこれ、力が抜けていく……」

チャラい感じの男がまた一人倒れた。

「……、懲罰完了。次、桐原壮介、頭髮が染められている。校則違反だ」

そういつて、謎の男は両刃の剣を振りかざす。すると、校則違反をした男子生徒、桐原壮介は急に倒れ、ぴくりとも動かなくなる。

「あいつが原因か」

「叩きのめしちゃいましょうよ」

「賛成。これ以上の被害が出る前に片付ける」

「よし、行くよ——ここまでです！ 大人しくしてください！」

俺達は運動場横の小高い木の影から躍り出る。両手剣を持つ男は気だるそうにこちらを向く。

「また校則違反者か、だが、この人数じゃ『神の裁き』じゃ捌ききれない」

「降参しなさい！ あなたじゃ私達に勝てません！」

「仕方ない、面倒だが、一人ずつ叩き潰そう」

両手剣を持つ謎の男は剣を構える。

俺達も次々と戦闘準備に入る。

「来るぜ！ 気を引き締めろ！」

「行くよ、エクスカリバー」

現実世界の現実離れた戦いの火蓋が切られた。

第六章 拓真の帰還（後書き）

次回は遂に第一部の物語が佳境を迎える……と思います。お楽しみ。

第七章 現実世界の秘密通路（前書き）

バトルシーン多め（当社比1・5倍）でお送りする第七章！第一部
もついに佳境へ……？

第七章 現実世界の秘密通路

「行くぞ！」

先手を取ったのはエクスカリバーとか言う大剣を持った男子生徒だった。男子生徒は一樹の懐へ一気に潜り込み、俺の目からしてまあまあ早い一閃を放つ。

一樹はその一閃を首に当たるか当たらないかという所で躲し、続く連閃も紙一重というふうと躲していく。

「どうした？ 避けてばかりではこの戦いには勝てないぞ」
「そうだね、ならこれはどうだ！」

一樹は懐から金属製の短い棒を取り出して一言呪文らしき言葉を呟いたかと思えば、短い棒がちまちま90cmくらいの日本刀になり、それを一樹が真横に振り抜けば巨大な大剣で受け止めた男子生徒は大きく吹き飛び近くの校舎の壁に激突する。

よく見れば彼の握っている大剣にヒビが入っている。

……一樹の日本刀に一体どんな秘密があるってんだ。

「この日本刀はね、玉鋼30%にチタニウムが55%、それにタングステン15%を練り合わせた特別製さ。もの凄く重いけど、これを受け止めきれぬ人は、いないんだと思うよ」

「こ、このクソ——」
「召雷——」

一樹の右手から稲妻が迸り、巨大な剣を携えた男子生徒の足元を穿つ。

男子生徒は一步後退り、額に脂汗が浮かんでいるのが遠目から見て分かる。

「今のは警告です。降伏してみんなの仮死状態を解きなさい」

男子生徒は高らかに笑い、巨大な大剣を真上に掲げて不敵に笑う。
何がおかしいんだ、アイツ。ワケ分かんねえよ

「そんな事は知らないな。全てはあの方の命令だ、あの方がやれと言っからやるんだよ」

「そうですか、あなたが何をしようとも僕たちには関係ないですが、僕たちの行く手を阻むというならしばらく眠ってて貰います！ 轟ごう雷召らいしょう！」

「眠るのはお前だ！ 出力最大の裁きを受けよ！」

無数の稲妻が降りしきる中、男子生徒は無骨な大剣を一樹に向けて振り下ろし、何だか物々しいオーラが一樹を包み込む。

「あれは……。なるほど、仕組みが分かった。呪封氷じゅふうひょう」

愛子が一言二言呟いた瞬間、男子生徒の持つ大剣の鍔が凍り付き一樹を纏う物々しいオーラが消え、無数の稲妻の一つが男子生徒に当たってそのまま男子生徒はパタリと前のめりに倒れる。

「ふう、真剣を携えた人と戦うのは骨が折れるんだね」

「俺には随分と余裕そうに見えるけどな」

「まさか！ 剣が体の近くを薙ぐ度に心臓がバクバク鳴ってましたよ！ 余裕なんて全然ありませんでしたから！」

あはははは、と一同は揃って笑い出す。俺はふと浮かび上がった疑問をみんなにぶつけてみる。

「なあ、さっきのヤツ、風紀委員がどうだのこうだのって言うたけどさ、他の風紀委員もみんなあんなおっかない剣を携えているのか？」

「風紀委員のほぼ全てがエクスカリバーレプリカを持っている」

「そもそも、この学校に風紀委員会なんて存在しなかったんだけどね」

まあ、あつちでチヨメチヨメこつちでチヨメチヨメ、運動場で子作りが当たり前な学校に風紀なんて無縁の存在だわな。

「さあ、理解も深まっただし、あつちでチヨメチヨメしましょ？」

「う、うん……っん!？」

振り向いた瞬間に唇を奪われ、顔を真理亜の大きな胸に押し付けられて完全に抵抗力を無くした俺の手を引いて近くの公衆トイレへと連れて行くこととする。

その瞬間に見えない何かが色々な所に、主に首へと絡みつき後ろへと引き寄せられる。

その先には香織がいた。

——あともう少しで真理亜とキモチイイこと出来たのに……じゃなく、節操の危機から救ってくれてありがとう……かな？

「誰が真理亜とにやんにやんするのを許可したの？」

「ぐ、ぐびい」

「誰が真理亜の胸、触ることを許可したの!？」

「じ、じぬう……」

「誰が! 真理亜と! き、キキ、キスする事を! 許したの!」

「お、おーい、拓真君が死んじゃうぞー」

一樹のその一言で見えない何か――恐らく空気の縄を解き、ふんとそっぽを向いた。

この高飛車傲慢束縛不良女めー！

……なんて思っもんじゃねえな。空気の鞭がしなつて俺の体を痛めつけるよ……、とほほ。

「あ、そう言えば拓真さん。海斗さんから伝言があるんですが……」
「イテ！ どうせ、ゴホッ、ゴホッ……、決闘しろ！ だろ？ イテ！ 土に還れとでも言っといってくれよ、イテ！ めんどくさいテ！」

「……相変わらず海斗さんに手厳しいですね。でも、違うんですよ。海斗さんは拓真さんに会えたら地下広場調整通路に来てくれ、って言ってましたよ」

さかきはらかいと
榊原海斗。普段の彼は俺と目が合う度に決闘、決闘とうるさい人間だが、今回は珍しく違つようだな。

「で、地下広場調整通路ってのはどこにあるんだ？」

「あ、はい、こっちです。付いてきて下さいね」

見る者全ての心を癒す満面の笑みを見せ、手を取り地下広場調整通路つて所へと向かう桜。

俺は桜が手を引くままについて行く事にした。

「何なんだ、その無数の傷とメチャクチャになった服は！ ほんつとつに無様だな、拓真！」

「焼き尽くされる前に本題に入った方が良いと思うけどなあ」

「やれるもんならやってみるよ、お前が放つライターのようない弱な炎なんかで俺の神木には焦げ痕一つ付かないだろうがな！」

「アホか、俺の炎は地獄の劫火だし！ お前のヘンテコリンな木クズなんか一瞬で消し炭だね！」

「二人ともやめてください！」

その桜の声と共に両手パンチが同時に俺と海斗の頬にヒットし、軽く吹っ飛び辺りが笑いに包まれる。

コレが俺と海斗が遭遇したとき、必ず起こるサイクルである。もう三年は繰り返しているが、意外とまだ飽きられてない。

「海斗君、怪しい所を見つけたって聞いたけど、一体どこなんですか？」

「まあ、見つけたと言うかは思い出したと言った方が正しいか。ここはネズニードランドが丸々入る程の面積を持つ地下広場を円滑に稼動するために調整機器が横一列にズラツと並んでいるのは分かるよな」

「サルでも分かるわ。で、ソコにあるいかにも貯水プールみたいな所が怪しいとでも言うのか？」

「なっ、くあっ！？ 拓真！」

「それこそサルでも分かんだよ、アホ」

自分の考えを先読みされりや、自尊心の塊である海斗じゃ無くても多少は傷付くだろうな。

海斗はというと、プールの近くで体操座りしてる。良いザマだ。

「でっ、でも、誰も分からなかった隠し通路の入り口を思い出すなんて、海斗さんはスゴいです！」

「そ、そうか？ 俺は凄いのか？ 俺は凄いのか！？」

はっはっは！ 俺は凄い！ 拓真より凄い！ などとほざきながら立ち上がり、虫酸の走る高笑いが辺り一面を染める。
……もう無視しよう。

で、貯水プールを泳ぎ切った向こう側。

香織の風魔法のおかげで泳いでいる途中で息が続きなくなりお陀仏……なんて心配はなかった、香織様々だな。

そして海斗の予想通り、貯水プールの向こう側にはまた通路が闇に吞まれていた。

「おにいちゃん……、怖いよ」

「大丈夫よ、いざという時はおにいちゃんが体張って守ってくれるわ」

——そういう事にならないよう願うよ。

「ここは敵の手中。敵の襲撃が無いとは思えない」

「ま、そうだな。気を引き締めていこうぜ、みんな！」

「あ、そうだわ、ダーリン……、ここだけの話、香織とはどこまでやったのよ？」

「なっ！？ んなっ……！」

——な、ななな、何てこと聞いてんだよ！！ 真理亜のヤツ！

「どうせ、あのツンツンの事だから処女どころか体に触れることから許してないんじゃないの？」

「誰が潔癖症よ！ 体を触られることくらい、何ともないんだもん

！」

「へえ、じゃあ拓真にこんな風に触れることも、平気よね」

忍者顔負けの忍び足で香織に気付かれる事無く後ろに回る真理亜。そのまま抱き付かれ、真理亜の魔手から逃れまいとする香織だったが、すぐさま首筋を舐められてそれも失敗に終わる。

何せ真理亜は性感帯という性感帯を知り尽くしているからなあ、『真理亜の毒牙に掛かった者はえもいわれぬ快楽に絡め捕られ精を捧げる』という逸話が存在し、『現代に蘇った夢魔』なんて呼ばれたりするしな、それに俺も何度か真理亜に襲われて……。やべ、思い出しただけで体が反応しちまつてる。

いや、目の前に広がる真理亜と香織のいちゃいちゃを目の当たりにしたら興奮するのは男なら仕方ないことか……。

「あ、んん、ひゃっ！？ やめ、止めてよ！ 真理亜！」

「あれえ？ 香織ちゃん、お顔が真っ赤よ？ ダーリンにこういう風に触られる事考えて興奮してるのね？ やらしい娘」

「かつ、か、か、考えてない！ あ、あんな奴隷にこつ、こんな風にベタベタ触られたって、な、なっ、な、何も感じないもん！」

「へえ、アナタって不感症なんだ？ 違うわよねえ？ だって今こんなに真っ赤にしてるじゃない！ 大丈夫よ、今アナタが感じてるその性への焦燥、私がその扉を開いてあげるから」

「ふ、ふっ、ふ、不潔！」

性器に手を伸ばす真理亜を疾風の一撃【ウィンドブレイク】で吹き飛ばし、泣きながら俺に駆け寄り抱き付く香織。

…… お、俺もお尻とか触った方が良いのかな？

「うう……、拓真」

とっ、とりあえずお尻に軽くタッチ。

香織はんっ、と甘い声を出してギョツと抱き付く腕に力を込める。反応は良好と“思い込んだ”俺は調子に乗ってスカートの中から両手を使ってがっしりタッチ、さらに包み込むように揉みしだく。

手のひらに広がる甘美な感触に包まれて、やったな、と誇らしげな顔で香織を見れば――

「奴隷如きがどこ触っているのよ」

双眸に憤怒の光を湛えた香織の顔がそこにはあった。

つまりアレだ、さっきの反応は拒絶反応だった、ってわけなんだな。

――つまり俺、絶体絶命!?

「あ、いや、その……、どうにか香織を元気付けようと奮闘し――」

言い切る間もなく、香織の的確で鋭いボディブローが鳩尾に炸裂、当然俺は崩れ落ちて悶え転げる。

怒るほどに動きに動きの的確さや鋭さや力強さが上がるのが彼女、香織なのだ。

「ふん、奴隷如きがエッチなことをするなんて百年早いよ百年。あ

ーあ、久し振りに疲れ果てちゃったわ、あそこで休憩を取りましょ」

「そんな事したら敵からの奇襲も――」

「休憩、休憩、きゅーけーい……キャッ!？」

それは香織が座るのにちょうど良さそうな段差に腰掛けた瞬間に起きた出来事だった。

小さな悲鳴と共に飛び上がり、怯えた表情で自分の下着を見る。

瞬間、香織の顔が青ざめ小刻みに震え出す。

香織が自らの下着を確認するためにスカートを捲り上げた際に見て

しまったのだが、妙に下着が水気を帯びているような気がするのだ。

「なにこれ、ねちよねちよしてへばりついて、とっても気持ち悪い！」

「あら、濡れちゃったの？ ソコには直接触れてないのに？ やっぱいいやらしい娘よね」

「くうううう！ 拓真！ 下着を貸しなさい！」

「貸せるかつ！」

「三人とも！ 風紀委員に気付かれましたよ！ 既に包囲されてます！」

「包囲網をかくぐつて奥に逃げるぞ！」

生意気にも海斗がそう言えば、一樹達も各々戦闘準備を始める。

でも相手は生身の人間、俺はどうすれば……。

さっきもああは言ったが本当は熱風で軽い火傷を負わして吹き飛ばしただけなのに……。

「なにボサツとしてんのよ！ 殺されるだけよ！」

「分かってる！ でも相手は生身の人間なんだぞ！ 例え帯剣していたとしても！」

「今は目の前の事に集中しろ！ 拓真！ 殺すのがイヤなら殺さねえように気絶させろ！」

「あの方のご命令により、死んで貰うぞ！ 大山香織イ！」

剣を持った風紀委員の一人が香織目掛けて突っ込む。

よほど予想外の攻撃だったのか香織の詠唱が全然間に合わない！ このままじゃ香織が……！

「クッソオオオオオ！」

俺は手の平から炎球を繰り出して向かってくる男にブチ当てる。
男はすぐさま炎上して持たれていた大剣は香織の足元に転がり落ちる。

残ったのは、エクスカリバーレプリカと焼けた男の残骸……。

「あ、アリガトウ、拓真……」

「うつ……く、はあ……！ はあ……！」

「拓真……？ どうしたの？」

——人を殺したんだ、アイツ等と同じに、そう。あの孤児院を襲ったアイツ等と同じレベルになったんだ……ついに。

これだけはないなくなかったんだ、でもなってしまった。友達を、思い人を助けるためとは言え、殺したのは事実、逃れようのない……
…事実。

「ウアアアアアアアア！」

「落ち着きなさい！ 拓真！ あなたの思うことは分かるわ！ でも今は——」

「殺した……、人を……、俺が……！ 嫌だ、いやだ、イヤだ！
止める、やめる、ヤメロ！ はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……
！」

鮮明に広がるあの時の惨状。

悪夢とも地獄絵図とも思える衝動と欲望が渦巻く孤児院何も出来ずにただ震える自分がいた。兄を守りきれなかった自分がいた。額を傷つけられた自分がいた。

——胸が、心が痛い、とても苦しい……。

その内に視界が真黒に染め上げられ、襲い来る虚脱感に包まれてこれ以上あっても意味のない意識を投げ出した。

――男は皆殺しにしろ！ 上玉の女は犯してトレーラーにブチ込め！
ブスは殺しても構わん！

――なんだその目は、大切なお友達が犯されて悔しいか？ 殺されて恨めしいか？ 力無き人間がそんな目をするな！ 腹立たしい！
死ね！

――なんだ、驚かせやがって死にぞこないが、お前は頭からノコギリでガリガリとじっくりいたぶってから殺してやる！

「そんな事、絶対にさせない！」

「死ぬんじゃないわよ、拓真。私よりも先に死ぬのだけは絶対に許さないからね」

次に目覚めた時、香織の顔が視界を埋め尽くし、口内では蠢く感触、体全体がぼかぼかと暖かい。

これだけで香織に抱き付かれてキスされてることが分かる。が、香織の性格上それはあり得ないだろう。

俺が何かすれば怒声、殴打、魔法の三連殺。

抱き締めて甘々キスなんて到底するはずがない。

「……………！？ 起きたのね、拓真。……………やっと届いたのね」

「……………何が？」

「なッ！？ 何だって良いでしょ！」

「痴話喧嘩は後、『痴話喧嘩じゃない!!』……………今はとりあえずこ

「こを離れなければ。拓真、動ける？」

「ああ、もう心配いらない。心配かけちゃったな」

俺はゆっくりと腰を上げて辺りを見回す。

ふと気付くのは周りの風紀委員が一人たりとも見当たらないことだ。少量なら血痕は確認出来るが……。

「アイツ等なら何とか撤退させたわ。かなり深い傷も何度か受けたけど、ちょうどそこに回復魔法のエキスパートがいたから、なんとかあったわ」

「稜のことでーす！」

「そ、そうか、よくやったな稜。偉いぞ」

俺は稜の頭をグシグシと愛情を込めて撫でてやる。稜は堪らないと言った様子で抱きついてきた。

稜の胸は真理亜には劣るが意外と大きい。

齡12歳にして、バストが78cmあるとは……、これ以上の成長は望めないな。

「まだまだ成長するよ！ おにいちゃんが愛を込めてもみもみしてくれればね！」

「あ、ああ……。とにかく！ 先を急ぐぞ！ 追っ手に追いつかれる前にな！」

……とは言っても、進むべき方向が分からなければ話にならない。とりあえず愛子にどっちに行けばいいか聞いて、指差した方向へとずんずん進む。

そうして進んでいく内に俺や香織達は大きな広間みたいな所に出た。白いコンクリートの質素な壁が闇に吞まれる程に天井が高く、丸く配置された篝火の間隔が広いことから面積もかなり広いことがわか

る。

「ようこそ、現実と空想の境目へ。歓迎しよう、空想の業を使う現実の住人よ」

そこには異様な雰囲気を放つ一人の初老の人間がいた。

俺はその老人が放つ異様な雰囲気に気圧され、思わず劫火の鋭剣「ブレイズブレイド」を装備してしまう。

——これほどまでに一人の人間を『怖い』と思った事があっただろうか？ これほど怖いと思ったのは孤児院以来のことだ。

いや、これは孤児院と同じ恐怖？ まさか、コイツがあの時兄さんを殺したヤツだと言うのか？

あり得ない。アレほどのことをしてのけて懲役五年以下なんてそんな甘ったれな事、絶対にあり得ない。無罪放免なんて以ての外だ。なのに、なんで？ なんでコイツからあの時と全く同じ恐怖を感じてしまうんだ？

「だれだ……、テメエは！」

「私か、私はただのしがない教頭先生だよ、ふははははは！」

そう言つて自称教頭先生は空に向かって不可解な笑い声をあげる。今回は、なかなか手こずりそうだな。

俺は、そつと心の中でそう思い、二本目の炎の剣を作り出して構える。

「おや、次期校長先生に刃向かうのかな？ なんと愚かしい。格の違いを見せつけてあげよう。エクスカリバー！」

アーサー王物語に登場した架空の剣の名前を叫んでどうすんだよ、頭イカれてんじゃないの？ 確かにそう思った。が、次の瞬間に俺

は自らの目を疑う事となる。

コンクリートの床を突き破るように両手剣のしっかり突き刺さった岩が現れ、その両手剣の柄を掴んだかと思えば、男はそれをスルリと抜き取ってしまったのだ。

真黒に染められた剣はどこから放たれる光で鈍く輝き、見ているとまるで絶望を押し固められたモノを直視してするような感覚に陥ってしまう。

「怖いかな？ この剣が」

「はっ！ 別に怖かねえよ！ そんな剣、溶かして屑鉄にしてやるよ！」

「ほお、その虚勢がいつまで続くか、試してやろう」

男の周りに闇が纏わりつく。

絶望の具現とも呼べるその闇を見ると、やっぱり原始的な恐怖が呼び起こされ、『逃げたい』という気持ちはどうしようもなく湧き上がってしまう。

でも立ち向かわなければ何か大切なモノを失ってしまう気がするんだ。

だから、どんなに無謀でも立ち向かわなければならぬんだ！

「みんな、準備は出来てる？ 立ち向かう準備は」

「ええ、エクスカリバーだかなんだか知らないけど、あんなにム力つくヤツには私の風の刃をお見舞いしてやるわよ！」

「みんなの怪我は私が治してあげるからね、おにいちゃん」

真理亜達も各々自らが得意とする武器を装備し、戦闘準備を整える。そして、俺は男に向かって突進する。

——例えどんなに無謀でも、勝利を呼び寄せる聖剣を相手にする事

になつても。

この先を知るために障害となりうるものなら、全て等しく壊すまでだ！

第七章 現実世界の秘密通路（後書き）

結局、エツチなシーンが入りました。俺って……

慰めの感想、お待ちしてます。

第八章 漆黒の扉（前書き）

かなり長らくお待たせしました、そして、かなり長らく文章が続きます。

（当社比約2倍）

遂に第一部はラストスパートをかけます！

遂に一連の騒ぎの黒幕と対峙する拓真。果たして、拓真の運命は？

そして、香織はどのように拓真を弄ぶのか！？

第八章 漆黒の扉

「だぁぁぁぁぁぁ！」

俺はまず、自称教頭に向かって二振りの剣を同時に振り下ろす。

かなりの衝撃があるこの攻撃を自称教頭は顔色一つ変えずに受け止め、さらには片手で軽く横に振るうことでいとも簡単に俺を吹き飛ばして見せたのだ。

人間離れした怪力しやがってこの野郎が！

「ぐぁっ……っつと、一人じゃ無理があるか」

「援護する。拓真は再び突撃して」

「私も援護するわよ、ダーリン！」

「よし……、行くぞ！ 二人とも！」

今度は変則的に蛇行しながら自称教頭に突っ込む。

真理亜と愛子は自称教頭に強力な魔術を浴びせるために精神を統一している。

それに対して自称教頭は何をするでもなくただただニヤニヤ笑っていたのだ。

ム力つく上にキモい野郎だぜ、全く！

「これに乗って下さい、拓真さん！ がんしょうだい 岩昇台！」

直後、自称教頭の前五メートルの床が盛り上がる。

俺がそれに飛び乗れば、盛り上がったコンクリートは少し沈んだ後に重力が過度に掛かるほどのスピードで急上昇した。

こんなもんが急に止まったら、俺はどうなると思う？

答えは単純にして明快、派手にぶっ飛ぶんだ。

しかし、意外と計算高い桜はただ俺を吹き飛ばした訳じゃないって事は分かってる。

頭上から急襲するのにちょうど良い場所をピンポイントで落ちるようにちゃんと計算してぶっ飛ばしたのだ。

…後で前からせがんでいたほっぺにチューでもしてやろう。ああ見えて桜は2人つきりになると凄く積極的になるんだ、ハグとか頬擦りとか。

……うん、すごい甘えんぼさんなんだ よね。

「今です、拓真さん！ 飛びっきりの一撃をぶつけて下さい！」

「うおおおおおらああああ！」

桜の助力、無駄にはしない！ 二対の火炎迸る剣同士をぶつけ合わせて大剣を形成し、自称教頭に向かって振り下ろす。

真理亜と愛子の魔法も左右から襲い掛かる。

これで決まりだ！ 自称教頭！

「仲間、良いですねえ。仲間同士協力し合って強力な力を生み出せる……しかあし！」

自称教頭の一喝と共にエクスカリバーを床に突き刺す。

瞬間、おぞましい不可視のオーラが火と氷の帯を消し飛ばし、炎の大剣を跡形もなく粉々にした。

その衝撃で俺は大きく吹き飛ばされて香織の前まで吹き飛び地面に叩き付けられて、甚大なダメージを受ける。

「いつまでも慣れ合っているようでは私には敵わない！」

「そんな……、三方向から攻撃しても通じないなんて！」

「どんなに堅い守りでもどこかに穴はあるはずです！ 陣襲雷！」
じんしゅうらい

一樹の一言により自称教頭の足元にかなり複雑で言葉に表せない魔法陣が現れてそれが一際強く輝く。

次の瞬間には黄色の円柱が自称教頭を包み込んで爆ぜた。

「やりましたか!？」

「ハハハハ……、蚊にでも刺されたか？」

「ビクともしてねえな、じゃあ俺に任せろ！
じゃくそうばく 若草縛」

海斗の掌から蔓が伸び、自称教頭の全身に絡み付く、そのせいか剣を振ることは疎か歩くことすらまならない。

「くそ、こんな蔓草の一本や二本……!!」

「今だ！ 拓真！ 今や自称教頭はツタの中だ！ 俺が言いたいこと、分からないわけ無いよなあ!？」

「サルでも分かるわ！ アホ！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】!」

海斗は絡み付く蔓を燃やす事で、自称教頭を火の中に閉ざそうという考えらしい。俺もその手に乗ったが、良く考えれば、こんなことしたら確実に死ぬんじゃない？

いや、一樹の陣召雷を受けて平気で立っていたんだ、例え火達磨になっても『良い火加減だ』ってけろりと不気味に笑って見せるんだろうな。うざったい。

そう考えている間にも蜥蜴の尻尾はツタにぶち当たり点火させ激しく燃えさかる。

「さあ、フィニッシュよ、渦風の牢獄【シュトロムプリズン】!」

風の牢獄を作り出すであろうその魔法は、轟々と燃え上がるだけの炎を球状に形作り、質を上げたのだ。さすが香織といったところか。

「当然よ、だって私は大山財閥の跡取り娘！」

「関係ないだろ、さすがに」

「ふはははは、全く、さすがは大山財閥の跡取り娘、といったところか！」

燃え盛るドーム状の炎から声が聞こえたと思いきや、突如黒い小さな球体が香織を貫かんと猛スピードで襲い掛かる。

……ダメだ、弾き返すには反応が遅すぎた！ やむを得ず、俺は黒い球体を体で受け止め、香織を守った。

「なかなか素晴らしいチームプレイだったよ、しかし、他人を頼っているようでは私には勝てない。守るものがあるが故に生まれる隙が私には無いからな。私は孤独だからね」

「があっ、ぐう……、はあ、はは、孤独気取ってんなよ！」

痛みが和らぐや否や、すぐさま飛び起き剣を再び二本作り出して自称教頭に突っ込む。

今度は教頭も真っ黒なレーザーで排除しにかかるが今の俺には止まっているように見える。

俺はそれらを軽くかわして自称教頭に斬りかかる。

「孤独を感じたからって強くなった気なのか！？ 何でも一人で出来るからっていい気になっているのか！？ ふざけんな！」

上段で二本の剣を受け止めてガラ空きの脇腹を思いつ切り蹴り飛ばし、よろける自称教頭の懷に潜り込んで右斜め下から斬り飛ばす！

「守るものがあるが故に生まれる隙？ 守るものがあるが故に生まれる強さを知らねえくせに知ったようなこと抜かすなよ！」

自称教頭は近くの貯水ポイントに落ちて水飛沫を上げる。

「それに、悪いけど俺の方がお前の何十倍も孤独だぜ。父親も母親も兄さんも、奪われちまった俺の方かな」

「やったね！ おにいちゃん！」

満面の笑みを迸らせて駆け寄って来る稜。

……さあ早く俺の近くに来てパイタッチさせておくれ、その大きなおっぱいをゆっくり揉ませておくれ。

ああ、顔を真つ赤にしてキスをせがむ稜の姿が目には浮かぶぜ……。

……なんてけしからん事を考えていたら、いきなり自称教頭が俺と稜の間を割るように現れたと思えばもやもやとした闇で出来た腕を背中から二本、生やしたのだ。

「そう、なら妹も奪われてみるか」

「ふざけんな！ 稜に何かしてみろ！ 絶対に殺してやるからな！」

「死ねえ！」

「キヤアアアア！」

稜の悲鳴が室内に響き渡る。

俺は両脚に力を込めて二人の間に駆け込む、割り込んだ時には自称教頭が闇で出来た爪を振り下ろし、俺の背中を抉っていた。

「がはあつ……、クツソオオオオオ！」

俺は残っている力を振り絞り自称教頭に一闪、見事にヒットし大きく吹き飛ぶ。

ザマア……、そう呟く頃には体を支える力を全て無くし、どきりと崩れ落ちる。

そんな俺を心配してかみんなが俺の近くに駆け寄る。
そんなに近づいたら、俺の血で体も衣服も汚れちまうぞ……。

「拓真あああつ！」

「気を確かに持つんだ！ 拓真君！」

「タダじゃ済まさねえぞ！ 化け物が！」

「おにいちゃん！！！」

「ハハハハハ！ 妹を庇って自ら傷を負いにきたか！」

くそ、力が……、指先一つ動かない。俺は死ぬのか……？
でも……、稜のために死ねるなら、俺は……。

「バカな事言わないで！ 私はおにいちゃんといっしょで初めて幸せなの！ おにいちゃんが私より先に死んじゃうなんて許さないからっ！」

「お願い、拓真さん！ 死んじゃ嫌です！」

「もう遅い！ この傷では絶対に助からんわ！」

「ダーリンを傷付けた事、後悔させてあげるわ」

「案じなくても良い、貴様等もすぐにこの男の所へと行くんだからなあ！」

「そんなに孤独を愛すなら、あなたに永久の孤独をあげるから」

「許さない、おにいちゃんを傷付けたあなたを許さないんだからあつ！」

薄れゆく意識の中、稜の絶叫が脳内で木霊する。次の瞬間には視界が真っ白に染まった。

もし俺が気絶していたなら視界は白ではなく黒に染まるはず。

そこまで思考が及んだその時、不意に唇が柔らかいモノに包まれる。口内に無味無臭の明らかに食物ではない何かが流れ込み、何故か背中が痛まなくなるのだ。

魔法的な何か何だろう、じやなきやこんな短時間で傷が癒えるはずない。

その影響が徐々にだが視力を取り戻し、目の前にある唇を覆っている何かの輪郭が露わとなる、その輪郭の主が……、

「良かった……、おにいちちゃん、無事みたいだね」

稜だった。視力を完全に取り戻した時の顔の近さと唇の感触からキスされてたんだと考えがつく。

他のヤツらにもこうやってキスしてたとしたら、ちょっと妬いちやうな……。

俺はムスツとした表情のまま立ち上がり、ありがとうと無愛想に礼を言う。

「もー、おにいちちゃんにだけ、特別に考えた癒しの光【ヒーリングライト】口移しをしてあげたのに、その態度は何なのよ！ もう、癒しの光口移ししてあげないぞ！」

「あ、いやいやゴメン、とっても嬉しいよ……、でも、していいのは俺だけだからな」

「もう、おにいちちゃんったら……、最初からそのつもりだろう、おにいちちゃん以外の人とキスなんて考えられないし、こんなこともおにいちちゃんにしかできないし」

ちゅう、という音と共に俺の体は歓喜に震え上がる。

…… やっぱり敏感な首筋に吸い付かれるとどうしてもこうなるよな。その最中、今まで包み込んでいた光が徐々に収束していき周りに香織達の姿を、後方には自称教頭が凄い形相で睨み付けている。

いや……、あれはまさに悪魔！？ 頭に禍々しい角を生やして黒眼の中心は赤い光を放ち、所々裂けた衣服から覗く皮膚も緑色に変色している。何故だ……？

「ぐ、ごおお……、が、暴れるな、体を借りねば存在できぬ霊体の分際でエエエ！」

「お、おい、なんだか分からないが今がチャンスみたいだぞ！ 全精力を以て駆逐だ！ 駆逐！」

なぜだか分からないが、自称教頭は呻き苦しんでいる。今がチャンスなのは間違いない！ 俺は蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放つべく両手をかめ●めはの要領で後ろに引いて呪文を唱える。香織達も各々自らが最も得意とする魔法の呪文を唱える。

「古より伝わりし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を与えよ。蜥蜴の尻尾【リザードテイル！】」

両手がこれ以上無いってほど熱くなる。見れば両手にバレーボール程の大きさになっていた。

俺は両手を突き出しその中で暴れる真紅の炎を解き放つ。

放たれた炎は自称教頭に着弾した瞬間に爆発し吹き飛ばす。

次の瞬間には香織達も次々自称教頭に向けて魔法を繰り出し、次々と命中させていく。

炎が舞い氷の楔が身を穿ち、土の槍が地中から襲えば金属がその身を縛り、細かな木片は激しき風に乗って深く突き刺さる。

最後に香織が無数の細かな空気の刃を放って自称教頭は断末魔を上げて仰向けに倒れる。

「やったか！？」

「あれほど魔法を浴びたのよ、死んでなければ人外としか考えられないわ」

「はは、がはははは、は……、見事だ」

「野郎、まだ息してやがる！」

「違う、彼の体から黒い粒子が出ている。彼はもはや闇そのもの」

愛子の言うとおり、自称教頭の至る所から黒い粒子が流れ出している。

「はははは……、まさか悪魔の力を取り込んだ私が、死にかけるとはな」

「悪魔の力？ どういう事だ！」

「知りたければこの扉を開くがいい。その先に答えがあるだろう、孤児院襲撃の理由もな」

「孤児院襲撃……だと？」

どういうことだ！ 俺がそう叫ぶ頃には自称教頭は高らかに笑い黒い粒子と化していた。

「チクショウ！ 待ちやがれ！ 孤児院襲撃は仕組まれていたことなのかよ！ 答える！」

「落ち着いて、彼の気配はもう無い」

「落ち着いてられつかよ！ 俺はあの事件で一度全てを失った！

大切な人を！ 兄ちゃんを奪われたんだ！ もしあの事件が仕組まれていたことなら、俺はその首謀者を殺さねえと気が済まねえ！」

「あんたの気持ちは分かったわ、でもー」

「分かる訳ねえだろ！ 全部無くした人の気持ちを、全部有り余っている人間なんかに！」

ペチン！ 乾いた音が大きな部屋に響き渡る。

香織が俺の頬を叩いたのだ。

「何……すんだよ」

「ええ、正直あんたの気持ちなんてこれっぽっちも分からないわよ。」

でも、ここで喚いたってなにも変わらないじゃない！」

香織は叱りつける、その顔には涙。一体彼女は何を思い泣いているのだろう。

「失ったものは確かに取り戻せない！ でも作り直すことはできるわ！ あんたに兄はいなくても、妹や真理亜たちとか、お姉様たちがいるし、何より私がいるじゃない！」

「香織……」

「そうそう、失ったものは大きいけど、それ以上に大きな思い出を作ったら、少しは寂しさは紛れるんじゃないかしら」

「過去ばかり見ても何も進歩しない。大事なのはその過去を自らの糧とし今に未来に活かすこと」

「だから、今を邪魔する教頭先生をばーんとやつつけちゃいましょう！ ばーんと」

「真理亜……、愛子……、桜……」

「全く、しみつたれな拓真を見てるとなんか調子狂うんだよなあ、普段が普段なだけに」

「んだとお……！？」

「まあまあ、拓真さんの言いたいことは分かりますが、今回は香織ちゃんの言い分が正しい。とりあえず彼の言っていた扉を探し出してみませんか？」

「一樹……、そうだな。一樹の言うとおりだな。よし、じゃあちゃっちゃんと扉を探し出して、ちゃっちゃんと自称教頭を片付けるぞ！」

おおー！ 互いを鼓舞するように雄叫びを上げる一同。

そりゃあ憤慨は完全には消えちゃいない。でも香織の言うとおり、今ここで喚いたってなに一つ変わらない。

だから俺は直接自称教頭の所へ殴り込んで、一発殴り飛ばしてやるんだ！

「それでこそダーリンよ！」

「むぐつ……！？　ちよつ、真理亜！」

真理亜の大きな胸が襲い来る。羨ましいなんて思うなよ、コイツは俺以外の男を快樂を得るための道具としか考えてないから。

俺でさえいついかなる時、場合でも襲える恋人としか捉えられてないんだから。

……十分？　おめでたいな。毎晩襲われてみる、俺じゃなくてもウンザリするぞ。

「ダーリンってば素敵すぎっ！　食べちゃいたい！」

「今はマズいだろ！　ギャラリーがいる！」

「そうよ！　雇探して教頭ぶつ飛ばすって奮起したのに、ダメにする気！？」

「いーじゃない。ご褒美ってことで全身リップだけだから」

「それがいけないのよ！」

「い………イクう………」

真理亜のおーきくてやーらかいお胸が僕のお顔にぴったりくっついて酸素を供給するための穴という穴を埋め尽くして、結果スゴく苦しいんだけど。息できないんだけど。

「イキそうなの？　ダーリン？」

「ええ、早く離してあげないと天に召されるわよ」

そこで事の重大さを知った真理亜は慌てて頭を押さえつけていた腕を離し、撓わに実った罪深き果実から漸く解放されたのだ。あと少しで幸せな死に方をするところだったぜ。

「……拓真」

「ん？ どうした、なにか言いたげだな、愛子」

「扉、見つけた」

例のごとく要点だけを話し、ある特定の座標を指差す愛子。その座標上には、扉というには余りにデカすぎる、例え巨人族みたいな巨大な人間が実際にたとしても普通に通れるような巨大な漆黒の扉が存在した。

「これは探すも何もないですね、この大きさじゃ」

「全くだ、こんな巨大な扉誰が使った？」

教会とか中世西洋の建物なんかに興味もなくバカでかい扉がよく使われるだろうが。

まあ、海斗はバカだから分からないだろうなあ。

「拓真。なんなんだ、その明らかに見下している目は」

「別にい、海斗は所詮井の中の蛙なんだなあって」

「この形状にさっきの発言、あれがどこかに繋がる扉だしたら、開かない訳ないわよね？ その三バカトリオ！ あの扉、開いてみなさい」

三バカトリオって……、俺が入っていない事を祈るが……。

「名指ししないと分からないの！？ 使いづらいわねえ！ 拓真！

一樹！ 海斗！ あんた達の事よ！ 分かったら貴婦人達のためせつせと気張りなさい、男でしょう！？」

「拓真と一纏めにするな！」

「だってバカ犬、バカオタク、姉妹バカじゃない。バカが三人揃って三バカトリオと呼ばれても仕方ないじゃない？」

こんなにもバ力を連呼する女は十五年生きてきて初めて見たぞ。しかし、やっぱり入っていたか……。それに自分たちの事を気品の一欠片も持っていないくせに貴婦人って言ってやがるよ。

せめて優雅な立ち振る舞いの一つや二つ、見せてから物を言えってんだ。

そんな心の声を聞いてか、香織は俺に空気の塊をぶつけてきた。そんな香織の顔を覗き見れば、どす黒い笑みを浮かべてこちらを睨み付けている。

俺はこれ以上余計なことを考えないように努め、扉の前へと立つ。

「拓真君、準備は出来ましたか？」

「もちろんだ、一樹」

「足引つ張んなよ、拓真」

「今の言葉、そっくりそのまま返してやるよ、海斗」

俺達三人は同時に扉へと手を掛ける。

瞬間、俺の脳裏にある場面が浮かび上がる。

だが、そんなのに構っている暇はない！ 扉を力いっぱい押し、扉の開放を図る。

でも男三人でも力不足のようだ、ビクともしない。

「うんぬううう……、ダメだ、動きません」

「おい、拓真！ 自分だけ楽をしようと手え抜いてんだろ！ 正直に話してみたらどうだ！」

「それはこっちのセリフだ！ 筋肉無しのもやしがッ！」

俺達は罵倒し合いながら尚も力を加える。しかし、ビクともしない時間が数分に渡り続く。

香織も呆れて「使えない三バカトリオだわ」と呟いた、まさにその

時扉がズズツと軽く動き、四メートル超の巨大な扉が独りでに、なんと独りでに動き出したのだ。

……大事な事なので二度言いました。

「……俺は音がしてから少しも触れてないぞ」

「僕も。何でこんなことが起きたのでしょうか？」

「そういう仕様なんじゃないの？ とにかく行くぞ！」

「気を付けてダーリン、空間魔法を自在に操れる私だから分かるんだけど、この先はさっきまでダーリンがいた世界なのに、さっきとは様子が変よ」

「……姉様達が危ない！ 急ぐわよ！ 桜、愛子、真理亜、三バカトリオ！」

「だから拓真と一緒に纏めるな！」

焦りを隠せないと言った様子で香織は駆け出し、俺達も香織の後についていく。

この時の俺達はまだ知る由もなかった。

この世界と魔法の世界の二つの世界を巻き込む大きな出来事が起こるうとしてるなんているなんて。

第八章 漆黒の扉（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回はエッチとシリアス4：6を意識したつもりですが……いまいちエッチが多くなる傾向にあるみたい……目指せ、シリアス50%！

第九章 惨劇の魔法世界（前書き）

お久しぶりです！ シリアスで、長い文を書いていたら、こんなに間が開いてしまいました。

それに加え、『ゼロの使い魔』とか『HEROES』を見ましたから……

やっぱりルイズは最高だ……

じゃなくて、いつか『ゼロの使い魔』みたいなエッチと『HEROES』みたいなシリアスの両立が出来たらなあって思って、日々頑張っています！

遂に、校長室を発見した拓真は、扉を切り裂き、教頭先生の元へと向かう。その時、拓真は衝撃的な過去を知らされて！？

もちろん、香織も負けていない！ 首輪を使って犬扱いしたり、

おまけにキスをせがんだり！？

拓真は二重の意味でどうなってしまうのか？

第九章 惨劇の魔法世界

「しっかし、どこまで続くのか、この暗闇は……」

ここまで歩いて約30分、どこまで続くのか、はつきり言って、少し疲れたぞ……

「あら、元気ないようね。私が元気が出ること、してあげようかしら？」

「なッ！ 節操を持ちなさい！ ここは黒幕の手の中かもしれないのよ！？」

「あら、あなたは欲しくないの？ 拓真のか・ら・だ」

香織は顔を赤くして、顔を背けた。

「ううっ……そう言われると、弱いわね……」

「でしょう？ だったら行動あるのみよ！ ちょうど辺りも真

っ暗だから、何をしても、私とあなたと拓真しか分からないわよ」

そんな淫乱娘に腹が立った俺は、殴りかかるのは情けないという考えから、大きな胸を揉みしだくことにした。

俺にとつては、二人に対する罰ゲームみたいなものだが、二人はこれを興奮していると勘違いしてしまった。

「ほら、拓真も興奮して、おっぱいもみもみしてくれてるわよ！今を逃すと一生できないわよ！」

「そ、そうよね。今しかないわよね。拓真もエッチしてくれるのは、真っ暗な今しかないわよね」

すぐさま俺は誤解を解こうとするも、抗議の声を出す唇は真理亜の唇によって塞がれる。

「いいから、黙って私達のおもちやになればいいねよ」

「ぬああ！ 離せ！ おい、ふざけるなよ？ ここは愚かなる教

頭先生の手中だと言うのかわからないのか！」

「問答無用！」

「知った事ではないわ！ ただ私は獣なの！ 快楽を貪る獣！

それが夜の私、闇の中の私！」

いや、昼夜問わずお前は獣な気がするがなあ……

「それは所謂、気のせいってものよ」

「じゃあ、昼間の真理亜はどんな真理亜だよ？」

真理亜は可愛らしげに首を傾げ、「んー、気品溢れる淑女？」と答えた。

『ありえない！』

この場にいる全ての友人達が口を揃えて返した。

「そんなことより、見ろ！ 出口が見えるぞ！」一樹の言うとおり、前方に光がさしてきた。だが、妙に赤い気が……。

「出るぞ、あらかじめ、武器は装備しておけ」

海斗が言くと、みんな武器を装備した。さすがは元帥の息子、戦闘の時はリーダーシップを発揮してくれる。しかし、かなり臆病なので前衛ではまったく役に立たない司令塔みたいな人間だ。

「うるさい！ 戦闘狂よりかは数段ましだ！」

「誰が戦闘狂だ！ 焼き尽くすぞ！」

「やってみる！」

「止めなさい。こんな所でいがみ合っても仕方ないわ。第一、無駄に魔力を消費する事になるわ！」

香織は一際厳しい剣幕でこちらを睨み付けている。

「拓真、こっちに來なさい。これは主である、私からの命令よ！」

「へいへい」俺は渋々と命令に応じた。……はあ。一体、何されんだろ。と沈んでいると、ガシャンと首元で金属音が鳴り響いた。

「んんっ！？ 何だこれは！？ ……じゃなくて、何でしょうかご主人様？」

「チエーン・オブ・ザ・ウインド。風属性専用マジックアイテム、『風の首輪』よ」

「く、首輪ア！？ あの犬がつけるアレか！？」

香織は悪びれた風もなく笑う。

「そうよ、ソレソレっ」

「ざっけんな！　俺は犬なんかじゃねえ！」

「あら、犬じゃない。オスにはケン力をふっかけ、メスには尻尾振って、種をまく。これ全部、犬の本能じゃない！」

「俺がいつ種なんかまいたよ？」

「しつかりまいたじゃない？　真理亜に。精根尽き果てるまで」

「まいてねえ！」

「ふーん、へえ、そーう」

「何だよ……そのあからさまに信用してないその目は」

「だって、世界一誘惑が上手な真理亜と世界一誘惑に弱い拓真なのよ？　もう、拓真は誘惑されて『困ったなあ、もうやっちまおうか？』的なノリでやっちまっただら？」

「やっちまってねえよ！　そもそも何だよ！　『やっちまう』って！」

「おーい、そろそろ本当に出る、本当に戦闘準備しとけよ！」

「あいよ」

俺は再び、獄炎の小刀【インフェルノ・ナイフ】を装備し、首輪の中に入れる。

「な、何するつもりか分からないけど、破壊するのは諦めなさい、この鎖はかの有名な『オリハルコン』を使われてるみたいだから」

「破壊？　何をお子ちゃまなことを言ってるんだ？　灼き斬るんだよ。『灼熱の一閃』」

小刀に纏わり付く炎が、一際強く輝き、首輪に纏わりついてバラバラになる。香織は完全に色を失ってしまふ。

「うっうっ、嘘ッ！　ありえないわ！」

「オリハルコンもマグマには負けるみたいだな。さ、いよいよ教頭先生のお出ましだ、氣引き締めろよ！」

「分かってるわよ！　もう、この戦いが終わったらたっぷりとお仕置きしてやるんだからね！」

そんな中、稜が敏感に異変を感じ取った。

「ん？　あれ？　なんか焦げ臭いよ？　お兄ちゃん」

「稜も感じるか？ 人々の悲鳴、怒号、恐怖が」

「うん。やっぱり何か変だと思った。……怖い、怖いよお兄ちゃん」
「心配するな。俺が守る」

ここまで話して、とんでもない殺気と嫉妬が混ざり合った、グサリと心臓に突き刺さってしまうんじゃないかと思わせるような鋭い視線を感じたが、「気のせい、きつと気のせい」と自分に言い聞かせて、いや、全然気のせいじゃないけど、無視して、魔法の世界へ足を踏み入れた。

後々、これが災いとなって、再三と追いかけ回され、散々と痛みつけられたのは、また別の話だ。

そして、俺達は再び魔法の世界に足を踏み入れる。恐らく、ここは学校の近く、そこそ高いい山の山頂付近の公園なのだろう。そこで見たものは……

「地獄絵図」

「ひどい……誰がこんな事……ひどすぎます！」

市街地が火の海となっていた。地獄でいう『灼熱地獄』だろう。

「わ、私のお姉様達が！ まだ屋敷の中かもしれないわ！」

「よし、急ごう！」

しかし、愛子は手をかざし、行く手を遮る。

「囲まれた。待ち伏せ」

辺りを見回すと、ゴブリンとか、ドワーフなどの下位悪魔がわんさか集まっていた。前のような化け猫……なわけないか。奥の手を使ってみますか。

「仕方ない、アレを使おう。かなり魔力使うけど」

「何！ アレって！」

「いいから、黙って見てな！ 烈火の流星【シューティングスター・ブレイズ】！」

突如として現れた、流星群が次々と下位悪魔に当たり、消滅してい

く。ただ、この魔法は消費が激しすぎて発動したら、しばらくは寝返りをうつこともままならないくらいに疲れ果てるのだ。

「ゼエ……ハア、やった……やったぞ……クッ！」

そのまま、足腰に力が入らなくなり、前のめりに倒れる。

「え、嘘！ 拓真！ しつかりしなさいよ！」

香織の声が聞こえる……やべ、再起不能だ。くそ、こんな所で……そんな中、俺の唇に何か暖かく柔らかい物が触れた。……何故か動けるようになる。あんなに疲れてたのに……

「だだだだ、大丈夫？」「香織……さっきの柔らかくて、暖かい感覚は……唇？」

「そそそそ、そうよ。魔力回復には、女の子の唇が一番なの。他に緑色のポーションとかあるけど、苦すぎて私には飲めないわ。だから、女の子の唇を奪うの。別に、ガールズラブとかレスピアンとか小百合属性ってわけじゃなくて、魔力回復なの。分かった？」

「お、おう。にしても三回目だな」

「何が？」

「キスしたのが」

瞬間、真っ赤になった香織に押し倒され、気が済むまで唇を奪われた。

「宮本流剣技、居合い一ノ型『断絶』！」

灼熱の冠を鞘に差したまま、抜いた衝撃を利用し、対象を下から真っ二つにする、基本中の基本の技。だから威力は低めだが、俺が使うと大山家の豪邸の前にそびえ立つ鋼鉄の巨大な門を粉碎するほどの威力を有するのだ。

それに加え、香織とのキス。あれが俺に絶大な力を与えてくれたみたいで、今ならドラゴンも瞬殺出来るんじゃないかって思えてくる。

「おおい、紅音ー！ 詩音ー！ 楓さーん！」

俺が彼女達の名前を呼ぶと、突然、目の前にワープしてきた。

「あら、お久しぶりですね。香織に拓真さん」

「ああん？ 香織に拓真じゃねえか？ どうした？ 遭難者を探すような呼び方しやがって……俺らはここの住人だから、迷わないんだよ」

「もお、なんや？ 人様がせっかく気持ちよく寝とるゆーんに？

腹立つわあ！」

あ、あれ？ 紅音の口調がとてつもなくヘンだ。関西弁になっている。前に会った時はルー・柴みたいな喋り方だったのに……

「あの、一つ質問、いいですか？」

「なんや、いつてみい？」

「あなたは、前に日本語の間に *glamorous* とか *name* とか言ってませんでしたか？」

「それは、あんたとアタイが初対面だからや。初対面の人にいきなり関西弁ってーのは失礼や思うてな……」

「だから、ルー・島みたいな喋り方を？」

「せやな。大体あつとるけど……」

「もう！ 拓真も紅音お姉様も雑談に興じている暇はないでしょう！ 一刻も早くここを離れなきゃ！」 「せやな！ 拓真、この続きは混乱が終わったら、じっくり話したるからな」

俺達は大山家の豪邸を後にし、最寄りの高台に登りつめた。俺達がそこから豪邸を見た瞬間、そこに巨大な隕石が落ちてきて、大山家豪邸を跡形も無く吹き飛ばした。

「あつ！ 私達の家がつ！」

「んなアホな！ ありえへんて！」

「おいおい、住むとこ無くなっちゃったぞ！ どうすんだよ！」

「まあ、ドンマイ！ 復興までは家を使ってくれて構わないからさ……」 「ホンマか！ おおきに、ホンマ助かるわあ！」 いや、紅音

が関西弁を使うのは意外だったが、あの挑発的な態度も完全に消え

ている。

「ああ、あれは芝居やで。どや、興奮したやろ？」

いやあ、女というのは本当に芝居が上手くて怖いもんだよ、まった

次に向かったのは、大山第一魔法学校。もし俺が普通の人間だったら、今頃向こうの世界で、五時間目の授業を受けているだろう。確か歴史だっけな……と物思いにふけていると後ろの方で轟音が響き渡った。今はあの大山家豪邸を吹き飛ばした隕石なのだろう。

「おい！ さっきの高台も吹き飛ばしたぞ！ あのオッサン！」

「だが、ここが奴の居城なら、ここに隕石は降って来ないだろう。安心して搜索すればいい」

「じゃ、じゃあ、もしここが教頭先生のいるところじゃなかったら、どうなるんですか？」

『……………』

みんな黙っちゃったよ……。

「ねえ、ダーリン。私と最後のエッチ、しようよ」

お前は一生黙ってるよ！

「じゃあ、とりあえず校長室へ行こうか？」

「なんで？」

「そこしか見当つかねえからに決まっているだろーがッ！」

「でも、敵が……」

愛子の言うとおり、いつの間にか、ガーゴイルを主とした、魔物軍団が俺達の周りを囲んでいた。

「お兄ちゃん、私……怖い……」

稜は驚く程に怯えていた。確かに怖い。だが負けるわけにはいかない。俺は稜の背中を優しくさすってやった。稜の体の震えは収まり、表情が綻ぶ

「教頭先生は我々が到達する前に魔力を使い果たさしてしまおう、

という魂胆なのでしょう。しかしそうはいきませんよ」

一樹は土間に向かって雷を放つ。土間を守っていた魔物は全て消え去った。

「行ってください。ここは任せて先へ。これであなた達が本来使う魔力の2分の1位は節約でしょう!」

「でも! 一樹だけじゃ、みすみす死に行くようなもんだ!」

その時、木で作られた巨大なハンマーが近くのカールを襲う!

「誰が一樹だけだって言った? 俺も行く」

「海斗……お前、やれるのか?」

海斗は不敵に笑った。

「当たり前だ。どこまで侮辱すれば気が済むのか、生還したら全力で土下座しろよ?」

俺も不敵に笑う。

「ああ、土下座ならいくらでもしてやる! だから、絶対に死ぬなよ!」

「おう、貴様の悔しそうな顔を見るのが楽しみだぜ」

「僕たちも必ず追いつきます! だから早く! 土間のバリケードが張られる前に!」

「お、おう……絶対に死ぬなよ!」

土間には早くも魔物が集結し始めている。俺はその魔物を全て切り刻み、活路を切り開く。

「こつちだ! 早くしろ!」

俺と女達は校舎の中へと消えていった。

俺達が完全に消え去るのを見て、不意に一樹は呟いた。

「海斗君。君の勇氣は賞賛に値し、中世のヨーロッパでは、普通に爵位を貰えるくらいの働きをしてくれたと思う。これは特攻で、足止めに過ぎないし、こんな魔物達を殲滅しきれるかも分からない。それでもやってくれるかい? 海斗君」

「愚問だな。友の危機に駆けつけるのが真の友というものだろう。散る時は一緒だ。一樹」

「あれ？　生きて帰って、拓真に土下座させてやるんじゃないかったのかな？」

「ああ、そうだとも。仮にだよ。ありえないがな。さて、あちらもそろそろ痺れを切らす頃だろう。この続きは生きて帰って、拓真に土下座させた後にしようぜ！」

「だな、攻雷九ノ式、『豪雷ノ双拳』」

「攻木九ノ式、『神木ノ巨槌』！」

「きゃっ！」

突然の地響きに目を丸くして驚く女達。まあ俺も多少はびっくりしたが……

「お兄ちゃん、さっきのつて……」

「ああ、あいつらだ。あいつらが頑張ってくれているんだ。俺らも頑張らないとな！」

「ええ！　当然ですわ！」

「一樹さんと海斗さんが頑張っているんです！　私達も頑張らないと！　この世界が教頭先生に滅ばされてしまいます！」

その時、愛子が何か呟いた。

「敵影、接近。12時の方向。」

愛子の言うとおり、正面に衛兵が接近してきた。「何者だ！」

すかさず、接近し、居合い抜きからの峰打ちで衛兵を気絶させた。

「凄いやん！　やるやないかい！　なあ？　詩音」

「いや、まだまだだね。俺なら一瞬で殺せるぜ？」

殺せるって……これまた物騒な……

「甘い、甘い！　勝負はいつも死ぬか生きるか！　弱肉強食の

この世界、そんな甘つちよろい考えじゃ、すぐにお陀仏だぜ！」

そこまで言われるんだ……気絶させただけで……

「まあ、これが詩音ちゃんだから仕方ないですよ」

「おい！ 楓！ 俺をちゃん付けで呼ぶなって何回言えばわかるんだ！ 気持ち悪い！ 俺はチャラチャラした女じゃねえ！」

「でも、香織ちゃんと遊んだ時の、あの乱れっぷり、最高でしたよ？」

「グギイ！ るせえ！ うるせえ！」

そっとう詩音の目には涙が黙っていた。

「殺すからな、テメエら絶対に皆殺しにしてやるからな！」

それからしばらくは、雑談を交えながら、衛兵を次々に気絶させたり、懺殺したり、色気で乗り切ったり（俺も色気で何度も気絶しそうになったが）と、搜索はスムーズに進んでいき、遂に校長室へとたどり着いた。

「魔力消費してる人はいますかあ？」

桜を除いた全員が手をあげた。みんな、ちゃちな魔法から壮大な魔法まで様々な魔法を放っているためだ。桜はと言えば……逃げた。

「一列に並んでください。キスしますから」

いきなり何言い出すんだ、お前は。もじもじしてるし。

「本当は拓真さんとだけで大人な時間を過ごしたかったんですが、せつかくだから、女の子ともラブラブしてあげようかなあ、なんて」

「……本当はそんなこと言われるとこっちから願い下げて言ってるんだけどね……今はあんたの唇が必要だから、何も言わないわ」「じゃ、拓真さん、キスしましょうー！」

遂に香織がキレだした。

「ふざけないで！ もう我慢の限界だわ！」

「……キス、しませんよ？」

その一言だけで香織の反抗は終了する。……いやあ、本当に短い反

抗だった。

「何か言った!」

「いいや、何でもないですよ」

「ああ、もう! 勝手にしなさい!」

「じゃ、拓真さん、私がやさしく、ゆっくり、じっくり、がつつり、キスしますからね」

そうついた途端、俺は桜に押し倒される。

「え? ええっ!」

「ついでに体も奪ってあげますから」

「……おい、みんな、大丈夫?」

「あんたみたいに激しく体を貪られたわけじゃないからね」

「ゼエ……ハア……なんで俺だけこんな目に」

「女の子をメロメロにするフェロモンがあなたにはあるのよ」

真理亜が蠱惑的な微笑を浮かべながら、近づいてくる。近づいてきて、抱きついてきた。

「チューしていい?」

「お願いします」

「ふざけるな」

香織は疾風の棍棒【ウィンド・クラブ】でしたたかに殴りかかる。

「なにすんだ!」

「真理亜はダメ。絶対にダメ。個人的に気に入らない」

香織、それを人々はエゴって言うんだよ。

「うつさい! そんなにシメられるの!」

うわっ、目がマジだ。

「すみませんでした。あなた様の主張が聞きたいのであります」

「つまり! 真理亜とキスするくらいなら、わ、わ……私とキ……

……スをしなさい……って意味よ!……分かった?」

って言われてもなあ……もうされてんだけど、キス。

「うぬあああつ！　真理亜！」

香織は激怒した。『うぬあああつ！』って言うくらいだから相当腹が立っていたらしい。

「ああ！　もう！　元々の目的を忘れたか！　教頭先生の殲滅！　それだけだろう！　何故こんな所で油を売っているんだ！」

「自分の性欲が歯止めを失ったから？」

「じゃあしい！　とにかく行くぞ！　ああ行くぞ！」

俺は獄炎の双剣【インフェルノ・ツインブレード】を装備し、クロスして構える。

「何するつもりなの？」

「まあ、見てな！　クロス・ブレード！」

剣を振り下ろし、扉をぶち破る。その奥には、自称『しがない教頭先生』の姿が見えた。

「遅かったね。待ちくたびれたよ」

「まあね、直前でいちやつき始めるバカチン共の相手をしてたらかの样だ」

「まあいい、いずれにせよ、役者は揃った。大原拓真君に、大原稜君」

「――！　何故その名を！」

「忘れるわけじゃないか、殺し損ねた奴の名を！」

俺はその時、過去の惨劇を思い出していた。

血塗られた壁、首から上がない子供の死体、辱められた後に惨殺された若い女性の死体、そして無惨にも切り裂かれた、俺の兄さん！

「テメエがやったのか！　テメエが、兄さんを！　普通は死刑じゃねえのか！」

「私には金がある、腐るほどに！　その十ある一つで事件ごとくもみ消しただけのこと！」

「……最低なヤローだぜ」

俺の周りにスペルを唱えたわけでもなく、炎が迸る。……ファンタジーでよく使われる、魔力の具現化だ。かなり興奮すると発生するらしいが、知ったことか。今、考えていること、それは……

「兄さんの仇、修道院のみんなの仇、この額の傷のお礼だアアアッ！」

次の瞬間、俺は額をさらけだす。そこには10cmくらいはありそうな大きな古傷だった。

「この時をずっと待っていた！ テメエに復讐する時を！ 修道院のみんなの仇を討つ時を！」

「ふん、非力な貴様に何が出来る、兄一人満足に守れない、貴様がア！」

「今の俺は昔とは違う。俺は力を手に入れた。あの時の過ちは繰り返さない！」

「ふはははは！ 強がりを言っているのは、今の内だぞ！ 小僧！」

俺は装備していた双剣を標的に向けて構える。標的も同じで、エクスカリバーと呼ばれる両手剣をこちらに向けて構えている。

魔法学校、否、魔法世界全体の生死をかけた戦いが、今、始まるうとしているのだ。

第九章 惨劇の魔法世界（後書き）

どうだったでしょうか？

『ゼロの使い魔』みたいなエッチと『HEROES』みたいなシリ
アスの両立は出来ていたでしょうか？

感想、お待ちします。

尚、来ないだろうけど、一応言っておきますが、『タバサのほう
が萌える』だとか、『アンリエッタのほうがイイ』とかそうゆうのは
無視しますね。

第十章 決着の校長室（前書き）

今回は第一部の最後と言うことで、表現の限界に挑戦してみました。見る人が見れば、18禁だと思う人がいると思います、でも、まあ、他の作品でも似たようなものがあるから、ギリギリ15禁だと思いません。苦手な人はご注意ください。

第十章 決着の校長室

「らあああああつ！」

俺は駆け出した。冷静さなんてどこかへ吹っ飛んでいた。

「拓真！ 落ち着いて！ それこそ奴の思っ壺よ！」

そんなこと、知ったことか。今は奴を叩き斬る！

それしか頭がない俺は教頭の頭めがけて右手に装備した『焰魔』を振り切る。が、手応えが全くない。

「ははは！ どこを見ているのだね！ 怒りに任せて剣を振ってもこの私には当たらないぞ！」

「黙れエエエツ！」

教頭に向かって絶空波を放つも、教頭には当たらず、教頭は真後ろに移動する。そこに剣を振るっても、教頭は闇に同化し、からかうかのようにかわし続けている。

「クソオ！ 変われ！」

その言葉と共に左手を軽く振るう。左手に持っていた『緋炎』の刃が鐔の部分から折れ、次の瞬間、鐔が撃鉄、引き金と言った拳銃の部品になり、切っ先に穴が開き、銃口になる。左手に持っていた『緋炎』は十秒もしない内に真紅色をしたリボルバーになった。

「実は、18禁改造エアガンで、ヤンキー約百名を殺した事があつてね、その頃から大山財閥の権力が働いたか、ニユースにはならなかったが、みんな眉間に寸分変わらずヒットしてね。みんな即死だったよ。何が言いたいのか？ つまり、テメエの眉間から心臓まで寸分変わらず蜂の巣にしてやるって事だよ！」

俺はダブルアクション式のリボルバーを構え、放つ。

「ふん、そんなちやちな兵器が通じるはず……」

その時、教頭の頬に血が伝う。

「血が出ているぜ？」

教頭は唸り声を上げ、こちらに向かって突進してくる。俺も駆け出

す。そして、相打ち。俺の頬に血が伝う。教頭は黒い塊と化して、いつの間にか俺の横に立っていた。

「何！　　どういう事だ！」

“闇黒の球体【ダーク・ボール】”

瞬間、横からの衝撃に大きく吹き飛び、壁に激突する。

「ガハアッ！」

香織が緊迫した表情で駆け寄ってくる。

「拓真！　　そんな！」

香織が怒りに顔を歪め、風を纏わせる。

「テムエエエエッ！」香織は教頭の後ろに瞬間移動し、纏わせた風を解放し、教頭を吹き飛ばした。

かに見えたが、闇と同化して、いつの間にか香織の後ろに存在していた。

「香織！　　危ない！」

ドヤ顔していた香織の表情が一瞬で青ざめる。その胸に教頭の右腕が貫いていた。

「嘘……でしょ……？」教頭は乱暴に右腕を引き抜く。香織は糸が切れたマリオネットのように倒れ込んだ。

「香織いいいいい！」

「三有る目的の一、大山香織の抹殺を達成した。残るは一つ。大原兄妹の抹殺だ！」

即座に稜の前に立ち塞がる

「こいつだけは、稜だけは絶対に守る！」

「何度も言わせるな。兄も守れないお前に何ができる。邪魔だ」

教頭は右手で埃でも払うかの動作をした。それだけですぐ横にある壁に激突してしまう。

「グアアッ！」

「言っただろう？ 『お前は無力だ』と、彼女を守れなかった事を悔やみながら、死ぬがいい！」

教頭は左手で首を絞める動作をした。気道が締めまり、息ができなくなる。

『止めてええ！』

女達が叫ぶ、しかし、その声は次の瞬間、断末魔に変わる。

「エクスカリバー！」

教頭が叫ぶと右手に両手剣が現れ、それを片手で軽々と振るい、七人の女達を一瞬で真つ二つにする。

…… まずい、このままじゃ死ぬぞ……。

意識が薄れ、窒息死してしまう、と思った時、一筋の光が教頭の左腕を吹き飛ばし、俺は呼吸を取り戻す。

「お兄ちゃん！」

激しく咳き込む最中、俺は落とした二つの剣を拾い、構える。

「すまない、心配させたな。だが、次は——」

だが、稜は首を横に振り、頬にキスをする。

「いいよ、十分頑張ったよ、一人で抱え込まなくていいんだよ。拓真は休んで、私達に任せていて——」

稜の目の色が青色に変わり、稜がいつも纏っている、のほほんとした雰囲気や嘘のように消えてしまい、代わりに今にも殺されてしまいそうな雰囲気や纏わせている。

「——いいんだよ」

言下、稜の姿が消えた。……と思わせるようなスピードで教頭の目の前まで接近していた。

「我が聖なる光よ、全てを切り裂く剣となりて、我が敵を討て！」

聖光の鋭剣【ホーリー・ブレイド】！ ウォオオオオ！

雄叫びと共に、拳を斜めに振り上げる。普段なら、教頭の体が闇に同化して、どこかに移動してしまうはずだが、同化せずに血が吹き出した。見れば、稜の手には光で作られた剣が持たれているではないか。

「伝説の『光』属性か、厄介な奴を敵に回したものだ」

稜は血で衣服が汚れるのも構わずに、ひたすら斬り続ける。斬って斬って斬りまくる。その内に、教頭は立っていられなくなり、倒れてしまう。

だが、稜は攻撃を止めようとしなない。むしろ、倒れてから一層、攻撃が激しくなっているような……

「私はどうなってもいいの！ でも、お兄ちゃんが傷つくのは許さない！」

『お兄ちゃんに謝って！』と繰り返しながら、どこからか持ってきたサバイバルナイフで教頭の体をメッタ刺しにしている。

「お、おい！ 止めろ！ もう死んでいるだろう！」

俺は稜を揺さぶったり、羽交い締めにしたりしてみる。稜はまるで長い夢から覚めたかのようなリアクションを取り、ようやく攻撃の手を止めた。

「終わったよ。お兄ちゃん！」

「お、おう……」

ま、まさか稜にこんな一面があったなんて……

「うに？ お兄ちゃん、どうしたの？」

「いや、なんでもないですよ」

……『うに』って言うくらいだから隠しておきたかったことだったんだろうな、相当に。

「お兄ちゃん。このこと、バラしたりしたら……あのひとみたいになるからね？」

稜はそう言いながら教頭を指差した。内臓やらそういうのがぐちゃぐちゃになっている。

……どんな風に転んでもあんな感じに殺されたくは……ないな。

「了解。ところでさ、稜……」

「なあに？ お兄ちゃん」

稜は俺に向かって、純粹無垢で弾けるような笑顔、稜曰わく『お兄ちゃんをメロメロにするニコニコスマイル』を放って来た。

……なぜだろう、俺はメロメロどころかムラムラするぞ？　く、苦しい……落ち着け拓真、落ち着くんた。これは反社会的行為であつて、してはいけないことで、ヘンタイの考えることだ。そうだ！　これは煩惱なんだ！　だから追い払わなければならぬ。煩惱退散！　煩惱たいさぐん！

「……私の体が欲しいのね」
「ふえっ！？」

稜の表情が赤みを帯びていく、もじもじもし始めた！　原爆並みの威力を有する仕草だ。

「だって、お兄ちゃん、稜のおっぱいばかり見てたんだよ？　考えられることはっ——」

「だあぁっ！　そんなわけ……無いじゃないか、妹に欲情するなど禁忌の中の禁忌、そんなことしたら、兄妹の関係じゃ無くなつてしまふ」

「いいじゃん！　お兄ちゃん！　稜は兄妹の関係もそうだけど、大人の關係つてやつになりたいんだよ！」

くそ、氣道を絞められてる訳じゃないのに、息が出来ない。苦しい。まさか稜の口からそんな言葉がでるとは……

「お兄ちゃん、稜のおっぱい、もみもみして何考えているの？」
え？　そんなはずない、と視線を上げていくと……

「ああ、ダメだこりゃ。お兄ちゃん、エッチしてあげるから、おっぱいもみもみ、止めてくれる？」

両手で包み込むように揉みまくっていた。

「あ、あれえ？　おかしいな、こんなことするわけないのに、しかも、離せない。つまり、取り憑かれた！？」

「それは災難ね、お兄ちゃん、私もムラムラしてきちゃった」
た、助けて！　俺、本当にどうにかなりそうだ！

「フハハハハ！　滑稽、滑稽。笑わせてくれる」

声のした方へ振り向くと、エル・オス第二形態みたいな翼を生やし、悪魔としか思えない姿をした、『教頭先生第二形態』が不気味な嘲笑をうかべていた。

「驚いただろう。『真・教頭先生セカンドインパクト』だ」

名前ダサッ！　ネーミングセンスゼロだ！　俺でももう少しマシな名前を付けるぞ！

「ああ、驚いたよ。テメエのネーミングセンスにな」

「うん、ダサイ。それにさ、お兄ちゃん。いつまでもみもみしてんの？」そんなこと言われても、体に乗っ取られているんだ。しかも俺の体を利用して、あんなことから、こんなことまで稜にやろうとしている。「呪われてるんだよお……助けてくれよ……」

「そうだね。悪霊はお祓いしなきゃね」

そう言う稜は大きく深呼吸をし、決心したように目を閉じる。

「何をしている、そっちが来ないなら、こちらからいかせてもらうぞ！　悪魔の稲妻【デビルズ・サンダー】！」

紫色の雷が教頭第二形態の手から放たれる。火炎の壁【ファイア・ウォール】で防御しようと呪われている最中、どうにか構えたが、稜が手を出すと言わんばかりの勢いで構えたため、自粛することにして。しかし、何を出そうとしているんだ？

「聖なる光よ、我に守る力を与え、我と守りし者を守りたまえ。光の聖域【ホーリー・サンクチュアリ】」

稜がスペルを唱えると、真っ白な壁が現れ、瞬く間に俺と稜を囲む。「な、何これ？　白い空間が広がっているけど……」

「うん、光の聖域、ホーリー・サンクチュアリだよ。ほら、呪いも解けた」

おお、ほんとだ。もみもみが止まっている。

「はあ、一時はどうなることかと思ったよ」

自由を取り戻した手で額に浮かんだ冷や汗を拭う。いやあ、今ほど自由を感じた時はない。

「でもさ、お兄ちゃん。実はやりたかったんじゃないの？」

そう言いながら、稜はにやにや笑っている。その動作一つでドキツとする俺だが、さすがにそこまでは思わ……ないぞ？

「いやっ、そんなやらしいことは……ねえ？」

「まあいいや、お兄ちゃん、キスしよ！」

完全なる不意打ち。一発KO。俺は完全に沈黙してしまふ。

その沈黙をイエスと受け取ったのか、ゆっくりと目をつむり、唇を近付ける。……あれ、このシチュエーションはどこかでみたことがあるような気が……と考えていると、俺の唇に稜の唇が触れる。その瞬間、香織や真理亜のキスでは感じる事がなかった、雷が落ちたような感覚に襲われる。少し抗う素振りを見せると、両手で顔を挟み込み、動けなくして、じっくりと唇を貪るのだ。少し貪っては“好き”と囁き、抗う氣力を奪い、ゆっくりと、だが確実に、俺の心を奪っていく。

ある程度時間が経つと、突然に稜が光の粒子になり、俺の体内に侵入してきた。

「うわっ！ 稜！？ これはどういうことだ！」

一瞬の間が開き、俺の頭に稜の声が直接響いて来た。

“スピリット・リンク、魂の繋がり、私達がお互いを心から愛し合える存在になったとき私達は本当の意味で一つになれるの。ああ、お兄ちゃんと一心同体。なんて素晴らしいことなの！”

「う、うん、でさあ、この状態になると、何ができるようになるの？」

目には見えないが、稜は得意げに説明した。

“ズバリ！ お互いのステータスを足した能力値をお兄ちゃんが使えるようになるのです！”

「なるほど、運動能力、知能、さらには魔法まで、俺と稜の物が使えるようになるわけか」

“さっすがお兄ちゃん！ 大正解！ ご褒美としてラブラブしてあげるっ！ あ、補足説明しておくとお兄ちゃん、私の姿が見えなくても、抱きついたり、チューしたり、ペロペロしたりすることがで

きるんだよ。ほら、このとおり”

稜に抱きつかれ、チューされ、舐め回された。ような感触がした。

“それと、お兄ちゃんが受けた感覚なんかも稜に伝わったり、逆に稜が感じたこともしっかり伝わるんだよ”

稜がそう言つと、何だろう、得も言われぬ感覚に襲われる。

「な、なにやってんのかな？　なんかすごいゾクゾクするんですが」

“うに……今、自分のえつちいところを指でいじくつてるところ

……はあん、やっぱり、お兄ちゃんとあんなことしているところを想像するだけで、私は、ああん！　私はっ！”

「しつかりしろ！　稜！　今はそんなことしてる場合じゃないんだぞ！」

“そ、そうよね、私がしつかりしないと、お兄ちゃんが全力を出せないからね。よし、じゃあ、いくよ！　解除【デイスベル】”

稜が叫ぶ。少し間を開け、光の聖域が弾け飛ぶ。弾け飛んで最初に見たのは、怒りに顔を歪ませた教頭第二形態の姿だった。

「待ちわびたぞ！　貴様等、どれだけ待たせたと思っておるんだ！」

「待たせたんじゃない」「余命を延ばしてあげたんだよ」

「貴様等ア！　私を完全に怒らせたなア！」

教頭が激怒しても、動じなくなるとは……やはり凄いな、スピリット・リンク

“うん、稜とお兄ちゃん。最強のコンビだよ！”“光の翼【ホーリー・ウィング】！”

背中に魔法で作られた翼が生える。

「驚くのはまだ早い！　“斬鉄剣！”」

光で作られた日本刀が正面に現れる。それを手にとり鞘を抜くと、目映いばかりの閃光が迸る。

「そっちが西洋の剣なら！」

“こっちは日本の刀よ！”

「調子に乗りよって！　すぐに後悔させてくれようぞ！　エクス

カリバー！」

二対の戦士は同時に空を駆け出す。金属音を鳴り響かせ、鎬を削る。
「宮本流剣技、一ノ型『閃光斬』！」

俺は剣を目には見えない速さで振りまくる。俺の剣は火花を散らし、次第に光を放つようになる。教頭第二形態の顔にも、苦悶の表情が浮かんでくる。

「クソ……よもやこれまでの力を持っていたとは思わなかったぞ、どうにか形成を逆転せねば……」

「戦闘中に考え事か、余裕あるなあ」

“でも、これはどうかな？ わが輝く光よ、空を駆け、敵を討て！”

輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！”

突然、刀の切っ先が光り輝く。

「どうすればいいんだ！？」

“そのまま、振ってみて。面白いことが起こるから”

稜の言う通り、俺は剣を振ってみた。そしたら、面白いことに、切っ先からソニックブームみたいなのが現れ、教頭第二形態の片翼をあっさりと切り落としてしまう。

……嘘だろ、あんな丈夫そうな翼がいても簡単に切り落としてしまう、否、あれは翼の付け根が光の粒子になったと言った方がふさわしいだろう。

「おのれ！ おのれおのれエエエッ！」

“今度は、溜めてから放って見て、すごいことが起こるから”

俺は斬鉄剣を真上に掲げた。すると、空気中の光が刀に集まり、周りが少し暗くなる。逆に斬鉄剣は今まで以上に光を放っている。

「“いっけえええッ！”」

「調子に乗るな！ 暗黒の衝撃【ダークネス・インパクト】オオオオ！」

二つの技は同時に放たれ、俺達と教頭第二形態の中間点で激しくぶつかる。その後、輝光の飛刃は暗黒の衝撃を打ち消し、教頭第二形態を真つ二つにした。

「ああ！ 校長になる計画が！」

「テムエに校長先生、いや、社会人になる資格なんて最初からねえんだよ、殺人鬼」

“ばいばーい”

教頭先生第二形態は雄叫びに似た、断末魔を上げ、大爆発。教頭先生は跡形もなくなってしまった。

「兄さん、仇はとりました。安心して、眠ってください」

俺はそう呟くと、地面に降り立ち、斬鉄剣を鞘に収める。

“お兄ちゃん、あそこになにか刺さってるよ？”

稜が指さした……と思う所を実際に見てみると、なんか神々しいオラを纏った両手剣が威圧感を放ちながら、刺さっていた。

「本当だ。なんか神々しい物が刺さってるね」

“あれが愛子さんの言ってた、『本物のエクスカリバー』じゃない？”

「そうだね。でも刺さってるね。抜けるかな？」

“抜けるよ！ だってお兄ちゃんだよ！ 不可能なんてないんだよ！”

「じゃあ、抜いてみるか」

恐る恐る、エクスカリバーに近づき、柄の部分を握ってみる。……

何も変化はないようだ。次に柄の部分を上に引っ張ってみる。する

と、電撃が走り、俺達に多大なダメージを与える。

「があああああつ！」

“いやあああああつ！”だが、負けるわけにはいかない。この剣には魔力が込められている。他の悪人に利用される前に、引っこ抜かねばならねえんだ！

「こんのおおお！ 抜けやがれええええ！」

突然、剣が軽くなり、スルツと抜けてしまう。

おお、抜けた！ と思ったのも束の間、刺さっていた所から、いきなり閃光が漏れだし、視界を奪った。

「うわっ！」

“う、うう……きやあ!”

稜が後ろに吹っ飛んだと同時に閃光は消え、視界が戻る。その時に見たのは、鞆に収まった、エクスカリバーだった。

「すげえ、いつの間に……」

腰に下げるにはちよつと長い為、背中に背負う。と、同時に稜が後ろから抱きついてきた。

「おに……ちや……ん! 稜ちゃんに……っぱいチューして……!」
すぐさま振り向く。その時、二つの異変に気づいた。

一つ目、稜の表情と様子。顔が完全に緩んでる。それに、すごく危ない感じになっている。

まるで、媚薬でも飲まれたようだ。

二つ目、俺の体。なんかすごいゾクゾクする。これこそ、媚薬でも飲んだのか、って感じだ。実際飲んでないけど。

「お兄ちゃんもゾクゾクしちゃうでしょ? スピリット・リンクの副作用、一つになった二人は惚れ薬と媚薬を一緒に飲んだかのように、お互いの体を激しく求めてしまうの!! ああ! 今、稜の下着はびしょびしょ、お兄ちゃんの体はムラムラ! もう、アレしかない!」

「アレ?」

「ひとつになるの! 心も体も! ついでに、私達の子供も作るのよ!」

「おい、まさか、マズいつて! 反社会的——」

「そんなの関係ない! ああん! もう我慢できない! いただきます!」

「ちよつ! おい! やめつ、うわあああああ!」

俺達を産んでくれたお母さん、ごめんなさい。兄妹で交わることになつてしまいそうです。いや、そんなことはあつてはならない。反社会的行為だからな!

「火炎の——」

「解除【ディスプレイ】」右手に生み出した炎はあつという間に鎮火

される。くそ、やっぱ駄目か。

「眠りを誘う雲【スリープ・クラウド】」

稜の口から霧状のねばっとした何かが噴出される。それが雲だと気付く頃には、強烈な眠気に襲われる。

「な、なんだこれ、めちゃくちゃ眠くなる。何を……した？」

「うふふ、お兄ちゃんは今から眠ります、痛みも感じないくらいに。その間、私は事を進めておきますね。」

「待て……りよ……う、やめ……」

その後、三日三晩も眠り続けた……らしい。

第十章 決着の校長室（後書き）

どうだったでしょうか。

この作品を読んで卒倒した人がいないことを願っています。

感想、お待ちしてます。

【お詫び】完全に18禁ワードがあつたことをこの場でお詫びします。その他にも、完全に18禁ワードがあつたならば、ご連絡下さい。すいませんでした

エピソード 一時の平和（前書き）

エピソードです！ 次回から愉快的学園編になります。（全五話）
その前にキャラクター紹介が入るかも。

エピソード 一時の平和

……ま、たくま……

「拓真！ コラ！ さつさと起きろ！」

頭に激痛が走る。Mじゃない俺は無論、反撃に出る。

「誰だ！ 烈火の竜巻【ブレイズトルネード】」

炎を纏った右手を横に振る。途端に炎の竜巻が現れ、周りを包んでいく、と思われたが、一陣の風によって消え去る。

「バカね、あんたの魔力はあたしより、か・な・り弱いの！ 分かったら無駄な抵抗を止め、さつさと起きろ！」

また蹴られた。今度は鳩尾に当たったぞ、起き上がろうとしても、起きあがれないんだけど！ と思っていたら、頭をぐりぐり踏みにじってきた。

「ほらほら、こういうのが好きなんでしょう？ 気持ち良いんで

しょう？ もっと痛めつけてあげますよ？ 好きなだけ味わいな

さいよ！」

ここは大山家の豪邸、時刻は朝。俺と香織の主従生活が今日もまた、始まるうとしている。

しかし、香織は胸を貫かれたはずでは？

「あんな危険な場所、行くわけないでしょ？ あんたら兄妹以外、

みんな分身よ！ 分身！」

エピソード 一時の平和（後書き）

と言うことで第一部が終わりました。感想、お待ちしています。

プロローグ 紅音の発明（前書き）

いよいよ、学園編が始まります。学園といえば、着替えシーン、水泳（夏限定）、生徒会室のハーレム！

まだまだ挙げきれないが、これら全てが不幸にも拓真に襲いかかる。
（予定）

頑張れ！ 拓真！

プロローグ 紅音の発明

「も、もう良いでしょう？」

「犬は喋らないって、何度言えば分かるのかな？ まだまだ調教が必要ね」

時は少し進み、大山家豪邸。

俺は今、香織の魔法で強制的に四つん這いの状態だ。でもって、香織は風の鞭で叩きまくるといった、俗に言う“SMプレイ”って言うのを、香織によって無理矢理体験中。

「ほら、『キャー』ン』って言いなさいよ！ 野良犬！ 無様ね、って笑ってあげるから」

おまけに、“バタフライマスク”なるものをつけて、完全にSM女王様気取りだ……マジでム力つくぜ。燃やし尽くしてやる。

「……我と契約せし、炎の魔神よ——」

「はあ？ なんて言ってるのかしら？」

「——汝の炎を持って、我が仇敵を討ち滅ぼせ！ 現せ！ その姿！ イフリート！」

俺が叫ぶと目の前の地面に魔法陣が浮かび上がり、そこから炎の魔神、イフリートが現れる。

「な、犬の分際で召喚魔法！？」

香織が動揺したためか、俺を強制的四つん這いにした、空気の縄【エア・ロープ】が解け、自由を取り戻す。肩つったかと思った……。それはそうとして。立ち上がると、イフリートの為の攻撃呪文を唱える。

「灼熱地獄の主、進む灼炎、死の息吹に似て、仇敵を瞬く間に葬り去る」

イフリートの口から炎が迸り、香織を包む。が、香織は真っ黒焦げにはならず、バタフライマスクだけが消し炭になる。

「あ、あれ？ 私、いつの間にここへ？」

「とばけるなよ？ お前が鞭でメチャクチャにひっぱたきまくって、挙げ句の果てには『跪け！ 犬！』だよ？」

俺は一句ごとに指を差し、今の苛立ちを一生懸命にアピールする。

その度に、香織は慌てふためき、「あわっ」とか「ふわぁ」と声を漏らす。

「私はそんなキャラじゃないわよ！ 私はその……っん……っん……」

……

「ツンデレ」

「そう！ 多分それよ！ 認めないけど」

「でも、どうして『ツンデレ香織ちゃん』が（バキッ！）『SM女王香織様』（ベキッ！）になったのか、よく分からないよな」

「……知らないわよ」

拗ねるな。お前のもう一人のお前に失礼だ。

「うるさい！」

「おう、素敵なSMライフを過ごしてるかいな」

『紅音！』

あれは……さっきのバタフライマスク？

「へへへ、どやった？ わいの新発明『SMマスク』は？」

『お前（紅音）の仕業か！！』

だが紅音に反省の色は見えない。むしろ、アブない笑みを浮かべている。

「ほな、次な。名付けて、『性転換光線銃』レズっ娘の香織ちゃんが喜ぶ、拓真を女の子にしてまう光線銃だ。受けてみ、拓真！」

紅音は懷から、外国製アニメによく出そうな光線銃を取り出し、構える。

香織の目の色が、徐々に変わっていく。

「そつよ、拓真！ 主からの業務命令よ！」

ふざけるな！ 業務命令で女の子にされてたまるか！ っても
う撃ってるし！ う、うわああああっ！
眩い光に包まれ、煙幕に囲まれて、自分の姿が一瞬、溶けて消えた
感覚がした。煙幕が晴れると、そこには……。

「成功したわ！ 完全に女の子よ！ かわいい！」

女の子の体になった自分がいた。胸が苦しくなり、重くなる。よく
見ると、いや、チラツと見ただけで胸が膨らんでいることが分かる。
「わああ……服がおっぱいではちきれそうになって……。紅音！

スッゴくおいしそう！ 食べていい？」

「どうぞ、召し上げれ」

ねえ、食べるって、グロテスクな意味？ それとも、エッチな意
味？

「エッチな意味に決まっとるやろ」

じゅるり……、と涎を飲む音、鼻孔、眼孔、その他諸々と、色んな
所が開いてる。その姿だけで俺（今は私か……）の心を原始的な恐
怖が襲う。そして、恐れていたことが現実になる。

「いっただきまゝす！」

ただ、叫ぶしかなかった。

「いやあああああっ！」

その後、香織は衣服を剥ぎ取り、胸を揉みしだいたりして、着せ替
え人形にした挙げ句、気絶するまで弄ばれた。

はあ……。これからずっとこんな事が続くのかな……？

ブローグ 紅音の発明（後書き）

どうでしたでしょうか。

あーあ、なんでこうなるんだろ。次回はもう少しシリアスになる、予定。

第一章 伝説の刀剣（前書き）

退魔師見習い様から、感想が届きました。ありがとうございます。本当に、地の文には、気を付けたいと思います。

今回は、エッチよりも、シリアスの方が多くはず。形式も『ハルビ形式』に（わかってくれるかな？）したつもり（ただし、試験的）です。

感想、お願いしますね。

第一章 伝説の刀剣

時はさらに進み、ここは学校の校舎内、たった今地獄のようにつまらない数学が終わった頃だ。

内容？ 覚えてない。何せ、嫌いなことや恥ずかしいこと、自分に都合が悪い出来事は二秒で忘れられる、どーでもいい特技を持つてゐるからな。

なのに、今日のご主人様、大山香織の下着の色が頭から離れない。純白のブラと純白のレース付きパンツ。この二つが頭の上をぐるぐる回っている。ワザと見せてた気がするが、早く消さねえと、『ご主人様の下着を見たドヘンタイ』として処理されてしまう。それはそうとして。

「思ったんだが、ここはどっちの世界なんだ？」

「どっちって？」

「決まってるだろう！ 俺達が元いた世界か、魔法がひしめく世界か」

全く、一から十まで教えないと答えられないのか、俺のご主人様は。「そうね、剣を見てもビビらないから、魔法の世界なんじゃない？」

「『なんじゃない？』ってぶっきらばうな……。何が起きたんだよ？」

「『何が起きたんだよ？』じゃないわよ！ あんた、私の本体が校長室に入って、最初に目にしたの、何か知ってる？」

「血まみれになったお前？」

「ちがう！ あんたと稜が汚らわしく繋がっていた場面よ！

あんた、あんなことされて、無抵抗なんて！ あんたお得意の、蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】でもぶち込めば良かったのに、あんたは何もしなかった！」

妹にそんなことするか？ 普通、やらないよな。

「怖いこと言うなよ、俺は稜をこれ以上傷つけないって決めてんの。したがって、稜に魔法は放ちません」

「シスコン！？」

「どっかの変態と一緒にするな。俺は女に手を出さないだけで、稜だけ攻撃しない訳じゃないんだよ」

「フェミニスト！ ヘンタイ！」

「いかん、落ち着け、今、香織を攻撃したら全校生徒を敵に回す事になる。落ち着くんのだ。俺。」

「まあ、いいわ。良くないけど、いいわ。私はべつ、別に嫉妬深い女の子じゃ、な、ないもの。ただ、稜としたことを同じように出来れば。でも、あんたは眠らされたのよね……。仕方ない、眠るの無しにして、やるか」

「ふざけるな！ それ、普通にエッチしてくださいって言うてるようなもんじゃん」

「じゃあ、エッチしてください」

「言い方変えたらしてくれると思うたの！？ 断固拒否するからな？」

「あんたの心はどう思っているかしら？ 私と交わりたいてって言うてる気がするわ」

「ヤバイ、このままじゃ、犯される。打開策を練らねば……。」

「ということだから、覚悟してね？ あんたの心と体、奪い尽くしてあげるから」

「ふざけるな！ 烈火の拳【ブレイズ・フィスト】！」

俺は炎を纏った拳で、香織を攻撃する。が、案の定、吹き飛ばされる。

「やはり、魔法じゃ香織の方が上か。じゃあ、新兵器、エクスカリバーだ！」

俺は鞘からエクスカリバーを抜き放つ。すると、俺でも香織でもない声が聞こえてくる。

「よお！ お前が95番目の主かい、俺を抜けたってことは、あ

のバカ王子くらいにすげえ奴なんだよな？」

俺はその声に驚き、腰を抜かす。

「け……、剣が喋ったあああああ！」

その後、剣の話を聞くに、あのアーサー王の剣だったらしく、その後、色んな姿や形になり、色々な主と出会い、仕えてきたが、皆共通して不幸な最期を遂げていったと言うことだった。

俺も思ったことだがこいつは百年以上使われた物に憑く、“付喪神”みたいな存在で、喋った所を見られるのは、アーサー王を除いて、何故か俺だけらしい。

「実はバカ王子とも喋ったんだが、そのことは歴史の闇に吞まれたみたいだな。いやあ、お前さんの魔力がバカ王子と同じでさあ、バカ王子が現世に蘇ったかと思っただぜ。」

つまり、アーサー王も魔法使いだというのか？ しかも、火属性。いやいや、良く考えてみ？ どうして魔法が使えるようになったかさえ分らず、思いつきで魔法を唱えていた俺が、どうして、アーサー王と同じ魔力を持っているんだろうか？

それに、『アーサー王物語』を読破したことがあるが、アーサー王が魔法を使った所など、書かれていなかったぞ？

と、考えていると、不意に、エクスカリバーが、

「俺様の名前はエクスカリバー」

と、いきなりの自己紹介をする。まあ、いずれにしても、自己紹介せねばならないとは思ったがな。俺は「大原拓真」と自己紹介を済まし、ついでに香織でも紹介してやろうとした時、エクスカリバーはこう言った。

「おっと、主以外の名前は紹介しないでいいぞ、10秒で忘れるから」

……記憶力が乏しすぎないか？ 俺より深刻だぞ。

「何せ、興味ないのや、関係ないのはどう頑張っても、覚えられな

いんだよ、脳みそあるわけじゃねーもん」

あつそ、じゃあいいか。すぐに忘れるものと、開き直る。だが、香織は許さなかった。香織は「奴隷の事は覚えられるのに、どうして主であるこの私が覚えられないのよ！」と怒り狂った。このままいくと、学校を破壊してしまいそうな勢いだ。いつそのこと破壊して欲しいと思ったんだが、勉強好きな生徒に恨まれかねないので、仕方なしに覚えさせようとする。

「いいか、エクスカリバー。あいつは、お前の主の主、大山香織だ。胸だけが妙にデカイ、独裁者気取りの、ドS娘だ」

「了解だぜ。『独裁者気取りのデカチチババア』ね」

「ちがう、覚えるべきは――」

「オイ、デカチチ」

あちゃー、やつちまった。今すぐ捨てたいぞ、この剣。

「だれが『デカチチ』ですって？」

「お前さん以外にいなえよ。デカチチババア」

香織のツンツンオーラが殺気に変わった瞬間である。

「覚悟してね？ その剣ごと切り裂いてあげるから」

あの空気……マジだ。

「相棒、俺を構えな、ある程度の魔法は吸収してやる」

いつの間にか、対等の関係に。ってそんなこと考えてる暇ないか。

「旋風の鋭刃【サイクロン・エッジ】！」

香織の手から竜巻らしき風の塊が襲って来る。

俺は動じずに風の塊を斬る。瞬間、風の塊はそよ風になり、頬を撫でる。

……伝説の使い魔が持つインテリジェンスソードと機能が一致し過ぎて、なんだか怖い。これがエクスカリバーの能力なのか？

「違うね。俺が状況に応じて、様々な機能を持つ。さっきのは、お前の記憶の、『ゼロの使い魔』とか言う作品の『平賀才人』とかい

「奴が持つてる、『デルフリンガー』とかいう刀剣の機能をパくらせてもらった。口調もな」

それ、説明したから！ ああ、伏せて説明しようと言っ俺のポリシ―が……。ま、いいや。

「実に心地良い風だ。こんな風は何年ぶりだろうか」

と、言ってみる。香織は顔を赤らめる。その赤らみが怒りから来るものなのか、それとも、羞恥なのか。俺には分かりかねる。こういう時ほどテレパシーが使えたら、と思う。

「もう、いい！ 知らない！ 拓真なんかもう知らない！」

「あつ、おい、待て！ はあ……、行っちゃった。」

『とりつく島もない』と言っのは、まさにこの事か……。

「なあ、エクスカリバー。俺はどうすれば良いと思う？ やっぱり追っしかないんだよな」

「そうだな。じゃ、とつとと追いついて、いちやいちやしてやれ」

へこんだ時には屋上へ行く。と相場は決まっっている。俺は屋上へ向かって駆け出した。

香織が襲われているということも知らずに。

第一章 伝説の刀剣（後書き）

予告、次回は焰野様とクロスオーバーの予定。

焰野様には、失礼の無いようにしなければ。

第二章 交わる世界の侵入者（前書き）

クロスオーバー第一弾！

焰野様の氷原健吾君と共演させて頂きました。

これを機に、焰野様の作品も読んでもらえたら、嬉しいです。

「でも、これは本編だな？」

ええ、この理由は次回くらいに詳しく説明しますよ。お楽しみ。

第二章 交わる世界の侵入者

はあ、俺何か言ったかな？ いや、だって『実に心地よい風だ』って言ったただけだぜ？ 何であそこまで言われなきゃいけないかね？ 本当、女ってわかんね。

いや、そもそも他人の考えてることすらろくに分からない、推測の範疇を超えないんだけどね。でも、それでも分かる奴はいる。テレパシー使いだ。たまにテレパシーで人の思考を支配したり、悪夢や幻影を見せたり出来る奴もいるが……。

そんな戯言は捨てていて。

「なあ、エクスカリバー、何で俺は魔法を使えるようになったかね？」

「その昔、アーサー王は女好きでな、女を見る度ナンパして、子供を孕ませていたんだよ」

「つまり、何が言いたい？」

「お前はアーサー王の血を引いてる。デカチチも、お前の妹も、お前の親友もだ」

なるほど、しかし、アーサー王は火属性なのでは？

「いんや、何でも使えた。魔導師マーリンに魔術の全てを教わったんだが、歴史の闇に消えちまったみたいだな。ガリア征服の時はバンバン使ってすぐ魔力を使い果たしたからな。それからだよ。俺がアーサーのことをバカ王子って呼ぶようになったのは」

そうなんだ……。そりゃあ、アーサー王がバカ王子って呼ばれるわけだ。

その時だった、

「キャアアアア！」

香織の悲鳴が聞こえたのは。

「香織！」

俺は夢中で駆け出した。一秒でも早く、一瞬でも早く屋上へ出なければ。香織が危ない！
そして、屋上の扉にたどり着き、ぶち破った。

「香織！ 無事か！」

「早く助けなさいよ！ 変な化け物が、執拗に迫って来るのよ！
気持ち悪い！」

そこには、カエルみたいな真つ黒な化け物が、舌で香織を喰らおうとしていた。香織は必死で避けている。その足元は、舌の粘着力が強いのか、はたまた、舌の先に強烈な酸があるのか分かりかねたが、とにかくめくれていた。

「早くッ！ 出来るだけ早くッ！ きゃっ！」

カエル型化け物の口から爆竹みたいな物が放たれる。爆竹みたいな物は香織の足元で弾けて、文字通り、爆音を撒き散らす。香織は泣きそうな顔になりながら、慌てふためき、奇妙なステップを刻んでいる。爆笑必至である。

「何、樂觀視してんのよ！ こっちは生き抜くのに命懸けてんの

！ 奴隷のくせに、生意気よおおつ！」

そんな事を叫んでいる間にも、カエル型化け物は、香織に向かって狙いを定めている。

「させるかよオ！ 業火【フレイム】！」

前方に向かって火炎放射。命中するが、手応えがないし、反応もない。どういう事だ？ まさか……影？

「きやあああつ！」

香織にカエル型化け物の舌が迫る！ すかさず聖光の矢【ホーリー・アロー】で舌を貫く。舌は狙いを外し、香織の足元に着弾。ジュワツと言う音と共に床が溶け、ぐちよぐちよになる。香織は声にならない悲鳴を上げる。

そりゃ、そうだな、強烈な酸が自分に当たったとしたら……、考えたくもないな。エクスカリバーを抜き放ち、スペルを唱える。

「我が輝く光よ、空を駆け、敵を討て！ 輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！」

エクスカリバーの切っ先に光が宿る。それを勢い良く振ると、光の刃がカー・ィが使うマ・ターソードのソードビームみたく飛んでいく。カエル型化け物は断末魔も上げることなく消え去る。

「でも、やっぱり、稜がいたほうが威力高いよな……」

「まあ、お兄ちゃんの光魔法はお兄ちゃんの特特殊能力、技術複写【スキルコピー】にすぎないからね。」

いつの間にか、稜が真後ろ——から抱きついてきた。

「——？ 特殊能力？ どういう事だ？」

「うーん、まあ簡単に言っちゃうと、魔法以外の普通じゃあり得ないことかな？」

説明する側が疑問符使うなよ……。つまりあれか、『禁書目録』から幻想殺し【イマジンプレイカー】を例に挙げて、それを完璧ではないが使用する事が出来るのか。

「だいたい、そんな感じね。私の場合、解析【アナライズ】と言う特殊能力があつて、心を読む事ができて便利だなあ、とか思ってたけど、最近になってこれが読心術の為に使うんじゃないくて、物とか人を調べる為にあることが分かったのよ」

「そうそう。私の能力は増強能力【スーパーチャージャー】、私が触れると能力が強化されます」

稜、胸を張って自慢げなところ悪いけどさ、それ、とある外国ドラマの丸パクリだからな？

まあ、俺もスキルなら何でも丸パクリ出来るから、人のこと言えないか。

「それだけじゃ無いわ。あんた、ダブルスキルなのよ！ これだけで珍しいのに、スキルもこれまた珍しい、幻想召喚【イメージサモン】よ！」

「な、なにそれ？ すごいのか？」

「すごいんですよ！ 自分の想像を現実、そして、ちゃんと使えるすごい特殊能力——」

轟音。そして重圧感。ちょうど、●玉と融合した藍●惣右介に睨ま

れた感じだと思ってくれて構わない。

「何！ 何なの！ 何がどうなってんのよー！！」

「わ、分からん、ただ、ただならぬ重圧感というか威圧感がすごい
こ——」

瞬間、空間が歪む。そこから、さっきの力エル型化け物の比にもならないくらいに気持ち悪い化け物が次々と現れる。

…… 本当に吐き気がしてきた。吐いていいかな？ 胃の中に残っているもの、全部吐いてもいいかな？

「何をふざけた事言ってるの！ 本気でぶつとばすわよー！！」

「それよりも、早く魂の繋がり【スピリット・リンク】を！ 三人で！」 「無茶よ！ お兄ちゃん、副作用覚えてる？」

「承知の上だ！」

「そこまでの覚悟があるなら、やってやるわ。で、どうやってやるの？」 「ひたすらキスをします」

「き、きききき、キス！？ そつ、そんな事しなくても、スピリット・リンクくらい、楽勝よ！」

「へえ、だったらやってみてくださいよ、キス無しで、出来たら誉めてあげます」

…… 二人とも、胸を張り合うのは俺の中でしてくれないか？

「分かったわよ」

「うん！ いくよお兄ちゃん！」

『魂の繋がり【スピリット・リンク】！』

俺を含む三人を眩い光が包む。次第に光は広がり、バラバラだった三つの光は今や一本の光の柱になっている。その柱もいつしか消え、

俺だけが残され、二人の姿は無い。

化け物達は女達が逃げたのかと思い込み、無様に笑い転げる。だが実際は違う。

‘疾風の一撃【ウィンド・ブレイク】’

一陣の風が吹き荒び、下級の化け物を消し飛ばす。

残された化け物達に動揺が走るのが分かる。さすがは解析【スキヤン】。奴らの思惑やら何やらが丸見えだぜ。

‘残りの敵はどうすんの？’

“片っ端からやつつけるしかないよ、お兄ちゃん”

「だな。『融合魔法 三色の鋭剣【ユニゾンレイド、トリニティ・ブレイド】』」

俺は左手を前に突き出す。すると、火、風、光の魔法陣が現れ、融合していく。全ての魔法陣が合わさると眩い光が迸り、一振りの片手剣が具現化する。

それをしっかり掴むと、エクスカリバーを片手で抜き放ち、エクスカリバーに「片手剣になれ」と呟く。すると、エクスカリバーの柄と刀身が同時に縮み、片手剣になる。

「いくよ。稜、香織！」

‘分かってるわよ！’

“了解！”

俺は獣のような雄叫びを上げ、近くに鎮座する、中級悪魔（って呼ぶ事にする）を一太刀で切り捨てる。

「あと六！ 気イ抜くな！」

続いて、空に向かって、エクスカリバーを掲げる。

「太陽の光【ソーラー・レイ】」

天から無数の光線が降り注ぎ、標的を光の中に葬り去る、稜の最強攻撃魔法。瞬く間に上位悪魔もろとも葬り去った。

だが、歪みは次々と現れ、遂には人型の悪魔まで生み出した。

いや、あれは人間。そんな、どうやってあんな歪みを！？

破型 弐式 苦寂

その人間は一瞬で傍らの上位悪魔に近づき、三撃で終わらせる。

「俺も負けてらんねえな、宮本流剣技、秘式壱ノ型『一刀両断』！」

俺は空高く飛び上がり、近くの上位悪魔を真つ二つにする。

「お前、“ブラッディローズ”じゃ見ない顔だな、名乗れ」

「人に名前を聞くときは、まず自分からっ、名乗るもの……、だろっ！ 秘式参ノ型『灼熱地獄』！」

近づいて来る上位悪魔を火だるまにして消滅させる。くそ、埒が開かねえ。

「それよりも俺は、そろそろ沸いてきやがる上位悪魔を一気に殲滅する方法を教えて欲しいね。普通に魔法をぶっ放しても当たらねえし。影だから、光魔法は通じるんだけどな」

「上位悪魔？ “堕ち神”だ」

「“堕ち神”ね、じゃ、その“堕ち神”って奴をどちらが多く殺せ

るか、競争と行こうじゃないか。氷原健悟君」

「――！ 何で俺の名を」

「俺の特殊能力、解析【スキャン】だよ、何でも知ることがつ、できる！」

袈裟切りで一体倒す。4 / 12 体を倒した。その内の三体が俺。健悟君はまだ、一体。

「すごいな。 あんな短時間で三体殺ったぞ」

その声は健悟君のものではなかった。

「へえ、健悟君も意志のある剣を持つてんだ。エクスカリバー！」

「何だ、俺っちに何か用か。」

「いや、喋らせたただけだ。悪いな」

「なあに、良いってことよ」

終型 初式 怨炎

健悟君の剣――蒼百合が黒炎を纏い、堕ち神を二体、炎の中に葬り去る。

「やるなあ。でも、まだまだ俺達の方が凄い！ 我が輝く光よ、空を駆け、敵を討て！ 輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！」

スペルを唱え、エクスカリバーを真上に掲げる。光が宿り、エクスカリバーが細かく振動する。

そのまま横に振り抜くと、光の筋ができて次第に広がっていき、終いには四体を光の粒子にする。

“ いち、にー、さん……、うわぁ！ 何体倒したか分からなくなっ

たよ！”

「7体よ。それくらい数え切りなさいよ！」

「まあまあ、ってありや何だ！」

突然、一際巨大な歪みが現れ、ラオ・ヤンロンが具現化したかのような、ラオ・ヤンロンに似た、否、そのものが歪みを通して現れる。……今頃、ラオ・ヤンロンのいた世界では、ハンターが『ラオ・ヤンロンが消えた！』って喚いてんだらうな。

「きりが無い。で、このバカでかい堕ち神は何だ？」

「知らん、知るか、知らないですよ。カ・コンにでも聞いてくださいよ」

「そうか。俺はあいつを殺る、お前は雑魚を片付けておけ」

「嫌だね、討伐して天鱗をゲットするんだもんね」

俺は駆け出した。健悟君も同時に駆け出す。

幻想召喚《蒼穹双刃》

技術模写《拔刀術》

モン・ンにはモン・ンで倒してやるぜ。

いつの間にか現れた二つの青い二つの剣をしっかりと握りしめ、邪魔する堕ち神とやらをぶった斬り、ラオ・ヤンロンの喉元に右手の刀剣を抜き様に切り裂く。

拔刀術の効果は、抜き様の攻撃、その威力をあげるモン・ンのスキル。

もつとも、その攻撃で喉元を断ち切れるかと言うと、“否”だが。

終型 貳式 黒雨

突如、健吾君の剣から、無数の剣撃が宙を駆け、四方八方から斬り

つける。たまらず、ラオ・ヤンロンが悲鳴、らしきものを出す。

健吾君はいつの間にか、浮いてるラオ・ヤンロンの弱点である腹下に潜り込み、突き上げた。

無論、血は出る。その返り血で衣服が汚れるのも構わずに、更に突き上げる。ラオ・ヤンロンの口から、血が吹き出す。

「エクスカリバー、弓矢モード。用意」

「あいよ。相棒、お安い、ご用だ！」

“何するつもりなの？”

「背中から心臓を狙う！　今、一番シンクロ率を上げないと、最悪、心臓に当たらず、健吾君にグサリ、だ」

「シンクロ率？　何それ？」

「ようは、心を寸分違わず、一つにすんの」

「なるほど、分かったわ」

“でも、その後の副作用が大変な事に……”

“怖い事言わないで”

「そうだぞ、稜、頼むからシンクロ率を下げるようなことを言わないでくれ。キスしてやるから」　「私には無いの？」

「いっぱいキスしてやる。頑張ってくれたら、いっぱいキスしてやるから、頑張ってくれよな」

“拓真のキス、絶対に貰ってやるうううっ！”

辰星　水羅億傷　魔

ん？　いつの間にか、健悟君はラオ・ヤンロンの横に立って、……魔法？　みたいなのを放っている。水色の炎みたいな物をぶつけまくって、ラオ・ヤンロンに多大なダメージを与えている。

……こちらに流れ弾が飛んでくる？　……無差別攻撃か！　左手の剣で受け止める。しかし、その炎は爆発し、俺達は大きく吹っ

飛ぶ。

「ぬっ！　ぐうっ！」　「いやあああっ！　何で？　自分が受け
たわけじゃ無いのに、こんなに痛いのか？」

“それは、スピリット・リンクの最大の特徴、感覚の共有だわ”

「相棒、準備完了だ。いつでもいけるぜ」

「よし、いくぞ、’　“穿て、心の臓まで！”、’」

シンクロ率を最大限まで高め、矢を放つ。腹に健吾君は居ないため
貫通しても、被害は出ない。ラオ・ヤンロンの背中に突き刺さり、
貫いていく。

遂には、心臓に達し、ラオ・ヤンロンは活動を完全に停止する。

「ふう、討伐完了。凄いクエストだったぜ」

クエスト名称　異次元の歪みから湧き出るモンスター！

報酬金　0 Z

契約金　0 Z

制限時間　無制限

指定地　学校の屋上、及びその上空

主なモンスター　堕ち神　ラオ・ヤンロン

備考　クエストクリア

「改めて自己紹介。大原拓真です。中に大山香織、大原稜、で、こ
の剣が伝説の名刀、エクスカリバーだ」

時は少し流れ、学校の屋上。ようやく戦闘が終わり、とりあえず自
己紹介をしている。

「氷原健悟だ。で、中とは？」

「話すと長くなるが、簡単に言うと、俺の頭ん中に二人がいるんだよ。と自己紹介も終わった事で、勝者からの命令、君の世界について、教える」

「俺の世界？　　どういう事だ？　　ここが俺の世界じゃないみたいな言い方だな」

「ああ、そうだ。ここは君が来るような世界じゃない。堕ち神なんてこの世界じゃ現れない」

「だが、現にさっき現れた」

「それは——」

すると、エクスカリバーが横槍を入れる。

「“異次元の歪み”だな。お前さんも堕ち神とやらを追ってる最中に、紫色の割れ目ん中に入っただろう？」

「ああ。俺はその時、ある依頼を受けていた。だが、いきなり地面が裂けて、俺はその裂け目に吸い込まれてしまった」

「だろ？　　お前さんが裂け目に吸い込まれたように、堕ち神とやらも吸い込まれたんだよ、多分」

「戻らねえと」

さっきの“依頼”で思い出したらしい。健悟君はかなり深刻そうな顔をしている。

「……無理だよ。異世界に行く手段なんてないんだし、手段があるならとつくに元の世界に戻ってるっての」

「お前らもこの世界の住人じゃ無いのか？」

「そうだよ、俺らも元は超常現象が何もない世界に住む、真人間だったんだよ。でどんな奴だった？　あんなに出たんだ、依頼された堕ち神もいるかもしれん」

「……。カエル型の堕ち神という情報が——」

「じゃあ、葬った」

「チツ、俺の獲物を横取りしやがって……。俺と戦え」

「いいよ」

“ いいの！？ ”

‘ 無茶よ、コイツヤバすぎる！ ’

「何だよ、二人とも臆病風に吹かれたか？」

「誰と話しているんだ」

‘ 冗談じゃない！ やってやるわよ！ ’

“ お兄ちゃんがついているもん！”

「よし、いくぜ、まずはこいつと戦って貰うぜ。我と契約せし炎の魔神よ、汝の炎を持って我が仇敵を討ち滅ぼせ。出よ！ イフリート！」

言うが早いか、魔法陣が現れ、次いでイフリートが召喚される。が出ると同時に剣が胸に突き刺さる。

「は？」

瞬間、健吾君の姿が消える。と言うのは間違いで、実際は一瞬でイフリートに接近していたのだ。

絶ノ双爪 封臨

直後、両手の剣で切り上げる。ああ、イフリートが無残な姿に……。

「修復【リペア】、灼熱地獄の主、劫火の拳、魑魅魍魎の炎を纏し、その拳に打ち碎けぬ物など皆無！」

切り裂かれた肩が治り、戸惑う健悟君を灼熱の炎を纏った拳が強かに打ちつける。

「チッ！ クソが！」

健吾君はとっさに剣を突き立て、勢いを殺そうとするも、殺し切れずにフェンスに背中を強打する。すかさず、追い討ちを掛ける。

「灼熱地獄の主、迸る劫火、死の息吹に似て、仇敵を瞬く間に葬り去る！」

イフリートが炎を吹き出す。フェンスが解け落ちる。そこには健吾君の姿が見えない。

終型 壱百式 狂桜

彼は空中にいた。健吾君は空中から、頭、首、心臓を目に見えぬ速さで突く。イフリートは消滅してしまう。

「次は、お前だ！」

うわっ！ 突進してくんな！ こっちは武器持ってねえんだぞ！ ええい！

「エクスカリバー！ 日本刀モード！ 大至急！」

「あいよ、完成だ」

エクスカリバーを恐るべき速さで日本刀になった。ご丁寧に鞘までついて……。手間かけません！

そうやって、悶々としている間にも健吾君は迫ってきている。健吾君の初撃を抜き様の剣で受け止める。だが、もう一つの剣が襲い掛かる。

「エクスカリバー！ 鞘を日本刀に！」

「あいよ」

金属音、どうやら間に合ったみたいだ。

「ちつ、これなら——」

「宮本流剣技、攻式七ノ型『風林火山』」

右の刃が動きかけた健吾君の剣を打ち落とす。次いで、左の刃が健吾君の急所を狙う。

この技は、相手の次の攻撃を潰し、更に急所を斬る、攻防一体の技。しかし、健吾君も一流の剣士、こんな攻撃はいとも簡単にかわされ、距離を取られる。

辰星 八岐大蛇 斬

「負けるか！ 宮本流剣技、攻式三ノ型『空穴来風』！」

二つの技は正面からぶつかり合い、衝撃波を撒き散らしながら消滅していく。

完全に消滅した後、二人は駆け出す。

辰星 激龍雷怒 滅

「宮本流剣技、副式八ノ型『迅速果敢』」

目に見えない速さでの剣劇が繰り広げられる。ガギン、ガギンと金属音が鳴り響く。端から見れば、火花しか分からないだろう。

「クソが、叩つ斬つてやる」
「はっ！ そろそろ終いにしようぜ！」

剣劇は激しさを増していく。つばぜり合いが繰り返され、技を出し合い、少しずつ傷つき始める。
そして、遂に決着の時が来る。

絶ノ双爪 阿修羅

「宮本流剣技、攻式八ノ型『一罰百戒』」

断続的に続く金属音、少し懷に潜れば、すぐに斬りつけられる。しかし、誰だつて一瞬の隙はある、技術模写^{ガンテールウ}ほら、そこがから空きだ！

「宮本流剣技、攻式四ノ型『三日坊主』」

健悟君の鳩尾に柄をめり込ませる。健悟君の動きが一瞬だけ、止まる。

その一瞬を俺は見逃さなかった。すかさず首筋に峰打ちを喰らわす。健悟君は、苦痛に顔を歪ませ、悶絶する。

「ふう、お疲れ、と言いたいとこだか、まだやることが残っているぜ、健悟君を元いた世界へ帰すんだ」

「でも、どうやって？ 他の世界に行く手段なんてないんでしょ？」

「いいや、一つだけある。真理亜の空間魔法【デイメンジョン・マジック】だ。真理亜は俺達が元いた世界からワープしてきたんだろ？ だったら、健悟君も送り返せるかも知れない！」

“おお！ ぐつどあいであ”

「でも、彼の世界には、堕ち神つてのがいっぱいいるんでしょ？」

危険だわ、

「怖いのなら無理についてこなくてもいいよ?」

「べ、別に怖いわけじゃないわよ。ただ、あんたが向こうの世界で浮気しないか、心配なだけよ、」

「そつ、じゃあ、行くぜ。異次元の扉よ、その戒めを解き、我を導け!」

俺はエクスカリバーを緑衣の剣士が神殿で、伝説の剣を台座に収める時が如く地面に突き刺す。健悟君の前に淡く光る扉が現れる。

俺は健悟君を肩に担ぎ上げ、扉をくぐる。そこは夜霧漂う、港町だった。

「おーい、健悟!」

「おい、健悟君」

「ん、ああ……」

「連れの方が、お待ちのようにだ」

「そうだな」

健悟君は軽やかに飛び上がり、軽やかに着地する。

「拓真、お前に言っておくが、まだ負けた訳じゃない、次に会ったときはお前の首を落とす」

「勘弁してくれ、男ならいさぎよく、負けを認め、恋人の胸に埋まっ
つてよしよしされとけ」

「――!!」

俺はそれだけ言うと、剣撃が飛ぶ前にさっきの扉を潜り、魔法の世界へと逃げ帰っていった。「じゃあ、スピリット・リンクを解除するよ」

生唾を飲み込む音。当たり前か、三人同時つてのも、シンクロ率最大つてのも初めてだからな。解除した時の副作用がかなりヤバい事になるのは当たり前なことで、覚悟を決めたつもりでいたが、いざ、解除となると、やはり原始的な恐怖が心臓を掴んで離さない。

「ねえ、副作用つて何なのさ。ここまで一度も話題になつてないんだけど、どうしてさ？」

「その内容が、あまりにも過激で、破廉恥で、下劣極まりないからだよ」

「ふん、そんなのにビクビクしてんの？ あんたらしくない。あんただったら、多少のリスクくらい、平気でぶつ飛ばすでしょ？」

「……そうだな、そうだよな、そうでなくちゃいけないよな！ よし、覚悟決めた！ いくぞ、スピリット・リンク、解除！」

と、叫んだ瞬間、光の柱が俺を包む。数秒経った後、稜と香織が具現化する。が、様子がおかしい。顔が真っ赤だ。……俺、何かやつたかな？

「違うの！ これは、これは……。何かすごいムラムラしてきて……。いやっ！ ダメ！ 冷静に思考出来ない！ 何がどうなっているの！」

「すごいです……。これがシンクロ率100%の力。体がどんどん熱くなつていきます。服を着ているだけで、ダメ！ もう我慢出来ない！ 稜、服を脱ぐ！」

稜がすごい勢いで服を脱いでいく。豊満なバストがお天道様にさらけ出される。

少し間を開けて、香織も風の力を使って脱いだ、というより、ビリビリに引き裂いた。俺の衣服と共に。

「て、テメエらアア！」

「わ、私の裸を……、見て……」

「おに……ちゃ……ん！」

「く、くるな、来るなアア！　業火の竜巻【フレイム・トルネ

ード】！　業火の防壁【フレイム・バリア】！　業火の牢獄【

フレイム・プリズン】！」

淫乱娘共に汚されてたまるか。俺は竜巻、防壁、牢獄の三重防御を試みるが、稜の解除【デイスperl】で全て鎮火される。

「うふふふふ　　しつかりと搾り取ってあげるわ」

「おに……ちゃ……ん！　　だいだいだあいすき……！」

「や、やめてエエエッ！」

その後、香織と稜は官能小説並みに淫ら狂い、俺は気力を全部持ってかれ、なされるがままになっていた。

俺の人生の90％はハーレムなのだろうか？

俺はそう思いながら、ぺちやぺちやと言う音と共に気絶した。

第二章 交わる世界の侵入者（後書き）

どうでしたでしょうか、焰野様、すいません、やっぱりあの漢字は出ませんでした。変わりに“怒”を使いました、本当にすいません。

クロスオーバーと言うのは、面白いけど、その分難しいんですね。

よし、クロスオーバー、自分も募集します。

使いたいと言う人も、出したいと思う人も、感想や、メッセージで連絡をお願いします。できる限り、いい感じに仕上げてみせます。よろしくお願いします。

第三章 異世界に通じる扉（前書き）

大変長らくお待ちいたしました。

外伝にしては、あまりにも物語が動きすぎるので、本編にしました。
ですが、海に行ったのは変わりません。

今回は残酷なまでに性的虐待を受けます。

海だもの、少しくらいはっちゃんけたっていいじゃない。

第三章 異世界に通じる扉

あの戦闘三昧の日から、あつと言う間に2ヶ月か、授業と言う名の性的虐待をたつぷりと味わった俺は、精神的に強くなっただろうか？ そんなことより、

「はあ、来るんじゃないかった」

せつかくのサマーバケーションに海の家、なのにテンションだだ下がりなのは、理由がある。

「アハッ、止めなさいよ」

「そっちからしてきたくせに、何言ってるのよ」

「そんな解きやすい水着を着て来るから悪いのよ」

今のでお分かりになっただろうか。

そう、恥を知らぬ女達は水着の脱がし合いをしているのだ。

あいつら絶対に俺の事をそこらへんの犬っころとしか見てねえよ……。

「おい、あんたらの辞書に『恥』と言う字はあるか？」

『無い！』

即答……。しかも何気にハーモニー奏でてるし。

「全く、シークレットビーチだからって、コッソリ後から付いてきて盗撮している奴がいらないとは限らないんだぞ。ほら、そこに——」
俺が茂みを指差すと、音を立てて中肉中背で眼鏡を掛けた、明らかにオタクな中年男が、カメラを持って「なぜバレたんだ」と心の中で呟いている。おそらく、不可視【ステルス】でも使っていたんだろう。

俺は技術複写【スキルコピー】で、とあるドラマの能力の一つ、時空間制御【クロノキネシス】をコピーし、時間を止め、カメラを奪い取る。すぐさま画像をチェックするが、見るに耐えないものばかり。

りで、三枚も見ないうちに、叩き付けた。

「ごめんなさい！　もう二度としませんから！　金なら払う。命だけは、命だけはどうかご勘弁を！」

何かの拍子でクロノキネシスが解けてしまったか、まあいいや。俺は今、完全に怒っている。いまにもはちきれそうだ。

「このカメラ、意外と頑丈だなあ、返して欲しいか？」

盗撮男はものすごい勢いで頷いている。爆笑物だ。

「じゃあ、かけっこで勝ったら、返してやる」

そう言い残すと盗撮男は全速力で走って行った。

「さてと、どうやって絶望させてやろうかな。メモリーオールデリート？　それとも……」

悩みに悩んだ結果、『メモリーカードを抜いて、原型を留めなくらいにブツ壊す』ことにした。

「火炎の球【ファイア・ボール】、業火の球【フレイム・ボール】、烈火の剛球【ブレイズ・ボール】、獄炎の剛球【インフェルノ・ボール】――」

次々と炎の球を作り出し、上に投げる。炎の球は融合を繰り返し、全て投げ終えた頃には、拳ほどしかなかった炎の球は小さな太陽くらいに膨れ上がった。いた。

フュージョン・レイド

「――合成魔法、紅炎の爆弾【プロミネンス・ボム】！」

直後、小さな太陽はカメラに向かって全速力で突進する。

男がようやく異変に気づき、後ろを振り返れば、炎の巨大な塊がカメラをブツ壊している様がよく分かるだろう

「――！」

そして、着弾。叫び声は轟音にかき消され、男の姿は巨大な炎柱で見ることが出来ない。

「後で上映会だな。男の前で」

「えらくエグいことすんなあ、拓真」

声のする方へ振り向くと、視界が真っ黒に塗り潰される。

「何するんだ！」

「なんや、つれないのう、わいの事嫌いか？」

返ってきたのは関西弁、つまり紅音である。

「別に、そんなことを言ってるわけじゃ無いけど」

「まあ、ええわ。せつかくの海や、楽しもうやないか」

「そだね。取りあえず、水着を着てくれないか？」

紅音もまた、淫乱娘の魔の手にかかっていた。

「着たで、ほんでな拓真、さっきのは何やったの？ 盗撮男がなんとかって」

「ああ、だから脱がし合いは止めろって言ったんだがなあ」

「さっきの轟音は拓真が作り出したのね。あんな凄そうな魔法、どうやったら唱えられるのさ」

「怒りだよ、怒り。ファンタジーの基本だぞ？ そんな性格して、

これくらいも分からないとは、お前のその性格は重度のラノベ中毒じゃなかったのかよ」

「うっさいわね、奴隷がそんなこと言って良いと思って——」

「はい、奴隷。自分の都合が悪くなるとすぐに奴隷、奴隷、奴隷！

奴隷解放はとっくの昔に終えてんの、香織も奴隷解放しろー！」

「うるさい！ うるさい！！ うるさあああ！！ わた

しは何も聞いてなあああ！！」はあ、大原拓真の夜明けはまだ遠いな……。

「よーし、ビーチバレーやろっ！」

「唐突だな、どうしたんだよ、桜」

「いや、だって、こうでも言わなきゃ、私、すぐに忘れられるから……」「分かった。やろっ。そして、ごめん。もう忘れない」

その後、ビーチバレーセットを俺の幻想召喚【イメージサモン】で生み出したのだが、チーム編成で既に負けていた。

まず、香織のチームだが、香織、真理亜、紅音、詩音、楓といった、平均身長が高いチーム編成になっている。

一方、俺のチームは、俺、稜、愛子、桜、人数合わせのため、一樹をテレポートで呼び寄せたが、俺以外に誰一人として、一番背の低い香織を超える身長を持つ人はいなかった。

そして、俺と一樹にとって最大で最凶の脅威、みんなFカップ越えの巨乳だったことだ。

ジャンプした際に発生する“乳揺れ”で俺や一樹を悩殺し、使えなくして、大量得点を狙うつもりなんだろう。

そして、試合開始、ビーチバレー対決は実に悲惨なものになった。

香織チームのジャンプサーブが色んな意味で凄まじいし、万一受けきつても、桜が俺に向かって殺意あるアタックをして来て、せつかくのチャンスですべて棒に振ったために、全五セット中、一度も得点出来ずにストレート負け。

罰ゲームは桜に与えるべきなのだが、香織曰わく、

『部下のミスはリーダーのミス。従って、あんたが全部受けるのよ』らしいので、結局、罰ゲームは俺が受けることになった。笑顔で殺されかけたんだぞ？

「さてと、どうやって犯そうか？」

「ははは、それ方面オンリーですか？」

「水着で罰ゲームって言ったら、これ方面しかないじゃないの！」

ああ、香織が興奮してきたよ。また汚されるのか、嫌だよ、授業と言う名の性的虐待受けたばっかだよ？

「いや、もっとあるじゃん、尻文字とか、砂埋めビキニとか」

「男の尻文字とか、見てるこっちが罰ゲームじゃねえか、キヤハハハハ！ それよりかは拓真の体を貪っていたいね」

ダメだ。人の話聞く気ゼロだ。

「罰ゲームが決まりました！　なんと、『拓真さんの唇を奪いまく

って、拓真さんの体を食べちゃおう』です!」

「はあ、もういいです。好きにしてください、もう、抵抗する気力が失せました」

「じゃあ、お言葉に甘えて……、ウキャホーイ!」

「あーっ! ずるいです、私も食べます!」

と、桜と稜も加わり、結局ただの大ハーレムになった。

「助けてくれ、一樹」

俺は一樹に助けを求めた。一樹は「仕方ないですね」と呟き、稲妻の機関銃を装備する。

発砲する直前、鋭い竜巻が吹き荒れて、稲妻の機関銃を切り裂き、一樹を吹き飛ばす。

「助けを求めている人を見るとさ、すつごくイジメたくなるのよね」
香織の魔の手が迫る。俺は無意識の内に叫んでいた。

「拓真、落ち込むなよ、いつものことだろう?」「ああ、でも、今回ののは酷かった。もう海に行きたくない。トラウマだ。水着すら見たくない、裸体なんて……」

「まあまあ、拓真。君はよく頑張ったよ」

「時に、君はこんなにスタイルのいい女の子達に囲まれ、どう思う?」

聞き覚えの無い声に、一同は一斉に振り向く。

男は全員がこちらに注目したのを見ると、前髪をかきあげ、薔薇の造花を口にくわえる。その一つ一つの動作に吐き気を覚える。

「あなた、何者だ」

「人のな——」

「不審者に名乗る名前などない」

すると不審者は激昂したのか、全身を真っ赤にして、

「こんなに美女を侍らしておいてその態度はなんだね、貴族の基本も分かって無いじゃないか!　　そうか、貴様は成金か、ゲルマニ

「うるさい。ア・カのどこが悪いのよ？　可愛いじゃない。キング・オブ・ザ・ツンデレ、くぎゅ以外で唯一可愛いなって思った女キャラなのよ」

「そうだよな、その性格のルーツだもん！　でも、もう少し文乃っぽくなっても良いと思うがな！」

「“迷い猫”の？　なってるわよ。わたしのツンデレは、バージヨン16・8よ？　最新のツンデレ、それらをイイとこドリップしているんだから」

イイとこドリップした結果、“芹沢文乃”は完全に消え去ったらしい。

「それにはルイズも入っているのか？」

「もちろん、今のメインだもの。でも、最近のルイズは才人にツンツンしなくなったと思うわ。キュルケが才人争奪戦に参入すれば、もつと面白くなると思うんだけどね」

判定、黒。釘宮理恵さんをくぎゅと呼んだし、ゼ・使の今後について語り出した。誰がどう見ても、オタクと思うだろう。いや、女だから腐女子か。

「お兄ちゃん、あの人は一体なにを言ってるの？　稜、よく分からない」

「分からなくていいんだよ、稜」

「ちなみに、稜は完全に妹属性だ！」

「いもうとぞくせいってなあに？　お兄ちゃん」

「ムダな知識だ。トリビアだ。いや、トリビアはためになるから違うか」

「羨ましいな拓真。自分もお兄ちゃんと呼ばれたいね。なあ？　香織」

「うるさい！　バカ兄貴！　一生涯バカ兄貴だよ！」

「『おにいさま、キス……、したくなっちゃった……』ってさ」

「誰が言うか！　バカ兄貴！」

しばらくオタクな話が続いた。真理亜、愛子、大山姉妹は、終始蚊

帳の外だった。

「本題に戻りますけど！ さっきのキャラクター具現化は何だったんだろうか？」

突然の質問に、この場に存在している全員が沈黙する。

しばしの沈黙、口火を切ったのは、エクスカリバーだった。

「ありや、『異次元の歪み』を通ってきたにちげえねえな」

「異次元の歪み？ あの化け物達がたくさん出てきて、氷原健悟君が出てきたトンネルみたいなアレ？」

エクスカリバーは鍰をカタカタ鳴らして答える。某ラノベのインテリジェンスソードみたいだ。

「大正解だ、デカチチ」

直後、何故か俺を殴った。後々、理由を聞くと『剣を叩くのはバカバカしいから』である。死ねばいいのに。

「つまり、あれはフィクションじゃなくて、実際に現存しているってわけかよ！」

「それも正解だ、相棒」

「つまり、近い未来にルイズちゃんと出会えると！」

「おいおい、興奮し過ぎだ、一樹。有り得ない事はないが、確率かなり低いんじゃないのかよ、世界は狭くなったとは言われるが、所詮はコミュニケーション。旅行しようたって五、六時間は確実に掛かる。世界は俺たちの手に余るくらいに広いんだよ」

「そだな。確かにルイズとやらも異次元の歪みを通じてこの世界に来ることもあるだろう」

「この世界に？ やっぱ世界は一つだけじゃないのか」

エクスカリバーの声音が変わる。ここからは今まで以上に真剣な話が始まるのか。

「そう。パラレルワールドって知ってるか？ 平行世界と書いてパラレルワールドだ」

「えーっと、この世界と別にある、私達が元居た世界。二つの世界が同時に進行している、ってところかしら」

「大当たりだ、楓の姉貴、そう、パラレルワールドは一つだけじゃない。パラレルワールドは“もしも”、“if”の数だけ存在する。ドラ●ものの映画にもあつたろう、“もしもボックス”って、あれでパラレルワールドを召喚って訳だ」

「つまり、どうゆうこと？」

「つまり、無限通りある“もしも”の世界から俺達の世界へ異次元の歪みを通じていろんなものが流れてくるって感じだろ？」

「そうだ、詩音の姉貴」

「で、俺達は何をすればいいんだ？ エクスカリバー」

「簡単に言えば、色んな世界に行つて、色んな所に現れる、異次元の歪みを閉ざす。それだけ」

「そうか、海斗がいつから居たかは置いといて、どうやって色んな世界に行くんだ？」

「そりゃ、あそこにあるような、『異世界に通じる扉』、通称Dorsを潜るんだよ。記憶したか？」

「どこにあるのよ！ その扉は！ どこにも見えないわよ！」

「……あそこ」

愛子が指差した場所に、扉が現れる。それは入学式の日、俺をこの世界、魔法の世界へ誘つた、淡い光に包まれた扉、そのものだった。

「マジか、マジなのか。今度はどこに飛ばされるんだ」

エクスカリバーは凄く他人ごとのように、

「知らん」

とだけ答えた。

「でも、あの扉がどこに通じていようと、俺達はあの扉を潜り、そこにある異次元の歪みを閉じなければいけないんだろう？ エクスカリバー」

「そうだ。坊主、話が早くて助かる」

「そうかい。じゃ、行くか」

しかし、香織はやり残した事があると、抗議を上げる。

……雰囲気ぶち壊しやがって。

「まずは元いた世界に戻って、私達の無事を伝えるべきよ!」

「それもそうよね……。パートナーと無断で旅行に行っていましたって言うのが一番ね」

「よし、拓真、異世界の扉よろしく」

「いいけどよ、俺は真理亜と違って、場所の指定は出来ないんだ。南極に飛んでも勘弁してくれよ?」

なにせ、コピーしても“不完全”だからな。コピーでやれることは制限されんだよな……。

「じゃあ、真理亜よろしく」

「嫌よ。なんか屈辱的な言い回しだから」

「拓真! どこでもいいから元いた世界に送りなさい!」

いやいや、もう少し頼むことをしようよ……。

「俺からも頼む、真理亜。どうしても真理亜の扉が必要なんだ。何でもするから」

すると、真理亜の目の色が変わっていき、舌なめずりをする。

「……今、真理亜はやさしいことを考えたわ」

「そんなことはないわ。それよりも拓真、本当に何でもしてくれるのよね?」

「二言はないよ」

真理亜の舌なめずりが薄気味悪い笑い声に変わり、なんだか酸っぱい匂いが漂い始める。……怖いよ、真理亜、いかにも喰われそうって感じが特に……。

「うふふ、くふふ、ぐふふ、ぐへへへ」

「ねえ、いつの間にか真理亜ちゃんの足元に水溜まりが出来てるけど、魔法の前触れだったりするのかな?」

「ああ多分そうだろう。って真理亜? 真理亜、真理亜!?!」

俺は真理亜に軽めのチョップを喰らわせる。

真理亜は長い夢から覚めたかのようなリアクションをとり、我に返る。

「あ、ああ、異世界の扉よ、その戒めを解き、我を導け！」

真理亜の詠唱がもう一つの扉を生み出す。それは、Doorsとは違って、小さくて、丸くて、不思議な紋章が描かれてて、要するに、魔法陣だった。

「一応、確認しておくけど、ちゃんと私達の部屋に繋がっているんでしょーね？」

「お、おいおい、扉を作らせておいて、それは無いだろ？ なあ？ ……、前見たときと、形が違うのですが……」

「うふふ、これが本式よ？ さあ、行つてらっしゃいな」

真理亜は蠱惑的な笑みを浮かべる。それに惹きつけられたか、どうにも体が動かない、こう、蛇に睨まれた蛙みたいな感じ。

そんな俺をコッソンと小突き、

「ほら拓真、何真理亜に鼻の下伸ばしてんの！ さっさと来る！」と叱咤し、魔法陣の中へ消えて行った。

「さてと、俺も行くわ」

と真理亜達に伝え、踵を返し、魔法陣に向かって歩き出した途端、
「ちよつと待つて——」

真理亜が手を掴んで、

「——伝えたい事があるの」
真剣な表情で話しかけてきた。

第三章 異世界に通じる扉（後書き）

次回は恋の茨が拓真に巻き付く予定、あくまでも、予定。
自分の気分次第でキャラクター紹介になるかも。

第四章 動き出す恋の歯車（前書き）

破廉恥な事しか出来ない訳じゃないよ！

と言うことで、恋愛小説風味、特に理由は無いです。
あるならば、動きが欲しかった。それだけです。

第四章 動き出す恋の齒車

「あなたに伝えたい事があるの」

真理亜の表情がいつもと違う。なにやら真剣な話をするみたいだ。

「キウルケみたいな色ボケキャラかと思っていたが……」

「真面目に聞いて！ 私は真剣なの！ 本気で聞いて！」

半泣き状態の真理亜。こればかりはいけないと見て、本気で土下座した。

「すまん、この通りだ」

真理亜は俺に「立って」と言い、それでも土下座する俺を水魔法で立ち上がらせた。

「本題に入ります」

ゴクリ、生唾を飲む。俺は徹底的に犯されるのか？

『今からダーリンに媚薬や催淫薬を沢山飲ませ、絶頂直前まで興奮させて、私の胸の中でたくさんイってもらいます』

うん、あり得る。真理亜ならやりかねない。

「確かに、私の本能はそうしろと叫んでいるけど、今のところは理性が歯止めを掛けているから……、いつまで続くか分からないけど」俺は安息の溜め息をつき、尻餅をついた。

「り、了解……。続けて？」

「ええ、そうさせて頂くわ」

俺はもうそろそろ真剣になった方がいいと考え、立ち上がり、真剣な眼差しで真理亜を見る。

そうすると、真理亜は目に見えて赤くなり、言葉を詰まらす。

……意外と初心だったりするののか？

「き、緊張して、何を話すべきか分からなくなっただわ、心を落ち着

かせるから、もうちょっと待っててね？」

……緊張は人を変えらるというが、本当だったんだな。

「落ち着いたわ、日頃の行いのせいかしら……、いくわよ」

ゴクリ、俺は一際大きな塊となった生唾を必死になって呑み込む。

「あなたのことが好き、いや、愛してる。心の底から、愛してる！」
真理亜の顔が迫ってくる、互いの顔に鼻息が当たるほどにだ。

ここまででは至って普通、いや、結構好きだな。こうゆうの。でも、次の瞬間、それらがちよつとした恐怖に変わる。

「私はね、欲しがりの、特に愛する人については、誰よりも知っていて、持っていないきゃ、私は耐えられないの」

真理亜は相も変わらず、顔を真っ赤にしている。目もぎゅつと瞑っていて、とても可愛げがあるのだが、肝心のセリフがなんか危ない。

「ダーリンが欲しい！ 誰よりも欲しい！ 心も、体も！ 全部欲しいの！ 私にとつて、あなたが全てなの！」

このセリフは、もちろん嬉しい。

でもそれはセリフだけ取ればの話で、さっきから出ている、その奥からの殺気。及び、真理亜から発せられる筆舌に尽くし難い、オーラみたいな、真理亜みたいな人がここまで真面目になると、凄く、近寄りがたい雰囲気が漂ってしまつて……、とにかく、それらさえなければ、俺は嬉しすぎて、思わず飛びついて押し倒し、真理亜の最大の魅力である巨大で豊満な胸を、揉みながら埋まり、あんなことやこんなことも……、俺つてやつは、なんてことを……。

「でも、今のダーリンは香織の物、香織にぞつこんだから、私がちょつと色気を振りまいても、ちつとも見てくれないかもしれない」
急に声音が変わった。自分を責めても何も出ないぞ。

確かに高飛車で高慢ちきな香織のことが実は好きだ、そればかりか、彼女以外、好きになれそうにない。

いや、友達とか、そういうのは別だ。そういう意味でなら、真理亜のことは大好きだ。

でも、香織には悪いけど、それは暫定で、まだ答えを出しかねているから、今後の行動次第では真理亜のことを好きになったり、逆に俺が香織やその他の皆さんにあんなことやこんなことをして、俺の物にしてしまっている場合もある……。

いや違う、何てことを考えてたんだ！ やっぱり香織一筋だ。今決めた、神の名の元に誓った。大原拓真は大山香織だけを愛し続けることを！

「だから、私は全身全霊を賭けて、ダーリンを虜にしてみせる！
今まで以上に過激で、大胆にダーリンを惑わして、私の物にしてみせるわ！」

言下、真理亜は俺の手と頭をしっかりと掴み、自分の胸に押し付けた！

真理亜は一方の手で俺の頭を巨大で豊満な胸にうずめさせて、もう一方の手で俺の手を自身の胸に押し付け、弄ぶ。その際、真理亜はくねくねと動き、さりげなく“えっちいところ”をこすりつけ、粘っこい、艶やかな声と息を浴びせかける。

男にとっては、願ったり叶ったりのシチュエーションだが、俺にとっては地獄、お色気地獄だ。それに、数分前に誓った、香織との誓約が……。

「いけないわね、歯止めが利かなくなっちゃったわ」

実に楽観的な真理亜、何か奥の手でも持っているのだろうか？

持っていないにせよ、香織に見つかる前に止めさせないと……、殺される。

「だあれに殺されるんですって？」

げっ……、この声は……。

香織が戻ってきた。かつて無い、巨大な殺気が容赦なく襲っている。誰か助けてくれ。

だが、念じただけで物事が良い方向に進むほど、人生は甘くはなかった。

むしろ、最悪の展開が訪れた。

「あら、香織じゃない。ふふふ、私、決めたわ！ 香織にダーリ

ンは過ぎた代物、ダーリンは私が愛してあげる！」

それは、火にガソリンを注いでいるようなものだ。

香織は案の定激昂し、竜巻【トルネード】を繰り出すが、真理亜も負けじとそれを上回る威力で槍焰【そうえん】を繰り出し、竜巻を打ち消す。

……ん？ 炎？ 確か真理亜は水属性だったはずじゃ……？

「ふふふ、私、実は火属性だったりするの。さあ、私の胸の中で眠りなさい」

真理亜はさらに力を入れ、俺の顔に巨大で甘美な、禁断の果実を押し付けてくる。燃え盛る炎に、ガソリンを呆れるくらいにぶちまけているようなもんだけだな……。

「えゝろゝまゝりゝあゝ！！」

香織の近くにつむじ風が次々と出来る。香織はマジギレ寸前のようにだ。

しかし、真理亜も挑発することを止めない。

「褒め言葉として受け取っておいてあげるわ」

その一言が香織を派手に事故った車の最期が如く爆発させるってことを真理亜は知らないのかな……。

「にぎやあああああつ！！」

真理亜に対する香織の怒りが、奇声を上げて大爆発。辺りに竜巻が発生し、辺りの土地を容赦なく荒らし、この辺りの水を全部ひっくり返してしまう。

「もう、スマートじゃ無いわね」

「うるさい！ 人の奴隷に手を出すな！」

「だ、だからって竜巻を飛ばしてくんなあ！」

蛇行しながら、近づいてくる巨大な竜巻。あんなの、俺の炎でも呆

気なく消し止められてしまう！

「ど、どどど、どーすんだよ真理亜！ 助けて、まだ死にたくない！」

「そうよね。まだやり残した事が！」

「デート？ まだ私とのデートが終わってないものね」

「デート？」

「そうよ、あなたが何でもしてくれるって言ったんじゃない？」

ああ、そういうことか、納得。

「納得すんなああ！」

目の前の竜巻が更に勢いを増す。少し気を抜いただけで高度云千メートルまでとばされそうだ。

「大丈夫、私を信じて、少しの間だけでいいから、私に心を委ねて欲しいの」

「委ねるっ たつて、どうすりゃいいんだよ？」

「うふふ、こうするのよ」

そう言つて、真理亜は俺の顔を両手で優しく包み込み、蠱惑的な微笑を浮かべる。

そして、真理亜は香織にむけて言い放った。

「香織！ 女の子は可愛さが一番よね！ でも可愛さだけじゃ

ダメなのよ！ 女は、時に妖しく、時に大胆に、時に繊細に、男を求めるものなのよ！ そしてね、今から拓真にこんなことして

誘惑してあげるんだから！」

真理亜は再び俺に聖母マリアのような微笑みを見せ、捕食されたかと錯覚するほどの激しくて大胆なキスをした。

「んっ、んぐっ！？」

舌が凄入ってきて、唾液を思いつ切り吸われる。何故か興奮する俺は変態なのか？

「んっ、んんっ……」

俺はバレないように真理亜の顔を覗き見る。がすぐに目をとじた。反則だ、真理亜のキス顔可愛すぎる……。ちゅっ、ぶちゅっ、ぶちゅっ、という効果音さえなければ、もっと可愛いんだげど

な。

だが、竜巻を止めなければならないのだが……。

仕方ない、ダメもとでやってみるか！ 烈火の飛刃【ブレイズ・エツジ】！

撃ち出すために、手を竜巻に向ける。意識を集中、手が熱くなり、手を突き出すと炎がでる！ はずなのに、意識を集中しても、手が熱くならない。突き出してみても、ジュツと音を出しただけで消えていく。

「ああ、ダーリンのmanaは情熱的な愛を育んでいる最中に、ほとんど貰ったわ。あ、manaって言うのはダーリンが知ってる言葉で、MPと言うのかしら？」

え、MPドレイン……。アスピルとも呼ばれるそれは、RPGの呪文の中で喰らうとかなり厄介な呪文だ。

MPを取られすぎた俺の分身が、魔法もロクに使えず、威力が弱すぎて意味のない直接攻撃ばかり繰り返して、ブラッド・ゴンになり殺され続け、本体ごとソフトを破壊したのを、今でも覚えている。「なんて事を……」

すっかりと意気消沈する俺を真理亜は優しく抱きしめる。その顔を覗き見ると慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。この顔を見て、夜間は真理亜にこっそり従う事に決めた俺。良心？ 教頭もとい、ケダモノに兄を殺された時から捨てている。

「気を落とさないで、竜巻から、ダーリンを守ってあげるから」

そう言うところ真理亜は、再び唇を奪った。だが、前と違って優しく、興奮よりは安心の方が強い。

ひとしきり唇を重ねると、急に唇を離し、何か呟いた。

「純愛【ピュア・ラブ】」

何かの魔法？ と頭を傾げていると、閃光が炸裂し、荒れ狂う竜巻を何事も無かったかのように、消し去ってしまう。

「ドキドキするでしょ？」

「へ？」

「私の能力はね、キスした人を興奮状態にして、冷静な判断を失わせるの。そしてもう一つ、キスした人のマナを奪い、特殊な魔法を使うウィンディーネ特有のスキル。さっきのがそうよ」

ウィンディーネ？　水の精霊？　何故特有のスキルを使えるんだ？　実はウィンディーネだったとか？

「血を引いてるのよ、ウィンディーネの血を」

……神話はデタラメじゃなかったんだな。

「好きよ、ダーリン」

その言葉と同時にとてつもない殺気を感じた。

「そうか、そんなにエロいのが好きか、そうよね、あんたは盛りのついたバカ犬だもんね。仕方ないもんね。あんた達なんか、遙か上空でいちやいちゃと交尾でもしていなさいよ！」

怒りで真空の刃や竜巻が乱れ飛ぶ！　船がヤシの木が、果てには

岩山が木っ端微塵になる！

俺は香織に追われる形で元いた世界に戻っていった。

第四章 動き出す恋の齒車（後書き）

どうだったでしょうか？

次回は雑魚キアラ地獄で暴れまくる予定です。

後一話でやっと異世界へ。

第五章 元いた世界の心無き者（前書き）

久々の更新です。凄くヤバくなって、ボツになったり、苦勞と努力を水の泡にされたりと泣きたくありませんでしたが、なんとか書き上げました。

今回はヤバいです。マジでヤバいです。かなりえっちなです。苦手な人は戻ることをお勧めします。……マジで！

第五章 元いた世界の心無き者

「私の前で大人の階段を昇った大原拓真を正式に婚約者として、我が大山家にむかえよう。この婚約は決して違えられる事はなく、二十歳になったら何がどうなるうと香織と結婚させるんで、ヨロシクう！」

「何が『ヨロシクう！』だよ！ 凄く傍若無人な結婚ですね！？」
「褒め言葉として受け取っておこう」

……はあ、コレも運命か。

「そう、あなたは私と結ばれるして結ばれた、運命共同体なのよ！それに、拓真は私に種をまいた。まいておいて責任放棄なんてさせないんだからね！」

そつだよな、例えコイツの事が嫌いだったとしても、男として最低の責任は取らないとな。

そつ、あんなことをしたばかりに――

――回想シーン――

「生きてるってなんて素晴らしいんだろう」

風魔法をむやみやたらと撃ちまくる香織から逃げるように元いた世界に來た俺は完全に逃げ切ったと思い、息を絶え絶え、束の間の喜びを噛み締めていた。

「私から逃げ切れると思った？ バカな男よねえ」

だが、そんな喜びをあつさりぶち壊し、逃げ切ったかと思った俺を捕食するかのように後ろからしなだれかかる香織。

「ううあっ！　なにこれ、また女になってる！」

いつの間にか女の姿にされた俺の胸を、いつの間にか付けていたブラジャーの下からがしがしともみしだかれ、いつの間にか付けていたパンティーの上から、“アレ”をなぞられる。

「私はね、拓真の次に女の子が好きなのよね。カッコ良い拓真もいいけどさ、可愛い拓真は凄く萌えるんだよね！　さあ、私を喜ばせなさい、萌えさせなさい！　淫らに舞い踊るのよ！　拓真！　いや、春菜！」

淫らに喘ぐ声、それが俺の声だなんて、未だに信じられない。

「はあはあ……、はううっ！　なんで、こんなことを？　これが、自分の声なの……。はあんっ！　激しく……かぶあ！」

香織はさらに激しく胸を揉みしだく。世界が一瞬暗転し、真っ暗闇が広がる空間で、遂に覚醒するもう一人の人格、春菜。

『春菜は拓真で、拓真は春菜。私を傷付ける事はあなたを傷付ける事なのよ』

春菜は意味深長な言葉を残し、俺を“意識の牢獄”に閉じ込め、体をコントロールし始めた。

「おねえさま……私とキスを」

「ええ、もちろん。でもただキスするだけじゃつまらないわ。胸を揉み合いながら、キスしましょ」

激しくキスして、激しく揉み合い、互いに色んな所に触れた。
そして、禁断の花園へもよゆうで踏み込んでいった、香織と春菜だった。

（つまり、レズって二人仲良く果てた）

意識を取り戻して、初めに見たのは、威厳ある校長室と、香織の胸を後ろからもみしだく変態だった。

「はあはあ……、ああ、ああっ、ああん！ いやっ！ やめっ、やめて！ た……、拓真もぼけっと思ってないで、助けなさいよ……！」

香織は凄まじい嬌声を上げ、恥部からは透明な液体が流れ出ている、色んな意味で見られてなかった。

すかさず、香織の上位風魔法、暴風の金鎚【ストーム・ハンマー】を繰り出し、香織もろとも変態を吹き飛ばす。

香織は窓ガラスの横の壁にぶつかり、落ちずに助かったが……。

「お、おいおい、何やってんだよ!？」

時既に遅し。香織は完全に発情し、目を虚ろにして、こちらに近寄って来る。

自分の恥部を自分でいじくり回して、嬌声を上げている。そして、艶やかな声で誘惑してきた。

「はあはあはあ、ううっ！ はあ……拓真、私だけの拓真！ 私の“初めて”受け取って欲しいの……。拓真が初めてじゃないとヤダ……」

瞬間、俺の中の“何か”が吹っ飛んで――

今に至る。

ほら、そこにまだ残ってる、血と汗と酸っぱい匂いを出す何かの痕跡が……、今思い出しただけでも……、げばにゃー！

「なかなかやるじゃない、凄く気持ちよかったわよ」

「うつせえ、まあこんなことにならなくても、いつかは真剣に考え無けりゃならねえと思ったがな……、結婚について」

「ばっ、ばかつ、何言ってるのよっ、結婚は形だけで、扱いは私直属の奴隷として、一生こき使ってやるんだからね！」

そう言ってますが香織ちゃん、お顔が真っ赤だよ？ そんな香織に愛おしさを感じ、ぎゅううう……っそれはもうとてもきつく抱き締めた。

「――って、何抱きついてるのよっ！ いたたたっ、離しなさいよっ！ ねえ、離してよ、恥ずかしいじゃない……！」

「好き、好きだよ香織、とても愛おしい。凄く好き、本当に好き、心の底から惚れてる」

「嘘じゃないでしょうね？」

「もちろん、心の底から愛してる」

俺は証明の為に、さらにきつく抱き締める。が、きつすぎたのだから、肩を叩き、ギブアップを示している、プロレスじゃあないんだから……と思いいながら離してやった。

「いたた……。分かった、あなたの愛は凄く感じられた、でもさ、あれは無いわ。痛い。凶器か。……。でもね、凄く嬉しかったから……。また……。やってね？」

「……。分かった」

「でっ、でも、エッチなことしたら、吹き飛ばすからね！ ホントのホントに、吹き飛ばすんだからね！」

「……。分かってますよ」

そんな甘いムードをぶち壊す、愚者が一人……。

「さあ、二人の気持ちが高まった所で拓真。香織と誓いのセツ——」

「うおおっ！」

「きゃあああっ！」

甘いムードを完全にぶち壊す、激しい揺れと突然の轟音。何かが爆発したみたいだ。

「あんたが爆発させたんじゃないの！」

「何もしてないよ！　つか、いつの間にかツンデレ香織ちゃんに戻ったんだな」

「う、うるさいわね、現場に急ぐわよ！」

——渡り廊下——

「……。な、なにさ……。あの歪みは」

「異次元の歪みなんだろうけど、何よアレ……。黒い塊を吐き出し続けているわ……。気持ち悪い……。」

……確かに見ていて気持ちの良いものじゃないな。

「拓真、激しい戦いが待っているかもしれないわ、死なないで」

「俺のセリフだ、絶対に死ぬな、ダメだと思ったら逃げてても良い、だから絶対に死ぬな」

そんなシリアスな雰囲気さえぶち壊す、とんでもない愚者が一人……。

「おいおい、二人共、誓いのセ——」

『エロオヤジは黙ってる！』

香織と俺はその言葉と同時に魔法を放っていた。

二つの違う魔法は、混ざり合い、融合魔法コンソナレイト、獄炎旋風（ストーム・インフェルノ）になり、香織の父、確か大吾朗だっけ？ を遙か彼方の上空へと吹き飛ばした。

「……、切り替えよう、香織。とにかく生徒に危害が加わる前に、素早く殲滅させなければ……」

「そ、そうね。拓真。……それにしてもエクスカリバー、あの歪みはどうやって閉じるのかしら？」

「前はかなり小さな歪みだから出てきた奴を全滅させれば塞がったんだが、今回のような普通クラスなある程度出てきた奴をぶっ飛ばし、俺が光り輝いたら歪みに向けて俺を掲げる。そうすれば歪みは消えて増える事もなくなる。あとは残った奴らをぶっ飛ばすだけだ」

俺と香織は同時に息を呑んだ。

そして、これまた同時に、俺は「キン・ダムハーツみたいだな！？」と、香織は「あれで普通クラス！？」と驚きを隠せぬ声で叫んだ。その後、「ツツコむ所が違う」と言われてポコスカ殴られたのは、

言うまでもない。

—運動場—

マジかよ……。と呟いてしまう程に、多大という言葉すら殺してしまふその量は、いつか見た『ハート・ス千体狩り』のイベントみたいにうじゃうじゃしていて、吐き気がしてきた。

「キン・ダムハーツ恐るべし、実際に起こると吐き気がしてきた、なあ香織、お前もそう思わないか？」

返事がない、ただのしかばねのようだ。

「誰がしかばねよ！ 死んでないわよ！ 考え事をしていただけよ！ ねえ！ 拓真！ 聞ってるの！ ……………、”返事がない、ただのへんたいのようだ”」

「誰がへんたいだ！ 変態でも返事くらいはするわ！ 考え事してただけだ！」
そんなふうにいちゃついている最中、一体の黒く小さい悪魔が襲ってきた。

「ちえっ、もう来たか、気の早い奴」
「でも、私達の濃厚な愛の前には無力同然なのよ！」
「へ？」

言下、香織に突然唇を奪われ、同時に襲ってきた黒く小さい悪魔は消滅する。
それを合図に次々と襲って来るが、それらも儚く消え去ってしまう。

これは『ラヴ・インパクト』なる魔法の一種で、特殊魔法のカテゴリに入るらしい。

そもそも魔法には、攻撃魔法、防御魔法、補助魔法、特殊魔法と四つのカテゴリがあるのだが、それを説明するのはまた別の機会にしてくれ。

香織曰わく、二人の魂の波長がピッタリ重なることにより爆発的なオーラが発生し、辺り一面を吹き飛ばすらしい。

……、意識せずに使えるのは、それ程までに深い関係になっているからなのか？

（でも、受け身は嫌いだ。もっと強引に大胆に攻めるのが、香織の力であり、俺の生き様だ）

（生き様って……まあ、その方が拓真らしいわね）

そう心の中で会話を交わした後、俺は静かに唇を離す。唾液が俺と香織を結ぶ、透明な橋を築き上げる。その光景にキュンとなって、再び唇を奪う。今度は俺が口の中を舌で掻き回す。

香織は悩ましげな顔でキスに応じ、艶やかな声と衝撃波を辺りに撒き散らしている。衝撃波に関しては、さっきより大きい……。シンクロ率とかそういうのも関係して来るんだな……。

俺は香織をここまで求めたことがあっただろうか？ 二人の息が荒くなり、体は火照っている。

我慢出来なくなった俺は香織のＴシャツをたくしあげようと、右手を裾に置くが、香織の手がそれを許さない。香織はそっと唇を離し、何人をも虜にする笑顔でこう言った。

「白昼堂々と私を求めてくれるのはもちろん嬉しいわ。でも、今は戦闘中よ？ 今は戦闘に集中して。戦闘が終わったら、真っ先に押し倒してあげちゃうんだからね」

俺はコクリと頷き、エクスカリバーを抜き放つ。そして、横薙ぎに多くの心無き悪魔を切り裂いて、悪魔の群れに突進していった。

香織も何故か強化された竜巻【トルネード】で次々と悪魔を吹き飛ばす。後々、香織に聞いてみたが、『愛の力』らしい……。

「エクスカリバー、他の武器に変化できるか？」

「なあに言っただ相棒、弓になったじゃねーか」

「よし、なら“マシーンプラスター”にチェンジだ」

エクスカリバーは「あいよ」とだけ言い、淡く光った後に少し大きめの近未来的な銃の形に変化した。

「形は完璧だな。あとはトリガーを引いて小さな光の弾が出たら最高！」

そして、トリガーを引く。次いで、ドドドド……、といった発砲音と共に小さな光の弾が連発され、心無き悪魔を黒い粒子にしてい

「最高！ 忠実に再現されてやがる！ チェンジ、ランチャーNO.8！」

淡く光り、銃口が九つある重火器に変化する。

一度トリガーを引けば、一度に九発の誘導式ミサイルが発射される、とある銀河の最強武器。とてつもなく重いのは、身体強化でカバーだ。

「うらうらうらあ！ 吹っ飛べ！」

四十セット全てを一気に撃ちまくる。

ミサイル一つ一つが違う標的を狙い、着弾し、爆発する。

それはもう、大音量だった。

「今ので大体、十分の三くらいは吹き飛んだだろう。じゃ、二天一流、宮本武蔵の凄さを見せてやろうかな……っ」と

「ん？ 相棒のよく使っていた宮本流とはどちらがうんだ？」

いきなり喋るなよ……。まだ慣れてないんだから……。

「宮本流は武蔵の弟子が新たに開いた、分家の一つみたいなもの。対する二天一流は武蔵が作った宗家みたいなもんだ。ってことでエクスカリバー、右手に大太刀、左手に小太刀を装備だ」

エクスカリバーは「こりやまた細かい注文なこと」とぼやきながらも、注文通りに、右手に大太刀左手に小太刀を装備させる。

「二天一流地の巻“突貫”」

瞬間、俺の姿は数十メートル前に移動し、その軌道半径五メートル内にいた悪魔はぶっ飛び、黒い粒子に変わっていく。

「ヒュー、やるねえ」

「キングダム・ーツのアクセルかったの。でも、まだまだこれからよ、二天一流風の巻、“怒涛”」

その姿は、まさに疾風怒涛、俺は一瞬の間に悪魔の群をほとんど薙払い、エクスカリバーも凄い光を発している。

「今だ！ 相棒！ 俺を歪みに向かって掲げろ！」

「ったく、アクセルかデルフリンガー、どっちかにしてくれよ、絡みづらい」

そう言いながら、右手のエクスカリバーを歪みに向かって掲げる。

光が切っ先に集まり、次いで一筋の光線になって歪みに放たれる。歪みはでかい塊を吐き出したのを最後に、一瞬で閉じてしまった。

「さあて、残り物の掃除といこうかね！」

「おうよ！ 相棒！」

「私を忘れてもらっちゃ、困るわ」

ちようど、でかい塊は小さい悪魔を全部喰らっちゃったからな、心置きなく1on2で戦える。

卑怯だ？ 化け物相手に卑怯もクソもあるか！

ギイヤアアアアアツ！！！！

化け物が吠え、こちらに向かって突進して来る。四足歩行のドラゴンみたいな容姿だが、何かが違う。あれだ、闇だ。実態のない闇の集合体だ。だから、普通の攻撃魔法じゃ効くはずない。

香織の目を見る。ちゃんと分かってるな、よし！

『融合魔法、^{ユニソレイド}聖なる風【ホーリーウィンド】！』

光の鱗粉が風に運ばれ、闇のドラゴンを包み込む。

この魔法は、対象が人間、獣人みたいな生物だと無害どころか、体力が回復される、回復魔法になるが、もしモンスターや悪魔などの魔族だったらものすごいダメージを与える攻撃魔法になる、光/風属性の特殊魔法だ。

だが、ああいうドラゴンがそんな簡単にやられるはずも無く……。ゴオオオガアアアア！ と咆哮し、怒らせてしまい、尻尾振り攻撃でかなり手痛いダメージを受けたあげく、校舎の一つが全壊して瓦礫が振ってくる。

「いやあああつ！」

まずいな……。瓦礫をどう防ぐか、やはり光の聖域【ホーリーサンクチュアリ】が一番か！

すかさず、スペルを唱え、ホーリーサンクチュアリを発動させる。瓦礫と聖域がぶつかる度に凄い音を発する。

「ねえ、大丈夫なの？ このコピー。凄い音がするわ」

「心配ない。信じる、絶対に大丈夫だ。」

しばらくして、断続的に続いていた轟音が収まり、俺と香織は一安心と一息ついた。

「ふう、なんとかなったわね」

だが、安心など戦闘中にあるはずは無く、すぐに轟音、しかもさっきより大きい轟音が聖域内に響き渡る。

「まずいわ、聖域にひびが入ってるって！ 何か解決策は無いの！？」

「魂の架け橋【スピリットリンク】しかないだろう」

“繋がり”が“架け橋”になっているが、名前を変えただけで、特に変化は無い。

「誰に言ってるの？ とは敢えて聞かないわ……。それにしても、ま、また、キスするのよね？ 私、またさつきみたいに口の中を掻き回されたら、今度こそ……」

「今度こそ？」

「えーっと、その、うーん、あう……。……えい！」

香織は意を決したか、思い切り唇を俺のそれに押し付ける。
あの時の感覚がフラッシュバックし、もう一度口の中をかき回したくなる。

上唇と下唇を割って入るように舌を動かす。香織は驚愕の声を上げるが、直ぐに身を委ねる気になったみたいだ、とろんとした目になっている。

いつもみんなからドンカン、ドンカンと言われる俺ですら分かる。凄く求めている目だ。

そんな目で見つめられたら、何もしないわけにはいかない、俺は舌で思い切り口の中を掻き回した。

くちゅくちゅ、と音が鳴る度にいやらしい声が聞こえて来る。

早く！ 私、もうダメになる！

ん？ 今香織の悲痛な叫びが聞こえたような？

「んっ！ んんっ！ んんんんん！」

凄い断末魔としか言いようのない叫びと共に、香織の体から力が抜け、辺りに酸っぱい匂いが漂う。

「……まさか、ね……」

俺は下をゆっくりと見た。案の定、下着から液体が漏れ出し、香織の足下に水溜まりを作っている。

「キスだけでこんな事になるのか？」

そんなわけなかった。

左手が妙に濡れている。

匂いを嗅いでみると……、クラクラした。女のフェロモンの集合体だこれ。

さらに、右手は下着の下からしっかりと胸を揉みしだいていたのか、服装に乱れがあり、その乱れの中で右手が思いつきり胸を鷲掴みにしている。

ドラゴンが眼前に迫っているのに、凄いいピンク展開の予感。

「たくまあ、わたしのしきゅうがたくまをまってるの、はやくいれて、おくまでいれて、いっぱいだして、ぜんぶだして、おねがいたくまあ」

………。戦闘中にすいません、ピンク入りまゝす。時よ止まれ、タ〜イムストップ。

—— 数十分後 ——

「満足したか？ 正気を取り戻せたか？ 戦えるよな？」

「ええ、もう、完璧よ。瞬殺出来るくらいにね。あんたも本気出せばこいつを倒すくらい、赤子の腕を捻るくらいのもんでしょ？」

「ああ、時を動かすぞ、戦闘準備しとけ」

時よ動き出せ、タ〜イムスタート。

轟音と共に、ドラゴンが眼前を通り過ぎる。ドラゴンの横に移動したのだ。

「気持ちよかったわよ、たくま」

「うつせえ、その呼び方で呼ぶな！ 恥ずかしい！ 蜥蜴の牙【リザードファング】」

凄い勢いで燃え盛る、小型ミサイル型の炎が闇のドラゴンに向かって放たれる。普通なら、すり抜けて、変な場所に着弾するが……。

ギィアアアオオオオ！

ドラゴンに当たり、爆発。左足が吹き飛び、黒い粒子と化した。

「光の鱗粉の効果ね、物理的な攻撃が効かない闇の集合体をしばらくの間だけ、実体化させるのよ」

「じゃあ、斬撃も効くんだな？」

「もちろん」

「じゃあいくぜ、エクスカリバー、右手に大太刀左手に小太刀を装備！」

エクスカリバーが淡く光り、右手に長い青竜刀が、左手にそれより少し短い日本刀が持たれていた。

「見てな香織、これが宮本武蔵の本当の剣術だ！ 二天一流空の巻、“絶空”」

瞬間、目にも留まらぬ速さで駆け、闇のドラゴンを真っ二つにする。

ギィアアアア……！ と断末魔みたいな雄叫びを上げ、幾多の黒い粒子となり、鍵みたいな形になった後、俺の右手に収まった。

「黒光りする鍵だな、どこの鍵だと思う？ 香織」

香織が答えようとしたところに、エクスカリバーが、

「あの扉の鍵だ」

と答えたために、香織は答える代わりに軽く俺を殴った。
ひでぶっ！？　と言うのも忘れない。

「んじゃ、歪みも閉じた事だし、一樹ん所に帰るか」

「……ふん」

拗ねやがって、面倒だな……、置いていくか。

「来ないんなら置いていくぞ」

「ちよつと、待ってよ！　置いていくなんてひどいじゃない！　こら、待てー！」

香織の声をバツクに、一人考え事をしていた。

……あんなに大勢で襲って来たのに、あんなに巨大な怪物が校舎を一つ破壊したのに、目撃者、負傷者共にゼロ。それは何故なのか？

ああ、そうか、夏休みだったんだ。
簡単過ぎる謎の答えに落胆しながら、俺と香織は一樹達が待つ魔法の世界に戻って行った。

エピソード 新たな世界の黒い鍵（前書き）

歯止めが利かなくなってきたこの最近。

今回もガチでヤバイ！

遂には殺される！

エピソード 新たな世界の黒い鍵

「戻ったぜ、一樹」

残った力を振り絞り、今出来る最大の笑顔を親友達に見せる。

「遅かったじゃない、ダ〜リン、待ちくたびれちゃったじゃない！」

媚びを売るような声と共に、駆け寄ってくる真理亜。

「待て、待ってくれ真理亜。抱きつくのは——」

「もうまたなーいっ！」

直後、真理亜による渾身の一撃で二、三メートル吹き飛び、倒される。

当然のようにのしかかっている真理亜は顔に頬擦りをし、胸がきつかったからなのかボタンを外してさらけ出された胸を大胆に押し付けた。

当然、俺は息が出来なくなり、周りの女達は息を呑む。

マジで室素しそうになった時、俺は生存本能を呼び覚まし、無理矢理胸を遠ざけた。

「なあ、頼むから激しいことは後にしないか？ 満身創痕の状態から、なんとか回復【リカバリー】で癒やしたのはいいんだが、魔力使い果たして精根尽き果て——」

「じゃあ、抗う気力はゼロってことね？」

真理亜が急にニヤケだした。凄く怖い、マジで怖い。なんだか一方

的にやられそうな予感……。

すると、真理亜は突然鼻で体中をまさぐってきた。

真理亜はひとしきりまさぐると、ものすごくニヤケながら、吐息がかかるくらいに顔を近づけた。

注意深く鼻息を聞くと、ほんの少し鼻息が荒い。ほんの少しだが興奮しているんだ。

「ダーリンから、二人の汗と香織の蜜、それからダーリンの真っ白な愛とほんの少し、初エッチの血の匂いがするわ。ダーリン、香織の処女を奪っちゃったのね……」

俺はとても恥ずかしくなり、顔を背け、少し頬を染めながら答えた。

「恥ずかしながら……」

「そうよ！　これで真理亜に一つ勝ったわ！」

勝ち誇った顔をする香織。だが、真理亜も負けず劣らず、勝ち誇った顔をしている。いや、真理亜の方がドヤ顔に近い気が……。

「へえ、おめでとう。晴れて大人の仲間入りね。でも、私は五年前にダーリンの童貞を奪い、理性という理性を隅々まで喰らい尽くして、私を何度も何度も陵辱させた挙げ句、私とダーリンの子供を五年の間に三人も身籠もらせ、みんな母子共々無事に出産させたのよ？　あなたよりも、二回りも三回りも凄くてよ？」

女達の顔がひきつる。有り得ない……。と真理亜以外の全員が思っている。

「ねえ、ダーリン、さっきので力を全部使い果たしたんじゃない？」
「ああ、そうだよ。頼むから室素死だけは止めてくれよな、胸に押

し潰されて窒素死なんて、洒落にもならねえ」

「世界中の健全な男の子はみーんなそういう風に死にたいと思うものなんだけどねえ……」

ははは、そう思わない俺は健全じゃないってか、悪かったな、まだ死にたくねえんだ。ま、胸に押し潰されて窒素死も悪くは無い……か？

「分かってる、死んだら——」

真理亜はためらうことなくジーンズに手を突っ込み、直に“アレ”を握り締める。

数秒後、頭が真っ白になり、またさらに数秒後、下半身が痺れるような感覚に襲われる。

「こんな気持ち良いことが出来なくなるわよね」

真理亜はゆっくりとジーンズから自分の手を抜き、自分の手に付いた何かを艶やかに舐めとる。

その笑みはどこか蠱惑的でなまめかしく、今この場面を現すには、妖艶の二文字が最もふさわしい……。

……どこまでエロチックなんだ真理亜。一樹も、いつの間にかいた海斗も、釘付けになっている。俺もなんか脈拍数みたいなのが急激に上がって、体中が熱い。体中でマグマが煮えたぎっているみたいだ……。

「愛する人の精液は蜜の味ね、ここまでおいしい“食料”は食べたことないわ。もっと食べさせて頂戴な……」

真理亜は再び蠱惑的な笑みを浮かべ、四つん這いに覆い被さった後、激しいキスをで口内を貪り始めた。

ひとしきり食った後、真理亜は唇を離す。二人の間に透明な糸が引き、脆くも切れる。それだけで体はヒートアップしてしまう。そして、真理亜は獣みたいな笑みを浮かべながらこう言った。

「ねえ、処女のお味はどうだった？ おいしかったでしょう？ でもね、私のような熟練者も良い味出すのよ？ うふふ、二人とも完全に発情している今、香織の“初めて”より気持ちいいことが出来るわ……ほら、私の中の狼がお腹を空かせて待ってるの。今にも暴れ出しそうだから、早く行って私の中の狼を、まんぞくさせて頂戴な。あの時のように……」

その一言で、俺の中の何かが目を覚まし――

――1時間が過ぎた――

「真理亜、あんたの中の獣は気が済んだわけ？」

「ええ……、こんなに沢山……愛をもら……って、狼はとてもまん……ぞく……して……る」

「そうか、そりゃ良かった。じゃ、そろそろ扉の鍵を開けるぜ」

「拓真、あんたはいっぱい搾られたはずなのに、なんで立てるのよ？」

「さあ、何でだろ？」

香織の質問をあっさりとかわし、扉の前に立つ。扉はまだ淡い光を発していない。おそらくまだ繋がっていないんだろう。

「相棒、あの時手に入れた黒い鍵を見てみな」

エクスカリバーに言われた通り、あの時の鍵を見ると、鍵が黒

い光を放っていた。

「さあ相棒、格好良くD o o r sの鍵を開けな」

「格好良くって……はあ」

「おーい！ 相棒が格好良く鍵を開けるんだとよ！」

「お、おい、バカっ！」

チクショウ、みんながぞろぞろと集まって来たじゃないか！ 後に引けなくなっちまったじゃねえか！

「どきどき、わくわく」

「おにいちゃんが格好良く……」

「ま、まあ、どうしても言うなら見てあげなくもないわよ」

「……………楽しみ」

「ダーリンが格好良く鍵を開けるんだもの、きっと凄いことになるんだわ！」

上から、桜、稜、香織、愛子、真理亜である。

みんなマジで期待してる……。

つてか真理亜が復活している。すっかり果ててしまったはずなのに。

「ああもう！ 格好良くやりますよー！」

『キヤーーーーッ！』

黄色い声援、ってやつか……。ジャ・ーズじゃあるまいし……。

「開け！ 異世界に繋ぐ、魔法の扉！」

漆黒に輝く鍵を扉に思いっきり投げつける。

鍵はまっすぐ鍵穴に吸い込まれ、ガチャリと音を立て、消えていった。

「あ、開いた……のか？」

直後、眩い光が扉を包み込み、この場にいる全ての人が目を覆う。

「なっ！ 眩しい！」

「きゃあっ！ 何なのよ一体！」

『きゃあああ！』

「何も見えない！」

「……？」

「何だあれは！？ 黒い翼が四つ生えてるぞ？」

愛子と海斗が扉の異変に気付く。それと同時に眩い光は消え、誰もが異変を見取る事が出来た。

「何だ？ 扉から翼が……」

そこで俺が見たのは、絶望の具現と言っても変わりないくらいに真っ黒な翼だった。

「不気味な翼……拓真、本当に行くの？」

「扉が現れるって事はそこに異次元の歪みがあるんだろ？ 行くしかねえだろ」

「うう……。分かってるわよ！ 言ってみただけよ！」

辺りを見回し、大きく頷く。取っ手に手をかけ、思い切って開ける。

「……行くぜ」

俺は一步、また一步と奥へ進んでいく。香織達も後を追って次々と入っていく。

「真っ白な部屋……」

確かに……。ん？ これ、最初に扉をくぐり抜けた時と……気のせいか？

そう考えている間に、一樹が敏感に何かを感じたらしい。真剣そんな顔をして、唸っている。

「うーん……」

「どうした、一樹？ そんな真剣そうな顔をして……」

「なーんか嫌な予感……」

一樹がそう言った瞬間、部屋中が一際輝き、光が消えると、それまで部屋だった所が大空に変わっていた。

……まさか、ね……。

そのまさかだった。次の瞬間、重力が戻り、凄い勢いで落ちていった。

「またかああっ！」

高度2000メートルからのフリーフォール、再び。
今度は、助かるかどうか分からない。

キャラクター紹介その1

『第一回キャラクター紹介』

今回は、主人公大原拓真とその妹大原稜、メインヒロインの大山香織です。それでは早速スタート。

大原拓真 男 15歳

身長 168cm

誕生日 6月6日

火の魔法を得意とする異世界を旅することになってしまった不幸な本作の主人公。

元は普通のどこにでもいるような男子高校生だった。

が、突然、超高位魔法の蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放ち更に高位魔法、獄炎の剣【インフェルノソード】を続けて繰り出し、何らかの経緯で魔法が使えるようになってしまった。

魔力、精神力には長けているが、まだまだ実力は未知数。

得意技は眼前に存在するもの全てを炎に包む、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】。

喋る聖剣エクスカリバーを携え、今日も異世界を旅する。

香織などにキスされると簡単に気絶したり、真理亜の誘惑に度々負けるなど、少々女に弱い所がある。

大山香織 女 15歳

身長 163cm

誕生日 7月19日

スリーサイズ

B / 75 W / 55 H / 70

風の魔法を操る、とある高飛車貴族より胸が小さい残念な本作のメインヒロイン。

拓真に思いを寄せる。自分の感情に素直になろうとするが、プライドやら何やらが邪魔して失敗に終わる、いわゆるツンデレキャラだが、三女紅音曰わく、ラノベの読み過ぎで真似し出したら定着してしまっただけらしい。

また、本来はともえっちらしく、女の子をこのんで襲う、いわゆる百合属性だったらしい。

拓真と出会ってから、寝静まるのを待って、襲おうとしているとか。

得意技は激しく吹き荒れる風で敵を吹き飛ばす疾風の一撃【ウィンドブレイク】。とある寡黙少女の技をパクったらしいが、香織は容疑を否認している。

風で薙刀を作り出し、近接戦闘もこなす。

大原 稜 女 12歳

身長 155cm

誕生日 5月20日

スリーサイズ

B / 78 W / 65 H 75

光の魔法を駆使する、ないすばでえな拓真の義妹。

おにいちゃん（拓真）が本当に大好きでいっつもそばにいる。人目を気にせずキスすることも。

中学生とは思えないプロポーションは、おにいちゃんを喜ばせたいという信念と努力の賜物。

おにいちゃんを喜ばせるためなら手段を選ばない。

香織には昼夜構わず自然に甘えられて羨ましいと思われている。

得意技は鋭い光で敵を両断する、輝光の飛刃【シャインエッジ】。

という訳で、キャラクター紹介、第一回、拓真、香織、稜編を終了します。

次回は、拓真の親友特集です。

キャラクター紹介その2

『キャラクター紹介その2』

さあ、お次は拓真の個性豊かな親友達です。

大山一樹 男 15歳

身長 155cm

誕生日 5月2日

五行ノ術式の内、金の術式を極めた、拓真の中学以来の親友。大山香織の父親、大吾朗の血を分けた子供。つまりは香織の義兄。しかし、不倫相手との子供なので大吾朗は快く思っていない。実はかなりオタクらしい。

香織からはおにちゃんなどとは呼んでもらえず、良くてバカ兄貴、最悪の場合クサレオタクと呼ばれ、兄とは思えない仕打ちを受ける。得意技は稲妻を呼び起こして敵を貫く、召雷。

藤宮真理亜 女 15歳

身長 175cm

誕生日 11月20日

スリーサイズ

B / 95 W / 75 H / 85

五行ノ術式、火ノ術式を極めた、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その一。

拓真とは中学以来の友達。

拓真をあの手この手で誘惑し、何度も何度も襲せた過去を持つ。

今でも、あの手この手で、時に描写出来ないくらいに乱暴な色気で拓真を誘惑する。

香織とは、拓真を取り合うライバル的存在。

その影で拓真を誘惑し、耐えきれなくなった所で大胆に喰らっているのは、まだ誰にも知られていない……。

得意技は真っ直ぐに伸びる炎で敵を貫く、鎗炎。

榊原海斗 男 15歳

身長 170cm

誕生日 2月3日

五行ノ術式、木ノ術式を極め、拓真のライバルと思い込んでいる、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その二。
上に四人、下に二人の姉妹を持っている。

特に、姉からの仕打ちは海斗も恐怖している。

それが原因でDMに。

自分がシスコンだということを、必死で隠している。

因みに、姉妹からはカイ、と呼ばれているらしい。

得意技は巨大な木の塊を生み出し、敵にぶつける、木塊。

新垣愛子 女 15歳

身長 145cm

誕生日 3月3日

スリーサイズ

B / 65 W / 45 H / 55

五行ノ術式、水ノ術式を極めた、拓真の勉強友達で大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その三。

かなりの無口。過去に何度か強姦事件に巻き込まれるが、未だ解決されてない

それが原因か、男が嫌い。

だが、拓真は例外。

むしろ信頼しきっている

ごく稀に、感情や人知れず我慢していた思いが爆発することがある。

得意技は鋭く研ぎすまされた氷の槍で敵を串刺しにする、氷槍。

坂田 桜 女 15歳

身長 165cm

誕生日 5月6日

スリーサイズ

B / 58 W / 51 H 65

五行ノ術式、土ノ術式を極めた、拓真の小学校以来の幼なじみとも言える存在であり、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その

四。

香織達は拓真争奪戦に一切関係無いと思っているが、実際はとても大胆で、二人きりになると思い切り甘えてきたり、場合によってはキスもしている。

得意技は何も無い地面から鋭い槍のような物を突き出す、地突針。

これでキャラクター紹介その2を終わります、次回は香織のお姉さん達です。

キャラクター紹介その3

『キャラクター紹介三回目』

最後に大山香織の姉達を紹介します。

大山 紅音 女 17歳

身長 170cm

誕生日 8月10日

スリーサイズ

B / 85 W / 65 H / 78

水の魔法を使役する、とあるゴム人間並みに陽気な大山四姉妹の三女。

と、言っても元々はとある孤児院に暮らしていた血縁関係に無い子供である。

関西弁で喋る、四姉妹のムードメーカー。

拓真に裸体を見せるのを恥ずかしいと思わず、バスタオルを巻いただけの霰もない姿を見せたり、拓真のベッドに裸で忍び込む事もある。

また、記憶を消すことが出来て、拓真の記憶が抜けているのはだいたい紅音のせい。

得意技は、空気中の水分を極限まで集めて圧縮し敵にぶつけてその水圧で粉々にする、激流の大砲【トーレントキャノン】
水を伸縮自在の鞭にして戦う事もある。

大山 詩音 女 19歳

身長 173cm

誕生日 6月20日

スリーサイズ

B / 70 W / 59 H / 63

土属性の魔法をちよこつと使える、とある人造人間並みに戦闘狂な大山四姉妹の次女。

彼女も紅音と同じように血縁関係に無い子供。

血の気が多く、イラついては拓真をイジメたりボッコボコにしたりする。過去に暴力団を五つ、団員千人相当を棍棒一つで無傷でまとめて潰した武勇伝を持つ。

得意技は標的に当たると弾ける岩の爆弾を投げつける、岩石の爆弾

【ロックボム】

魔法を使うよりも岩石で棍棒を作り出し、叩きのめす方が強い。

大山 楓 女 22歳

身長 180cm

スリーサイズ

B / 95 W / 72 H / 83

闇の魔法を扱う、大山四姉妹の長女。彼女だけは父親、大悟郎の血を引いている。母親を物心付く前に亡くし、母の顔を知らない。そのためか、とてつもなくお節焼きで、母親のように細かく言っ

てくる。

その所為か、楓の胸に飛び込めば母性愛に包まれて安らぎを得ると言われている。

拓真に関しては人一倍お節介焼きで、拓真が落ち込んでいると性的交渉を持ち掛ける事も。

得意技は触れた標的を一時的に幻覚を見せ混乱させる悪夢の息吹【ナイトメアプレス】

闇魔法で二丁拳銃を作り出して戦う。

これで現時点で全てのキャラ紹介が終わりました。

次回はいよいよ死神の世界編、同時に三作品同時クロス。
凄まじくえっちくなる事が予想される……。

序章 死神と拓真とピンク

「うわあああああ！ またかあああつ！」

魔法の世界に続く扉を潜った時もそうだったっけな……。

「香織！ 一樹達を頼む！」

あの時は香織が風魔法で助けてくれたが、その香織も今は空にいる。間違い無く死ぬ。

「分かったわ！ ……死なないで」

雲を抜け、城が見えてきた。うん、間違いなくここは別世界だ。

……ははは、ここまでひどいと、どうしてか笑いがこみ上げてくる。どこもおかしくないのにな。

さらに落ち、ひとつの民家が正面に見えるようになる。どうやらここに落ちるみたいだ。

木造だけかなり頑丈そうな家だ。木造ならば下手に炎を使えない、か……。なら！

「真空の剣【エアースレイド】！」

左手に真空の剣を生み出し、右手でエクスカリバーを抜き放つ。そのエクスカリバーにも、真空の刃を纏わせる。

「宮本流剣技、攻式一ノ型『疾風怒涛』」

屋根を塵さえ残らず切り刻み、軽やかに着地する……はずだったが、

切り刻んだ時にバランスを崩して、背中から派手に転んだ。

……ステルス発動しておいて良かった。

いやあ、本当に広いなこの部屋、寝室？　寝室だよな？　まあいい

や、とにかく広いな、ホテルみたいだ。

中三の修学旅行で泊まったディ・ニーホテルより広い……気がする。そう思った時、甘ったるい断末魔が耳を貫いた。

「……まさか、ね……」

そのまさかだった。二人の男女が裸で抱き合っている。俺は運悪くラブホテルに墜落してしまったのか？

……いや、その割には扇情的な物が少なすぎる。

ん？　何故知ってるか？

後々話す、真理亜とのデートで分かるはずだ。

決してピンク予告ではない……と思うよ。

さてと、特徴は女がネコミミ？　をつけている。尻尾はない。人とのハーフなのか、満月の夜に凶暴化するから切られたのか、俺には分からない。

男は……、あれ？　どっかで見たことがあるぞ？　確か……いつの間にか積まれていったアダルトビデオ（失礼だ）の如月優太か？

「誰だ！」

あー、いかん。ステルス解けた。ここは潔く名乗るか。

「知らぬなら言って聞かせましょう、俺は異世界を扉のままに旅する——」

「危ない！　たく——」

ちゅどーん！ 香織と言う名の空爆が落つこちで、俺は甚大なダメージを受けた。

しかも、マウントポジションみたいに着地したために、身動きが取れない。

さらに、香織は運悪くスカートを穿いていたため、下着が丸見え……。

「何？ 何かおかしい所でもある？」

悟られてはならない。なるべく冷静を装わなければならない。悟られたら、命は……ない。

「い、いや。それよりも香織、一樹達を任せたと言ったはずだが？」
「ちゃんと安全な所に飛ばしたわよ！ でも、それで精神力を使い果たして私だけ真っ逆さまよ！」
「そうかよ——」

見まい見まいと踏ん張ってきたが、こんなシチュエーションはそうそう無い。

ならば思い切り満喫してやろうと、俺は目線だけを下に向けた。

……なるほど。見れば見るほどに水色のしましまだ。

それに、何でだろう、下着の一部分が濡れてしみになっている。

「——早く下りやがれ、このバカチン！」

十分に満喫した俺は、こう言い放つが、香織はただニヤニヤするばかり。

……この上無い恐怖だ。

「とりあえずさ、償って貰おうかしら、下着をガン見たこと」

まさか、悟られていたのか！？ そんなバカな！

「私の解析【アナライズ】をナメてもらったら困るわ。私があんたに乗っかって、あんたが下着を一度でも見たときから、ずーっと分かってたのよ？ まったく……、あんたはご主人様までエロい目で見えるくらいに盛りのついたバカ犬なのね」

「うっさい、いいからどいてくれよ、さっきから変な液体が流れていて、Ｔシャツがぐちよぐちよに濡れてんだよ」

「だから償って貰うのよ、あんたに欲情し過ぎて私の体がどうにかなったから、いっそのこと快楽を貪っておかしくなった体を正常に戻そうってハナシ。『毒を以て毒を制す』って言うでしょ？」

待てよ、つまり、俺に………というのか？

「気持ち良くしなきゃ、お仕置きだからね？」

香織が凄い笑顔で顔を近付かせてきた。

「もしかして、怒ってる？」

「うっん、拓真がどんな手段で食べてくれるか楽しみなだけよ」

はあ、如月優太くん、隣のベッド貸してー

——しばらくお待ちください——

「で、しばらくここを拠点にしたいと？」

ここは如月優太君の家、一階のリビング。大まかな自己紹介を終え、事情を説明した後に、しばらくの間だけここを生活の拠点としていきたい、と交渉しているところだ。

「俺は優太君を知っている。優太君も俺を知っている。そうだろ？」

「あ、ああ。一応はな」

「家事は手伝うし、子育ても微力ながら手伝う。頼む！ この世界のために！」

俺がそう言っていると、優太は手を突きだし、顔を歪めながら傾げる。

「待て、待てくれ。この世界のため？ 拓真達が他の世界の人だということとは分かったが、一体どういう事だ？」

「それはだな――」

エクスカリバーが喋ると、この場にいる如月一家全員が「うわっ！」と驚きの声を漏らし、ほとんどが目を丸くした。

「剣が、喋った？」

「凄い！ どこでみつけたの？」

「……不思議な剣」

「魔法に通じてる私でもこの魔法は知らないねえ」

「何かと使えそうな剣です」

「面白そうな剣だね」

「少し貸してくれないだろうか？」

「どんな魔法でできているの！？」

『もつとしゃべって〜！』

上から、優太君、ロロさん、ラルカさん、ジェシカさん、フロルさん、ミヤさん、エミルさん、リュアさん、子供達。

……捌き切れねえ！ 子供達とか、何かわーわーぎゃーぎゃ騒いでたけど、省略するくらいに多い！

「——話を戻すぞ。今、色んな世界に“異次元の歪み”つつうモンスター無限製造機が現れようとしてる。その異次元の歪みを探し出し、プチ壊すのがコイツらの使命。」

「ああ、知っている。俺も元は違う世界にいた。」

「ふえ？ おとうさん、ばらる、わーるどってなあに？ ……ふえ……かんじやったよう」

突然の五歳児、龍樺の登場に、俺の女性陣は発狂、瞬時にぎゅうぎゅうのハーレム状態になった。

……端から見るのも辛いな。

「かわゆい！ 拓真も良いけど、この子も良い！ 名前はっ！？」
「ふえええええ！？ 龍樺ですっ、ふええええええ！？」

錯乱する龍樺、さらにぎゅうとする香織たち。とりあえず、ぎゅうとするのを止めさせる。

「パラレルワールドって言うのはね、仮に優太君とロロさんが出会って、龍樺君が生まれた世界があるとする。それとは別に、優太君がロロさんと出会わずに、君が生まれなかった世界もある。それを全部合わせてパラレルワールドって言うんだ」

「うん、分かった！ ありがとう、おにい、ちゃん……ふえ……またかんじやったよう」

……わざとじゃねえのか？

そう考えた時、優太君が、口を開いた。

「はあ、また部屋を増やさなきゃな……。いいよ、好きなだけ居候してくれよ」

「ありがとう。こんなことに巻き込んで、本当に済まないと思っている」

まさにその時だった。何者かが壁をぶち破り、侵入してきた。

「ちーっす、拓真の首を取りに来ました」

「こんばんは、遊びに来ましたよ」

弓を持つてお辞儀する女はどうでもいいが、男の姿は……そう、因縁がありすぎる奴に似ていた、否、そのものだった。

「氷原……健悟！」

序章 死神と拓真とピンク（後書き）

さてと、忙しくなるぞ。

序・上・中・下・終の五話編成で行きますよ！

よろしくお願いします！REDEXさん、焰野さん！

徐々にピンクくなるのは、気にしない。

健悟はキャラが違うので、参加しない。そもそもしたら殺される。

香織「二つのハーレムが交わる時、物語が動き出すう！」

拓真「おいおい……」

上章 死神と妖刀と冥王（前書き）

REDEXさんへ。

色々とすいません！

特にキャラ壊れていたらすいません！

バトルオンリーにするつもりが……。

なるだけ頑張ったので、読んでみてください。
次回は頑張ります。

上章 死神と妖刀と冥王

「ちわーっす、拓真の首を取りに来ました」

「氷原……健悟」

突然の襲撃か、まさかそっちから来てくれるとはな、『首を取る』か……。

「上等だ。そのケンカ、受けて立つ。だが、今までの俺と——」

煌々と真紅に輝く、獄炎の剣【インフェルノ・ソード】を作り出す。手にしている自分ですら熱いと感じるくらいに燃えている。

「——侮らないことだな！」

言下、一足で健悟の元に近付き、剣を弾き飛ばして回し蹴りを繰り出す。

向かいの家の壁に激突、ヒビが入る程の威力に繰り出した自分も驚く。

さらにだめ押しの一手、落ちてくる剣を獄炎の剣で弾き、健悟の顔、そのすぐ横に突き刺す。

……いやあ、死ぬ気で特訓した甲斐があつたね。街中を走り回り、素振り毎日一万回、ハードな筋トレ毎日五セットと悔しくて、とにかく死に物狂いだっただ。

今じゃ健悟と互角、否、それ以上の力を持っている。

しかし、快進撃もこれまで、不意に紅からの巨大な火炎弾が高速で迫ってくる。

「健悟はこれ以上傷付けさせない！」

だが所詮は炎、獄炎の剣で両断すれば、吸収され、威力と切れ味が増す。

「あくまでも邪魔するんなら、まずはテメエから叩き斬る！」

踵を返し、紅を両断しようとするが……。

「紅に指一本でも触れたら、殺す」

健悟が間に割って入り、剣で受け止める。当然と言えば当然か。一度距離を取り、体勢を整える。

「何なんだあいつらは、家の壁を破壊しやがって、しかも拓真は目の色変えて突進するしさ、拓真は何者か知ってるんだよね？」

「ああ、氷原健悟と……（解析【アナライズ】）……赤羽紅、二人共同メンバーで化け物を滅していくみたいだ、特に健悟は俺にとっちゃ、いきなり出てきていきなり斬りかかってくる超危険人物だよ。……はあ、二人同時はやっぱキツいか……。済まないが、優太君も闘ってくれないか？ 倒すまではしなくても、ただ戦力を分断してくればそれでいいから」

「ちっ、面倒だな、まあしょうがないか、また家を壊されたらたまらないからな」

よしっ、と言って二人と対峙する。が、直後に、

「地獄に落としてやる」

と聞こえたのは、気のせいだろうか？

「俺も不本意ながら、戦闘に参加するわ」

そう言うと、優太君は黒い翼を八本生やし、何処からか剣を呼び出した。

刃だけで150cmを軽く超えそうな大剣を軽々と持ち上げる優太君。

「悪いけど、手加減出来ないからな」

その割にはかなり冷たい笑みを浮かべている……。まさか優太君……、最初から手加減するつもり無いんじゃないか……。

「――！」

健悟の声、だがその声は建物が崩れる轟音で聞こえず、姿は既に存在しない。代わりに、優太君がすがすがしい顔で、

「赤羽紅は任せる！」

と叫び、邪魔なものを全てぶち壊して健悟の元へと突き進んだ。

……味方であって良かった。
そう思った時だった。

「よそ見たら、死ぬよ？」

不意に声を聞き、一瞬遅れて火炎弾が炸裂する。

いくら火属性に耐性があるとしても、不意打ちでは対応しきれない。

そのまま大きく吹き飛び、壁に激突する。

激突した音で子供達が泣き、口口さん達があやしている。

そんな口口さん達と、戸惑うばかりでちっとも闘ってくれない香織

達を別次元の部屋【アナザーディメンジョン・ルーム】へと転送し、辺りの安全を確保する。

「覚悟はできた？ 死ぬ覚悟は」

「生憎、女にやられる程ヤワじゃないんでね」

「女と思っで見縊ると、あつと言う間に焼け死ぬよ？」

「上等、炎VS焰、どちらが強いか決めようじゃないか！ 狂乱の炎魔神【バーサークイフリート】！」

拳同士をぶつけ合わせ炎を起こし、起こした炎は瞬時に全身を包み鎧と化す。兜には二本の巻き角が生え、鎧には所々炎が迸る。

「泣いても知らねえからな！」

次の瞬間、視界が一瞬だけ赤く染まり、理性が吹き飛び、『破壊』という本能だけが残る。

「——！？」

紅の数cm横にクレーターが出来る。その衝撃で服は吹き飛び、ズボンは所々ズタズタに引き裂かれる。

「女だろうが子供だろうが、この状態じゃ全て破壊対象だ」

そのまま紅に一撃、紅は大きく吹き飛び、住宅を五軒くらい破壊して止まった。

それと同時に矢が三本、放たれる。が、難なく弾き飛ばす。

「まだまだこれからよー！」

紅は飛び上がり、次々と矢を射る。

無数の矢が襲いかかる。

が、一瞬で装備したエクスカリバーの一振りですべてがあさつての方
向へ飛んでいく。

「なかなかやるわね、でも、ここからが本番よ！」

紅の姿が消え、無量の矢が囲むように現れる。

「まさか、襲ってきたりしないよね？ キングダムハーツじゃない
んだし……」

やはり、襲いかかる。畜生、なんでこう悪い予感当たってしまう
のか！

次々と襲いかかる矢を弾き返す俺。が、ソラやリクのように延々と
弾き返すのは出来ない訳で、徐々に喰らい始めていく。

足に、腹に、背中に、腕に、次々と刺さっていく。

しかも矢は突き刺さった後も燃え盛り、身を焦がす。

「ぐうっ……、ぐああ……」

遂には動く事もままならなくなり、次々と矢が深々と突き刺さって
いく。

「これで、とどめよ！」

突如として紅が上正面に現れ、一本の矢を放つ。

避ける足も弾く腕も使えない俺は何も出来ない動かぬ的以外の何者
でもなく、放たれた矢は狙い違わず胸に突き刺さる。

そして、断末魔を上げる間も無く矢が内側から爆ぜ、巨大な炎柱を

作り出し、二階をも吹き飛ばした。

炎柱が消えた頃には炎の矢は消え、血がとめどなく出ている。壁に血がべつとりと生々しくついている。おそらく爆ぜた時に血が飛び散ったものだろう。

立つ力を失い、床に倒れ伏せる。血溜まりが更に広がっていく。

「この技をまともに受けて、立っていた者はいないわ。私の勝ちね」

ちくしょう……。爆ぜた時に胸が心臓ごとふきとんだか……。

……俺、死ぬのかな……。

“……汝、更なる力を求むか”

頭に声が直接響いてくる。うるさいようで、どこか心地よい……。

俺は心地よさに身を委ねる形で意識を手放した。

俺が次に目を覚ましたのは黒一色の世界だった。

どこまで歩いてても暗黒の世界つてくらいに光一つ無い。

うん。ここは優太君のいる死神の世界でも、俺が元いた日常の世界でもない。

じゃあ、ここは何処だ？　と思った時、その疑問に答えるかのよう
に、紫色の炎が足元に灯る。一步、また一步と踏み出す度に炎が灯り、道しるべとなってくれる。

数分後、一際大きな炎が灯り、その前に人のシルエットが浮かぶ。
そのシルエットは徐々に色を取り戻していき、十秒後、完全な人の

色を取り戻した。

「お前は誰だ！ ここはどこなんだ！」

「我は“冥王”ハデス。この冥界を統べる者なり」

はあ！？ いや、待て待て、冥界いいいい！？

「さよう、起爆矢によって胸を抉られ、貴様は死んだ。故に貴様はここにいます」

よ……読まれた？ 今、心を読まれたのか！ まさか、優太がお世話になっている、“主神”ゼウスじゃないんだし。

「我ここにあり、故に弟がいるのだ」

「あーはいはい、分かりますよ。ハデスとゼウスは兄弟なんですよ、それは置いといて、“更なる力”ってなんだ」

ハデスの顔色が変わる。ここからは真面目な話になるようだ。

「本題に入る。汝、更なる力を求むか」

「型はいいよ、型は。それよりも、なんでそこまで親身になって力をくれるんだ？」

「我は貴様が気に入った。故に貴様の力となるのだ」

「なるほど、しかし俺は胸を抉られ死んだんじゃないのかよ？」

「無論、生き返らせてやる。地獄にもゼウスがいる天界にも送ってなるものか」

なるほど、優太君の記憶からあらゆる情報を入手したが、間違っているはないようだ。

「さて、と……ではいよいよ私の試練を受けて貰う」

試練？ 聞いてないよ！ そんなの！

「まあ、そう言っな。儀式みたいなものさ。ま、ちと痛いかな……始めるぞ」

いや、待て、まだ心の準備が！！

そう心の中で叫んでいたら、ハデスはいきなり凄まじく恐ろしい顔をして、

「集え、冥界の炎よ——」

と、呪文を唱え始めた。すると、紫色の炎が俺の周りに、現れ、囲み、身を焦がす。

「ぐっ……ぐああ……熱い、苦しい……！ 何がちょっとだ！」

「まあそう言わさんな……、彼の者に全てを破壊する冥王の力を、全てを焦土に帰す冥王の炎を与え賜え」

周りを囲む紫色の炎が俺に纏わりつき、灼けつくような痛みを与える。

熱い、これが獄炎、いつも使う炎。とてつもなく熱い。

「耐えよ、耐えきった時、貴様は更なる力を手に入れるだろう」

「んなこと言ったって……っ！ ぐああああ！ ぐうう……あああああ！ 熱い……、香織、稜、一樹、みんな……！」

意味もなくみんなを思い浮かべる。そうすれば何とか乗り切れる、そんな気がしたからだ。

あれから何分たっただろうか、炎は段々と弱くなり、それから数分後、完全に鎮火したところで、ハデスが、

「止めえ！ 良くやった大原拓真、試練を乗り越えし者よ」

と言った。試練をクリアしたようだ。

「ゼエ、ハア、やっと、か……」

あまりのダメージに精神が追いつかなくなったのか、そのまま倒れ伏す。

朦朧とする意識の中、会話が聞こえてくる。

「ペルセポネ〜！ ペルセポネはいるか！」
「いるわよー！」

あれ？ペルセポネは11月から2月の4ヶ月間だけ冥界にいるはずじゃ？

「千年経てば色々と変わるものよ」

また読まれた……。凄いな神ってのは。

「ふふふ、この子が大原拓真でしょう？」

「ああ、私の試練を難なく乗り越えた、我はそいつを気に入ったんだ、丁重にもてなせ。最後に地上へ送ることを忘れるなよ」

ペルセポネはテキトーに返事をし、こちらを覗き込む。かなりの美人に覗き込まれているためか、凄くドキドキしている、香織に覗き込まれているのと同じくらいにドキドキする。

「あら、残念。もう思い人がいるのね。でも、味見くらいなら許されるわよね?」

直後、首筋をペロリと舐めた。背筋に電流が流れ、意識が覚醒する。意識が覚醒して、目を見開き、この時に初めてペルセポネをちゃんと見たのだが……。

「うふふ、この様子じゃ、私、惚れられたみたいね……、私って罪な女、うふふふ」

スッゴい好みの人だった。
スタイルが良くもなく悪くもなく、ちょうどいい感じで、顔も整っていて、黒で統一された、胸を開けたドレスが高貴さを漂わせながら、大胆さを醸し出し、これぞまさに大人の魅力っていうような女性だった。

「うふふ、なんて罪な人、私をここまで夢中にするなんて……味見くらいで済むかしら?」

急にペルセポネが笑い出す。真理亜並みに怖い。否、それ以上に怖い。
そんなこと思っていたら、ペルセポネにいきなり首輪に吸い付けられた。

「ひゃあっ!?!」

女々しい悲鳴に更にキュンときたのか、チュツ、チュツと音を立てながらどんどん上へと吸いつく位置を変えていく……。

首筋から頬へ、上がるにつれて、頭が真っ白になる。

「うふふ、何も考えられないのね……。実は私ものの。いいわ、本能のままに唇も奪ってあげる」

ペルセポネはとろんとした目で俺をしばらく見つめ、優しく唇を重ねた。が、優しかったのは重ねた時だけで、その後はめちゃくちゃ激しかった。

前、香織にしたように口の中を掻き回される。

唇が離れた後は俺もペルセポネも呼吸が荒く、顔は紅潮し、目は濁っている。

互いの目線が下半身にのびた、まさにその時、彷徨える魂を捌ききったハデスが、声を荒げて叫ぶ。

「ペルセポネ、あの剣は……渡されていないじゃないか！ もてなすのもいいが、ちゃんと渡すものを渡して、早く帰してやらなきゃなあ！」

ペルセポネは悪びれる様子もなく、

「もつと食べたかったなあ……。この子食べ応えあるもの。じゃ、この剣をあげるわ」

と言い、剣を生み出した。柄から切っ先まで真っ黒な剣だ。

「なん……だ？ この、真っ黒な剣は」

いかん、まだ頭が真っ白だ。

「魔剣ラグナロク。あなたの背中にかかっている聖剣エクスカリバーと対を成す剣よ」

「さあ、その剣を抜け、闇に掲げよ、さすれば、貴様は地上へと戻れるだろう」

俺はハデスの言われたとおりに、ラグナロクを抜き放ち、頭上に掲げる。

すると、闇のトンネルが出来上がる。これが……地上へと続く道……。

「また来てね。今度来たら、交わってあげちゃうから」

「現世うつしよと冥界はその魔剣ラグナロクで行き来出来るだろう、わからんことが出来ればいつでも来るがいいだろう」

二人の言葉を背に、俺は優太君の世界へと戻っていった。

「早く使いこなせるようにならんなあ、大原拓真」

闇のトンネルを抜け、地上、優太君の家に生き返って最初に聞いた声は健悟の、

「死ね、拓真」

だった。いきなり酷すぎる。

腹が立ったので、正拳突きで弾き飛ばしてやった。

軽ーくしたつもりだったが、健悟は城壁まで飛んでいき、前方の建

物が衝撃で五十軒くらい吹き飛び、優太君の家が粉々になった。

「あ、あれ？ 何この力は？ ハデスの力？」

うん、これはあれだね、チートってやつだね。

「――！ 俺の家がつ！ それにロロ達もない！ 誰がやった！」

ロロさん達は別次元の部屋に移動させだし、家はさっき俺が衝撃で吹っ飛んだから……。

「ごめん、全部俺だ。今元通りにする」

指をパチンと鳴らす。

さっき吹っ飛んだ健悟も、跡形もなく壊れ果てた優太君の家も、壊滅状態の都市も全てが元通りになった。

……まさかとは思ったが、魔力もチートになったみたいだ。

「ほら、ロロさん達も」

ポンという音と共に、ロロさん達がリビングに集結する。

『おとーさぁん！ 怖かったよう！』

「おーよしよし、みんな無事か」

「もちろん、俺が別次元に非難させたからね」

「ええ、拓真さんの空間魔法で傷つかずにすんだんですよ！ それより、ユウタさん、私達……」

ロロさん達は優太君の腕を取り、足早に二階へ行った。優太君はこの後、理性を剥ぎ取られ、あっちこっちに体液をぶちまけるんだろ
うな。

「ああ、ちよつとタンマ、優太！」

「何ですかもう！　せっかくの甘い一時をぶち壊すなんて、空気読めなさすぎです！」

「黙ってくれないか、ロリ毒舌、それよりも紅さん達はどうしてここに？」

「……。えっと、ラファエロさんとゼウスさんが友達で、拓真達に来るってゼウスさんが言っただけで、せっかくなので私達も遊びに行こうってラファエロさんが」

さすがは主神、何でもお見通ししてわけか

「ついでに拓真の首を取ろうと——」

『平伏せ』

ドゴツ、と音を立て、崩れ落ちる健悟。床が衝撃でへこむ……。後で直そう……。

「なあ、コイツらも泊めてやってくれないか？　絶対に家具が壊れないようにするから」

「出来るのか？　そんなことが」

「出来るから言ってるのさ、頼むよ」

「……………。分かった、本当に頼むよ？」

ふう、とりあえずは万事解決かな？

「ねえ、ちよつと拓真」

香織が、顔を赤らめながら話しかけてきた。

「私達を異次元の部屋に非難させてくれたのよね？」

「ああ、そうだよ、それがどうかしたか？」

「いや、あの、そのね、そんな拓真にごほうびとして一緒にお風呂入って、背中を流して上げようかな、って」

その気持ちは嬉しいが、目が激しく泳いでいるぞ？

「あはははは！　そうかしら？　さあ！　さきに入りなさいな！　私達は後から入るから！　さあ！」

俺は香織に不信感を感じながら、浴室へと向かった。

上章 死神と妖刀と冥王（後書き）

次回は遂にアレです！

アレって言ったらアレです！

REDEXさんみたいなアレはかけるかな？

中章 死神と妻と浴場（前書き）

激ピンク注意！

REDEXさん、優太君のキャラクターが崩れてたら本当にすみません。

視点を变える事に挑戦しました。

焰野さんのキャラクターが未だに掴み切れてない、今日この頃……。

すみません！

中章 死神と妻と浴場

「……広いとは優太君の記憶で分かっていたが、まさか、これまでとは思わなかったな……」

それが、初めて浴室を見たときに、自然と出た言葉だった。
この浴室、余裕でチョメチョメ出来るスペースあるよな……。
……彼の狙いなのか？

「ま、驚いたって何も始まらないよな」

とりあえず、頭洗おう。体は香織達が洗ってくれるらしいからね。
俺の好きだったシャンプーとボディソープを想像、具現化して、銭湯みたいな浴室の一角でシャワーを浴びた後、頭を洗い出す。
シャンプーに含まれる柑橘類の微かな香りが鼻腔をくすぐる。
銭湯か……。いや、ここは銭湯なんかじゃなく如月家の浴場だが、あまりの広さに銭湯と間違えてしまう。

「にしても、香織の豪邸にも、こんなでっかい浴場はあるだろうか？
後で頭の中を覗いてみるか」

特殊能力、解析【アナライズ】これは元々、香織の特殊能力なのだが、いつの間にか使いこなしている。ただ、香織と違って心の中が読めないだけ。

心の中が読めたらどんなに便利なことか、香織の思惑も簡単に見破れるのに……。

その時、突然戸が開く音が聞こえエクスカリバーを装備した後、烈風が吹き荒び金属音が鳴り響く。

間違いない、健悟だ。戦闘狂かよ、コンチクショウ！

「あんたさあ、時と場所を考えようよ」

「関係ない、俺はお前を殺したいんだよ」

俺は健悟を弾き返して、炎を繰り出す。

が、健悟はいつの間にか真後ろにいて急所を切り裂さかんとしていた。

だが、呆気なくやられる程、ヤワじゃない。エクスカリバーで受け止め、弾き返し、ラグナロクの魔斬弾で健悟を吹き飛ばす。

一瞬だけ苦痛に顔を歪めるが、すぐに冷酷な顔に戻り、目に見えぬ速さで猛進する。

「突っ込むだけじゃ勝てねえよ！」

迫る影に向かって剣を振るう。

手応えを感じる事もなく、鮮血も溢れ出ない。どういう事かと思っただ次の瞬間、後ろに気配を感じ振り向いた直後、背中をバツサリと斬られる。

「な……、いつの間に……」

「死線を切り裂いた。諦めろ、お前の命は既に尽きている」

瞬間、鮮血が飛び散り、真つ二つになる。

健悟は何事も無かったかのように浴場を後にした。

「あゝあ。これから起こるであろうエッチなイベントの身代わり君が……。ま、これで暫くの間は健悟君襲って来ないからプラマイゼロか」

俺は指をパチンと指を鳴らし、幻影を黒い粒子に変える。

風呂場に入った瞬間に幻影を作り出し、ソイツにエッチなイベントを全部受けて貰おうと思ったんだが……。コレ、かなり魔力を食うんだよなあ……

でも、健悟君ですら騙せる幻影を作り出せるなんて、ハデスの力つて凄いな。

ガチャリ……。

再び戸が開く音。冥炎の追尾弾【ヘル・ファイアミサイル】を作り、留めておく。敵意を感じたら、ぶっ放す！

「どうしたんだ、拓真？ そんなに怖い顔をして」

「なんだ、優太君だったのか。無駄に神経すり減らしたじゃねえか」

留めていた冥炎の追尾弾を消滅させ、作り笑いを見せる。

「いやあ、健悟君が来たのかなって思ってたさ……。それにしても、奥様方はどうするのさ？ まだ行為の途中なんだろう？」

「いや、まだしてないよ。ロロが『行為の前には身を清めるものだとカオリちゃん言ってた』ってさ、もう直ぐロロ達も来る」

あんの発情女！ ロロさんに変なこと吹き込みやがって！ あながち間違っではないんだろうけどさ。

「すみません、こちらのバカがロロさんに変な事を吹き込んだばかりに……」

「いや、良いんだよ、あはははは……」

二人同時に溜め息をついた時、キャツキャと女の声が聞こえてきた。

「ヤバイ、どうしよう！ 香織達が来た！ これ間違はなく濃厚ハーレムピンクになるって！」

「立ってしまったフラグをへし折ることはできない、諦めよう」

優太君は少しも動じず、落ち着き払っている。

「おいしいい！ 少しは抗おうとは思わないのか」

「思わない。本当に彼女達の事を考えたら、出来ないはずだ」

「はあ、確かにそうだな、一理ある。俺はアイツらの事が好きだ。だから抗う事を止める、無論、必要最低限の忍耐はするがな」

そう言っていると、優太君は苦笑し、

「当たり前だ。俺達は健全な男の子であって、獣じゃない」

と言った。ま、そうだな、と思い、戸に向き合う。

遂に禁断の扉が開かれるのだ、濃厚ハーレムピンクの扉が……。

『たくまあああ！』

俺は精神崩壊を覚悟した。

拓真 side out

優太 side

『ゆったあああ』

妻たちの甘える声が、いつか聴いたコーラスを奏でる。あの時は、六人だったがりュアやエミルが加わって、今や八人になっている…、今更だけど。

「体を清めた方がより感じやすくなれるとカオリから聞いた」
「だったらみんなで体を洗い合おう！」

リュアやエミルも気合い十分だ。近くにあるスポンジを取り、体を洗い始める。
始める、のだが…。

「よい、しょ……、んっ……」

「ふう、はあ……」

「う……あふ、ふあ……」

「えへへ……あふ……」

デジャヴを感じる……。柔らかなナニかが擦る度に当たるのはやっぱりワザとなのか？

「あっ、ふあっ……」

「あ……うう……」

「……ひあうう……」

「はあ……ひう……」

何だろ……、いつにも増して過激なのは、香織や拓真がいるからか？

「ねえみんな、私達まだ清められてないよね？」

「それなら、ユウタさんに抱きついて泡まみれになれば、良いと思うよ。」

「あ、なるほど、良い考えね」

「うむ、良い考えだな」

「流石ジェシカ、冴えてるう」

「大胆ですねえ、みんな雌豹みたいです」

「……………（コクリ）」

「せーのでギユウツとするんだよ！　せーのっ！」

上から口口、ジェシカ、ユナ、エミル、ミヤ、フロル、ラル、リュアだ。

そして、リュアがそう言うのと皆一斉に抱きついて来る。轟めくように動くナニかや艶めかしい声が理性崩壊を速まらせる。

俺はこれでも健全な男の子であって、このシチュエーションは正直辛い。

「ねえ、ユウタのが凄い事になってるよ！」

ジェシカが目敏く俺の息子の変化を見取る。

何しろ限界が近いんだ。

「はあ、こんなのが入ったら私……、早く入れてよう……………」

ブチッ！

遂に理性が限界を迎え、崩れ落ちた。

優太 side out

拓真 side

優太君が遂に我慢できずにやりだした。
口口さんが喘ぎ、嬌声を上げてる。

「ねえ、優太君もやり始めたんだし、私達もはじめようよ、えっち」
「そうよ、ダーリン、私達、もうイキそうなのよお……」
「おにいちゃん、私の中に早く入れてえ……」

そして、こちらは首筋を舐められ、唇も奪われ、耳元で淫語のオンパレードである。

理性と言う名のダムが決壊するのは時間の問題だ。

背中を流した瞬間、稜が抱きつき、次いで香織、真理亜まで抱きついてきて、軽いハーレム状態だ。

今のところ、桜と愛子は顔を赤らめてこちらをガン見しているだけだが、いつ発情して襲って来るか分からない、愛子なんか下半身をいじくってる。

そうゆう類は嫌いじゃなかったのか愛子……。

「うーん、ダーリンはもつと直接的なコトをしないと感じてくれないみたいね」

そんな事考えている間にも真理亜がアレを口を含む。直後、頭が真っ白になり下半身に違和感を感じる。
色んな意味でもうダメだと思った時、

「今ッ！」

一陣の氷粒を纏った旋風が吹き荒れ、香織達を吹き飛ばす。
どうやら助けてくれたみたいだ。

「あ、ありがとう、愛子出来るなら、もう少し早く助けて欲しかったな」

「ふふふ……、そうね」

……。今、愛子が少しだけ笑顔を見せた……。気がする。

「……たまに見せる笑顔は最大の武器と聞いた」

「ふーん、誰から？」

「母親から」

「母親は駆け引きが上手なんだね」

「無口なだけ。でも——」

愛子は無表情で跨り、これまた無表情で、

「とても大胆だった」

と言い、更に

「母は言った、女は罠を張り、男は罠に掛かり弄ばれる。あなたもその内の一人」

と言い、背、というかお尻を向ける。

「母はこうも言った、ON/OFFの切り替えが出来ない女は失敗すると」

「……つまり、今のあなたは狩猟モードONって訳ですか？」

愛子は返事の代わりにアレを口に含む。

さつきから晴れてきた意識が再び白く濁り、何か得体の知れないモノがこみ上げてくる。

「あい、こ……今すぐ止めろ、このままじゃ、何かまずい！」

愛子はこちらを一瞥、口元を釣り上げた後、すぐに続きを始める。

「ちょ……っ！ 待て！ うくああああ！」

抗議をしようとしたが時既に遅し。何かが勢いよく吹き出ている。愛子はその何かを喉を鳴らしながら呑み干して行く。

「んく……んく……、ぶあ、どうだった？ 口腔内に出した気持ち
は？ 気持ち良かったでしょうね、何しろ生殖行動をし終えた後に
訪れる快楽は、人間の感じ得る快楽の中で一番気持ち良いとされて
いるから」

濁った意識の中で、愛子の言葉が頭でこだまする。

「私は過去、父親に犯された。その時から私は男を憎み、呪った。
そして復讐対象として見た。あなたも一樹も海斗も屈辱を与えるつ
もりだった。しかし、あなた達三人は違った。その中でもあなたは
特別だった。この意味分かる？ 分からないなら、体に教えてあげ
る」

——禁則事項です——

愛子が雌豹になってから、どれだけの時間が経っただろうか。俺の

意識が完全に覚醒したときには、愛子、香織、真理亜と稜、更には桜まで完全に気絶し、彼女達から白い何かが溢れ出ている。その光景で俺は全てを理解し、

「絶望したッ！ 我を失ってまで生殖活動をする愚かな自分に絶望したッ！」

と言ってうずくまった。

「まあまあ、彼女達が望んだ事だし……、その内慣れるさ、まずは体を洗おうか」

「うう、罪を犯した俺を励ましてくれるか、彼女達を犯した俺を励ましてくれるか！」

優太君はマイナスオーラ全開の俺を励ましてくれる。すぐさま膝にしがみつき、涙目で見上げた。我ながらキモいと思った瞬間である。

「俺も最初の頃は自己嫌悪に襲われたさ、恥じる事はない」

その後も励まし合いながら体を洗い、しばらくして就寝した。

翌日、各所に引っ付く香織達を無理矢理引っ剥がしリビングに行く
と、仲良く談笑していた口口さん達と赤羽紅がいた。が、内容がぶ
っ飛んでいた。

「ケンゴ君の事、どう思ってるの？」

「と、友達以上恋人未満ってところかしら」

声が裏返っている、きつと恋人同士だろう。
健悟が羨ましい、純粋な子が彼女で。こちらら昨晚も犯されかけてんだぞ。

「初体験はまだなの？」

「こつ、この年で交わる方がおかしいと思うわ」

純粋で初心。はあ、健悟が妬ましいねえコンチクショウ！

「ちなみに年はいくつなのかな？」

「十六よ」

「タクマさんも十六よ？」

「あの人は呪われているのよ」

呪われているは無いだろ、コラ！ 更に胸を抉るつもりか！

「じゃあ私から質問、子供を育てるのは大変？」

紅さんの質問に、ロロさん達はぶんぶんと首を振り、

『全然！』

と、口を揃えていった。

「むしろ、日々の成長に驚かされ、泣かされるばかりだ」

「うにゅ！ 子供はいいよ！」

「早くやっちゃうと良いです！」

「……誘惑の仕方……知る？」

「え、あ、あうあうあう………」

ロロさん達からの連続口撃に紅さんはボンツと爆発し、目を回して、

顔を真っ赤に染めながら、

「うわああああん！」

と、泣きながら家を飛び出していった。

「あははは……、その話題なら香織達の方が弾むぞ？」

「うわっ！ いつの間にそこにいたですか？」

「ステルス、気配を完全に消す力。俺の場合長時間の使用は出来ません。更に、かなりの達人には意味がありません。あしからず」

「へえ、凄いなだねえ」

話が盛り上がった所で、優太君が二階から下りてきた。子供達も一緒だ。

「おはよう、みんな」

『おはよう、ユウタ！』

0・1秒の誤差さえ無くぴったりと返す妻達。毎日の日課もここまできると恐ろしいな……。

「おはよう、拓真。昨夜は寝られたかい？」

「全然、ベッドの寝心地云々以前に、女達が襲って来るから……」

「そう言う君は？」

「三時間寝れた。おかげでまだ眠い。ふああ……、お互い腰を鍛えた方が良さそうだな」

二人同時に大きなあくびをし、俺は前から行きたかった、『ギルド』と言うものに行くことを提案する。

優太君は清々しい顔で、

「そうだな、俺も子育てや営みに忙しくて最近行ってないからな」
と、了承してくれた。

二人は服を着替え、ロロさんお手製の最高に美味しい飯を食った後にギルドへと向かった。

大惨事が起こることも知らずに。

下章 死神とギルドと歪み 前編（前書き）

やりたい事全部やってみたら、二万文字を突破しました。
ので、前後編に分けます。

下章 死神とギルドと歪み 前編

これまた優太君の記憶から抜き取ったものだが、ここはグリア大陸のロームラルカ国という王国らしい。その城下町のとある街道にて

「お前、何で生きてるんだ、あの時は確実に死線を切り裂いた筈」
「あの時テメエが斬ったのは幻影だよ、もし本物を切り裂いたとしても、俺は冥王ハデスの名の下に力を授けられ、現世に蘇る！」

小さな戦火が起ころうとしていた。

「なら、何度でも切り裂くだけだ」
「ナメるな！ 今度はテメエが死ぬ番だ！」

健悟が突進し、俺もエクスカリバーを装備して立ち向かう。
互いの剣が首を刎ねようとした、まさにその時、とてつもないプレッシャーが俺と健悟を襲い、二つの剣をピタリと止める。

「おい、ここで騒ぎになったら……。分かっているよな？」

優太君の殺気を含む声、ゆっくりと優太君のいる方向を見れば、なんと四対の黒い翼を生やしているじゃないか！

こんな状態で暴れられでもしたら、あつという間に冥界送りだ。健悟は地獄へ直行するんだろうけど。

俺はエクスカリバーを光の粒子にし、健悟の剣を吹っ飛ばしてから許しを請う。

「はい、存じております。健悟共々重々承知でありますれば、もう

二度と同じ過ちは繰り返さぬ所存。ですからその翼をどうかお納め下され」

「はぁ？」

未だに現状が呑み込めないバカに今、何をすべきか小声で言ってる。

（ほら、お前も地獄へ直行しなくては、停戦協定を結ぶことだ。お前も分かるだろ？ 刃を交えたお前ならあいつの恐ろしさが）

（ふざけるな、あの時は後一步で殺せたんだ、次は殺す）

「……ま、いいや、めんどくさい。ギルドに行くぞ！」

優太君はいがみ合う俺と健悟を無視して、ギルドへと続く道を進んでいった。

「覚えていろ、いつかお前を殺す！」

「殺してみる、ハデスの名の下に現世へと蘇り、必ず復讐するからな！」

その後、なんやかんやピンクな事件も起きながら、なんとかギルドに着くのであった。

「はぁ、やっと着いた。エリクサーを創造しなきゃな。体力も魔力も精神力も全部奪っていったもん。なあ、真理亜」

「ふふふ、ごちそうさま。なかなか斬新だったわよ？ 真っ白な愛と一緒に貰う魔力は、もう格別だったわ……。もつと頂戴な」

真理亜は正面に立ち、胸をムニョンと持ち上げ、胸の谷間を強調す

るという、よくビキニ着たピッチピチのお姉さんがおねだりする時に使う、悪魔のように艶めかしいセクシーポーズを繰り出してきた。因みに今の服装は、かなり丈が小さなタンクトップ（ブラ付けてない）と下着にしか見えない丈の短すぎるズボン（後に聞いたところ下着だった）、それには申し訳程度にシースルーのヒラヒラ、スカート？……と肌を隠す気が毛頭にも感じられない服装、と言ったところか。

大概の人は折れてしまうのだが、……俺だって折れてしまいたかったんだが、折れてしまったらエリクサーを創造する気力を奪われてしまっただろうから、離せない視線を無理矢理離しエリクサーを創造して、使用する。

見る見るうちに力が湧き、すっかり生氣を取り戻した俺は優太君に近づき、

「さあ、早く受注しようぜ！」

と急かし、なんとか真理亜の誘惑から逃れた。

……据え膳食わぬは男の恥？ そんなこと知るか。

目に見えて落ち込む真理亜が可哀想に見えてきたので、

「ごめん。真理亜。今は少しでも早く戦いたいんだよ、終わったらなんでもしてあげるから」

と声を掛ける。真理亜は見る見るうちに元気になり、遂にはぐふふふふと笑い出した。

……後にコレが原因で嫌と言うほど体液を搾り取られたのは別の話。

「ギルドは初めてですか？」

「ああ、そうだけど優太君からここの記憶を抜き取ったから説明は大丈夫だよ。登録用紙に名前を書けばいいんだろ？ ここの字書けないけど」

「は、はい……そうですが」

「ほらほら、みんなも来てよ。一人ずつじゃ時間がかかりすぎる」

「登録が完了しました。代表として“漆黒の暗殺者”ユウタ・キサラギ様、今回はどのようなクエストを受注されますか？」

「じゃあ、今回は気軽に――」

「Sランクを見せてくれない？」

この場にいる優太君以外のみんな、ロロさん、ミーノ姉妹、健悟、紅さん、稜、香織、真理亜、愛子、桜が「はあ!？」と言って呆れた。

「ちよっ……それはいくらなんでもそれは無謀かと」

「そうよ、拓真！ ここは大人しくCランクを受けるべきよ！」

「そうでもないよ？ 優太君は本気を出せば、彼を上回る奴は大陸どころか世界中探し回ってもいないよ。ね、優太君。それに、既にSSランクなんだから、Sランクなんて楽勝でしょ？」

優太君は目に見えて狼狽えている。

まあ当然か、これを知ってるのは本人と優太君が隊長を勤める突撃部隊の人達だけだからな。

「まあ、驚くな。特殊能力、解説【アナライズ】で優太君の記憶から情報を入手したから。俺は優太君の記憶から、この世界の全てを見ることができる！ と言った方が分かりやすいか？」

みんなポカーンとしている。そりや当然か、スケールがデカすぎるもんな。

……と言つても、香織は「それ、元々私の能力でしょ！」と騒いでいたが。

暫しの沈黙、破ったのはミーノ姉妹の姉、フロルである。

「んゝ、なんだか分からないけど、凄い能力なんですね」

「そゆこと。じゃ、受け付けの人、S級クエストよろしく」

「はあ……、こちらになります」

でん！ と音を立て、大きく表紙に「S」と書かれたファイルがカウンターに半分ほつぽりだす感じで置かれた。

俺は早速そのファイルを開き、何があるか確認した。

何々……。おつ、受注するならこれらの中か？

1・氷狼を百体討伐せよ。

フェンリル討伐クエスト。

いや、雑魚が何匹集まるうが、雑魚は雑魚だろう。

2・手負いの古代人形を討伐せよ。

ゴレム討伐クエスト。

傷を負った敵など眼中にないわ。

3・大型の半鳥妖女を十五体討伐せよ。

ハーピー討伐クエスト。

……っ！ 人間に酷似している！ コイツを斬れと言つのか！ なるべく避けたい所だ。

4・生ける屍を二十体討伐せよ。

ゾンビやらグールなどのアンデッドモンスターを討伐するクエスト。
焼き払えば済む話だろ？

……、あんまりロクなクエスト無いなあ……。
とりあえず、3を受注することにした。

「よし、ハーピー討伐のクエストを受注しよう」

「はあ、わかりました。場所はキルア山、期限は十日間です。まあ、せいぜい頑張ってくださいね。それと、そのクエストなら数日前にトラップマスターとじゅう？ 使い、ハンマー使いと鉤爪使いが受注しましたが、まだ帰還してません」

「晃弥と美由紀か……」

「仁宮晃弥に奥島美由紀、か。一樹に海斗も見かけないなと思ったら……。まあいいや。報告を楽しみに待ってなよ。優太君、転移お願い！」

そう言うが早いか、魔法陣が現れ、みんなを取り囲む。
その数秒後、気づいたら、山のふもとにっていた。

「拓真さん、拓真さん！ この看板に『キルア山登山口』って書いてありますよ！」

桜の言う通り、森に一ヶ所ポツカリと開いた茂みの前に、

『キルア山登山口』

と書かれてある看板が無造作に置かれていた。

「……やっぱり、登るしかないのか」

「そうみたいだね。ところでロロさん、ミーノ姉妹は王宮騎士隊に入っているみたいだけど、君は騎士隊どころか、仕事にすら入っていないね。……戦えるのか？」

「失礼な！ てい！」

ロロさんが手を突き出すと、氷の飛礫が現れ、狙い変わらず看板に当たる。

すぐさま看板が凍り付き、パリーンと軽快な音を立てながら砕け散る。

相当強力な氷の飛礫みたいだ。

「どう？ 凄いでしょ？」

「おやまあ、こりや大層な魔法なことだ」

だが、俺の炎にや勝てないがな。

「ご託宣はいい、早く登るぞ」

その健悟の一言により、一同は茂みの中に入って行ったのだった。

ふう、さすがはハーピイの住まう山、と言ったところか。
進めば魔物が現れ、襲ってくる。

その度に、石飛礫や氷の飛礫、空気の塊とか烈火の飛刃、さらに健悟や優太君が剣や鎌で八つ裂きにしていく。

そんな無限ループが三時間も続き、もう山頂が見えてもいいんじゃないかと思いはじめた時だ。

「はあ、はあ、流石はS級クエストと言ったところか。斬っても斬

つても埒が明かない」

「おやおや、健悟君ともあろう者が直ぐに音を上げるとは、情けないねえ」

「おい、騒ぎを起こすなよ、いつモンスターが出る——」

「キヤアアアア——!!」

女性陣の悲鳴が辺りに轟く。慌てて振り向くが、土煙が舞うばかりだった。

「こ、怖かったです、拓真さん！」

「……今の、間違いなくハーピー」

ただ、愛子と桜は無事だった。恐らくハーピーの考えは、胸の無い女は女じゃない、ということなのだろう。

ミノー姉妹が連れ去れたのは、『萌え』がわかるハーピーが紛れているのだろう。

「お前らだけでも無事で良かった。愛子、桜」

「……ええ、あなたこそ」

「でも、香織さんや真理亜さん、稜ちゃんが……」

心配するな、と言いひしと抱きしめる。だが、後ろで憤激する人が二人……。

「絶対に殺す！」

「いつそのこと空間ごと切り裂く！」

二人はかなり禍々しいオーラを放っている……。このままだと本当に殺しかねないため、愛子の技、静寂の水を繰り出した。

見事なまでに怒りが消え去り、話し合いが出来るような状態にまで回復した。

「さてと、ロロさんやミーノ姉妹、紅さんに香織達まで連れ去られたが、心配する事はない。なぜなら――」

現在、俺達は断崖絶壁を上昇中である。

まあ、健悟君は翼なんて生えないだろうし、レベーションでデキトーに浮かせてやる。

（……心も体も一つになる感覚、コレほどに気持ち良いことがあるのかしら……？）

（無いです！ えっちとはまた違う快樂です！ 凄いです、また一つ官能的な欲望が満たされました！ しあわせ……）

愛子と桜にはこれ以上危険が及ばないように魂の架け橋【スピリットリンク】で一つになっている訳だが……、一種のエクスタシー状態になっているみたいだ……何か変な気持ち……。

それはそれとして、俺達は終始無言で断崖絶壁を飛び続けた。そのうちに長い間続いた断崖絶壁は終わり、そこで俺は――

「うう……そんなことしていい訳？」

「直に愚かな男共がくるわ、それまでは少しずつ貴女達の精気を奪っていくわ」

香織達と唇を重ねたり、抱き合ったり、中には性行為らしきことをしているハーピーがいた。

「紅ッ！」

「ロロ、ラル、フロル！」

今にも飛び出しそうな二人を裏拳で牽制する。
あ、健悟は動けないから意味ないんだった。

「急かさずとも口口さんやミーノ姉妹、紅さんは助け出す。落ち着け」

二人が落ち着いたのを確認し、さつきから発動している不死鳥の翼【フェニックスウイング】を羽ばたかせ、ゆっくりと着地する。
それをきっかけに、健悟や優太君が着地する。

「殿方が訪れましたわよ！」
「え！？」

それまで女から精気を少しずつつ吸っていたハーピー達の目が輝き、香織達をパツと離して一瞬で人間に擬態した後、向かって来る。今の今まで精気を吸られていた香織達はパタリと倒れ、息を荒くしている。

ハーピー達はすぐさま俺や健悟や優太君を囲み、王宮でよく見るお辞儀をし、真ん中のハーピーが前に出て俺の前でくると一回転した後、いきなり手を握るもんだから思わず後ずさりしてしまう。情けない。

「ようこそ！ 若草の園へ！ 私が代表のエリイです、以後お見知り置きを！」

身長はだいたい180cmくらいだろうか？ 茶髪で童顔、体つきは華奢、でも胸は大きいハーピーの代表、エリイは目を輝かせている。こちらで紹介しなきゃいけないだろう。

「あ、ああ……俺は拓真、ここじゃタクマ・オオハラか。あちらは優太君に健悟君だ」

「はい！ タクマさんにユウタさん、それにケンゴさんですね！」

ハーピイの代表、エリイはそれぞれに笑顔を振り撒き、俺や優太君——健悟は知らんが、とにかくドキドキさせた。

「さあ、何なりとお申し付けください！ 私達は大いなる風の使い手、風は自由に姿形を変え、きつと貴方達のご希望に添えられるかと思えます！」

「いや、そうじゃないんだ。俺達は——」

俺がそう言った途端、エリイの顔から笑顔が消え、冷酷な笑みを浮かべ、更には擬態も解いて、完全に妖鳥と化した姿になった。

「またですか。何故私たちを付け狙うのか、下賤な人間のする事は分かりませんね」

言下、鋭い光が胸に向かって輝き、そのまま貫いた。

無論、こんなことされたら間違いなく死ぬだろう。

しかし、ハデスの試練をクリアし、契約を結んだ俺にとって胸を貫かれることは蚊が血を吸うのと同義であるため、そのまま引き抜きたちまち貫かれて開いた穴が塞がる。

しかも、エリイの手についているはずの鮮血は付いておらず、エリイはただただ言葉を失うばかり。

「冥王の名の下に、俺は不死身となった。死なないってことは、君達に勝ち目は無いって事だね。俺だって無駄な殺生はしたくない。そこで提案、木刀同士で一騎打ちをしようじゃないか。どちらかが『参った』と言うまで、もしくは体が動けなくなるかしたら試合終了」

了。俺が勝てば捕虜の解放及びこの地からの撤退、エリイが勝てば俺達三人を好きに扱う権利が与えられる。君達は男と交わり子孫を増やしたいんだろ？ だったら条件は妥当なはずだぜ？」

しかし、エリイは実に見下した目線で、

「げ、下賤な人間なんかの交渉など、受けてたまりますか！」

と言った。めんどくせえ、なんとしても一騎打ちに持ち越さなきゃ、作戦も何もなくなってしまう！ 俺は背中を向けて帰っていいこうとするエリイを挑発して戦闘意欲を高めようと試みた。

「ほお、逃げるのか。確かに俺は普通の人間とは違う、だが人間。お前は下賤な人間君に何もせず負けるってことだよな？」

エリイの動きが止まる。数秒後、いきなり振り返り手を突き出す。木刀をよこせ、と言う意味だろう。

俺はその近くに木刀を突き刺し、「GET IT！」と某ゲームの独・竜が如く叫ぶ。

エリイはその木刀を掴み取り、構える。指の間に木刀を挟み込むのはハーピー独特の構え方だろうか？

「良いぜえ、PARTYの始まりだ！！」

これまた某ゲームの独・竜が如く叫び、突進する。

一瞬でエリイの真後ろに移動、首筋に峰打ちを叩き込もうとした直後、一瞬でエリイが消え去り、峰打ちは空振りに終わった。

辺りを見回しているとき、上から笑い声が聞こえ、見上げて見ると案の定エリイが高飛車な感じに笑っていた。

「オーホッホッホ！ 私は鳥人であるが故に、翼を使いますが、よもや異論はございませんよね？」

「上等。俺も二刀流であるが故に、二本の木刀で戦う。よもや異論はないな？」

そう言うが早いか、二本目の木刀を創造する。

「剣が一本増えたところでなにも変わりませんわ」

「二刀流ナメてると、痛い目見るぜ！」

エリイは先程のセリフを鼻で笑い、高速回転しながら急降下。地面スレスレで横薙ぎの一太刀を繰り出す。それは地面を削る程に強烈で、避けたはずの俺でさえ吹き飛ばされる位に凄まじいものだった。

「このままじゃ落ちるか、仕方ない。不死鳥の翼【フェニックスウイング】！」

先程も発動した不死鳥の翼を再び発動。

背中から炎の翼が現れ、急上昇、日輪と重なり翼を広げる。その姿はまさに不死鳥だったと言う。

翼をはためかせ華麗に着地し、二本の木刀を構え直す。

「ふん、下賤な人間の割には随分やりますわね」

「ふん、まだまだこれからだ！」

言下、一瞬でエリイの目の前に近づき、足払い、ミドルキック、回し蹴り、蹴り上げ、踵落としを反撃する間も与えずに連続で繰り出し、フィニッシュとして、一度打ち上げてから地面に思い切り叩き付ける、宮本流剣技、秘式五ノ型『七花八裂』を繰り出した。峰打

ちで。

それでも少しの間は動けないだろうと思っていたが、さすがは鳥人、あまり変化はない。膝についた砂を払った後、

「和解いたしましょう」

とにつこり笑って近づいてきた。

「ハーピイには和解する時、キスをするという習慣がありますの、私と甘い口付けを交わせば和解は成立。皆さんと皆さんに関係する人達は返してあげますわ」

「その言葉に偽りは無いだろうな!？」

「——!? わ、私を疑うのですか? ひどいです……」

うつ……、エリイが心臓悲しそうな顔をした後、しゃがみ込み泣き出した。こういう時どうしたらいいのか?

「おーいもしもし、エリイさん、もしもーし」

俺はそう言いながら徐々にエリイさんに近づく。エリイさんのすぐ近くに行くと、エリイさんが膝にしがみついてきた。人間に擬態して。

「うつうつ……」

「な、泣かないでくれ、エリイさん、俺が悪かった、俺に何か出来ることは無いか？」

「ならば、口付けを交わして下さい甘くて情熱的なキスを、私にください」

俺は「分かった」と言い、エリイさんを立たせた後ぎゅっと抱きし

め、軽く唇を重ねる、はずだったが、エリイさんは重ねた直後に舌を入れ、更には体重をかけて胸を押し付けてくるなど、色々な所で誘惑した。

遂には誘惑に負け、自分から舌を入れてエリイさんの口内をめちゃくちゃに掻き回したり、胸を揉みしだくなど、色々といつちなことをし始める。

互いの唇から漏れる、熱い呼吸が顔にかかり、互いの唾液が口内を駆け巡る。

あともう少しで何かが弾け飛ぶ、と思ったその時、急に力が抜ける。結果、エリイさんの胸に顔を埋める形になった。

「オーホッホッホ！ やっぱり男はバカな生き物ですわね！」

言下、俺は粒子となってエリイさんに取り込まれた。

「拓真！」

「拓真を……返せ！」

「拓真さんを何処にやっただんですか！！」

俺が吸収する際、強制的に魂の架け橋が解除されたのだろう、愛子と桜、それに遠くから優太君が叫んでいる。

「オーホッホッホ！ タクマは取り込んであげたわ！ 少し色気を振り撒けば男はすぐに食いつき、少し涙を流せばすぐに騙される。全く、これ以上にバカな生き物は存在するのかしら？ でも——」

エリイは突然、顔を赤らめくねくねし始めた。

「でも、ここまで下半身がムズムズして、ドキドキが止まらないの

は何でだろう……、はあ、ドキドキが……止まらない！」

エリイはくねくねと動きながら「ああん」とか「はあん」などと嬌声をあげている。

「ハアハア、凄くドキドキする、まるで何か体が突き破るような……くっ、う！ あああああっ！」

次の瞬間、エリイの背中から純白で巨大な翼が生え、恍惚とした表情になる。

仲間達のざわめきが起こる最中、エリイはとてもアブナイ笑顔で、

「力が漲ってくる……、それに比例するようにタクマの体が欲しくなっていく……ああ、タクマ！」

と言っているので、さっきから発動していたステルスを解き、後ろから抱きついて、

「呼んだかい？」

と言ってみる。面白いくらいにピクンとなり、無性にイタズラしたくなった俺は、うなじに吸い付き、たわわと揺れる胸を揉みだく。艶やかな声を出し始め、しばらくしない内に崩れ落ちそうになる。俺はそれをなんとか支え、立たせる。

「はあ、はあ、タクマ様あ、私もう準備は万端なんですの、早くシてくださいよお」

エリイは甘えるようにねだってくる。しかし、まだ行為をするわけにはいかない。まだ“あの言葉”をエリイの口から聞いてない。

「でもなあ、まだ君には言って貰わなきゃいけない言葉があるはず
なんだけどなあ？」

エリイのよく育った果実、そのへたにあたる部分をクリクリと摘んでやる。すぐにエリイは、

「参りましたあ！ 私の負けで、いいですから！ 焦らさずに入れてくださいい！」

と負けを認め、さらにねだってくる。
そろそろ、理性なんかも限界……。

—— 後編へ続く ——

下章 死神とギルドと歪み 後編（前書き）

後になっていくにつれて、グダグダになっていきます。

もしかしたら、キャラクターが……………。

下章 死神とギルドと歪み 後編

「はあ、はあ……タクマ様のが私の中を、駆け巡っていますわ……」

で、エリイに十分余韻を楽しんでもらった所で、沈黙の水を発動、俺とエリイの欲情やら何やらをリセットし、話し合いを始める。

「さてと、約束通り捕虜の解放とこの地からの撤退、やって貰おうかな」

「はい！タクマ様のお願いなら何なりと！」

そう言った次の瞬間、エリイの後ろに山積みになされた人達が突如として現れた。

「よし、優太君、やっと出番だよ、この人達をギルドの前に転送してくれないかな？」

「ハイハイ、任せてください」

優太君は転送魔法の魔法陣を展開し始めた。

かなりの人数だし、やっぱり時間が掛かるか。

「えーっと、じゃあ健悟は晃弥君達の搜索に当たってくれない？」
「言われなくても」

その時、一体のハーピイが「それならこちらです」と言い、飛んで行く。それについて行くように健悟は生い茂る木々の中に消えていった。

「タクマ様、私、貴方に一生ついて行って良いですか？」

「え、ああ。でもき——」

“君は”と言いかけた時、エリイは唇に人差し指を押し当て黙らせる。つくづくドキドキさせるなあ、コンチクショウ！

「私のことは、エリイちゃんとお呼びくださいまし、タクマ様！」

エリイは満面の笑みを見せる。何も裏のない、純粹な笑顔。あまりの恥ずかしさに顔を赤らめ、背けてしまう。

「お、おお。エリイちゃんはハーピイの代表じゃ無かったの？」

「その点は大丈夫ですわ、マリイちゃんに任せましたから」

「マリイちゃん？」

その時、一樹や海斗を足で掴んでいるハーピイがこちらに飛んできた。

「ちいーす！ エリイちゃん、男の子二人連れてきたよー！」

「お疲れ様です」

降りてきたのは、身長約190cmで青い髪、エリイとは違い、ナイスバディな女の子だった。

「この子がマリイちゃん？」

「およ？ 私はサリイちゃんですよ？ エリイちゃんの姉貴をやつてます。それにしても、君がエリイちゃんを射止めたタクマ君だね？」

……す、凄く情報が早いなあ、しかも射止めたって……。

そう思っている間にも、ジロジロとサリイが見てくる。

「へえ、さすがは万年処女を墮とただけあって、見ただけでムラムラしてくるよ」

万年処女って……、どんだけ初心なんだろう。

「それよりもさあ……、キスしていい？　ありがとう！」

言下、サリイは両手で俺の顔を挟み、有無を言わず唇を奪う。
舌を舐め合うようなキスに、正直興奮してる……。

「ぶあ……、私ルールその一、即答出来なければYESと取るっ！
それにしても、タクマ君ムラムラしてるね？　こんなになっちゃ
って……そのムラムラに任せてえっちしょーよ！」

「いや、ちよつと」

「ねえ、しよ？　うん、そうしよう」

またしても有無を言わず押し倒される。

「ねえ、こんなに求めているんだからさあ、応えてあげようよ」
「あ……うん、そうだね」

俺は「もう、どうにでもなれ！」と呟き、何気に穿いていた水色の
下着、その妙に膨らんでる所を指で優しく擦ってみる。

「うあん！　きたあ！」

サリイは嬌声を上げる。　下着の湿り気が水気変わる。
その嬌声や水気で理性が何処かへ吹き飛んだ俺は、擦る勢いをさら
に激しくしていく。

「あう、くあつ、すぐ、きもちいつ……よお……」

サリイの嬌声が激しくなっていく……微かに残っていた、最後の理性が吹き飛び、そして……

——ちょっと待ってね——

はい、またやってしまいました。

「さすがタクマ様、サリイお姉様もマリイちゃんも独り占めするなんて！」

マリイは先代リーダーであり、姉でもあるエリイに報告すると言う名目で、エリイに別れの挨拶をしに来たのだが、そこで偶然サリイと俺の交尾を目撃し……。ごらんの有様ってわけだ。

「ごめんな、マリイ。せつかくのリーダーをこんな形で潰しちゃって」

「い、良いんです。エリイお姉ちゃんもサリイお姉ちゃんも夢中になるお人がどんな人か食べてみたくなって……。メアリーさんに代表をお任せしてまで来たかいがありました」

赤い髪に青い目をしている、身長160cmくらいでスレンダーな体つきの眼鏡っ娘、マリイは目に涙を浮かべて答えてくれた。

……、儚すぎる。いつの間にかもらい泣きして、罪悪感にも飲み込まれて……。

「ごめんよおお！　こんなイモムシのためなんかに戻ってきてくれたのに、君をこんなになるまで汚してしまつて、ごめんよ、生ま

れてきてごめんよおお！」

いつの間にか泣いていた。 今なら飛び降り自殺も出来るぐらいにネガティブシンキングな自分をアリイは聖母マリアが如く抱きしめ、ほっぺにチュウをした。

「あ、ありがとう、マリイちゃん……」

「拓真！ 捕虜の転送、完了したぞ！」

「搜索が終わったぞ」

精神状態も安定し、ちょうど二人の仕事も終わった事だから……。

「香織、真理亜、稜、桜、愛子！ 帰るぞ！」 『はい！』

色々な所から香織達が飛び出し、抱きついてきた。 エリイ達も負けじと抱きついてくる。

「それにしても、拓真があんなにも技術があるとは思わなかったなあ」

「止めてくれよ、俺はただペルセポネさんに言われたことを実践したまでさ」

この場にいる、健悟以外の全ての人が目を丸くし、こちらを見た。

「いや、冥王の妃っても分からないよな、きつと……」

健悟以外のこの場にいる人達は深々と頷いた。

取りあえず冥界に行くまでの経緯を紅さんに殴られながら話し、冥王の試練を乗り越え、ハデスというエライ人に認めて貰い、その妻ペルセポネさんに犯されそうになったこと。

魔剣ラグナロクをハデスから貰い、冥界と現世を行き来できるようになったこと。

それと今回、エリィに取り込まれた時、冥界へ行ったこと。

そこでペルセポネさんに完膚なきまでに犯され、その後ペルセポネさんに『同姓が教える、女の子を完膚なきまでにオトすテクニク』なるものを教えて貰ったこと。

そして、魔剣ラグナロクで取り込まれた0・1秒後の現世へと戻った事を話した。

「へえ、ユウタもタクマ君も神様なんだね」

「そゆこと。優太君はゼウスのお墨付きを貰って、俺はハデスに認められた、で、健悟君は大天使ラファエルに魔眼を貰ったと」

「——！？ それもなのか？」「そだよ、まあ本来の能力は技術複写〔スキルコピー〕と言って、誰かの能力をコピーしちゃう凄い能力なんだけどね、試しに健悟君のスキル、因果断絶の魔眼をコピーしてあげよう」

目の前に巨岩を想像、具現化。

香織達に危険だから離れてと言い、再び集中。

因果断絶の魔眼をコピーし、眼を見開く。

中心部の死線目掛け、エクスカリバーを突き刺す！ 巨岩は脆くも崩れ落ち、砂と化して何処かに飛んでいった。

「これが健悟君のスキル、因果断絶の魔眼だよ、と言っても、まだまだ能力はあるみたいだけど、所詮はコピー、オリジナルには劣るから全部は使えないのさ。それにしても、このスキル、凄く目が疲れるよ、よく長時間発動出来るね」

「俺はお前じゃないから当たり前だ」

「それもそうだ！」

皆が笑い、誰かと雑談を始める。　　と言っても、女は女同士、男は男同士で喋っているが……。

女性陣の鼻息が妙に荒いのは気のせいだろうか？

俺もさつき失った魔力をエリクサーで補い、雑談に交わろうとした、その時、再び女性陣の悲鳴が轟く。

見れば、黒い檻に捕らわれているではないか。

「二の舞は踏まねえ！」

とつさに無数の烈火の矢【ブレイズアロー】を放つ、しかし壊せたのは香織と真理亜、それとマリイの檻だけだった。

「紅っ！」

健悟君は紅さんの檻に向かって妖刀を振り下ろすが、一瞬早く檻が瞬間移動し、空振りに終わる。

「クソッ！　誰だ！　姿を表せ！」

健悟君がそう叫ぶと、突如として、吐き気を催す程の威圧感に押し潰されそうになる。

「何だ、これは！」

「遂にお出ましか、香織、真理亜、それにマリイちゃん！　アレやるぞー！」

香織と真理亜は頷くも、マリイは首を傾げて、「アレって何ですか」と香織や真理亜に聞いている。

その間にも香織と真理亜にキスをして融合していく。　そして……。

「さあ、マリイちゃんの番だよ」

「え、あ、あう、はい！ き、キスですね、分かりました！ あの、その……、優しくしてくださいね？」

マリイはにつこり笑った後、ゆっくりと目をつむる。その目には一粒の涙……。

気づけば俺はアリイをキツく抱き締めていた。

「いたい、いたいです、タクマさん」

「あつ、ごめん。じゃあ……、するね」

「うん……優しくしてくれた方が嬉しいんだけど、激しくしてくれたら激しく返してあげますから」

そう言つてマリイは目をつむる。

そして、優しくキスをする。

が、優しくかったのは最初だけ、どんどん過激になっていき、最終的には舌を舐め合うようなキスになる。一度唇を離せば、唾液が互いを結びつける橋になり、重力に逆らわずに落ちていく。その夢さがどこことなくマリイと似ていてドキドキする。

「凄くドキドキします。エリイお姉ちゃんもサリイお姉ちゃんも夢中になるわけです。もっと過激なこと、したいです」

「ああ、全てが終わった後な」

そして、再び接吻。やがてマリイは光の粒子となり、すーっと入っていた。

「さあて、俺は準備完了だ、そっちはどうだ？」

「いつでもいけるぜ！」

「早く出てこい！ 空間ごと叩き斬ってやるあ！」

健悟の叫びに応じて、吐き気を催す程の威圧感が俺や優太君、健悟君を押し潰さんとする。

「こ、これが昨日言ってた異次元の歪みって奴か……」

「そうだ、万年発情期、しかもかなりバカデカいぜ。相棒もデカチも見たことない、キングサイズだ」

「さよう、これらを放置すれば異世界の生物がこの世界の全ての生物を滅ぼし、空は黒い裂け目に飲み込まれ、最終的にはこの世界は消滅する運命にあるのだ」
さため

初耳だよ、世界が消滅するなんて。つか、喋れるんだ……、ラゲナロク。

「わが主よ、今はそんなことに現を抜かしている暇なぞござらんぞ」

分かってている。「抜かしてねえよ」と呟き、背中の鞘から二振りの剣を抜き放つ。

次の瞬間、バコッ！ という音を立てて空が真っ黒に染まる。裂け目から、戦艦によく似た円盤がゆっくりと降下してくる。

「——！？ あれはさっきのヤツ！」

黒い牢獄が巨大な円盤の周りを囲むように配置されている。

突如として黒い立方体が目の前に現れ、一瞬だけ光った後に32型のテレビみたいな大きさになり、光を放つ。その光はだんだん映像になり、円盤の上らしき風景と一人の科学者、一体のぐつたりとした裸に近いハーピーが映っている。

（あっ！ あの子はさっき代表を譲ったメアリーさんです！）

「やあ、リア充の皆さん。女の子を取られた気分はどうか？ 最悪だよなぁ？ 僕はモテない人達の代表、ルファ・ウィンディーヌ様さ」

ルファ・ウィンディーヌと名乗る者は、裸に近いメアリーとか言うハーピイの胸を直に揉みしだき始め、メアリーは悲鳴を上げる。

「イイよねえ、おっぱいって、大きけりゃ大きい程イイ。君達もそう思わないかね？」

これまた突如として、黒い立方体が現れ、程なくしてマイクになった。

これで意思の疎通がしたいと言うのだろう、上等だ。

「デメエ！ 稜達はどこだ！」

思い切り怒鳴ってやると、ルファは耳を両手で塞ぎ、裸に近いハーピイを取り落としてしまう。

「いきなり失礼な少年だね、君は。まあいい、君達から奪ってあげた女の子達はここにいますよ」

いきなりアングルが変わり、今度は三人の女の子が映る。それを見て俺達三人は目を丸くする。
なぜなら、そこにいるのは……。

「稜！」

「紅っ！」

「□□！」

それぞれの大切な人達だったからだ。

（私は大切じゃないって言いたいの？）

（妹もロクに守れん男がどう好きな人を守れと言うんだ。後、地の文にツッコむな。腹立たしい）

再びアングルがメアリーとルファに変わる。

「さてと、もう少しでこの女の子を調教し終わるんだ。そしたら、君達から奪ってあげた女の子達も調教してあげよう、完璧な性奴隷として——」

「ざけんじゃねえええ！」

怒りに任せ、エクスカリバーを振り下ろす。テレビやマイクを真つ二つにして黒い粒子に変える。そして湧き上がる感情、怒り、ヤツを切り裂かない限り収まる事を知らない怒り。

「絶対に叩つ斬る！！
ルファアア！！！！」

俺の体から炎が迸り、次第に鎧へと形を変える。

「激昂の冥王【ラージハーデース】」

言下、炎が全身を包み込み、狂乱の炎魔神より強固な鎧が形作られる。

視界が真っ赤に輝き、怒りの感情のみが残って、無意識の内に雄叫びを上げる。

そして、一瞬で円盤の真上に移動し、

「ぶつた斬れろお！」

と叫びながら、ルフアに向けて剣を振り下ろす。はずだったが、見えない障壁が邪魔してルフアのいる円盤の上に行けない。

「こんなもん張りやがってクソがあ！」

見えない障壁に向かって、様々な攻撃を繰り返す。エクスカリバーやラグナロクで斬りつけたり、冥炎魔法を繰り返したり……。その程度じゃ破られないことなど分かりきった事なのに、攻撃を止めることができない。

口調も変わるし、つまりはコントロールしきれていない、強大な力にはかなりのリスクが伴うらしい。

「おやおや、無駄な攻撃ご苦労さん。この障壁は世界一固いオリハルコン、その百倍は固いのだよ。普通の攻撃じゃ傷一つ付けられない！」

“なら、空間ごと切り裂いたらどうなる？”

突然の突風。吹き荒れた後、見えない障壁が両断されていることに気付く。健悟君が有する因果断絶の魔眼、その能力の一つが発動したらしい。

これをチャンスと見た俺は、一瞬で円盤の真上に飛び、錐揉み回転しながらルフアに近づく。ルフアはメアリーを調教し終え、稜達に迫っている。

「い、いやあ、来ないで！ 早く助けて、拓真！」

「ふふふ、何をしたかは分かりませんが、無敗の壁が破られるはずがない、従って拓真とやらが助けにくる確率はゼロ！ さあ、大人しく——」

「その穢らわしい手で稜に触れるんじゃねえええ!!」

俺は稜の胸に触れそうなルファの腕に向かってエクスカリバーを投げつける。ルファの両腕は稜に触れる前にエクスカリバーが斬り裂き、放物線を描きながら稜達の上を飛んでいく。断面から鮮血が溢れ出る。

「わ、私の腕があ! 何故、何故剣が降ってくるんだ!」

左手に持ったラグナロクでさらに胸あたりを斬りつける。錐揉み回転の遠心力でルファの胸を深々と切り裂き、胸あたりから鮮血が噴水のように噴き出す。

「ルファ……、殺す!」

着地した後、エクスカリバーとラグナロクを融合させ、一振りのかなり長い日本刀にする。

「宮本流奥義、森羅万象断空斬!!」

日本刀を思い切り振り下ろす。

刃から鋭い衝撃波が飛び、円盤ごと切り裂く。ルファは断末魔も上げる間もなく真つ二つになる。

『キヤアアア!』

女の子達の悲鳴が聞こえ、そこでようやく正気を取り戻し、やっと体のコントロールを取り戻す。

「稜! ロ口さん! 紅さん!」

俺は、優太君がよくやる転移魔法の魔法陣を展開する。位置を計算、割り出し、実行。見事成功し、優太君達の隣にいることを確認し、稜を抱きしめる。

「怖い思いさせてごめんな……、稜」

「ううん、おにいちゃんが助けてくれるって信じてたから、全然怖くなかったよ」

稜はそう言っているが、実際は凄く怖かったらしい、抱きしめている今でさえ少し震えている。

頭を少し撫でてやると、震えが止まり、顔が綻ぶ。

「もう、怖くないな」

「うん！　ありがとう！　おにいちゃん！」

そう言つて、稜は大きな胸と一緒に唇を押し付けて来た。瞬間、光の粒子となり、俺の中に入ってしまった。

「香織、あの黒い牢獄はどうやって破壊できる？」

（そんなの、あんたが探せば良いじゃない）

あれ？　何でだろ？　何故か拗ねてる……。　とりあえずもう一押ししてみる。

「それができないから言っているんだ。頼む！　香織、君にしかできないんだ！」

香織はこれまた拗ねてる口調で、

（じゃあ、稜ちゃんよりドラマチックなキス、してくれる？）

と、言った。 思考回路が追いつかず、思わず「は？」と聞き返す。
すると、今度は怒った口調で、

（だーかーら！ 私にも！ ドラマみたいなキスをしてほしいのおおー！）

と耳元で怒鳴られた。 おかげでしばらくキーンとしか聞こえそうになさそうだ。 リペアで治したけど。

「分かった、分かった。 どんなシチュエーションでも再現してやるから、とにかく今はアナライズよろしく」

（約束だからね！！ …… 中心部にエネルギーコアみたいな物があるわ。 それをどうにかできれば——）

「OK！ それだけ分かれば十分、いくぜ！ 烈火の流星群【シューティングスターブレイズ】！」

巨大な炎の球を上空に向けて撃ち放つ。 それが上空で炸裂し、無数の小さな炎になって円盤に降り注ぐ。

炎の一つ一つが、円盤の上で炸裂し、穿ち、削っていく。

その内、円盤の中心に橙色の球体が姿を現す。

「あれがエネルギーコアかあ……。一気にカタを付けるぜ！ エクスカリバー！ ラグナロク！」

「おうよ！」

「御意！」

かなり長い日本刀を再び二本の両手剣に戻す。 そして、二本の両手剣をクロスさせて構え、

「クロスインパクトオ！」

そのまま振り抜く。

瞬間、エネルギーコアにバツテン印が付き、次いでエネルギーコアが巨大な火柱を起こし、跡形も無く吹き飛ぶ。

そして黒い牢獄が粒子に変わって、中に捕らわれていた人たちは俺の起こしたつむじ風でゆっくりと落ちていく。

「……、危ないところだった。色んな意味で」

愛子はいつの間にか、真後ろに立っていた。

いや、今、俺、飛んでいるんだよ？

「空なら飛べる。蒼氷の翼で」

よく見れば、愛子の背中には青い氷で作られた翼があるではないか。ただ気づかなかっただけだが。

「それよりもさ、さつきからなんか寒いな」

「そうなの、これを発動している間は背中から冷気が放たれて周りが寒くなるの……。ねえ、あなたの吐息で、あなたの唇で私を暖めて」

愛子は突然、唇を押し付けて来た。蒼氷の翼が徐々に消えていき、青色の粒子となって体の中に溶け込んでいった。

「——！？ わ、私も一つになりますわ！」

「サリイも一つになりたいんだよ！？」

両頬からのキス。 エリイとサリイは一瞬の間も開かず粒子となり

取り込まれていく。俺に。

「やったな！ 拓真！」

優太君は手を振り、こちらに声をかける。

俺はゆっくりと優太君の近くに着地し、手を振り返す。

「ああ、円盤は吹き飛ばした。だがしかし、男に怯えるようになってしまったハーピイや、微かに残るルファの魔力が引っ掛かる。何はともあれ、ハーピイ達のエピソード記憶から、ルファに強姦されてしまった記憶を消し、体も調教される前に戻す。つまり、『無かったことにする』んだ。……融合魔法、光の風」

手のひらを突き出せば、光の粒子を纏う風がハーピイ達を包み込む。ハーピイ達は見ると見る内に凜とした表情になり、数秒後には、新しいリーダー、マリイを探し始めた。

さらに数分後、メアリーがこちらに向かってきた。

「少し聞きたいんだが」

「はい、なんででしょうか」

「今、我々は我らのリーダー、マリイ殿を探しているのだが」

「彼女か……、彼女なら君たちを庇って名誉の戦死を遂げたよ……」

俺がそう言うと、メアリーは頭を抱え崩れ落ちる。

どうやら信じ込んでいるらしい。今、この時、初めて演劇部に入っていて良かったと思った。

もう一芝居してみるか。

「彼女は息を引き取る前、俺にこう残した、私が死んでも絶対に泣くな。これからはメアリーが仕切る番だ。ただ東を目指せ、樂園あればそこを住処にせよ……と」

メアリーは立ち上がり、凜とした顔に戻ると、

「マリイ殿の遺された意思を伝えていただき、誠に感謝する次第！
我々はこれより東に向け飛び立ち、樂園を目指す！ と、マリイ
殿に伝えていただきたい」

と言い残し、仲間を連れ東に向け飛び立っていった。

「良い部下を持ったな、マリイ」

（いえ、全てはタクマさんのおかげです、ありがとうございます！）

さてと、ハーピー達は無事に飛んでいったことだし。

「出て来いよ、ルファ。テメエの奴隷とやらはみーんな飛んでった
ぜ？」

「そうだな、円盤も吹き飛んだしな」

言うが早いか、ルファは俺達の目の前に現れる。うなだれているよ
うだが、目ではかなり怒っている。

「本当に余計なことしやがって！ リア充共が！」

叫んだ直後、ものすごい殺気と怒気を含んだ威圧感が襲い来る。
しかも、リアルにオーラが見えだしてきたのだ。 スーパーサ●ヤ
人みたいなオーラが。

「俺のハーレム生活がああ！！ 許さないぞおお！！」

ルファは有名過ぎるマンガの有名過ぎる構えをする。まさか……。

「かめ●め波ああ！」

青いレーザー光線が襲ってくる。が難なくリフレガで弾き返す。ルファは自ら放ったレーザー光線で吹き飛んだ。

「チクシヨウ！ リア充共があああ！」

「さっきからリア充、リア充とうるさいぞ、紅をさらった事もあるしな。とりあえず死ね」

健悟は近づき、そのまま一閃。ルファの背中に大きな切り傷が出る。

優太君は断末魔を上げることさえ許さず鎌でルファを切り裂き、打ち上げる。

「さあ、トドメをさしてしまえ！」

「あいよ！ 宮本流剣技秘式五ノ型、『七輪八裂』改訂版」

空間魔法を駆使してルファを地上に落とさないように何度も何度も斬りつける。

トドメは両手の剣を同時に振り下ろして地面に叩きつける。ここは変えない。

「今だ！ 有りっ丈の上玉、ぶちかませ！」

二人は頷き、優太君は死神の翼を生やして飛び上がり、健悟君は剣を構える。

俺も空中に留まり、巨大という言葉すら軽く凌駕する予定である炎球を作り始める。

「さて、ラルやフロル、そして口口をさらった罪……、死して償え

！ 『死の波動』！」

優太君はルファに向けて手をかざす、その瞬間にかなり太い、真っ黒なレーザー光線がものすごい勢いでルファに迫る。

ルファは虫の息ながら、マジックシールドを張るが、横から健悟の放った鎌鼬らしきものがルファの右腕を吹き飛ばす。そのまま死の波動がルファに降り注ぐ。

「ぐあああああつ！ おのれ、リア充共めがああああああ！」

ルファがそう叫んだ瞬間、俺の最大の火炎魔法が出来上がる。

（どこか遠くへ！ 巻き添え喰らうぞ！）

テレパシーで二人に伝える。 優太君は自分と健悟君の足元に転移魔法陣を展開、発動してこの場から離れる。

離れたことを確認すると、頭上の巨大という言葉すら軽く凌駕する炎球をもう一回り大きくする。

「よし、今だ！ 獄炎の隕石【メテオインフェルノ】！」

頭上の炎球がかなりのスピードでルファを襲う。

「くそ、リア充共をこてんぱんに泣かせるまで……、俺は——」

そして着弾。

ルファの叫び声も虚しく、跡形も残らず燃え尽きた。

「よ……し、ルファの魔力が消え去った、遂にやったか……。でも、俺の魔力もすっからかんだ……。くっ——！」

.....ま.....くま.....たくま.....。

「拓真！」

うおわっ！？　と言う奇声を上げながら、ベッドから転げ落ちる。
そこで意識が完全に覚醒し、見上げて見れば、そこはあまりにも
暗く、すぐ目の前には水色のしましまが……。

「スカートの中に顔突っ込んで、ニヤケないでよ！　ヘンタイ！」

平手打ちを後頭部に受け、思い切り床に顔面を強打する俺。すぐに
飛び起き、

「ニヤケてなんかねえよ！　第一、俺に謝れよ！」

と講義するが香織は、

「ほおら、あんたの鼻から出ている緋色の液体が何よりの証拠よ！」

とさらに憤慨して踵落としを繰り返してきたが、鏡花水月でかわす。

「だああ！　落ち着け！　質問？！　ここは何処だ！？　質問？！
どうやってここに来た！？　質問？！　俺は何時間寝てたんだ！
？」

『それは私たちが教えてあげますよ』

いきなり入り口から三つの影が俺めがけて飛んでくる。　エリィ、

サリイ、マリイである。

ぐえつと言いながら隣のベッドに押し倒される。軽く数センチは飛んだらう。

次いでそれぞれの唇が迫ってくる。

「え、う、ちよつと——」

エリイの唇が重なる。エリイの唇が離れるとサリイの唇が重なり、サリイの唇が離ればマリイの唇が重なる。その繰り返し。それが小一時間続き、三人の息が荒くなつたある時、エリイ達は誘うように語りかける。

「でさあ、教える前にお願ひがあるんだよねえ……」

「おね……がいの？」

「そうです、このギルドに私達三人は苦労しながら連れてきたのですから、聞く義務がありますよね？」

バカめ、これで質問？と？は聞いたも同然！

「五時間くらいぐっすりと眠って、まっし——」

「ありがとう、知りたい事は全て知つた。さらばだ、鏡花——」

鏡花水月を発動しようとした瞬間、エリイは唇を押し付けて鏡花水月の発動を食い止めた。

「この欲情している私が離すと思ったのですの？ 甘いですわ、大甘ですよ、おーほっほっほ！ めちゃくちゃに犯し尽くしてあげますので、覚悟なさい？」

言下、ハーピー三姉妹は俺の体を喰らい始める。

俺は終始なされるままだった。

飛びかけた意識を繋ぎ止め、エリクサーでいろんなものを回復してふと思った事をギルドの受付嬢にぶつけてみる。

「でさ、あれが大型の半鳥妖女なのかい？ どう見たって二十歳くらい的身長じゃないか？」

「だから大型なのです。本来、見た目十歳程度なのです。だから元々は“妖女”ではなく“幼女”なんですよね……」

そうだったのか……。

俺はそう呟き、エリイ達を見つめる。

もしエリイ達が“妖女”ではなく“幼女”だとしたら……、凄まじい罪悪感に呑み込まれたのだろう。

「良かった……、さてと！ じゃあ報酬を頂きましょうかね！」

「はい、ちよつと待ってくださいね……」

ギルドの受付嬢がカウンターの奥へ消えていく、俺がなんとなく後ろを振り返ってみると、なんか血まみれの惨劇が広がっていた。

俺は優太君に状況を説明してもらうことにした。

「あのー優太君、これは一体どうなっているのかな？」

「アハハハハ！ それがなあ、この何処の馬か分からねえ奴がよお、口をナンパしようとしたから、俺が八つ裂きにしてやったんだよ！ お前も俺と殺るか？」

「遠慮しておくよ」

「なーんだつまんねえの」

言うのが早いか、大型の鎌が襲い掛かる。

その鎌をラグナロクで難なくかわし、エクスカリバーでうなじに峰打ちを喰らわす。狂気に吞まれた優太君は呆気なく気絶した。

「隙だらけだ。これならまだ狂気に吞まれていない優太君の方が強い」

二本の刀を鞘に収める。それと同時に、受付嬢がカウンターの奥から戻ってくる。

「はい……、これが今回の報酬……です！」

ドスン！ という音をギルド中に響き渡らせながら、ほとんどぼろぼろだす感じで置かれる。

「はい……、これが報酬の、金貨3000枚です」

さ、3000枚い！？ という声がギルド内に轟き渡る。そんなに価値がある物なのか？

「はあ……あなた達、国庫を空にするつもりですか？ 3000枚なんて、一人が一生遊んでもお釣りが来るくらいの金額なんですよ？」

そうなのか？ 優太君と言おうとしたが、俺が気絶させたため、優太君はぴくりとも動かない。

リペアとリカバリーを併用し、血まみれの惨劇と優太君の意識を元通りにする。

「あ、優太君おはよう、金貨3000枚って凄いの？」

「んあ？ いや、俺も金の価値は知らないんだ、まあ凄いつて言うんだから凄いだろ」

「まあ……いいか、凄いものは凄いつてことで」

「あの、ギルドカードを下さい。ランクアップしますから」

俺はちょっとした転移魔法で参加者のギルドカードを手のひらに転移させカウンターにさらに転移させる。

受付嬢が奥に消え、暫くすると、優太君みたいに、SSとでっかく書かれたギルドカード……ん？

「あれ、受付さん、これSSって書かれてますよ？ 確かこのクエストの難易度はSだったはず」

「ええ、あなたが気絶している間にとばちりを受けて死んでいった魔物達の剥ぎ取りをしていたらしいんですが、数々のS級モンスターの中に、SS級依頼のゴーレムの破片が多数存在してました、とばちりとは言え、依頼を達成したのでSSランクに昇格しました。おめでとうございます、『紅炎の破壊者』タクマ・オオハラさん」

「……はい？ 今なんと言いました？」

「二つ名ですよ、本当はAランク以上で優秀な成績を残して二つ名が付くんですが、金貨3000枚は異常だろうということなので、このクエストを受注したタクマ・オオハラさんに『紅炎の破壊者』という二つ名を与えるに至ったわけです。」

ちゅ、厨二くせえ……。まあ、事実だから仕方ないか。獄炎の隕石は着弾地点から数キロにわたって問答無用でクレーターを作るから……。

「あら、良かったわね、これであんたも一役有名人って訳ね」

あれは……、香織を筆頭にする、万年発情期ネコの皆さんだ。

「おう、香織。あの歪みは消えたか？」

「歪みはあんたがバカでかい炎の塊をぶちかました後に起こった噴火で山ごと消えていったわ。でもね、拓真。私達はそういうことが言いたい訳じゃないの、私達はね、あんたのえっち見てて……、む、ムラムラしたのよ」

「……おいおい、勘弁してくれよ！ もう既にエリイ達にほとんど持ってたんだぞ！？ それに、ここは公共の施設——」

「だからいいんじゃないのよお、ダーリン……」

真理亜がいきなり後ろから抱き付く。

それが起爆剤になり、次々と発情ネコ達は抱き付き、首筋に吸いついたりえっちなことをやりまくる。

「ちよつ、お前ら……っ止めろ……お願いだから、やめてっ……！」

「あ、拓真さん、凄くいやらしい声が出てますよ？」

「ホントだね、おにいちゃん。ほら、みんな押し倒しちゃえー」

ドスンという音を立て、俺は押し倒される。押し倒されるのは本日三度目である。

「ほら、おにいちゃん、凄いだよ、わたしたちみんなおにいちゃんのこと食べたがつてる。おにいちゃんを食べるためなら何でもするんだよ？」

「そうよ、拓真。周りの人々に私達のせ——」

「ご託宣はもういい！ ひと思いに喰らい尽くせよ！ なんの抵抗もしないから！」

発情期の雌ネコ達は、にっこりと笑い、「お言葉に甘えて」と美し

いコーラスを響かせ、性的な意味で喰らい始めた。
性的な意味で喰らい尽くされた後、意識が朦朧とし、暫くしない内に意識を失った。

下章 死神とギルドと歪み 後編（後書き）

前後編あわせて二万文字。
どうだったでしょうか？

REDEXさんのキャラクターは崩れていないか、焰野さんの作品のキャラクターに少しでも近づいているか。

さあ、もっと頑張らねば、文章とか……。

終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会（前書き）

遂に終章！

こんどは天界で……？

終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会

次に目覚めると真っ白な空間だった。

本当に何もかもが真っ白で、目を凝らしてようやくはっきりと物体を認識出来るくらいに真っ白な世界だった。

「あれ、俺は確か香織達にギルドで犯され気を失ったはずだよな？」

香織達の事だ、俺が気を失ったとしても構わずに性的行為をし続けるのだろっ。

「まあ、この点はラッキーだな。香織達に体を貪られずに済んだし」

“ いや、下界の時間は止めてあるが、お前の体は貪られているぞ ”

「誰だッ！」

突如として聞こえた声に警戒態勢として、エクスカリバーとラグナロクを瞬時に装備する。

「気を付けな、相棒。凄まじい気を感じるぜ」

「主よ、我が刃も主を軽く凌駕する気を感じております。お気を付けなされ」

ラグナロクがそう言った途端、目の前の空間が歪む。

「そこだッ！」

ガギンと金属音が鳴り響き、火花が散る。

エクスカリバーの能力、複写で魔を打ち払う力をコピー、エクスカリバーが触れている部分から歪んでいた空間が元通りになっていき、次第に鎌を持った人の形を取り戻す。

「あ、あんたは……、優太君じゃないか！」

「そういうお前は拓真じゃないか！ いきなり歪んだ空間が襲い掛かるから何かと思ったが……」

“ ようこそ、天界へ ”

先ほどの男の声が、また頭に響き渡る。次いで目を刺すような閃光が頭上に発生、したかと思えばすぐに消え、目の前に髭を生やした白い布を纏う男が存在していた。

「ようこそ天界へ、私がオリュンポス十二神、主神のゼウスだ」

「知ってるよ、今日はいつにも増して登場が派手だな。……でなんだ、今日は——」

「君があのだか兄貴に認められた大原拓真だな？」

……どこから仕入れた？ その情報は。神は下界（＝人間界）をいつも見ているとは聞いたが……。ハデスに認められたのは冥界での出来事。まさか、バカ兄貴というくらいだから交信はしないだろうが……。

「君もいつもやっているじゃないか」

「……解析【アナライズ】か。それよりも、さっきの言葉、一体ど

ういうことだ？」

「それはな、これを見れば分かる」

ゼウスは手を横にかざす。鏡みたいな物が現れ、そこには下界の様子が映し出されているのだろう。そこには……。

「今すぐに閉じてください、今すぐに！」

俺なんかが説明しちやいけない、淫らな大人の世界が広がっていた。

「今、君は精神だけの状態だ。まあ、すぐな——」

轟音と称すべき爆発音が響き渡る。火炎弾によるものだ。それもかなり巨大な。

神とは言え不意打ちでかなり巨大な火炎弾をぶつけられたら一溜まりもないだろう。だがゼウスは身じろぎもせず、

「話を聞いていないからといって逆上してあんなの放って貰っちゃ困る。神だつて痛いんだからな！」

とあれほどの魔法を喰らったはずなのに、痛いだけで済むとは……。さすがは神か。

「そうだ、私が神だ。ところで拓真といったかな、バカ兄貴は元気か？」

「まあね、気になるなら、自分の目で確かめればいいじゃないか。開け、冥界への扉！」

左手に装備したラグナロクを真上に掲げる。

少し間が空き、俺の後ろの空間が歪んで黒いトンネルを形成する。

闇の回廊みたいな感じのやつ。最初に来たのはペルセポネだった。

「うーん、天界に来るのはいつぶりかしら。あ！ 拓真あ！ 後で互いに体を通じて分かり合いましょうね」

ペルセポネはいきなり後ろから抱き付き、真理亜並みに大きい胸を押し付け頬を舐める。あとなんか凄いこと言ってるよ……………、とりあえず笑っておこう。

そして、冥王ハデスが天界に闇の回廊みたいなやつを通って現れた。あれ？ そういえば名前は確か――

「陰陽を紡ぐ空間だ。それにしても久しいのぉ、我が弟よ。前に会った時の方が遅しく見えるのは気のせいであろうか？」

「ああ、久しぶりだなバカ兄貴」

ハデスはバカ兄貴という言葉に過剰反応した。
簡単に言えば、キレたのだ。

「バカ兄貴、か。やはり父クロノスの教育は貴様に対して甘過ぎたのだ。我はここまで厳格に育てられたというのに、貴様だけはクロノスに甘やかされ、さらには主神の地位も欲しいがままにした！だから貴様は女に溺れる！ だから貴様は妻を怒らせ激情させるのだ！」

いや、そこはバカ兄貴と関係なくね？

「黙れ！ ゼウスもろとも貴様も我が剣の鎧になりたいかア！」

「もう、騒がしいなあ……。おちおち寝れやしないじゃないの……」

突如として金髪、ツインテールの少女が現れた。

解析【アナライズ】……………、この幼女がゼウスの姉であり妻であるヘラだというのか？

「失礼ね！ これでも結婚の神なのよ！？ 私がちよいといじくれば、あなたを一生結ばれない悲しい人生にする事だってできるからね？」

「失礼いたしました。結婚の神、ヘーラー様」

俺はヘラの前で跪く。香織達と結婚出来ないのは香織達に申し訳ないし、何よりも自分が嫌だ。

「真面目ね。どう転んだってそんな事しないから気にしないで、でも浮気はしないでね、香織達はきつと悲しむから」

「当然の事を言わないでくれ。香織達の涙は見たくないんでね」

おお、我ながらとってもクサイセリフ。だがそれが本心だから仕方ない。

「香織達が羨ましいなあ、どこかの誰かさんとは違って律儀だからねえ」

お前の事だよ！ と言わんばかりにゼウスを睨み付ける。ゼウスはその場にうずくまり、ガタガタと震え始める。

コレが神……、と俺が思うと同時にゼウスの目が輝く。ヘラはそれを見逃さなかった。

「ねえ、変態色欲万年発情浮気ペド野郎、今ペルセポネを変な目でみたよね？」

「見てません、本当です、姉貴」

「ありえない。“うわ、胸でっけえ、きゃっほう”みたいな目で見

てたでしょう！　いいわ、女の恐ろしさをたつぷりとその体に刻み込んであげるから」

そう言ったヘラは、ゼウスに対してマウントポジションを取り、次々とパンチを繰り返してゼウスを圧倒した。

剣の錆としてやろろぞなどと抜かしていたハデスは蚊帳の外だった。

「まあ良いわ、興が醒めた。ゼウスを斬り裂くのは次に会った時にしてやろろ」

「まあまあ、ハデスさんも落ち着いてよ、せつかくの再会だからさ、お茶でもどう？」

ゼウスをしつけ終えたヘラの一言で、なかったはずの場所にティーマセツトが現れ、甘い香りが漂う。ペルセポネは「是非！」と言い、すぐさま一番近くの席に着く。

ハデスはいはあ、と溜め息をつくが、程なくして席に着いた。どうしたものかと優太君に言葉を二、三投げかける。

その内に、ゼウスを無理矢理座らせているヘラに「座って」と促されたため、とりあえず座って待つてみる。

程なくして、この場にいる全員が座り終え、（ゼウスも気絶状態から回復した）それでも一つ空席があるため不自然に思った俺は、その空席について訊いてみる。

「ああ、そこには大天使ラファエルさんが来る予定なんだけど……あ、来た来た」

ヘラがそう言うと、突如として頭上に神々しい光纏い、翼を生やした白髪の幼女がゆっくりと下りてくる。

「はあ、何ですか……？　私も暇じゃないんですよ？」

「まあ、そう言わないで。暇あげるから」

「まあ、それなら良いですけど。早くしてくださいね」

ヘラの言葉に、ラファエロという幼女天使は渋々納得し、頬を膨らませ、ふてくされる。

これが健悟君に邪眼を授けた大天使ラファエロなのか？

「独断と偏見で人を見たら、痛い目をみるからね」

直後、俺の額の前で拳を握る。

「何これ、デコピン？」

「うん、デコピン」

言下、幼女なりに怖い顔になり、デコピンと思えないデコピンを繰り返した。

横に十回転、後ろ向きに二十回転して巨大で白い柱にぶつかる。その際柱はヒビは入らなかったみたいだ。

……、流石は天界か……。めちゃくちゃ痛いのは変わらないけど。

「私を怒らせると怖いんだから」

「く……そ、炸裂する豪火【バーンフレイム】！」

左手をラファエロに向ける、次いで火種がいくつも現れ、ラファエロに襲いかかる。着弾した瞬間、とてつもない炎が中から飛び出るように爆発し、ラファエロを包み込む。が、

「か弱い女の子に手を出すなんて最低の行為だよ？　そっいつのを幼女虐待といってね、ヘンタイのする行為なのよ？」

と、あまりにもふざけた態度で笑っている。衣服にすら傷一つなくだ。

俺はえもいわれぬ恐怖に心を掴まれ、思わず右手で白旗を創造し、頭上で狂ったように振る。

あんな化け物に勝てる奴がいたらここに呼んでこい、神として崇めてやるから。

「もう終わりかあ、つまらないなあ」

「ふふ、両者共に満足したようですし、さあ、始めましょうか、愉快なお茶会を」

俺や優太君、神達は茶菓子を食べながら喋り続ける。そして、あつという間に時間が過ぎた。

「よし、今日はお前ら帰って良いぞ」

「結局、何のために呼んだんだよ……」

「暇だったから」

「……、『死の波動』」

ルファを窮地に陥れた真っ黒なレーザーがゼウスを包み込む。

「じゃ、SEE YOU AGAIN」

ルファを絶命寸前まで追い詰めた死の波動をもつともせず、俺と優太君の意識を飛ばした。

（１ヶ月を過ぎたある日）

「ふああああ、変わらぬ朝、変わらぬ腰痛、そして——」

変わらぬ淫らな女共。と言いかけた時、ボタンとドアが開け放たれる。

おそらく口口さんが食事の準備ができたのかと思ったが、予想は呆気なく裏切られる。

「ここが寝室だときいたのだが」

「クソブタの小屋はここか？」

一樹と海斗を担いだ二人組の女性が扉の向こうにいた。よく考えてみれば早すぎるか。

一樹を担いでいるのは長身で緑色の長髪に深紅の目、アマゾネスを彷彿とさせる締まった筋肉……程ではないが、そこそこ締まっていて、さらに推定Gカップの大きな胸をぶら下げている。

……、イツミテモアンバランスダナ。

一方、海斗を担いでいるのは小柄で桃色のショートヘア、目はアマゾネス女と一緒に深紅、体型はスレンダーな方だ。

それと、目が凄くつり上がっている。

……、ヤッパリコイツ、ドSダナ。

「そうですよ、メアリーさんにジュディさん」

そうなのだ、彼女らは遙か東方に飛び去っていったハーピイなのだ。二人ともリーダーを辞退し、群れから抜け出したのだ。

ちなみに、彼女らはそれぞれ一樹、海斗を好きになり、一度交尾した後、一樹はーは完膚無きまでに喰らい尽くされ、海斗は完膚無きまでに蔑まれた。（海斗は人知れずMだったため、逆に喜んだ）

「なら、このベッドに乗せておこう」

「……………、すみません、ご要望にお応え出来なくて」

「いいんだよカズキ、君はよく応えてくれた、私は満足したんだ。
愛してる、カズキ」

メアリーは頬を染めながらベッドの上にいる一樹に濃厚なキスをした。微笑ましいこと極まりない。まあ、メアリーが唇を離れた瞬間
気絶したが。

「ケツ、こんなブタをベッドに乗せる価値なんてねえよ、床に這いつくばってる」

「うう、もっと……」

「うっさい、死ね」

ジュディは床に投げ捨てた海斗の鳩尾を思い切り踏みつけ、踏み躪る。

海斗は断末魔を上げて気絶した。

「相変わらず、二人とも過激ですね」

「一樹を心から愛しているからな」

「いえ、彼きつての希望ですから……」

そうなのだ、ジュディは海斗が気絶すると穏やかな性格になる、二重人格なのだ。

「まあ、いいや、先にリビングへ行っていてくれ、俺は俺でしなきゃいけないことがあるし」

「分かった、香織にもその旨、伝えておこう」

そう言って、メアリー、ジュディは寝室から退室していった。
ボタンとドアが閉まる。

「さて……と、エクスカリバー」

言下、腕を正面に突き出す。

一瞬間が空き、俺の右手に光が収束して剣の形になり、実体化した後、光が収まり、金色の柄に半透明な黄色の宝玉といった、アーサー王物語でお馴染みのデザインの両手剣が完成する。

「よう、相棒、お呼びのようだな、とりあえず床に突き刺してくれ、腕が疲れるだろ？」

お言葉に甘えて邪魔な海斗をサイコキネシスで一樹が寝ている隣のベッドへ飛ばし、エクスカリバーを突き刺す。

本当なら前にかけた俺の魔法で弾き返されるはずだが、エクスカリバーの元々の能力、『魔力の無力化』でそこだけ俺の魔法が効力を失い、突き刺さるってワケだ。

何？ 人の家を壊すな？

そりや直すよ、そりや直すけどさ……。

「誰に向かって喋っているんだ？ 相棒」

「やかまし。それにしても、その性格は定着してしまったのか、エクスカリバー」

「へへ、元々の性格が近かったからな」

「あの某有名ライトノベルの主人公が持っているあの刀剣に？」

「俺あ回りくどい表現は嫌いだ。お前さんの記憶の中にある——」

「大丈夫、分かったから。俺がしたいのはそんな話じゃない、香織のシークレットビーチに現れたあの扉がでているかってことだから」

エクスカリバーは急に黙り込む。おそらくは考え中なのだろう。

「見つかった。この部屋の隣りの開かずの扉だ」

「おいおい、そんなこと、なんで分かったよ」

「俺あそうゆうのを探知できるステキスキルがあつてね」

「ふうん、で、鍵は？」

「

宝玉のところを押してみな、とエクスカリバー。言われるがまま押してみると、押していない手のひらが光り輝き、その手の中に透明な鍵が持たれていた。

「へへっ、どうよ？ 俺っちのステキスキルその二、異空間の道具箱よ！ 大小は問わないが、三十個までな」

「スツゲエよ！ エクスカリバー！ 何か分からねえけどスゲエ！」

あ、ちなみに収納はお前さんの空間魔法を使いなよ、とエクスカリバー。

どこに繋がるか分からない透明な鍵を空間魔法で異空間の道具箱に転送、エクスカリバーもまた、白い粒子に戻し、再びドアノブに手をかける。

「さあてと、みんなに朝のあいさつでもしようかね！」

扉を開け放ち、リビングに向かう。

楽しい団らんの日々もこれで終わりか。なら、悔いのないように過ごしていかないとね……。

一樹と海斗に向けて愛子の魔法、『覚醒の雨』を発動、程なくして二人は目覚め、リビングへと向かう。

俺も扉を開け放ち、最高の笑顔で朝の挨拶をする。

「おはよう！ みんな！ 今日はみんなに重大な発表がある、次の

扉が見つかった！ この扉な。質問はいらないぞお、俺もわからないから。で、今日がお別れの日なので、記念撮影をやると思う。異論反論全て無視するからな、特に健悟。よし、じゃあみんな外に出てくれ！」

そろそろと外に出る皆さん、全員が出切ったところで俺も出る。

↓数十分後↓

「よし、みんなな定位置に着いたな？ じゃあいくぞ、クロスオーバー記念撮影！」

カシャリ……ツー……。

「上出来だ、これを2つ複製して……と。さあ、香織、赤音、詩音、楓、真理亜、愛子、桜、エリイ、サリイ、マリイ、メアリーさん、ジュディさん、そして、一樹に海斗。出発の時だ！」

再び中に入り、問題の開かずの扉に立つ。

そして、エクスカリバーを呼び寄せ、真ん中の宝玉をポチッと押し、透明な鍵を呼び寄せる。

「じゃあ、解錠するぞ」

透明な鍵を差し込みくると回す。

扉の隙間から淡い光が漏れ出し、みるみる内に扉が開いていく。

「またな、優太君。1ヶ月間本当に楽しかった。お互い、腰痛には気を付けような」

「ははは、そうだな。またな、拓真」

「香織さん、私が教えた男の子を完全にオトすテクニック、使ってみてくださいね！」

「ええ分かったわ、それじゃ、またねロロちゃん」

などと、それぞれ思い思いの別れの挨拶を交わし、10分後、漸く全員が扉をくぐりぬけていった。あ、ちなみに健悟達はその後、ラファエロさんが元の世界へ送っていったそうだ。

死神の世界 本編 終了

終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会（後書き）

はい、死神の世界編の本編が終了しました！

これから死神の世界を舞台に二、三番外編の予定です！

番外編 朝 拓真とサリイと純白の翼（前書き）

はい、約1ヶ月振りの更新です。

いやあ、予想以上にGOD EATER BURSTの武器やら何やらが豊富なもんだから、つついり込んであっという間に1ヶ月経っちゃって……、小説が疎かに……。

今回は拓真とサリイの交尾がメインです。といってもほんとキスしてるだけ

後編も出来次第更新します、お楽しみに。

番外編 朝 拓真とサリイと純白の翼

ルファの襲来、あれから一週間が経った。

一週間が経つ中で、文化祭らしきイベントがあったらしいが、あえて詮索はしないでおこう。

エリイ、サリイ、マリイのハーピー三姉妹もようやく生活に慣れてきたようで、人前でも平気で抱き付くようになった。

……香織がハーピー三姉妹に変な事を吹き込んだな。きつと。何はともあれ、今日も平和な1日だ。

「ちよつ、ロロ！ いきなり抱きつくのは――」

『ふにやふにやあ』

「ちよつと待てみんな！ お願いだから待て！ い、椅子が……た、倒れるっ！」

いやあ……、今日も平和な1日だよ、全く……。

次々と抱きついてくる女の子達の衝撃に耐えきれず椅子が大破。

みんなが怪我しないように椅子だった木片を粒子に変えるが、無論優太君はロロさん達に押し潰されるようになるため、打撲が絶えないとか。

その後は流れとして、ロロさん達は自分の体重で自分の果実を押し付けて、さらに優太君の体のいろんな所に唇をあてがい吸い上げられ、あつという間に気絶する。こんな事が日常茶飯事になっているのだ。

「ぐちそつさま」

早くも健悟は朝ご飯をほとんど平らげて出かける準備をした。

「どこにいくんだ、健悟」

「…………お前には関係ないから」

優太君の質問に無愛想な感じに答えると、優太君の家を出て行った。後々、心を読んでみたが、剣の素振りをしていたようだ。

…………練習熱心で宜しいこと。

健悟君の僅かながら残したご飯はというと、紅がむしゃむしゃ食べていた。

…………自分のを食べている時より幸せそうに見えるのは気のせいだろうか？

「おはよう、拓真」

「香織か、おはよう」

俺達の寝室から、香織が寝ぼけまなこを擦りながら…………、

「お、おい！ ななな、何だよその、はっ、裸同然の服はっ！」

ブラジャーもパンティーも着けずにスケスケのカーテンをそのまま巻きつけたような服装でリビングに現れた。

「ベビードールって言うのよ。ロロちゃんから譲って貰ったわ、ユウタでヤレたからタクマくんでも”っで。凄いでしょ？」

香織は胸をいつかの真理亜みたいに持ち上げ、強調する。

それだけで頭が真っ白になり、何でもやっていいような気分になるが、太ももをつねり上げてそんな気分を振り払う。

最初からやってしまうと後々辛いからな。

「は、早く着替えてこい！ 朝っぱらからっ、い、いかがわしいも

の見えるな！」

「つれないわね……、まあいいわ、夜を楽しみにしてなさい」

そう言つて香織は再び寢室のドアノブに手をかけ、寢室へと消えて行つた。

あ、思い出した。優太君の子供達はこの時間、異空間の部屋で遊んでいる。

いくらリア充二代目と呼ばれる龍樺でも、まだ俺達や優太君達がイチヤイチヤしている所は見られたくないからね。

「おつはよう！ たつくーん！」

香織の次に起きてきたのは昨日のクエストで親しくなつたハーピー三姉妹の長女、サリイである。

「親しくなつたつて、よそよそしいなあ、あたし達は既に、こ・い・び・と、でしょ？ まさか、あんなことしてさあ、まだ赤の他人だと言つつもりなのかい？ ん？」

「いや、その、……すみません」

なんかやるせない気持ちになり、顔を逸らす。

サリイの目がキラリと輝いたと思つたら、いきなり頬に唇をあてがい、思いつ切り吸い上げたのだ。

頬を吸い上げられているのに、全身がむず痒くなり、ぷるぷると震え出す。

それからおおざっぱに数えて十秒後、サリイは唇を離し、俺の顔を

凄くキラキラした目で見て、俺の顔に何かついているのか？

「そつだよ！ たつくんのほっぺにあたしのキスマークがついているんだよ！ なんか興奮しちゃってさあ、もっとキスしていいよ――」

ちよつと待てと左手でサリイにアイアंकローを繰り出し、右手で手鏡を創造してさつき吸いつかれた左頬を確かめる。

……うん、サリイのキスマークがついているね。しかもはっきりと。俺はすっかり脱力し、両腕をだらんとする。

「ぶはあ！ し、死ぬかと思ったあ！ 息が出来なかったんだからな！ お詫びとしていっぱいキスさせるのは礼儀ってやつだよね！？」

サリイが凄く凶悪な笑みを見せる。脅されているんだなあ、俺。

「……好きにしてくれ、今の俺にや抵抗する気力はねえよ」

「じゃあ、いっぱいするからな、もし止めてって言っても止めないからな！」

サリイはうんしょと膝に跨り、にっこりと笑う。

……正直かなりドキツとした。いや、香織とのファーストキスよりかはマシだよ？ あの時は心臓飛び出たかと思ったもの。

そしてサリイはゆっくりと唇を突き出す。

柔らかかそうで形のいい唇はゆっくりと近づき、俺の唇と重なる。

その際、サリイは舌を入れ、とてつもないテクニックで俺の何か、……何かはつきりとわからんが、何か大切なものを奪われているような気がする。

そんな風に思っていると、いきなり唇を離し、ニタアと笑う。
……怖い。原始的な恐怖が心を掴む。

「そうでしょ！ そう思っちゃうでしょ！？ 何故なら私は理性を奪っているからね！」

理性？ そんなの意図的に奪える物なのか？

「じゃあさ、あたしもつと凄いキス知ってるんだけどさ、あたしとしてみない？」

心の中の自分に問いかけてみる。

……………。

「じゃあ……、少しだけ……」

「ほら、やっぱり！ いつものたつくんならきっぱり断ってたよ！
まあ、それが本心だからねえ？」

再び凶悪な笑みを見せる。これ以上俺に何を望むのか。

「よくぞ聞いてくれました、あたしはぎゅーっと抱きしめて欲しいの、あのキスは感情の高ぶりに任せて思いつ切りぶちゅちゅちゅちゅーってやつちゃうやつだから」

それが凄いキスの内容なのね、果たしてそれは本当に凄いキスなのか？ と疑問が生じたが、そんな小さな疑問はサリイを抱き締めたという衝動に上書きされ、次の瞬間がばつと抱き締める。

「ふああああああっ！！ き、キタアアアッ！ 今、この瞬間、

たつくんに思いつ切り抱き締められているうつつ！ あ、ああ、
嗚呼！！ あたしの中に、愛が！ たつくんの愛が満ち溢れていく
う！ 好きっ！ 嗚呼、好きよ！ 大好きっ！！ この感情の高ぶ
りが、留まることをしらないよおお！！」

「俺もだっ！ サリイの愛情がひしひしと感じるっ！ 好きだっ！
サリイ！」

感情の高ぶりが頂点に達したのか、サリイの唇に自分のそれを押し
付ける。

サリイも始めは動揺したが、だんだん感情が高揚し、ついにはサリ
イも舌を入れる。

二つの舌が淫猥な水の二重奏を奏で、それがただただ聞こえて来る
のだ。

聞こえて来るつてのは、優太君の妻達、その大半のメンバーがロー
ムラルカ城に出掛け、紅さんはサリイが頬に吸い付いた時から気絶。
優太君はたまたま休みだったミーノ姉妹に連れてかれて自室で襲わ
れている模様、その息子達は異次元の部屋で遊んでいる。

ロロさんはクスクスと聞こえてこない程度に笑いながら、洗い物を
終えて観察し、香織達は未だに起きてこない、と音源に成りうるも
のが無いからだ。

……くちゅ、ちゅむ——

まずい、これ以上キスを続けると……っ！ おかしくなる！ でも

……ずちゅっ、れろれろ——

どというワケだがやめられない！

そう思った瞬間、何かがブチリと音を立てて切れ、次いでサリイの大福を彷彿とさせる柔らかな胸を鷲掴みにし、ガシガシと揉みしだく。

サリイは吐息に嬌声を交じらせ、なんとか口を吸っていたが、だんだんと耐えられなくなり、遂には唇を離し、嬌声を上げて悶え狂う。

「お乳を揉むのは反則だよー！！ たっくんにお乳が当たっただけでドキツとするのにー！ もみもみされたらもう悶えるしかないよおー！！」

「……？？ まあいいや、それよりもさっき、俺の中で何かが弾け飛んだんだ。つまり、俺は俺じゃなくなってるから、そこんこ、ヨロシクツ！」

言下、サリイ達の一張羅である緑色のワンピース、そのバスト部分を腰のところまでずり下ろし、次いで俺の指がサリイの巨乳の先にあるピンクの部分をつまんでいた。

つまんだんじゃない、つまんでいたんだ。

俺の中にあるもう一人の拓真が暴走を始め、体に乗っ取りサリイの乳首をつまんだのだ。

……責任丸投げしてもいいよね？

「あひあう！ そこはつまんじゃダメえ！ そんなことされたら、あたし、ダメになっちゃう」

サリイの悲痛な叫びにいたずらしくなつて、サリイの大きなお乳に顔を近づけて、そのままチロチロと舐め回したり吸い付いたりする。サリイはますます悶え、遂には叫び出す。

「ひゃああああっ！ もうだめ、あたし、イっちゃうからあああ！」

そう叫んだ後、サリイは弓ぞりになり、背中から純白の翼が生えた。

「へへ、たつくんでいったら翼が生えてきちゃった、あの時は生えなかったのに」

「えっと……、今のサリイちゃんはハーピー？ それとも天使？」

「わかんない。でもたつくんが好きなら関係ないよ、あとさっきはよくもイかせてくれたね？」

そう言っていると、サリイは背中中の翼で俺を包み込む。

体の一部ではない、俺の全身をすっぽり包み込んだのだ、腕ほどもないその翼でだ。

「ああ、何故？ って顔をしてるね？ でも残念、あたしもわからないんだ。まあ、でもこうなったからには覚悟しなさい？ 何度でも、何度でもたつくんが果てるまであたしの中でたつぷりとイかせてやるから」

言下、サリイは思い切り抱き付いて――

――しばらくお待ちください――

「覚醒の雨」

ぼやけた意識でそのような声を聞いた気がする。次の瞬間、上から大量の熱湯が降り注ぎ――

「うあっちゃちゃちゃあああ！」

俺の意識は完全に覚醒した。

「なにすんだよ！　俺なんか悪い事したか！？」

回答は魔法だった。香織の魔法、突風の槍「ブラストスピア」が顔面に直撃、幸い顔面に風穴は穿たれなかったが、他の誰かだったら確実に穴が開いて即死だっただろう。

さらに香織は一言、

「二回死ねっ！！」

……お前が三回死ねよ。

そう思った直後だった。ガスガスガスと後方に轟音、見れば後ろに巨大な穴が無数に開いていた。相当ご立腹のようだ、香織の奴は……
……ってか、さっきの熱湯は一体何なんだ？

「言ってやんなさい、愛子」

「……… 覚醒の雨……… 情事に溺れた人のお仕置きバー
ジョン………」

香織が指示し、愛子が頬を朱に染めながら説明する……、どうやら熱湯の魔法は愛子の魔法らしい。

「その言葉から察するに、俺はサリイにメチャクチャにされていたんだろ？　な。で、そのサリイはどうなった？」

「もちろん、私が嚴重なお仕置きを下したわ。あそこまでメチャクチャにされると私の立場が無いからね」

うんうん、とひとりでに頷く香織、相当犯されていたんだな、俺。

「あ、私達今から買い出しに出掛けるけど、拓真も行く？」

「何を買った？ 俺は行かねえけど」

「服を買った。エリイちゃん達のね。あの子達、若草色のワンピースしか持っていないじゃない？」

確かに、一週間ずっとあのワンピースだったわけ……。

「だから、みんなの服を買ったと同時にエリイちゃん達の服を買ってあげようって話になったの」

「ふーん、そう、よく分かった、分かったんだけど、ドアの影に隠れている人は何？」

俺が扉に向かって指を差すと影に隠れている人の一人がビクツとなり、その後続々と女の子が扉の影から現れる。

「お前ら……、何がしたいの？」

『行ってきますのキス』

なんとも素晴らしいコーラスだ、が、内容は最悪だ。

「良いじゃない、ダーリン、キスくらい」

ね？ と言いながらキスするのはどうかと思うが……、と思いたかったが、みんなからの羨望の眼差しが……。

「やつぱり、しなきゃダメ？」

『もちろん』

はあ、とため息を吐きみんなに“行つてらっしゃいのキス”をしてやる。まあ、偶然最後だった桜はガマンできずに襲ったけど。そのせいで桜は再起不能になったが。

でもって再起不能になった桜を寝室で寝かそうとするが……、

「やーっ！！ 見ないでえええ！！」

サリイが首輪で壁に釘付けにされ、全裸でM字開脚している場面に
出くわした。

「ふええん……、あたしもうお嫁にいけないよお……」

「……いや、俺がもらうことに変わりはないが」

サリイはその言葉を聞いたとたん、すぐに泣き止み顔をきらめかせ
て問いかける。

「……本当に？」

「もちろん」

サリイは目に涙を浮かばせながら、「大好きい！」と叫び、純白の
翼を広げた。

それと同時に桜が復活し、ぴよこんと立ち上がる。次いで桜は今の
この状況に驚いた。

「うわ！ 真っ白な闇です！ 何も見えません！」

その声を聞いてサリイは桜の存在に気づき、

「へえ、さくちんも一緒かあ……じゃあ、一緒にやろうよ」

と、桜に対して言った。

桜はそれを聞いて急に服を脱ぎ始めた。

「桜！？ なっ、何服を脱いでいるんだ！？」

「いえ、ここは脱がない方がおかしいんです。早く脱がないと私が

脱がせますよ?」

テンパってる俺に対して、恐ろしいくらいに落ち着き払っている桜。しかも桜は今、とんでもないことをさらっと口にしたからな!？とりあえず急いで服を脱ぎ捨て、すっかりと全裸になった。

「うんうん！　じゃ、次はここにきて交わって」

いきなり交わってと言われてもなあ……、とりあえず近づき、深呼吸をする。

「……早くう、やってよお」

「私も忘れちゃダメです!」

「はいはい、わかりました。やればいいんだろ？　やれば」

こうして、香織達がお買い物に行っている間、俺と桜とサリィとでたくさん交わりました。

「た……、ただいま」

「お疲れ、どうだった?」

「腰がイタイ、の一言に尽きるよ、そっちは?」

「俺もだ。いや、俺は年中痛いな」

俺と優太君は同時にため息をつく。

「女の子は傷付けちゃダメって言われても、二人同時はマズいな」

「いや、俺は毎日八人同時にやってるから。さっきだって口口とラ

ルとフロルとで三人だ」

想像してみよう、相手はハーピー三姉妹。

.....。

「エリイ達に一方的に犯されるね。うん、間違いない」

「ははは、そうか、まあエリイ達だもんな！」

ははははは、と笑う俺と優太君。

その時、扉が開き健悟が帰ってきた。

「今戻った」

「おかえり健悟、お前はとうだった？」

「..... まあ、ぼちぼち」

健悟はそそくさと立ち去ろうとするが、優太君が呼び止める。

「まあ、話でもしないか？ どうせ暇なんだし」

「それもそうだな」

健悟はテキストに近くの椅子に座り、女の子達が帰ってくるまでの会話に交わる。

..... が、あまり会話が弾まず、あまりにも気まずい雰囲気香織達が帰ってくるまで続いた。

番外編 朝 拓真とサリィと純白の翼（後書き）

いかがでしょうか。

次回は焰野さんリクエストのお買い物、REDEXさんリクエストのロリ百合を組み込んでお送りします、お楽しみに。

番外編 昼 死神の妻とお買い物と亜人との交戦（前書き）

えーっと、戦闘描写を入れてみたところ、また分けることになりました。

……とことん計画通りにならない自分の人生。

番外編 昼 死神の妻とお買い物と亜人との交戦

拓真達が気まずい雰囲気で香織達の帰宅を待っている頃、その香織達はとある街道のとある店で服を買っていた。

「あの……、どうでしょうか？ 似合っていますでしょうか？」

「うん！ 凄く似合っているわ！ マリィ！」

マリィと呼ばれる少女、否、ハーピィはドレス姿ではに كان いた。

「さすがはロロちゃんのチョイスね、凄くカワイイ服ばかりで目移りしちゃうわ」

「でしょ？ さらに、ここには魔法薬も売っててさ、暗示薬、睡眠薬、惚れ薬などよりどりみどりの！ あと、……ちよつと耳貸してね……、ここによこによ」

ロロは香織になにか囁き始めた。

恐らくは何かアブナイ話なんだろう。

「ええ！ 退化薬！？」

「しっ！ 声大きい！ 通称が“ロリっ娘薬”って言うんだけど、ここ最近、禁制の品になってるの。ここで売られていることを知られたらこの店が潰れちゃうから、大きな声で言っちゃダメ。分かった？」

「う、うん。分かったわ」

「そんなことより、次は私の番よ、さあ、この私の可憐な姿に刮目しなさい！」

しゃっ、と音を立て試着室から姿を現したのは、チャイナドレスを

身に纏ったハーピー、エリイであつた。

エリイは「どうだ、お前等の美貌も私の前では色あせるのよ」と言わんがばかりに思いつきり胸を張る。

すると香織が近づき、チャイナドレスの切り込みから覗く生足を頬擦りし始める。

「凄いわ、凄すぎるわエリイ、あなたのチャイナドレスの切れ込みから覗く、その生足がとてもおいしそう」

香織はエリイの足を舐め上げ、恍惚とした表情になる。

そのエリイは背筋が凍り付き、顔が真っ青になり、後退りをしようとするが、香織がそれを許さない。

「なんで逃げるの？　もしかして、私のこと嫌い？」

「いや、そういうわけじゃ——」

エリイがそういつた瞬間、香織はエリイを押し倒し、服を脱がし始める。

「ちよつと、香織さん、これは売り物——」

「いいのよ、紅さん。お金ならいくらでもあるから。さあエリイちゃん、私が本物の女の子にしてあげるから」

その直後、香織はエリイの唇に自分のそれを押し付け、口内、舌先、その他諸々を舐め始める。

その様子を見てしまった紅は顔を真っ青にして震えていた。

女の子同士で破廉恥な事をし合うとどこかで聞いたが、まさか実在していたとは！

紅は二、三步後退り、尻餅をついた。
それくらい衝撃的だったのだ。

「ひあつ、やつ！　ちよつと！　そんなところ舐めないでくれますかっ！？　私が、私じゃなくなるわっ！！」

「あなたも私を散々舐めまわして私をおかしくさせたじゃない。今度は私が舐めまわしてエリイちゃんをおかしくしてあげるから」

直後、香織は自らの衣類を脱ぎ捨て、エリイに覆い被さる。

試着室は店の端っこに設置されているため、端から見ればエリイの足がバタバタ暴れているのが見られるだけなのだ。

「好きよ、エリイ。とっても愛おしい、私が残さず食べてあげる」
「カオリ様に食べて頂けるなら私……、ひあつ！　くっ、くあつ、ん、んんっ……、ダメ！　やつ、あつ、あん！　イヤっ！　ひゃっ！　あ、あつ、はん！　なんかくっ！　うっ、やつ！　やああああ！」

さつきまでバタバタ暴れていたエリイの足が、嘘みたいに動かなくなつた。

この状況を知る紅以外のメンバーはいつちゃったのね……、と溜め息をついた。

一方、紅はまわりのメンバーが一斉に溜め息をついたため、ますますわけが分からなくなり、涙も流している。

「一体、エリイさんの身に何があつたの？　なんでエリイさんは動かなくなつたの？」

「純潔な紅ちゃんには……まだ早いよ……、それより、紅さんはは買う服決めたの？」

「はい、私はこの服を買おうと思います。……どうでしょうか」

紅が取り出したのはピンク色のリボンが随所に施されたドレス、と愛子以外は全員笑ってしまうほどノーマルだった。

「ぷっ、あはははは！ 紅さん、あなたはオシャレといったらドレスしかないんですか？」

「いやっ、でも——」

「皆まで言わなくて良いわ、真のオトナファッションを知らない紅さんを私達がオトナっぽくコーディネートしてあげるから」

別にファッションに疎いわけじゃ、という紅を強引に香織のいる試着室の隣りの試着室に押し込め、稜が採寸（バスト、ウエスト、ヒップに直接触る、セクハラ以外の何物でもないやり方）をし、紅に合うサイズの多種多様な服を試着室に無理矢理押し込め、一着一着脱がせ（自分で脱ぎます、と言う紅の抗議を全て無視）、着せかえていく。

そして、試着室のカーテンが開かれて、愛子やマリイ、ロロは言葉を失う。

「こ、これは何？ これがオトナ？」

「オトナかどうか知らないけど、赤ずきんちゃんの服です。うん、実に清楚。清楚な女の子はオトナになってもモテるよ」

赤ずきんちゃん。自分が童話のコスプレをしてることが恥ずかしく思う紅、そんな紅に真理亜は追い打ちをかける。

「ダメよ、男の子は乙女の素肌が好きなの、だからそんな素肌が1mmも出ていないコーディネートは誰一人興奮しません。むしろブーイングの嵐ね、私ならこうするけどね」

真理亜は再び試着室のカーテンを閉める。

その三分後、試着室のカーテンが開かれ、これまた言葉を失う。

「こ、こんな露出度の高い服、恥ずかしくて着れません！」

「それがいいんじゃない、慣れればみんな自分に注目してるって優越感に浸れるわよ？ それに、その格好でアピールしてみなさいよ。ベッドにお持ち帰り、そして淫猥な――」

「健悟はそんな軽い人じゃない！」

「ビスチェはダメです！ 過激すぎて目に毒です！ 私に任せて下さい！」

このループが三回繰り返され、着せかえ人形と化した紅は遂に気絶してしまう。

「あゝあ、気絶しちゃった。まあいいや。それにしても真理亜さんは買う服、決めたんですか？」

「ええ、私はこれでダーリンを誘惑するわ」

真理亜は既に精算を終えていた様子で、胸に大きなスリットを施され、背中は大膽なまでに露出しているスパンコールのドレスを身に纏っていた。

「見えそうで見えないのが世の殿様方を欲情させるの、この服で街を歩いたら大概の殿様方は振り向くわ」

「その殿様方があまりいないのがこの国なんだよね」

口口のその言葉に真理亜は異常なまでに反応し、色々とりアクションを取るが最終的には大きな溜め息をついた。

「はあ、行く人来る人女の子ばかりだった理由が分かったわ……、やっぱり殿様方はいなかったのね。はあ、ダーリンはこの服装を見てどう思つかしら？」

「とっても大膽な服だと思います」

その声を聞き、真理亜を含む買い物メンバーは一斉に声がする方へと振り向く。その影は――

〔拓真 side〕

一方、あまりの気まずさに耐えかね、香織や口口さんもないことだし、龍樺達を呼び戻すか、って話になり、呼び戻した。

そのお陰で気まずくは無くなった、が、逆に少しやかましくなった。

「ねえねえ、けんご」

「ん、どうした？ 何か俺に用か？」

「受け答えが少し刺々しいよ、健悟。で、何かな？ …… 未亜ちゃんに、…… 夏那ちゃん」

『赤ちゃんがどうやってできるの？』

言葉を失う健悟と俺。

そりゃそうだ。あのアダルトな単語の数々をどう表現すればいいかわからないものね。

「なんで俺にそんなことを聞く？」

「だってお父さんに聞いたら『大人になれば分かる』ってあいまいなこと言っでごまかすから……」

「そうか、拓真、俺の代わりに答えてやれ」

「ええ！？ ヤダよめんどくさい、…… いいよ、やってやるよ。どうせ純潔な健悟くんには自重音が入るような事は言えやしないものね。……… というわけだから、チェリーな健悟君の代わりに俺が答えてやるよ。いいな、心して聞けよ、一度しか言わないから」

固唾を飲み込む未亜ちゃんと夏那ちゃん。

自分達の知りたかった事柄について知ることができるのだと期待の眼差しで見られている気もする。

ハッキリイッテ、カナリメンドクセエナア。

「いいな、赤ちゃんはな、キスし続ければいつかはできるんだ。ざつと十年くらいはするように」

『うん！ 分かった！ でもどんなキス？』

これを言葉にするのは難しい。

実演することにした俺は桜を手招きし、呼び寄せた。

「はい、どうしましたか？ 拓真さん」

「ああ、ちよつとね……、じゃあ二人共、今から俺が桜お姉さんにキスします、これはほんの一例なので、どうキスするかは任せます。……じゃ、いくよ桜」

「はい」と桜、思い切り深呼吸をし、桜の唇に自分のそれを押し当てる。

桜は最初ビクツとなったが、最初だけで次の瞬間からは身を預け、舌まで入れてきた。

フレンチキスで終わらせるはずだった俺は逆にビクリし離れようかと思ったが、気分が高揚して来て、『もつと濃厚なキスがしたい』って衝動に駆られた俺は、桜を抱き締める力を強め、桜よりもつと深く舌を入れて桜の口内、主に舌を執拗に舐めまわした。

三分後、ようやく満足した、俺と桜は唇を離し、荒い息の中で説明を再開する。

「はあ、はあ、これが、キスの……、ほんの一例……です」

「うん！ 分かった！」

言下、未亜ちゃんと夏那ちゃんは龍樺に向かって突進し、同時に抱きついて同時に両頬にキスをした。

龍樺は完全に同様し、「ふえええ!？」と叫声を上げる。

それが起爆剤になったのか、みんな一斉に抱きつきキスをする。

「……………いいのか？ あれで」

「いいんだよ、道を違わなければ」

「あれは当分続きそうだな、微笑ましい光景ではあるけど」

「それよりも、拓真さん、私、ムラムラとしてきちゃったみたい、昔はみんなから清楚って言われていたのに、今じゃ拓真さんにすぐ欲情しちゃう、拓真さんって麻薬みたい、のめり込んだら戻れなくなるし、人格形成も変えてしま——」

「分かった、分かったから、相手してやるよ。転移【テレポート】」

健悟と優太君は龍樺君が女の子達にいっぱいキスされる様子を遠巻きに見つめていくことにした。

俺は不運にも欲情してしまった桜の相手をするために、寝室で桜の相手をしてやった。

……………お陰で腰が痛い。

拓真 side out

「大胆な服だと思います」

場所は戻り、再びとある街道のとある店にて、真理亜の背後から何者かの声が聞こえた。

その声の主は——

『拓真！？』

そう、拓真であった。

拓真は少しはにかみながら、

「いや、服が欲しくなったからね」

と真理亜達に聞こえるように呟いた。

稜は目をキラキラと輝かし、「おにいちゃん！」と駆け出すが、真理亜が制止させる。見れば真理亜は不審そう眉をひそめているではないか。

真理亜は囁くよう稜に言い聞かせる。

「待つて、拓真の様子がおかしいわ。目の奥にやらしい炎が見えるわ。普通の拓真なら純粹で真っ直ぐな気高い炎が見えるはずよ、どんなに欲情していてもね」

「真理亜さんって目の奥の炎で人が分かるんですね、ってか目の奥の炎が見えるんですね。私には何も見えないんだけど」

「私は火の使い手よ？ 当然じゃない、今から拓真が本物かどうか確かめるから」

「どうやってですか？」

「こうやってよ。『鎗炎』！」

直後、真理亜は拓真に向かって腕を突き出し、鋭い炎を拓真に浴びせる。

稜は悲鳴を上げて、「おにいちゃんに何するの！」と叫ぶが、再び真理亜は制止する。

「やっぱり、この拓真は偽物よ」

「どうしてそんなことが分かるんですか！」

「もし、拓真が本物なら、瞬時に烈火の障壁【ブレイズシールド】を張って私の炎を吸収したはずよ。正体を現しなさい、そして私の気が変わらない内に視界から去るのよ」

さつきから炎に包まれている拓真、否、拓真の紛い物は、表面の擬態用の皮膚が燃え尽き、見るも冷酷そうな青い皮膚に変わる。

「うわっ、擬態用の魔法服がっ！ ええい仕方ない！ 力づくでもヤっちまえ！」

さらに数人、青い皮膚の亜人が現れ、一斉に襲い掛かる。

「物分かりの悪い子は嫌いだわ、獄炎傀儡！」

突如、地面が揺れ動き、亜人の動きが止まる。

そして、先程拓真に擬態した亜人が断末魔を上げながら炎に包まれ、呼び寄せた亜人に襲い掛かる。

「覚悟してね？ この魔術と敵対して生き残った者はいないから」

言下、炎に包まれた亜人が爆発し、その亜人は木っ端微塵に吹き飛ばぶ。

「この魔術は一つの生命を触媒として発動する禁忌魔術、アナタ達には過ぎた魔術だわ、でもね——」

真理亜は一度言葉を止め、深呼吸をする。次いで、真理亜が今までに誰一人として見せた事ない程の怒りの表情を見せる。

「最も愛する人で欺こうとした怒りが下賤なアナタ達にこの魔術を使わせたの」

真理亜が言葉を続けている間に巨大化していき、ついには5Mを超える巨体になった炎の傀儡子は雄叫びに似た咆哮を放つ。

青い皮膚の亜人はそれだけで臆病風に吹かれたみたく後退りをして逃走を試みるが、真理亜はそれを許さなかった。

「誰一人として逃がさない、拓真の姿を真似た怒りをぶつけきるまで、死なせない！」

炎の傀儡子が拳を振るう。亜人の一人が拳に呑み込まれ、一瞬で燃え尽き跡形も無くなる。

それを見てもう一人の亜人は胸にぶら下げていた笛を思い切り吹く。次いで真理亜の傀儡子が放った炎球で爆発と共に蹴散らされた。

「真理亜さん！ 落ち着いて下さい！ 敵は全滅しました！ 魔術を解除して下さい！」

「分かってる、分かってるけど、……制御出来ないの……！」

言下、真理亜の傀儡子が遙か遠方の山脈目掛けて『ガイアフォース』みたいな巨大な炎球を投げつけ、炸裂し、山脈が消える。

「お願いよ、稜。あなたの解除【デイスperl】でこの魔術を解いて！ この城下町に被害が出る前に！」

既に真理亜の傀儡子は山脈を消し飛ばす程の炎球を頭上にチャージし終えている。

稜はすぐさま呪文を詠唱し、解除【デイスperl】を発動、炎球諸共

傀儡子は消え去り、真理亜も緊張の糸が切れたのかその場にへたり込む。

「危なかったですね、真理亜さん、街に被害が出たら、危うく牢屋行きでしたよ」

「そ、そうね……」

二人が安堵の一息を吐いたのも束の間、今度は青色の皮膚を持つ亜人が無数に現れる。

「わっ！ わわっ！ たくさん出てきた！ 真理亜さん！ さっきの魔法をもう一度お願いします！」

「無理だわ、あの魔術は無双の強さを誇るけど、そのリスクとして丸一日魔術が使えなくなるの」

真理亜がそう言っている間にも、青色の皮膚を持つ亜人はジリジリと近づいてくる。そして、先頭の亜人が飛びかかる！

もうダメだと稜が諦めた、まさにその時、横から圧縮された水のレーザーが亜人を貫き、屍となって稜と真理亜の眼前にどさりと落ちる。

何事かと水のレーザーが飛んできた方向を見やれば――

「なんや、愛する義妹がピンチに晒されと思うえば、これほどまでにひどいとは……、手エ貸すで」

紅音を初めとする、香織の姉達が皆それぞれ艶やかな姿で立っていた。

「あら？ 香織の姿が見えないわね」

「あ、香織さんならさつきからエリイさんと試着室でヘンなことやってます」

「分かったわ、ありがとうね紅ちゃん」

楓はいつの間にか意識を取り戻した紅に礼を述べた後、嬌声の聞こえる試着室の前で足を止め、カーテンを開け放つ。

「香織！　いつまでレズっているつもりなの？」

楓の一言により、香織は正気を取り戻し、ピシッと立ち上がる。

「は、はいっ！　楓さん！」

「今、表で何が起こっているか、分かっているかしら？」

「わかりません……」

「でしようね、こんな閉ざされた所で女同士のシックスナインなんかやってるあなたには、わからないでしょうね」

「すいません……」

うなだれる香織、楓はこれ以上の追及をせず、香織の頭をぽんぽんと軽く叩き、につこりと笑って見せる。

「うん！　反省してるなら良し！　さあ、これから愛すべき義妹である稜ちゃんを救ってあげなさい！」

「はいっ！　香織お姉様！」

香織はしわくちゃになった、ピンク色したいつものＴシャツと黒いフリルのスカートを自分の風魔法で乾かし、表に出る。

「加勢するわ！」

「おう、香織か、流石に俺一人じゃ何ともならないと思っていたんだ、よっと！　土巨獣の足跡【ヘビモスタンプ】！」

詩音は先程転ばせた亜人目掛けて棍棒を振り落とす。亜人はバラバラに吹き飛ぶ。しかしながらその余力で街道がひび割れ、地割れなんか起きて（と、言っても後々拓真が全部直したが）亜人に動揺が走る。

「影の鉤爪【シャドークロー】」

「激流の巨砲【トールレントキャノン】！　喰らいや！」

「これでも喰らえ！」

「てえええい！」

「……滅びの雨」

「輝光の飛刃【シャインエッジ】！」

詩音以外のメンバーも張り切っているらしい、影の爪で攻撃したり、激しい水流をぶつかけたり、炎の矢を放ったり、稲妻を落としたり、酸性雨を降らせたり、光の刃を放ったり……。

香織もある魔法を発動させるため、ルーンを詠唱する。

「出でよ、すべてを凍てつかせる氷の巨龍よ、その力を以て全てを凍てつかせ！！　氷結の飛龍【コールドドラゴン】！」

直後、香織の眼前に魔法陣が表れ、密度の高い氷で作られた龍が現れる。香織は更に詠唱を続ける。

「我が氷の龍よ、我と己に仇なす者に永遠の孤独を与えよ、絶零の息吹【フリーズブレス】！」

香織の召喚した氷の龍が咆哮する。

亜人は竦み上がり、逃げ出そうとする者も出るが、その前に氷の龍はブレスを放ったため、全ての亜人は逃げ出す前に氷の中へと閉ざ

される。

「止めよ。突風の矢雨【ブラストレインアロー】」

香織は真上に手を掲げる。香織の上の空気が揺らぐ。

先刻拓真に放った突風の鎗【ブラストランス】を一回り小さくした物が次々と降り注ぎ、氷に閉ざされた亜人を穴だらけにする。

「爆ぜろ【バースト】！」

言下、氷塊が粉々に砕け、亜人は跡形も無くなってしまった。

「終わりよ、さあ、拓真達の所へ帰りましょう」

「そうだね、例のアレも買ったし……、夜が楽しみ」

「例のアレって何なの？」

『純粋な紅ちゃんにはまだ早いわよ』

その後会計を済まし、一樹や海斗、ジュディやメアリーと合流して拓真達の待つ優太宅へと歩みを進める。

因みに、青色の皮膚を持つ亜人は、小さな異次元の歪みから出てきたモンスターの一種らしい。

その歪みはとうに消滅しているが。

何はともあれ、一樹達が先に玄関へと入り行く。

その中、香織とロロはアイコンタクトを取り、凄くニヤケる。

これから繰り広げられる淫乱な宴を妄想し、薄ら笑いが止まらないのだろう。

香織やロロには極上の喜びの、拓真や優太にはこれ以上ない苦しみの夜が幕を開ける。

番外編 昼 死神の妻とお買い物と亜人との交戦（後書き）

次回こそは、本当に、ロリっ娘の、百合シーン入ります。

どうぞお楽しみ。

包み隠さず表現すべきか、オブラートに包んで表現すべきか……

なるべく早く更新しますね。

以下、次回予告。

オッス、オラ拓真。悟空じゃないぞ、拓真だ。

家で優太君の子供と戯れていた俺は、香織やロロさんの帰宅を知る。
にやにや笑う香織とロロさん、一体何が目的なんだ？

うわっ！ 香織よりも背が低くなってる！ しかも大事なアレが無い！

次回、番外編 夜 少女とレズの危険な化学反応！

く、来るなあっ！ 香織！

番外編 夜 ロリとレズの危険な化学反応（前書き）

死神の世界編、遂に最終回！ 最後はやっぱり、ピンクです！

これでもってくらいに濃縮100%、超濃厚なピンク、80%overです！

進むにつれてグッダグダになっていくのは目を瞑ってネ……。

拓真「もうこれって富士見ファンタジアの猫娘とかヤングマガジンの淫乱姉妹を大きく上回ったんじゃないか？ もはや殆ど十八禁……」

だが後悔はしていない。

拓真「しろよ！ あー、今回は今まで以上に露骨で、ガールズラブ要素満載です！ キャラ崩壊も否めない為、上記三つで一つでも嫌だなあと思う方は、戻るキーを押して下さい！ ショック死します！」

焰野さんすみません、今回、健悟登場しない上に最後の最後に紅と美由紀が出るだけの見事にチヨイ役です。

RED EXさんにもすみません、色々とキャラ崩壊してしまったかもしれません。

番外編 夜 ロリとレズの危険な化学反応

『ただいま〜!』

香織やロ口さん達が帰ってきた。龍樺君も愛する母親が帰ってきたためか、さつきから頬や唇、更には胸板まで吸い続けている愛美から逃げ出すためのなか定かでは無いが、上半身裸で所々にキスマークが付いている状態でロ口さんを出迎えた。

「おかえりなさい! おかあさん!」

「ただいま龍樺、……あれ? 私がいない間に何があったのかな? 龍樺」

「あう……、きゆうに夏那ちゃんと、未亜ちゃんが、ちゅってしてきて、そのあとに、みんながちゅってしてきて……」

そう説明している間にも、愛美を筆頭とする優太君の娘達が近づいてくる。

そして、龍樺君は抵抗すら出来ずに捕獲されてしまう。

「つかまえた! さあおにいちゃん、こづくりしましょ!」

「ダメ! りゆうかはわたしとこづくりするの!」

「あの、その……わたしとやったら、たのしいよ……」

「……………(ギュッ)」

「りゆうかはわたしのものです、こづくりはわたしのきよかをとるです」

「りゅうちゃん、いっぱいいちゅーしてこどもをつくろうね」

「りゆうか、わたしとちゅーをするんだ」

「ふにゅ〜。りゅう、ほっぺたがいい? それともおくち?」

などと、口々に言葉を並べながら唇や頬、更には胸板まで吸い付く。

「どうしたの？ みんな？」

『たくまおにいさんがじゅうねんくらい、きすしつづけければ子供がつくれるっていったの』

口口はしばらく啞然とするが、すぐに夜ご飯の支度を始めた。

「一樹から聞いたぞ、襲われたんだってな」

「ええ、まあ私が全部片付けたんだけどね」

どうだ、すごいだろう。あんたとは違う次元に私はいるのよ、と言わんばかりに胸を張る香織。なんとなくイタズラしたくなり、ぷにぷにとつついてみる。

案の定、顔を赤らめ胸を押さえ、「バカ！ どスケベ！ ヘンタイ犬！」などと罵声を浴びせる香織。

「ごめんごめん、触って欲しいかと思ったよ」

ちょうどその時、

「みんな〜！ ご飯が出来たわよ！」

と、口口さん。今日はやけに出来るのが早いな……。

まあ、腹が減ってたから別にいいんだけどね。

俺は「待ってました！」と言いながら席に着き、並べられるのを待った。

「はいはい、随分とお腹が減ったのね、拓真さんは」

「ええ、子供達とハチャメチャに遊んでいましたから」

「嬉しい、そういえば拓真も将来的には子供を作るでしょ？ 作るとしたら何人？」

「そうだな……、子供は欲しいよな、子供は愛の結晶だとか言うしね」

「そうだね、私たちも優太と肌を何度も重ねて、生まれきた愛の結晶だもの、龍樺や愛美達を見ていると、その子に対する愛だけじゃなくて、優太に対する愛も滲み出てくるものよ、で、どうするの？」

「一人ずつは欲しいかな」

「お盛んなこと」

「やかまし。人の事言えんのかよ」

「愛があるからいいの。と言うわけで今日はちよつとしたフルコースディナーを作ってみました、召し上がれ」

なんとも美味しそうなフルコースが次々と並べられる。

なんか知らないちよつと苦い野菜のサラダ、パンが浮いたコーンスープ、柔らかく煮込んだであるラム肉、甘い匂いを漂わすプリン、そして――

「なんで優太君のと俺のだけ紫色してるの？」

香織やロロさんが白ワインなのに対し、俺のや優太君のは、赤とも白とも取れない不思議な紫色っぽいワイン。

「いやあ、優太と拓真さんには凄くお世話になってるからそのお礼としてちよつと奮発してみました……なんて」

ははは、といかにも怪しい笑顔を見せるロロさん、腑に落ちないため、香織に聞かれるのを覚悟でテレパシーを使う。

（優太君、聞こえるか？ 頼むが、先にそのワインっぽい何かを飲

んでみてくれないか？)

(ああ、でも何で？)

(ちよっとね、悪い予感がするんだ。いかにも怪しい薬！　って感じ)

(気のせいじゃないのか？　拓真らしくない、どうした？)

(いや、ただの思い過ごしか？　スマン、忘れてくれ)

優太君、不審そうに眉を潜めるも、すぐにへらへらと笑い出し、ワインっぽい何かを飲み干す。その瞬間に異変が起きた、机に突っ伏したのだ。

優太君はゆっくりとこちらを向きながら、途切れ途切れの心の声で訴える。

(た……くま、お前の予感は……ただし……かつたな……)

(優太君！？　どうしたんだ！？　優太君！？)

そう呼びかけている間にも、優太君は白眼を剥いて気絶した。

「ぎゃあああ！　優太君が！　逃げるぞ、ああ、逃げるぞ！　何されるか分かったもんじゃ——」

「空気の縄　操り人形　【エアロープ　マリオネット】」

席を立ち上がろうとした瞬間、力が抜けて動けなくなる。

力を入れようとしても入らず、どこも動かない。まるで自分の体のコントロール権を奪われたかのように。

「そうよ、拓真。あんたの体をコントロール権は私が剥奪したわ！　これで名実共に私の物ね」

「残念だったな、俺に精神操作は効かない、今にお前を殴……れない！？」

香織は古風な貴族がしそうな高笑いを上げながら言う。

「あ〜れ〜？ 自由になってないじゃない？ まあ当然よね、あんたは精神操作じゃなくて神経操作されてるもの、その気になれば私のアソコを子猫ちゃんのようにチロチロ舐めさせる事も出来るのよ？」

と。

自分自身ですら気づかなかった盲点を突いて来やがる。つーか発想がアブナイ……。

そう考えている間にも、グラスを唇にあてがう。

そして、グラスの中に注がれているワインっぽい劇薬を飲み干す。

ゴクリ……。

その瞬間、ハデスの試練と比べたら生ぬるいが、それでも常人なら軽く気絶させられる程の焼け付くような痛みが全身を駆け巡る。

その痛みから、後ろに倒れ、後ろ向きに半回転して静止する。

「うぐっ……ッ、何を飲ませた……ッ！」

香織の魔法が解け、自由な顔をゆっくりと上げながら言う。

「退化薬、通称ロリっ娘薬よ、直に睡魔が訪れるわ、その眠りから覚めた時……、あははははは！」

不気味に笑う香織。それに連動して、女性陣は次々と多種多様な高笑いを上げる。

その時、空けられたピンク色の小瓶を見つけてしまった晃弥さん。

そのまま健悟君や紅さんや美由紀さんを引きずって、「俺たち午後
の鍛錬があるから」

などとありがちな理由を並べ、すっかり真っ暗な夜に慌てて家を出
た。逃げ出しやがったんだ、きつと。

「逃げ出したくもなるわね、これからこの家は禁断の花園と化すも
の」

なんだよ、禁断の花園って、言ったつもりだが返答が無い、おそ
らく声が出ていないのだろう。そこまで思考が回った時、ちょうど
睡魔が襲ってきた。

俺は女達の高笑いをバツクに意識を手放した。

.....ろ.....きろ.....起きろ.....、

「起きろ！ 拓真！」

その声で飛び起きたらしい、俺は優太君の顔に思いっきり顔をぶつ
ける。厳密には、唇と唇が触れ合ったのだが、あえてそういうこと
にしよう。

じゃなきゃ心が保たない

「.....！！ ゴメン！」

と思ったが、ショックが相当大きかったようだ、謝ってしまう。こ
の言動がさっきのハプニングキスをより鮮明に形作る。

ってか、なんでだろう？ 声のトーンが上がってる、眠る直前まで

正常なのに……。

「なあ、なんか言ってくれよ、ゆ、う……た？」

俺は心底驚いた、優太君だと思って話し掛けたその人は優太君ではなく、一人の幼女なのだ。

「優太君、だよな？」

「ああ………、そうだ」

優太君の額に手をかざし、アナライズと呟く。

うん、確かに名前は如月優に変わっている、詳細説明として《如月優太が幼女化した姿》とある。

「そうか……、やっぱり退化薬の作用か」

「退化薬？」

「ロリっ娘薬の正式名称らしい、全くこの世界の魔法はなんでもありだな」

はあ、と溜め息を吐き出しながら下を見る。

薄々気づいていたが、服を着ていない。眠っているときに剥ぎ取られたようだ。

そして俺の体には、あつてはならない小さな双丘と、なくてはならない息子がいない。

「なあ、優太君」

「なんだ？」

「女の子同士のキスって、えげつないな」

「なんで？」

「一瞬とはいえ、優太君を引き倒して、舌を入れ、優太君の口内を

俺の唾液でぐちゃぐちゃにしまった」

「……止めてくれ、本気で寒気がしてきた」

「……ゴメン、優太君、もう、歯止めが効かないみたいなんだ」

完全に欲情しきった俺は、始めに唾液で自分の人差し指を濡らし、優太君の胸に小さなハートマークを描く。

その後、無理やり優太君の口に人差し指を入れて、人差し指を優太君の唾液まみれにする。

それをうつとりとした目で見つめ、美味しいものを味わって吸い尽くすようにちゅうちゅう吸い上げる。

この時点で優太君は背筋を凍らせていたんだろう、指を離して、「これで間接キス……（はあと）」と呟いた瞬間、優太君は脱兎の如く逃げていこうとした。が、あえなく俺に捕獲される。

そして、優太君を振り向かせた後、「ハアハア、優ちゃん、ハアハア、柔らかい唇と、美味しーい唾液。全部食べてあげるー！（はあと）」と呟き濃厚なキスをしながら押し倒し、薄い胸をまさぐる。数分後、戸が開く音がして香織を筆頭とする欲情ガールズの面々が現れる。

「WOW!! なんて情熱的なキスなの!? ねえねえ! I es bian kissesした気分はどう!?」

「……ぶちゅう……、んく、んく、ぷあ……。もう、最高! 優ちゃんの舌が求めるように絡まってきて、それをぶちゅう、って吸い上げたら……。じゃねえ! 今すぐあんたに球をブチ当てなきゃ気がすまねえ! 火炎球【ファイアボール】!」

二つの苛立ちを手の平に込め、香織に向かって突き出す。

赤い火の球が香織に向かって勢い良く飛んでいく! しかし、香織はそれを素手で弾いた。

「何これ？ 新種のカイロかしら？」

「舐めやがって……ッ！ 弾ける豪火【バーンフレイム】！」

今度は、まあまあ大きな炎球を繰り出す。あれが着弾すれば、凄まじく爆発する火種が飛び散る！

……はずだった。

「……抵抗するのね。少しお仕置が必要」

水が渦巻く音、愛子が何らかの水魔法を発動しているみたいだ。本気じゃ無いのは分かる、しかし何故だろうか生存本能が身を引けと言っている。まるで自分じゃかなわないと言っているようだ。

「ふざけるな、ハデスの力を持つてしても勝てないのか！？」

「……その愛くるしい体を食すため……、行け！」

言下、巨大な水流が一気に襲いかかる。まずい、水は相性が悪すぎる。

「くっ……、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

俺と愛子は同時に魔法を放つ。

炎と水がぶつかり合い、蒸発。その繰り返し。

「幼児退行していても、冥王の力は厄介」

「ははは、まだ……だ……ッ！」

突如、頭に激痛が走り、蜥蜴の尻尾が途切れる。それは蜥蜴の尻尾を放ってから大まかに数えて10秒後の出来事だった。

「なっ……！？」
「チェックメイト」

直後、巨大な水のハンマーが体を奥の壁へ強かに打ちつける。
壁に打ちつけられた背中はもちろん、蜥蜴の尻尾を使いすぎたせいで……、

「うぐう、頭が割れるようにイタイ……！」
「それは、少ない精神力で、強大な魔法を使うから」

愛子は二、三度深呼吸をすると近づき、軽く唇が触れるようなキスをする。
頭痛が収まり、そこで初めて目を開ける。

「……、拓真」

その頬は少し紅くなった……、気がした。

「あなたは男、今は……、女」
「何が……、言いたいんだ？」

残念なことに、さっきのキスで機能するようになったのは目だけのようだ。体はうんともすんとも言ってくれない。

だから、愛子の言動ひとつひとつに恐怖せねばならないのだ。
ほら、恐怖で涙が一粒、頬を伝った。

「恐れることはない。あなたには少し気持ち良くなってもらっただけ、あなたの女体を淫らに開花させるの」

言下、左右の小振りな果実、それに付いてるピンク色の出っ張りを

口に含み、吸ったり舐めたりし始めた。

「ひあっ！ やめ、やめて！ そんなに吸わないで！ 舐めないでえ！」

いつの間にか叫んでいた。あたかもそれが当たり前のように。

えもいわれぬ喜び、快感が脳髓を直撃してゆさゆさと色んなものを揺さぶる。

愛子はニタアと唇を緩ませ、右手で右側の出っ張りを摘むように刺激する。

更に、愛子は三回に一度、思いつきり吸い付くようになったために凄い快楽が体を駆け巡る。

「ひああああっ！ やめて、やめてください！ わた、わたわた、私が私じゃなくなるう！」

これも思わず口からこぼれ出た言葉で、最早自分が自分じゃなくなりつつあるんじゃないかと思う。一人称が『私』だし。

そんな心を読んでか、愛子は唇を離し、またニタアと笑って足首を掴む。

んでもって、左右に広げる。ちょうど『エロテロリスト』と自称するあの人が良くやるアレっぽくなった。

恥ずかしくない訳がないこの格好に、もちろん、俺は声を張り上げ、抵抗する。

「やつ、やめてよ！ 愛子！ 本当にダメ！ とても恥ずかしい！」
「ふふふ、その恥ずかしさが開花の糧となる。痛くない。私が目覚めさせてあげる。女の一面を」

その抵抗も無意味に終わり、どこからかぴちゃっ、ぴちゃっ淫ら

な水の音が聞こえてくる。

それと同時に、突き抜けるような快楽が脳髓を揺さぶる。

それに……、俺の体が俺の管理下から離れたみたいだ。

俺の意志に関係無く、言葉が漏れ出し、体が動くのだ。

「ふふ、淫らに開花した、拓真の体。私の仕事はここまで、最後に私がとびきりのキスをしてあげる」

そこまで言うと、瞼を閉じ、唇を近付ける。俺もまた、愛子の唇欲しさに顔を近付ける。

やがて、二つの唇は重なり、どちらからともなく舌を入れ、口内を掻き回し始めた。

「ん……、ちゆる、んふ……」

「ん、んふっ……れろっ、くちゅ……」

そりゃあもう、愛子のディープキスは情熱的だった。

人は見かけによらないとどこかで聞いたが、愛子に関しては本当にそうだ。

まさか、冷静沈着で色恋沙汰に興味が無いってか嫌いな愛子がここまで情熱的になるなんて……、思いもしなかった。

「……ちゅっ、ちゅむ……、んう……くちゅっ……」

「……ん、ちゅ……、ふむ……、ぷあ……」

唇が離される、後に透明な糸が引き、2人の息を更に荒くさせる。

「……、拓真あ……好きい……」

愛子はここまで甘ったれた声が出せるのかと思うくらいの声を出し、

再び唇を近付ける。

そこでようやく体が動けるようになり、両肩を押さえて立たせる。身長差も力の差もさほど無い為、楽に立たせることができた。

でも、愛子はすごく不機嫌な顔をして、「嫌なの？」と言う。

俺は無言で首を横に振り、ただただ抱き締める。愛子も満足したのか、「拓真あ……好き……」と甘えるような声で連呼し、ひしと抱き締める。

「……あ、そうだ——」

愛子が最初にキスをしたときにふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「いつか愛子は男は嫌いって言ったよな？」

「ええ、今でも変わらないわ」

「じゃあ逆に女はどうなんだ？」

「好きよ、特にあなたのようなとても可愛らしい少女には、すれ違うだけで下着がぐちゃぐちゃに濡れる……、恥ずかしいわね」

ははは、マジですか、レズですか、でもってロリコンですか。

「拓真あ……、苦しいっ！」

愛子、突然俺を引き倒し、胸を顔に押し付ける。本音を言えば、小さい胸に押し付けられてもムラムラしないしむしろイタイだけだが、何故だろう、目の前にある突起物を吸ったり、舐め回したり、こねくり回したりしたい衝動に駆られる。その衝動を悟ったのか、愛子は顔を真っ赤にしながらかなり欲情した声で、

「拓真あ！ もう我慢出来ない！ 胸を弄くり回して私をイかせて！」

と叫んだ。

愛子が一番エロく見えた瞬間であった。それで理性を捨てた俺は愛子の小さい胸を舐め上げる。

愛子は「ひっ、ああああ！」と嬌声を上げながら、自分の胸に俺の顔を更に押し付ける。

が、愛子は元々非力なため、どっかの姉弟みたいに苦しくはない。だから、俺は舐め続けた。

女性が上半身で一番えっちな声を出す（と思う）、ピンと立っているピンクの出っ張りをあえて避けて舐めてみる。

すると、愛子はたまらずいやらしい声でねだるのだ。

「いやあああつ、じらさないで、拓真、もっと直接的な快楽を、私にちょうだいっ！」

その時の愛子は涎をたらし、恍惚とした表情の痴女丸出し、いや、レズ丸出しだった。

そんな愛子の痴態にかなり興奮したのか、

「なんてえっちな声なんだ、愛子……。分かった、聞かせてくれ、愛子のもっとえっちな声をたくさん聞かせてくれ……。ッ！」

思ってもいない言葉を口にし、愛子の要望どおり、俺は出っ張りを思い切り吸い上げたり、口の中で転がしたりしてみる。その度に愛子の口から艶めかしい声がこぼれる。それは俺の欲情を加速させる。その内に愛子が、

「も、もうだめ、たくまっ！　好きいいいい！　あはあああああッ！」

と断末魔みたいな嬌声を上げ、弓ぞりになる。愛子は満足げな顔をしながら気絶していった。

「はあ、はあ、イっちゃった？ ……みたいだね」

そう呟き、再び愛子の顔を覗き見る。

可愛い寝顔だな。

そう思いつつ、愛子の頬をぷにぷにしてみる。

ぷにぷに、ぷにぷに。

うん柔らかいね、赤ちゃんを彷彿とさせるくらいに。

そんな赤ちゃんほっぺに軽めのチューをして、頬擦りをする。だつてめちゃくちゃ可愛いんだもん。

「キス……する？」

そうやって頬擦りをしていると、愛子が意識を取り戻し、質問を投げかけている。

「……、元々気絶していない。ただ気持ち良すぎてしばらく余韻に浸っていたかっただけ。それより、するの？ しないの？」

「もちろん、させてください！」

言下、愛子の唇に押し付けるように自分の唇を重ねる。

愛子は少しびっくりしたが、幸せそうに目を瞑り、舌を入れて、絡ませる。

俺も愛子に負けないくらいに舌を舐めまわす。

こういったことが愛子が二度目の絶頂を迎えるまで続いた。

拓真 side out

優太 side

ありがとう。

これは今、拓真と愛子に投げ掛けた言葉だ。

想像して欲しい。二人の幼女が仲睦まじくキスをしている場面を。さっきの龍樺みたいに幼い男女がキスするのはなかなかどうして微笑ましいところがある。

しかし、今の拓真は幼いおんにゃのこで、愛子も当然おんにゃのこ。おんにゃのこ同士のキスは見ていて何かそそるものがある、と俺は思っんですよ！

……話が在らぬ方向へと思いつ切りズレたな。話を戻そう。

拓真が愛子に覆い被さって、愛子の唇を思いつ切り吸い上げている最中、俺達はようやく体を清め終え、いよいよ行為に移るといったところだ。

「その前に、私と……キス……して欲しいな」

ミヤが顔を赤らめながら近付いてきた。

「もちろん、来てっらん」

あの時と一緒に。まだ結婚していない時と。

俺はミヤの頭を軽く撫でて、キスをする。ただ、今回は……。

「んふ……ん、れろっ……」

舌を入れてきて、かなり濃厚なキスになった。

「んん！ ん、ふう、くちゅ……」

「ふむ、ちゅ……、れろっ、ちゅ……ぷあ……。ゆうたあ……」

ミヤ、しなだれかかるように抱きつくもんだから、大きな果実が派手に潰れる。

理性が軽く吹っ飛びそうになるが太ももを抓り上げ、なんとか耐える。

だが、そんなギリギリの状態で、追い討ちを掛ける存在が二つ。

「ミヤばかりズルいわよ。………私にも構ってよね。」

「私にも構ってよ！ 優太！」

後ろから、口口とユナが抱きついてきた。

おかげで前から後ろから大きな果実が……。

ムニユムニユ……

「はぁん……あ、ふう……」

ムニユムニユ……

「ん……、ふぁ……はぁ……」

艶めかしい声……、色々とデジャヴを感じる……。

しかし、六つのデカメロンが直接潰れるこの状況……。もうそろそろ理性とか限界……。唯一救いなのは、俺が女だという事か……。

「ん？ 何だろう、この水、とても温かくて……とてもムラムラする匂いがします」

「本当ね、欲情を掻き立てる、媚薬のようなこの香り……。何かしら？」

「優太、うっん、優のに決まっているでしょ！！ ふぁ……。良い匂い……。私達が抱き付くだけでこんなになるなんて……。エッチになったね、優。ほらこれも……」

そう言った後、口はクリクリと転がすように蕾を摘み出す。自分の意思と関係無く、艶めかしい声が漏れ出てしまう。

「あ、やつ、止めて！ 口口！ い、ひゃ、ひゃん！」

「優、そんなに感じてちゃ、これからやるお遊びの一つも出来ないわよ、私がきつちりしごいてあげるから、感謝しなさいよね」

直後、ユナがアソコを弄りだしたんだろう、下半身に甘美な刺激が立て続けに起こり、全身へと広がっていく。

「はうう！ ユナ、それダメ！ おかしくなる！」

「きゃっ！ 優から漏れ出す水がいきなり熱くなった。どうして？」

「もうそろそろいきそうだからよ。さあ、トドメを刺してあげる。ミヤも口を吸ってあげなさい」

ミヤは弾けんばかりの笑顔で「はい！」と答え、ゆっくりと目を瞑り、唇を押し付けようとしますが、「はい、止めー」という口口によって止められ、引き離される。

ユナも同様に「私がいさせるんだよ？」と言いながら引つ剥がす。

「二人とも、暴走したい気持ちは分からない訳じゃないけど、今は我慢して。後でいっぱいやらせるから」

二人は快く承諾し、また体を清め始めた。

……ってか、このロリっ娘レズの後はまだ何かやるのか？ 悪い気はしないが。

「二人になったね、優」

「ああ、そうだな」

「私ね前から優とやりたかった事があってね、『貝合わせ』って知ってる？」

ロロ、ここに来て満面の笑みを見せる。

それを見た瞬間、暖まるはずの心が何故か凍り付き、思わず身震いしてしまう。

まさか、これが先程の悪寒の原因じゃなからうか？

「知らないです」

「じゃあいいや、今からやってあげるから」

再びにつこりと笑って、大きく二歩下がる。

どうした？ と声を掛ける間もなく、ロロが「うにゃー！」と叫ぶ。すると、俺の体がふわりと宙に浮き、90度後ろへと倒れるように何かの力が働く。抗おうとしても抗えない。一体何が起きているんだ！？

「にゃっはっはっはー！ 最近力オリに教えてもらった、エアマッ
トの魔法だよ！ これでもう優は動けない！」

確かに、寝返りを打とうとしても、何かに力を全部削ぎ落とされ、寝返りを打つことが出来ない。手も地面に着くことはなく、魔力も幼女化した時から全然湧いてこない。

だから魔法も放てない。一体どうすれば？

「何も出来ないよ、ただ私に食べられるだけ」

直後、ロロが跨り唇を奪う。その際、舌を入れることは変わらないのだが、このキスはいつもより長く、いつもよりねっとりしていた……、気がする。

「……………ぷあ……………、とってもかわいいよ優、そして、これが『貝合わせ』だよ」

その後もロロは手を休めず、立て続けに責め立てる。

次にロロはアソコ同士が擦り合うように座り直し、ゆっくりと腰を動かし始める。

最初は何も感じなかったのだが、徐々に徐々に気持ちよくなり、何時しか手で直接弄られるくらいに気持ち良くなった。

「うひゃあ！ くっ……………、何これ、ロロ、とても気持ちいい！ こんな感じたことがない！」

「でしょ……………、だって……………これは女の子同士じゃなきゃ……………感じられないんだもん……………うくひゃあ！」

ロロが悲鳴に似た嬌声をあげる。もうそろそろ限界が近いんだろう。

「優だって近いよ、お汁が熱を帯びて来てる。さつきは中断させちゃったけど、今度は止めない、必ずイカせるから！」

腰を振る速度を速める口口。にちゅっ、ぴちゅっと卑猥な水の音が大きくなり、息を荒くさせ、艶めかしい声が次々と漏れ出す。遂には口口がぐったりと俺の肩に顔を乗せる、のだが、腰は止まらない。

……こうなってくると、執念を感じるな。

そう思っている間にも、快楽は蓄積されていく。

そして……。

「う……ふう、はぁ……、優ちゃん、先にイってるね……っ！ い、ひぁぁぁぁぁ！」

絶頂に叫び、腹部に液体が飛び散り、びちゅっとな粘性の液体が床に落ちる。

口口はそのままぐったりと体を全部預け、動かなくなる。

その息は荒く、涎も垂らしっぱなし。

そんな口口を見て、人知れず堪えていた感情の高ぶりが一気に爆発、結果として自分もイくことに……。

「あはぁぁ！ ……ゴメン、ユナ、ミヤ、もうイク……いひっ、あはぁぁぁぁぁぁ！」

俺もまた絶頂に叫び、体中の力が一気に抜け、意識を手離す。

その後、俺は男に戻り、ユナやミヤにこっそり搾られた事をこの時の俺は知らない。

優太 side out

「お休み、愛子」

ふう、と溜め息を一つ吐いて立ち上がる。

つい先ほど、愛子がいったのだ。

……キスだけでイクとは思わなかったなあ……。
「だぁぁりいいん！」

声がしたその瞬間、誰かが後ろから凄まじい勢いで抱きついてきた。イケない果実が派手に潰れ、息がつまりそうになる。この大きさは真理亜だな。さっきのダーリン発言もこれで結びつく。

とっさに蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を床に向けて放ったが、体格差やら勢いなんかがあつて、甲斐なく額を床に強打した。

次いで真理亜は俺が仰向けになるよう横に転がす。

その時、すらりと伸びた肢体や薄い胸、あどけなさを残す幼顔、さらには何一つ生えてない、綺麗に整えているアレが見えて胸が高鳴ったのか真理亜の目が輝き出し、ペロリと舌なめずりをした後、まるで理性を失った俺みたいに覆い被さる。

その時、偶然にも俺のアレと真理亜のアレが擦れ合い、互いの脳髓に快楽を植え付けて互いの口から嬌声が漏れる。

「ダーリン！ どうだった？ 愛子とのlesbian sexは」

「……英語っぽくしたらごまかせると思っただかよ、ああ、悔しいけど……、死ぬほど気持ち良かったね」

「でしょ！？ ただ差したり抜いたりするだけとは違う快楽があなたを襲ったはずよ？ 愛子があななのワレメを舐め回したり、乳首を吸い上げたり。それから生まれる快楽は、全部男の子じゃ分から

ない悦びよ？　そしてこれも、……はあん！　アソコ同士を擦り合わせることも女の子同士じゃなきゃ味わえないわ！」

真理亜、なんか知らないけど腰を振り出した。

それと同時に覆い被さった時と同じ快樂が脳髓を揺さぶりまくる。ヘタすりゃ氣絶するぞ、これ。

「ああん、まるで体が溶け合うようなとても心地良い気持ち、流石は口口ちゃんがやってた事だわ！　ダーリンと一つになっていくような快感……なんて素晴らしいのかしら！　もう2人でイっちゃおう、当初の計画ではみんなでイクって予定だったけど、もうそんなのどうでもいい！　私、もう我慢出来ないのよ！」

真理亜、さらに腰を激しく振る。その顔は、まさに性欲に支配された者の顔と言えよう。

そして、自分も……。

「っやあ！　真理亜っ、ダメっ！　ナニかくる……っ！　い、ひああああっ！」

あまりの快樂に何かがプチリと切れて、いろんな感情がなだれ込んで知らぬ間に叫んでいた。

体の力が全部抜けて、頭がぼーっとする。

氣付けば、俺は意識を手放した後だった。

『拓真！　どうして先にイっちゃうの！』

『真理亜さんも、どうして私達が体を洗い終わるまで待てなかった

の！」

『……見て、拓真が男に戻ってる』

『あら、何時の間にか復活しているのね、愛子。ってか本当に戻っているわね、どうしてかしら』

『そんなことはどうでもいいの！　今はおにいちゃんの私達に対する種まきについて考えるべきよ！』

『なら、これを使う』

『ナニコレ？（二人の声）』

『拓真の頭の中にある情報を元にして作った。この中にとっても強力な媚薬を調合したから、拓真は一定時間疲れることなく種を蒔き続ける。さっき口口さん達に実験をかねて渡した。効果は実証済み』

『凄い！　どうしてそんなことが出来るの！？』

『液体に関する物なら何でも作れる、それに私の能力はサイコメトリー、拓真の記憶を抜き取ることなど簡単』

『なるほど、そうと決まれば……』

いっただきまあす……。

「うわあああつ！」

だああああ！　なんつー夢だ！　あのまま行けば、間違いなく陵辱ルート突入じゃねえか！

「でも事実。拓真は精根尽き果てるまで種を蒔き続けた」

そんな心の声を聞いてか、愛子がいきなり耳元で囁いた。もちろん、俺は驚いて飛び退こうとしたが、しっかり跨られて動けない。

「なにそれ、夢才ぢゃないの？　雰囲気からして」

「???」

「ごめん、意味が分からないね、悪かった。とりあえずリビングに行きたいんで退いてくれないかな?」

さつきも言ったとおり、今、俺の上には愛子が跨っているのだ。

端から見れば、可愛いしいなあとか思うだろうけどね、当人は凄くツライのよ、理性とか、理性とか、理性とか。

「嫌。私に接吻してくれるなら退いてあげる」

そうですか、そう来ますか!

はああああ、と息を吐きながら頭をかきむしる。そして半ば強引に愛子の唇に自分のそれを重ねた。

愛子も普段の無表情が一気にほぐれて女の顔になったようだ。

その証拠に愛子が自分から舌を入れて来た。

「ん……くちゅ……じゅる……ぷあ……、拓真……、あなたってかっ●え●せんみたい」

「いや、例えが分かりづらいんだけど?」

「つまり、あなたと交わると、止められ無くなっていつまでも続いていくし、止まらなくなっでどどんエスカレートしていく。まさにそんな存在なの、それに……これも」

言下、愛子の下で存在を物語るアレを握り締める。瞬間、心臓が止まりそうな心地よさに包まれる。

「つか下ネタかよ! だんだん恐ろしくなっていないか、愛子のヤツは! さつきのキスもAVに出てきそうなキスだったし!」

そう思っていたら、愛子は顔をいきなり近づけ、一言、衝撃的なことを呟く。

「こんなに勃たせて、いやらしい人」

……と。まさに意表を突いた一言と言えよう。

ってか、軽くSめいてないか！？ さっきの一言！ 何かさっきから愛子、冷酷な笑みを浮かべているんだけど！？

愛子はさらに言葉を続けていく。

「何でこんな事になったの？ 私とキスしたから？ 私の胸が当たっているから？ それとも、私が跨っているから？」

言い切った後、アレを撫でながら誘うような愛子の冷たい視線が自分の挙動不審な自分の視線と重なる。

ドキリと心臓が跳ね上がり、凍りつく。

猛禽族の目と言っただろうか、なんかいつもより鋭く突き刺さるような眼光。

こんなにまで愛子を恐れたことはあっただろうか？ いや、ない。こんなの初めてだ。

……つか、さっきから愛子、マシンガンのように言葉を放ってる、本来の性格って、冷静沈着、本当に寡黙な性格だよな？

「余計な事考えない。それにしても、あなたのモノは本当に私を突き刺したいって、私に語りかけている。アナタはどう？」

薄々気付いたのだが、これって俗に言う、『言葉責め』ってヤツじゃないのか？

愛子が責めている方で、俺が責められている方。

マズい、このままじゃ間違い無く、耐えきれなくなっちゃった♪

みたいなパターンになるじゃねえか！

どうにか止めねえと！

「したいんでしょ？ 手に取るように分かる、あなたの気持ち」

言下、再び愛子は顔を近付かせ、

「変態」

と、呟いた。途端に俺の中で何かがぶつつりと切れて、何故か涙が零れ落ちた。

愛子は会心の笑みを浮かべて「他愛のない人」と聞こえるように呟いた後、距離を取り普段は穿かないはずのスカートを捲った後、誘うように語り掛ける。

「そんな変態に朗報、あなたがはっきりと具体的に私としたいって言ったら、あなたの好きなようにしてイイよ。あなた、女の子に誘惑されるのが好きな変態だものね。女の子に誘惑されるとすぐに押し倒して交尾しちゃう盛りの付いた犬っころだもの。早く言わないと、一人でイっちゃうよ？ あなた、一緒にイきたいんでしょ？ 私と一緒に」

言い切った後、愛子はニヤリと笑い自らの恥部をショーツの上から優しくなぞる。

軽く嬌声が愛子の口から漏れる、が下唇を噛み締めてこらえているみたいだ。

いかにもＡＶにありそうな扇情的な光景に思わず生唾を飲み込んでしまう。

「聞いたわよ、生唾を飲み込む音。私が欲しいんでしょ？ 早く言いなさい、愛子が欲しいって、じゃないと私、一人でイっちゃぶ

うつ！？」

一瞬の出来事だった。愛子が奇声を上げたと思ったら、既に壁のそばでのうち回っていたり。

そして、俺の両隣には二つの威圧感が……。

「愛子、さっきから聞いてれば、薬の力を借りてんじゃないわよ！それでも大山四天王の一角なの！？」

「解除【デイスペル】！愛子さん、止めて下さいね。拓真はあくまでニュートラルじゃないといけないから」

「……分かった。ごめん」

なんか知らないけど、俯く愛子、まるでさっきとは別人みたいだな。

「そうよ、さっきの愛子は魔法薬の作用で生まれた別の人格よ、分らなかったの？ バツカじゃないの？」

「もういいでしょ？ じゃあ愛子ちゃん、いつものようにおにいちやんを誘惑しちゃって！」

愛子はコクリと頷き、再びベッドの上に向かい合うように座り込む。次いでクルリと半回転し、お尻をいやらしく突き上げた後、スカートを捲りながらショーツをずり下ろした。

……………まさか。

「おいで拓真、私が拓真を気持ち良くしてあげる。私の凍えきった心はあなたの進む真っ白な愛で解けゆく。拓真のじゃなきゃダメなの、受け入れる準備はとうに出来てる。拓真の有りっ丈の愛を私に頂戴！そして私に拓真の子供を孕ませて！」

言下、これでトドメだと言わんばかりにちゅ……。

「なっ……、何やってんだ!? 愛子!?!」

「目を逸らさずに見て、私のココ、ひくひくしてる……。拓真の事を考えるだけでこの有様なの。さあ、私のココを貫いて、それが拓真の今すべき事!」

そう言った直後、愛子の秘所から淫らな水が滴り落ちる。

その光景を目の当たりにした瞬間、面白いくらいに理性の糸が切れちゃって、気付けば俺は本能のまま愛子達を喰らい尽くした後でした。

俺って……、流されやすいのかな?

「良いのよ、拓真は、私達の、性奴隷なんだから、これくらい当然なのよ」

はああああ……。本日二度目のあからさまな溜め息を吐き、立ち上がる。そして着替えの服を持って脱衣所へと転移、服もまあ、魔法で消して、扉を開けた途端……。

「あっ……」

紅さんと美由紀さんに出会ってしまった!

もちろん、風呂場であるため、二人ともタオルを纏っただけのあられもない姿であるからして……。

「美由紀、そいつを捕縛しといて。いつでも処刑出来るように」

「そうですね、という事ですので拓真さん、素直に捕まってくれませんか? 痛くしませんので」

紅さんは凶悪な笑みを浮かべながら近付いてくる、美由紀さんもまた無表情だがゆっくりと近付いてくる。
そして質問の答え。決まっている。答えは――

「転移【テレポート】」

逃げるに決まってるだろう！

「あつ待て！ 逃げるな！」

怒る紅、思い切り手を伸ばす……が、伸ばしきる前に転移を終え、難を逃れる。

だが数分後、何故か紅さんが転移先に現れ、急いで二度目の転移、が、またしても数分後に紅が現れ……とかれこれ七日間は安息の時はなかった。六日目にして魔力が尽き、逃走を余儀なくされたが、何故かいつも先回りされ、七日目にしてついに矢で胸を貫かれ、あえなく冥界送りになりました。
即刻ラグナロクで復活しましたが！

死神の世界編 番外 END

番外編 夜 ロリとレズの危険な化学反応（後書き）

次回、新章突入！ 今度は魔法の世界がロボットに侵略されていくのを拓真達が阻止するお話です。

次回 機械の支配する世界編 プロローグ 時空の狭間

今度はプロットを立ててやってみようかな……。

プロローグ 時空の狭間（前書き）

おひさです！

久々にシリアスな予感です！

プロローグ 時空の狭間

〈前回までのあらすじ〉

優太と健悟達の助けを借り、異次元の歪み、及びルファの撃退、S級クエストの達成をし、さらにはエリィを始めとするハーピー三姉妹も仲間にした拓真。

天界でお茶会が開かれたりもして、退屈する日は1日たりとも無かった。

そんなある日、エクスカリバーが次の扉を見つけたと言う。

そして最後にしたかった記念撮影を終えた拓真はそれを二枚複製して、それぞれ優太と健悟に渡す。

満足した拓真は透明な鍵を使い、長閑で平和な生活に別れを告げ、新たな世界へと旅立ったのだ。

並行世界の脅威を取り除く為に……。

〈拓真 side〉

目の前で、光が収束していく。

ついさっきまで光の部屋にいたからなのだろう、辺りが真っ暗で何も見えない。

きつと薄暗い所なんだろうなと自己完結するも、10秒経とうが30秒経とうが、1分経つても真っ暗。

とりあえず他の意見、一樹の意見を聞こう。

「なあ一樹、薄々感づいているんだが、ここってやっぱり……」

「どうやらそのようだね。僕だけじゃなくて、君まで見えないんじゃない、ここは真つ暗闇なようだね」

一樹が言い切ったその瞬間、誰かに抱きつかれて少しだけバランスを崩す。

抱きついた誰かはふわぁと言って笑っている。

この香りに声、もしかして……。

「ふわぁ……」 この抱き心地にムラムラさせるフェロモン、間違はなくおにいちゃんだぁ」

……稜か。稜はこんなに暗い空間で間違える事なく頬擦りしてる。

「えへへ、おにいちゃん、ちゅうしょうよ」

「良いけどさ、分かんのか？ 唇の位置とか」

「分かるよ、うっすらとシルエットしか分かんないけど。それで十分だよ。いくよ？ んちゅう」

言下、右頬に吸いつかれる感覚。

…… 本当は見えてないんじゃないのか？

「わざとだよ、おにいちゃんにキスマークを付けたかったんだよね。じゃあ、おにいちゃんの大好きな“ちゅうちゅうキス”しちゃうからね」

ちゅうちゅうキス。それは優太君の世界で編み出した、稜の必殺技。赤子のようにちゅうちゅうと舌を吸いまくる凶悪なキスだ。

……と、説明している間に唇が……、いつされても強烈な快樂が脳髓を揺さぶる！

「こんなにしちゃって……、じゃあ例の如くにやんにやんしますか」

稜がそう言った瞬間、絡み付くような風が稜を引つ剥がす。この風はまさか……。

「いや！ おにいちゃんにやられたいの！ サリイちゃんがにやんにやんしないでいいの！」

「そう言わないでさあ、私ってば1日一回、たくちゃんやりーやんとにやんにやんしないと眠れないんだ、協力するよね？ うん、ありがと！」

稜が抗議の悲鳴をあげる中、布が引き裂かれる音が聞こえ、嬌声が聞こえてくる。

おそらくサリイが後ろからもゆもにゆんって直揉みしてんだろうなあ、途中で嬌声がくぐもったからキスされてんだなあと思ったりしている。

何？ 妹があんなことになってるのに助けはないのか？

いや、稜も嫌がっている訳じゃないし、サリイもにやんにやんしないと眠れないらしいし……。

何はともあれ、そろそろ光が欲しくなった為、上空に向かって持続性の激しく燃える炎球を放つ。結果と言えば、周りの人達（エッチな事してる稜達とか胡座であくびしている一樹とか後ろで襲い掛かろうとしている香織達とか）が照らし出されただけで、後は真っ黒だった。本当に底が見えないのだ。

「ははは……、ここは宇宙か何かですか？ 何にも見えないんですけど」

「ふああ……、そだね」

「それより私は拓真を貪り——」

「鼻息が荒いぞ、鎮まれ」

香織を言葉で一蹴し、どつかと腰を下ろし、頬杖をつく。

その時だ、一樹が異変に気づいたのは。一樹は俺の体を揺さぶり視線の先を指差す。

「おい、あれ、何か光ってないか？」
「ん？」

俺は目を凝らして光を探す。頭上の炎も消した。数秒後、確かに光が見えた……、気がする。

「本当だな、おいみんな、あそこに光が見えるだろ？ あそこに向かって走るぞ」

「ちよっと！ 私達との暗中セツ——」

「うっさい！ 黙って走れ！ 先行くぞ！」

とりあえず、盛りの付いた雌ネコ共を無視して、光の先へ突き進む。速度を上げ、ぐんぐん加速していく。遂には誰も追いつけなくなる速さになってひたすら光の先へと突き進む。

数秒後、視界が急に真っ白になり、その数秒後には広い空間に出る。

「……ここは、どういう世界だ？」

「時空の狭間じゃよ」

突然声が聞こえ、思わず戦闘態勢を取る、が直ぐに無害な老人だと知ると戦闘態勢を解く。

「あんた、誰だ？ ここはどこだ？」

「ここは時空の狭間、本来なら何人たりとも立ち入ることが出来ない世界、忘れ去られた虚無の世界じゃ、そしてワシは……名乗るで

もないただのおじいさんじゃ」

言ってることが矛盾だらけだ、特に、“名乗るでもないただのおじいさん”なら、ここの世界について詳しい説明は出来ないはず、このオッサン……なんか秘密があるんじゃない……。

「ほうほう、連れの方々がお見えになられたようじゃ。あ、紹介は要らんぞ、ワシは全て知っておるからの。さて、そろそろ全員集まる頃合いじゃろう、どれ、本題に移ろうかの」

「本題って？」

うむ、と言い謎のおじいさんは真剣な顔付きになる。

「今、並行世界全体に何が起こっているか……、分かっているかの？」

「各地に異次元の歪みが現れ、各地に影響を与えているんですよ」

「うむ、そうじゃ一樹。じゃあなぜ異次元の歪みが現れているか、分かるかの？」

「……、考えた事無いな。エクスカリバーからは仕組みを教えてもらっただけだから……」

「そうか……、異次元の歪みは世界融合【フュージョンワールド】の前触れに過ぎないのじゃ」

『フュージョンワールド？』

珍しくこの場にいる全員が素っ頓狂な声を上げた。世界が融合するなんてあまりにも非現実的な事に頭がついていけないみたいだ。

「つまりじゃな、無数に点在するパラレルワールド、そのパラレルワールドが一つにまとまってしまっくんじゃよ」

「……それは大変な事なのか？」

「そうじやとも、海斗君！ かつて起こった、恐竜種の絶滅やノアの大洪水はこれが原因なのじゃよ！」

「なっ……！ 下手すりやそのうち人類滅亡、ってワケかよ！」

この、俺の軽率な一言により香織達の間には衝撃が走り、ざわめきが広がる。

「そんな……、私達がそんな規模の大きい事に首を突っ込んでいたなんて……」

「こ、怖い……、世界全体がこの手に掛かっているなんて……、考えたくないよお、おにいちゃん……」

「まさか、最愛の人について行ったらこんな運命が待っているなんて……サリイお姉様……、私……」

「大丈夫、大丈夫！ たくちゃんやりーやん、かおりん達が頑張ってくれるさ、私達はちよちよいとサポートすればいいんだよ」

老人はうむむと二度頷き、朗らかな笑顔を見せる。

「そうじや！ 気に病むことはない！ フュージョンワールドは基本的に不定期じゃが、大体三億年に一回くらいじゃからの」

「でも、前兆は既に現れている」

「そうじやの、何者かが外部から並行世界の秩序を乱したからのお、今までにない未曾有の出来事じゃ、だから君達は招集されたのじゃ」

うお、かなりデ・モンアドベンチャーみたいな展開、選ばれたのか？

「そうじや、だが今の状態じゃ主犯格を倒し、並行世界に平和を取り戻す事は不可能に等しい」

「そうなんだ……、やっぱり修行だー！！ ……みたいになるのかな？」

「そうじゃな。まあ修行も兼ねてこの世界を救って来ると良からう」

老人は踵を返し、後ろの壁に向かい歩き出す。

そして、壁まで歩くと老人はいきなり壁に手を当てる。するとどうだろう、老人が手を当てた所を中心に扉が徐々に姿を成す。

この世界に来てから驚かされる事ばかりだ。

「これが……次の世界に続く扉なん？」

「そうじゃ、この世界は既に十中八九異次元の歪みから現れた機械の兵団に侵略されているのじゃ。このままではこの世界が大きく変わってしまうじゃよ。そこでお前たちにはその侵略網を打ち砕き、兵団の親玉を破壊してきてほしいのじゃ」

「了解、じゃあ、行こうぜ！ みんな！」

俺はみんなを連れて扉を開けるため扉に近付こうとする。しかし、老人は扉の前に立ちはだかった。

「ストップ！ 待つのじゃ！」

「何だよ！ 言い忘れた事があるなら早く言ってくれ！」

「この扉はな、八人までしか受け入れないんじゃ、八人以上入ったら虚無の空間を永久に彷徨うことになるぞ」

その老人の一言は、俺達を震え上がらせるのには十分過ぎた。

沈黙が俺達を包み込む。

「……ヤバいな、それ。一樹、どう決めようか？」

「やつぱりじゃんけんで決めるほか無いな」

一樹がそう言ったおかげで、女達の肉団子戦法（一斉に全方位から抱き付き、なんだかんだで悩殺させる戦法）を受けずに済んだ。

果てしないあいこの末、俺と稜、一樹に海斗、それと香織、紅音、詩音、楓が行く事になった。

『……………うう……………』

悲しそうにしている真理亜以下じゃんけんで負けた人達八名。見ていてとてもかわいそうだ……。

「あー、可能な限りの事なら一つだけしてやらんでもないが？」
『ホント！？』

子犬のように膝にすがりつくメアリー、ジュディを除く真理亜以下六名。

もし彼女達に尻尾があるのなら、ガンガン振ってるんだろうなあ。一体何をねだってくるのやら……。

『行つてらっしゃいのキスをさせて？』

見事なコーラスを奏でる真理亜以下六名。

その内容は俺を震え上がらせるのに十分過ぎた。

「……………舌入れない？」

『入れる！』

「……………はあ、わかったよ。一列に並んで待っていてくれ」

一分前とは比べ物にならないくらいに元気になった真理亜以下六名。

「行つてらっしゃい、ダーリン、半年分の愛情をあげるわ」

「あ、ありがと。俺も半年分の愛情をあ、あげるよ——んぐっ!？」

……。

「拓真さん、どうかご無事で」

「ああ、ありがと——んぐっ!？」

……。

「拓真……んちゅ」

「んぐっ!？……ちゅ」

……。

「行つてらっしゃいませ、タクマ様。どうか無事に帰ってきて下さいまし」

「ああ、必ず帰る——んぐっ!？」

……。

「お力添え出来ず申し訳ないです、タクマさん。私はここであなたの無事を祈ってますから」

「心配せずとも無事に帰るよ——んぐっ!？」

……。

「最後はサリイちゃんの番だね、果たしてキスだけで終わるかな?」

「なっ!？サリイちゃん、それはちょっと——んぐっ!？」

直後、キスされながら押し倒されてＴシャツを引き裂かれる。ちょっとおいたが過ぎるんじゃない？

「ぐふ、ぐふふ、たくちんの体、たくちんの体……」

「へ、ヘルプミー！」

「……仕方ないなあ、雷撃！」

一樹はサリイに向かって指を差す。

瞬間、稲妻が迸り、サリイに直撃する。が、それは俺を感電させるのに十分過ぎた。

「ぐああああ……！」

「あ、調整間違えた」

「バカ兄貴！ いや、最早馬鹿としか……」

ああ、意識に霧が掛かる。そういや唇奪われてばかりだなあ、気絶したまま次の異世界かあ、と思いながら意識を投げ出す、その時ちようど水が降ってきて、視界がはつきりしてきた。

「気絶しちゃダメ、あなたはまだやるべき事がある」

愛子の覚醒の雨か。すぐさま飛び起きて扉の前に立つ。

「モテる男はかなりツライな」

「いや、全くだ」

「それよりさ、あんた下半身がすごいことになってるわよ？ 四人のご奉仕を受けちゃう？」

「遠慮しとく。んじゃみんな……、行ってくる」

『行っってらっしやい！』

俺の言葉に素晴らしいハーモニーで答える真理亜以下六人。
そのハーモニーに送られながら扉のノブに手を掛ける。

「準備はいいな？」

「ええ！」

「うん！」

「勿論！」

「ああ！」

「どんとこい！」

「殺るぜ！」

「いつでも行けますよ？」

ドアノブを回し、扉を開け放つ。

そして一歩、足を踏み入れる。

世界を救う、冒険の扉が再び開かれる――。

ブローグ 時空の狭間（後書き）

次回、機械の支配する世界本格始動！

ただでさえ女子率高いのにまた更に女の子追加！

そろそろ男子も出さなきゃなあ。活報も覗いて下さいね！

第一章 女性の悲鳴（前書き）

シリアスが続いています。

このままギャグもはさみつつシリアスを続けられたらなあ、と思っています。

第一章 女性の悲鳴

光が目前で再び収束していく。

次の世界は優太君の世界のような世界らしい。

ガス灯、低い建物、馬……。

一つだけ違う所があるならば、一人たりとも通行者がいないことか。

「見て呉れは優太君の世界と似てるんだね」

「どうやらその様だ、……もしかすると優太の世界から派生した世界なのかも知れんな」

「それにしても人っ子一人いないわね……ってか、あんたはナニと戯れてんのよ」

「ん？ 猫だよ、可愛いだろ？」

ホレ、と言いながら香織の眼前にさっきまで戯れていた真っ黒な猫を突き出す。

香織は直後に不機嫌そうな顔をし、そっぽを向く。

「何よソレ！ 野良猫じゃない！ 汚らしい！ どっかにやりなさいよ！」

「ハア、これだからぼんぼんは困るんだよね、野良には野良の可愛さがあるのにねえ」

「そうそう、おにいちちゃんの言うとおりだよ。かわいいねえ。のらちゃん」

ゴロにゃあゝと猫は鳴き、首を振る。その際、首輪に付けられていたであろう鈴の音が鳴り響き、この猫に飼い主がいることを知る。次に猫はぐるぐると嫌そうな鳴き声を聞き、そこで抱っこが嫌いな事を悟る。引っかかれるのも難なので即座にして地面に下ろし、

謝罪の念を込めて顎下を撫でた。

猫はにやあゝと媚びるように一鳴きし、臍辺りに自分の頬を擦り付ける。

これはマーキングという習性で、これは自分の縄張りだ！ とか、ご主人様大好きニヤゝ……、みたいな時にフェロモンをなすりつける行為らしい。つまり、俺は大層気に入られたらしい。

「さあ、飼い主が心配してるだろうから、飼い主の元へお帰り」

猫は今まで以上に尻尾をピンと立て、器用に自分の唇を俺の唇に押し付けて路地裏の闇に溶けていった。

「まさか、猫に唇を奪われるとはな」

そう言つて笑いあつている最中、女性の悲鳴を耳にする。

その方向へ振り向けば、煌びやかなドレスに身を包んだ黒髪で黒眼、二十歳前後の女性が、悲痛な声を上げながら、彼女の数倍はあろうかと思うほどの大きさの右手に長剣、左手に拳銃を持った十体の機械の兵士から逃げていた。

「目標発見、目標発見。直ちに排除せよ」

「嫌！！ 誰か！ 誰か助け——きゃっ！！！」

女性はとても可愛らしい小さな悲鳴を上げ、派手に転んだ。

その際、スカートがめくれ上がり、白いレースの下着が見えたのだが、見なかった事にしてあげよう。

そんなこんな変な事を考えている内に、女性は物の見事に囲まれていた。

機械の兵士は無慈悲にも、か弱い女性に銃口を向ける。

そして、拳銃の引き金が引かれ、残虐な弾丸が彼女の精神を打ち崩

す……、まさにその時、一節の炎が一体の機械の兵士目掛け一直線に突き進み、胸部を貫き、爆破させた。
他の機械の兵士は一斉にこちらを見るが、一体、また一体と破壊され、五体にまで数を減らす。

「ナ……何者ダ！」

「鉄くずなどに、名乗る名前なんて無エ！」

そう言いながら、右手に黄金色の装飾に包まれた、神々しい光さえ放つ【約束された勝利を呼ぶ栄光の剣】エクスカリバーを、左手に殆どが黒の装飾で埋め尽くされた、原始的な恐怖を呼び覚ます【確定された破滅を招く闇黒の刀】ラグナロクを転移させ、近くにいる機械の兵士を斬り伏せる。

「バカナ！ 鋼鉄ノ鎧ヲ軽々ト！」

「バカなのはアンタ達よ！ 風が鋼鉄を貫く事を知りなさい！ 突風の鋭槍【ブラストスピア】！」

次に香織は空気を圧縮して作り出した槍を機械の兵士にぶつける。
見えない槍をその身に受けた機械の兵士は胸部に穴が開き、沈黙した。

「ナ、何ガ起キタ！？」

「壊れた以外に何があんだよ！！」

詩音が岩石から作られた棍棒を機械の兵士に振り下ろし、真つ二つになり爆ぜる。

虚を突くように機械の兵士が爆煙の中から斬りかかってくるが、分かっていた詩音は爆煙から現れた直後に岩石の棍棒を投げつけて貫いた。

「ア、アリエナイ。人間如キ二瞬ク間ニ全滅サセラレルナンテ……
イ、急ギ皇帝様マデ連絡セネバ」

「おっと、そうはさせねえぜ？」

いつの間にか海斗は蔓草を足に絡ませて飛び出そうとしている機械の兵士を地面に釘付けにする。俺はその機械の兵士の頭上まで跳び、渾身の力で一刀両断。

そのまま機械の兵士は爆ぜ飛びそして、軽やかに着地しながら二つの剣の鞘を作り出し、エクスカリバーは背中の鞘、ラグナロクは腰の鞘に収めた。

「大丈夫か？ 怪我は無いだろうな？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます。……それにしても、よくもまああれほどの高位魔法を放てるものですね、どこの国の育ちなんですか？」

「……えーっと」

回答に困る質問だ、と思った。

このまま正直に日本と答えれば、困惑させるだけでなく、もしかしたら怪しまれ、牢獄行きも有り得ないわけではない。

（拓真、何でもイイからテキトーに答えなさいよ）

しかし、彼女も俺達と同じように異世界の住人なら？ ……賭けてみる価値はありそうだな。

（さっきからぶつぶつぶつぶつ、何言ってるのよ？）

「日本です」

「日本!？」

「ちょっと！ 私の質問は無視するワケ！」

煌びやかなドレスに身を包んだ女性は、目をキラキラと輝かせて身
を乗り出した。

「ご存知ですか？ 日本の事を」

「知ってるも何も、私の育った国も日本ですよ、東京の秋葉原周辺
にて、男の子と女の子。2人の子供の面倒を見ていたの、特に男の
子の方は……」

言い終えた直後、体をくねらせる女性、どうやら自分の世界に入り
込んでしまったようだ。

「あのー、すみません？ あのー！ すみません！？」

「ハッ！ すいません、弟の事を思い出すといつもこうなるのです。
紹介が遅れたわね、私はフィリア王国の女王セリーヌ、あなた達の
名前を覚えていただけないかしら？」

「俺は拓真、で右となりにいるのが妹の稜、反対側が香織、その隣
がその義兄であり俺の親友、一樹だ」

「海斗だ。以後お見知り置きを」

「んで、ウチから順に紅音、詩音、楓や。よろしゅうな」

「はい！ 宜しくお願いします！ 早速ですが、私のお城に来てく
れませんか？」

「ええ、是非行きたいわ」と楓、さすがに今後の拠点は確保したい
ところだ。

「では、馬車の土人形【ゴーレム】！」

言下、地面の石畳が軟化し、グニャツと浮き出た後、徐々に馬車の

塊を成してきた。

恐らく、彼女は土系統の魔法が得意なのだろう。

「完成しました、中はとても広いですので存分にくつろげるはずです。馬車に乗って下さい」

そう言いながら、自分の作り出した馬車に乗り込もうとすると、突然崩れだし、セリーヌを派手に転ばせた。

その際、またしてもスカートが派手に捲れ上がり、純白の下着を見事にさらけ出した。

……俺の見間違いでなければ、少しシミが付いてた気がするが……。……
「……っかセリーヌが「見た!？」って言いたそうに、涙目で睨み付けている。とりあえず首を振っとこ。」

……つと、そんなことを考えている暇はない、何者かの襲撃を受けたんだ、敵はどつかに隠れ、既に第二撃の準備が出来てるはずだ。

「見て、きつとあれが馬車を破壊した犯人よ!」

楓が馬車の残骸の先を指差す。そこにはボウガンにそのまま手足が付いたような機械が既に装填した矢をセリーヌに向かって放っていた。

多分アイツもさっきの奴と同じ機械の兵士だろう。

「チツ! 伏兵か!」

すかさずセリーヌの前にテレポート、迫って来る矢をエクスカリバーで叩き落とそうとするが、

「クツ、間に合わ——」

瞬間、機械の兵士が放った矢が吸い込まれるように胸を貫き、叩き落とそう鞘から抜いたエクスカリバーを取りこぼしてしまう。さらに、先程のボウガン兵が呼び寄せたのだろう、次々とボウガン兵が上空に現れる。

「い、イヤああああ！」

『拓真！！』

「ぐうう……、こんなもの！」

俺は先程胸を貫いたボウガンの矢を無理矢理引っこ抜く。その傷は瞬く間に消え、痛みも消えて服に穴が開くだけとなった。そして、三度エクスカリバーを装備して、真上に掲げる。

「輝光の雨【シャイニングレイン】！」

瞬間、エクスカリバーから一筋の光が放たれ、弾けて降り注がれる。その光は次々と上空のボウガン機械兵を破壊していく。

「すごい！ 精神力の消耗が激しいから発動を躊躇うあの輝光の雨を躊躇いなく放つなんて！ やっぱりおにいちゃんはすごい！」

「ハア……、ハア……」

「流石、の一言だね。あれだけの大群を一蹴するなんて、拓真にしか出来ない荒業だね」

「何を言う、アイツに出来て俺に出来ないことなどない…… ってか拓真、なんか顔色が悪くないか——」

ドサリという音が脳内に響く。多分、俺が地面に崩れ落ちたんだろう。

きつと、致命傷の治癒やさっきの魔法で使い果たしたのだろう。

「ちよつ、ちよつと！ 拓真！ しつかりなさいよ！ —— 精神力使い果たしたのね、まったく…… 情け無いたらありやしないわ！ し、しょうがないから、私のを少し分けてあげるわ！ 感謝しなさい！」

数秒後、しつとりとした柔らかい物が押し当てられる。それが唇だという事を理解するのにはさほどの苦勞もなかった。

先程までひどかった頭痛、目眩、吐き気などが嘘のように治まり、数秒後にはぱちくりとまばたきを繰り返し、ぴよこんと飛び起きる。

「いやあ、済まなかったな、香織。面倒掛けさせちまってよ」

「どうってことないわよ、あんたの情け無い姿を見たくなかっただけよ」

あんなに（雰囲気の流れされたとは言え）淫らに乱れまくってた後も未だ健在なツンデレっ振り。ある意味すげえよ、香織。

「よし、セリー又さん、城のおおよその座標を思い浮かべてもらえますか？ 俺が読み取ってなんとかレポートさせますんで」

「そんな事が本当に？ …… 分かりました、私はあなたを信じます」

セリー又はゆっくりと目を瞑る。俺はセリー又の肩に手を優しく置く。アビリティ『解析【アナライズ】』の効果により、城の座標が頭に流れ込んで来た。

「みんな、俺の肩に手を置いてくれ」

肩に手の温もりと重みが徐々に大きくなっていく。みんなが手を置いたのを確認すると「レポート！」と叫び、一瞬視界が暗転した後、気付けば城の中庭にいた。

「よし、着いた！ ここには機械兵はいないな、ようやく一息つけるな」

「ええ、ここは城を中心とした半径30キロメートルに電気信号をめちゃくちゃにする結界と強固な城壁、それを包むように張られている防護結界がありますから、それにしても、あなた達の魔法には不思議な所がいっぱいあるんですね、世界の違いを感じますわ」

「そんな事言われても分からねえよ、早く城の中入ってぐっすり寝たいんだけどなあ」

「では、入りましょうか、そこで会話を交えながらお茶でもいかがです？」

「良いわね！ 早く入りましょう！」

楓はそう言ってセリーヌを押すようにして城内へと入っていった。その次に疲れた様子の詩音と紅音が、その後に一樹と海斗が、最後に香織に手を引かれ、俺と香織、その他メイドや執事が城内に入っていく。

この世界に訪れてから最初の戦闘は圧勝という素晴らしい形で幕を閉じた。

第二章 セリーヌの追憶（前書き）

今回はセリーヌの過去についてのお話です。

拓真に何らかの接点を持つセリーヌの正体とは!？

第二章 セリーヌの追憶

「うわっ！ ヤケに広いなあ、流石は王女の城やな」

「ええ、王室の間は特に見られますからね、ここは特に華やかにしなければ……と父親に言われましたから」

先程のセリーヌの言葉の通り、ここは王室の間。

何処からか濃厚なバラの香りがして、それがこの部屋のやんごとなき雰囲気のことさらに引き立てている。

しかし、本当にどこにも見られない芳香剤の存在。バラが飾られているわけでもないのに……、この香りはどこから……？

「気にすること無いわよ、……ちょっとムラムラするけどね」

そう言えば、さっきから香織の鼻息が荒い。

まあ、いつものことだろうと、香織の事だ本心はいつもムラムラしてんだらうと思い、ノータッチで事を進める事にする。

「そう言えば、あなた達はこの世界と違う世界から来た、と言いましたね？」

「そうとは言っていないが、まあ、そうなるな」

そう言ってしまったら失礼な気もしないでもないが……、セリーヌも気にしてないらしいし、まいっか。

「では、ここ最近の世情を知らなければならぬですね」

「そうね。まずは事の始まりを教えて貰おうじゃないの」

セリーヌは「それは6ヶ月前の出来事だったわ」と、遠い目で話し

始めた。

「その日の朝、まだ日の上り切らない時だったわ、清々しい一日が始まる……そう思った矢先だったの、上空に突如として黒く大きな穴がガラスの割れるような音を伴って現れたの」

「それが最初の異次元の歪みね」

「え、ええ、その異次元の歪みからまず機械の王様みたいなとても大きな人型の機械が現れたわ。その機械は四方八方に機械を散蒔いていったの」

それはセリーヌにとって思い出すことすら忌々しい光景なのだろう、知らず知らず肩を抱いていた。

稜はセリーヌの様子を敏感に感じ取り、赤子をあやすように背中をさする。

「怖かったの？」

「ええ、怖かったわ。私の騎士が次々と薙ぎ倒され、黒鷹の便りにより隣国が次々と攻め落とされた事を知る。それに捕らわれた国民は先程の巨大な人型機械——自らをガラドボルグと名乗っていたわ——に機械にされて無理矢理戦わせてるわ」

「だから城下町があんなにも閑散としていたのか」

沈黙するセリーヌ。気まずい雰囲気が俺達を包み込む。

「その……、ガラドボルグってヤツを片づければ、万事解決なんだろう？ 早く倒しに行こうぜ？」

そう言った瞬間だった。唐突に誰かの腹の虫が鳴き、調子を狂わせる。

「おい……誰だよ、緊張感に欠ける奴だなあ、全く」

「……、ごめんなさい、三日三晩何も食べてなくて……。まずは昼食を取りませんか？」

「ええー！？……まあ、腹が減ってはなんとやらと言っしな、メシにするか」

香織達の口から歓声が上がる。

みんなも同じように腹を空かせていたみたいだ。俺の腹の虫もまた、餌を求めている。

『いただきます！』

明朗な声が辺りに響き渡る。

セリーヌは太っ腹にバイキング形式で食事を用意してくれた。

が、次の瞬間には俺や海斗、一樹や詩音までおかずにありついていた。

作法とかルールとかまるつきり無視した食べ方に、セリーヌの笑顔もひきつつている。

「コラ！三バカトリオに詩音お姉さま！ディナーはがつつくものじゃないのよ！」

「だってよお、これ全部うめえんだもん」

「あらあら、とても豪快な食べ方ね……、喜んでいようで私も嬉しいわ」

がつがつ、がつがつ。

他人の迷惑もつゆ知らず、一樹も海斗も鬼の形相で次々と食べ物を

平らげていく。

その勢いに俺も詩音も気圧されておずおずと席に戻る。

その内に何種類もあったバイキング形式のおかずは全て二人の胃袋に収まってしまった。

「お前ら……、ちと食い過ぎじゃあなかろうか？」

「すまない、拓真。お前も食いたかったんだよな」

「謝るならセリーヌさんに謝りなよ、一口も手を付けてねえんだ」

見ればセリーヌのにこやかな笑顔の裏に黒い何かが垣間見えた。

「いえ、お構いなく。一樹さんと海斗さんには少しお仕置き部屋へ
と行って貰いますが」

セリーヌがにこやかに笑いながら首を傾げると、一樹、海斗の二人は近衛騎士隊の二人に腕を掴まれ、半ば強引に引きずられる形で退室していった。

数分後、彼らの悲鳴が城内に轟き渡ったのは言うまでもない。

「あの、誰か料理を作る人はいませんか？」

セリーヌの問い掛けに沈黙する一同。

所詮はボンボンか、召し使いに料理させてるから料理なんか出来ないんだ、ざまあみる。

俺はちよつと得意気に手を上げる。

「え！ 拓真が……料理！？ 考えられないわ……」

「では、拓真さんに任せます」

「分かりました、姫殿下、和食でいいでしょうか？」

「お願いするわ」

セリー又はにこやかな笑みで答えた。
俺も笑みを返し、調理場向かった。

〈調理場〉

なるほど、現代日本のステンレス製キッチンとは違って、タイルに包まれた古代西洋のキッチンもなかなか粋なものだな。

この近くに、食材を貯蔵するための空間があったようだが、今はもぬけの殻だ。何一つとして食材がない。

機械兵が出始めてから食材が採れなくなっただけに違いない。

パチンと指を弾き、食材を違う世界から呼び寄せる。

米、味噌、タマネギ、白菜、揚げ豆腐、茄子、そして魚。秋刀魚にしよう。見る限り水道は通ってないから水もいるな。

よし、これでもいいモノは作れる。

「さて、ちゃっちゃと終わらせるか」

手近にあった包丁を手に取り、本格的な料理を始める。

米をしっかりと研いで釜で炊きこむ。

一時間しっかりと炊き込めばちゃんとした米飯が炊き上がるが、待たせるわけには行かない。

指をパチンと鳴らして釜の中だけ時を進める。見事に炊き上がり、米飯の完成。

次に魚に下準備を施し、また指をパチンと鳴らす。魚を包むように激しく炎が燃え上がり、皿に盛り付ければ秋刀魚の塩焼き完成。最後にタマネギと白菜、揚げ豆腐、茄子を適当な大きさに切り、鍋にぶち込む。

水もたっぷり入れて、釜戸にセット、指を鳴らし着火。時を進めて味噌を投入。さらに時を進め、味噌汁の完成。

アバウトなんて言ってくれるな、時間がないんだ。

しかし、米飯と味噌汁を多く作り過ぎたな……。

斯くなる上は秋刀魚の塩焼きを複製、次いで茶碗に米飯と味噌汁をよそって、盆の上にそれらと秋刀魚の塩焼きを乗せる。それを1セットとして考え、7セット目で味噌汁、米飯共に尽きた。本当に計画通り行くものだな。

さて、これをどうにかして王室の間へと運ばないとな。

とりあえず、機内食を運ぶ際にお馴染みのアレを呼び出し、全部乗せた後再びテレポートする。

みんなの反応が楽しみだ。

〈王室の間〉

「ん、早かったわね。まさか王族相手に手抜きしてないわよね？」

「してねえよ、ただ魔法は使ったがな。待たせるわけにはいかなかったからな」

「あ、そ。さっさと渡してくれば？」

香織は不機嫌そうにそっぽを向く。直後にお腹の虫が鳴り、頬を染める。仕方がないなあ、と思わせるような溜め息を吐き、指を鳴らして全員（一樹、海斗は未だ帰っていない）に行き渡るようにテレポートさせる。

「どういうことなの？」

「ああ、作りすぎちゃってさ、みんなにも食べて欲しいな……って」

「そ、そうだったの。どうしても言うなら仕方なく食べてあげ

るわよ！」

そう言った直後、腹の虫が再び鳴る。

香織はもうたまらないといった感じで食べ始めた。

「それにしても、拓真さんの料理は美味しいわね、見直したわ」

「ホントホント、すげえ美味いぜお前の料理」

「たかが庶民料理と思うてたけど、考えを改めなアカンな」

「庶民の味ナメンな。ボンボン。……………お味の程は如何でしょう、
姫殿下」

「うん、ありがとう、とても美味しいわ……………」

あれ？ セリー又が泣いてる……………、何故だ？

「そのね、この料理が弟の作る料理と寸分違わずおんなじで、それで少し涙が出たの、ごめんなさい、場を取り乱したみたいで」

「気にするな。それよりも、そのように溺愛する弟とやらがどの様な人間か、教えてくれないか？」

海斗の問いに「ええ」と答え、弟について語り始める。

その目はとても遠くを見ていた。

私の弟は血の繋がってない義弟なんだけど、それなりに楽しく暮らしていたわ。

彼はどこまでも優しくて、姉妹思いだったわ。

妹とも血が繋がってないんだけどね。

彼との出会いは雨ふる夜、孤児院のすぐ近くの四つ辻だった。

その時孤児院は何者かに襲われた後で、パトカーが走り去っていく

のと、男の子と女の子が這い出るのをみたわ。

それも、男の子は額に大きな切り傷が刻まれていたわ。

私は直ぐに救急車を呼んだ。程なくして救急車は到着し、2人は搬送されたわ。

手術も無事終わり、数日後には2人とも面会可能になったの。

私は毎日2人に会いに行つたわ。

最初は大切な物を失つたみたいで心を閉ざしていたけど、だんだんと心を開いて、たわいない会話が出来るようになったわ。

数ヶ月後、退院を許され、私は2人を引き取つたわ。

それから毎日が楽しくて活気付いたものだわ。

そうして早くも五年が経ち、2人とも立派に成長した。

私にしてあげられるのはここまで、と思った私はここを出て行く事に決めたわ。

妹が寝静まつた夜、弟にこう提案したわ、「最後に心も体も一つになろう」って。

弟は喜んで飛びついたわ。何も知らずに、ね。

気付けば弟は気絶しかけていたわ、私のはだけた胸の内には可愛い弟の頭……、淫らに蕩けきつたその瞳は私にキスをしてっせがむように見ていた。

だから私はキスをした。とても濃厚で情熱的なキスを。

弟はぐったりして私にもたれかかってきたわ、だから私は弟に呟くの、「どんなに離れていても、愛してる」って。

弟はそれを聞いて安心したように気絶したわ。

その後、私は2人に忘却の呪文をかけた。

余計な悲しさを感じさせないようにね……。

「そつなのか……。俺の過去とその弟の過去、よく似てるというか、そっくりそのままというか――」

「嘘！？ 貴方の名前をもう一度聞かせて！ 名字も！ 全部！」

セリー又はいきなり肩を掴み、ガクガクと揺さぶる。

そんな中でどうにかこうにか大原拓真と答えると、揺さぶるの止めて下を向く。

何事かと思い、顔を覗き見ようとしたその時。

「たっちゃん！」

と呼ばれ、凄い勢いで抱きついた。

無論、女性には生物学的に男性が惹きつけられる二つのたわわに実った禁断の果実……、胸。

俗称おっぱいが、彼女は世間一般より大きかった。

ドレスの膨らみが景気良くつぶれているため、その様子が嫌と言うほど分かる。

「こらー！！ おにいちゃんに抱きついて良いのは私だけなの！！」

そんな事を考えていると、不意に稜の叫び声が聞こえる。

セリー又はふふん、と笑うと稜の方向へと向き直りそのまま抱きついた。

「え！？ ちょっと、まっ——」

「あなたも立派に成長したわね稜ちゃん、あなたの記憶も直ぐに戻してあげるから」

慌てて離れようと暴れる稜を意にも介さず、そのまま無理矢理唇を奪う。

最初は抵抗ばかりするも徐々に抵抗を止め、終いには自ら唇を押し付ける始末。

数分後、稜はパタリと倒れ、セリー又はこちらに向き直る。

そして、俺に再び抱きついてくる。

「うふふ、たっちゃん、身構えなくても良いのですよ?」

「稜の身に何が起こったんだ?」

「一度に大量の記憶が流れてきて、稜ちゃんの精神力が耐えきれず
気絶したんだわ」

なるほど、毒か何かの類じゃあないんだな。

「そうだよ。じゃあ、目を瞑って……記憶を取り戻させてあげる」

「ちよつと! 私抜きで話を進めないでくれる?」

「心配ご無用、たっちゃんの記憶を呼び起こすだけだよ」

「そうじゃない! あんたは私に断りも入れずに拓真にキスするの
かって話よ!」

それを聞くと、セリーヌはムツとした顔になり、香織に抗議の声を
上げる。

「さつきから、聞いていれば、たっちゃんを私有財産のように扱っ
て、あなたは拓真の何なのよ!」

香織は、よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりにない胸をそらし、
得意気に語る。

「ふっふーん、良いこと? 私はね、そこにいる、デカイ乳に挟ま
れ、鼻の下をでろーんと伸ばし、鼻血だらだら流してるその超バ
カ犬の飼い主、分かりやすく言うとな隷。サルでも分かるように言
うと婚約者なの、大原拓真の婚約者。だからその腕を離しなさい!」

言下、香織はセリーヌに対して指差した。

セリーヌはさらにムツとした表情になり、大切なぬいぐるみを放さないかのように、俺の体をぎゅーっと抱き締める。

「嫌です。これは私の男です。 たっちゃんの童貞を奪ったのはこの私です」

部屋にどよめきが走る。

「ふ、ふん！ どうせ一回でしょ？ 私なんか何回もシてるのよ！ 雰囲気流されて、だけどね！」

「嘘！？ ダーリンは私が“はじめて”だって言ったわ！ そこんところどうなの、ダーリン！？」

「いや、現時点の記憶では真理亜が“はじめて”だけど……」

「覚えてないだけで実際は真理亜の前にシてるのよ。それを今から思い出させて上げるっていつてるの。さあ、たっちゃん、唇を出して下さい」

訳も分からず、俺は唇を突き出す。

が、しかし、香織はシャイニングウイザード張りの跳び蹴りを繰り出し、思い切り吹き飛ばす。

恐らく、香織は俺の近くの空気を踏み台にしたんだろうが、なぜシヤイニングウイザードなのか。

腕にモロに当たって、ベキって鈍い音がしたんだけど。

折れたよ、確実に腕の骨が折れましたよ、香織さん。

「……決闘よ、貴方に決闘を申し込むわ！」

香織は再びセリーヌを指差し、声高に叫ぶ。

セリーヌも香織に堂々と向かい合い、不敵な笑みを浮かべながら、

香織に語りかける。

「良いですわ。弟ラブでも女王の端くれ、貴方達には負けませんわ。条件は何にいたします?」

「ほんつとくにム力つくわね、その態度。ナメた口訊いてると本当に後悔するわよ?」

両者の間に火花が散る。

ああ、これが女の戦いってヤツか、数力月香織達に囲まれて生活したが、一度も見ることの無かった女の戦いか。

「では、こうしまししょう。もし、万が一に貴方が勝てば、キスは諦めますわ。しかし、私が勝てば、飛びつきり濃厚なキスをさせて貰いますからね」

「臨むところよ!! 表に出なさい! ……あんたも何ぼさつとしてんのよ! あんたも外に出るのよ!! あんたがいなきゃこの決闘は成り立たないんだから」

「お、おう……」

何だか俺が感動に浸っている間に話が進んでしまったようだ。

遂に武力抗争にまで発展してしまった俺の争奪戦。

お色気攻撃ばかりじゃ息が詰まってしまう。

たまにはこういうのもいいって思うが、みんなには血を流して欲しくない。

「まったく……」

俺は複雑な心境のまま、城を後にした。

第二章 セリーヌの追憶（後書き）

次回は血湧き肉躍る女のプライドとプライドがぶつかり合う女の戦い、の予定です。

第三章 女の闘い（前書き）

今回は戦闘シーン重視でお送りします。

こうしている間にも物語は少しずつ進んでいるんですね。

そして、拓真が軽く暴走します。

あれ？ この章の間はピンクくしないって決めてたのに……。

いや、ピンクくはなってないけど。

第三章 女の闘い

時は同じく、フィリア王国とある路地裏、一匹の犬が走っていた。しかし、その犬の表情はとても楽しんでいる顔とは言えず、むしろ恐れに近かった。

何故ならばその後ろ上空にはセリーヌを追っていたものと同じモデルの機械兵。しかも犬に負けず劣らずの速さで追ってくる。

犬は自らの限界を超えた速さで走らねばすぐに捕まってしまうのだ。

「ハッ……ハッ……ハッ……、今までの機械兵は動物を捕獲しないんじゃないの!？」

犬は嘆きを帯びた声を上げる。この世界の動物の大半は言葉を話すのだ。

犬は夢中になって路地裏をかける。路地裏は狭いため機械兵が路地に入る事ができない。

そのため機械兵はバーニアを装備し、上空から追うことしかできない。

大通りに出れば最後、呆気なく囲まれて殺されるか捕獲されるのを待つだけ、その点路地裏は逃げるのに最適だと言える。

が、油断は許されない。上空からでもレーザービームや捕獲用の網を放つ事は出来る。

だから犬は全速力で走らねばならないのだ。

「ハッ……ハッ……、このままじゃ撒ききれない! 何か策を巡らせないと——キャッ!？」

犬は石を思いつきり踏んで、転んでしまう。その際、足を怪我して走ることは愚か動くことすらままならない。

「うぐっ……、こんな時に……」

苦痛に顔を歪める犬に機械兵が追い付く。

機械兵は銃口を犬に向けエネルギーを充填し始める。犬は少しでも動こうとするが、右前足が傷付き、まともに動くことが出来ない。そして、無情にもエネルギーの充填が終わり、犬に向けて放たれる。放たれたエネルギーは光線の形を成し、犬に着弾した瞬間纏わり付き、跡形もなく掻き消える。

「犬ノ獣人、『ソフィア・ローレン』ノ捕獲完了、残ル上等生物ハ、猫ノ獣人、『ローズ・フィレンヌ』ノミ。マタ、汎用型機械兵E-5062号カラE-5072号マデト遠距離奇襲型機械兵B-0356号カラB-0432マデガ何者カニ破壊サレタ。恐ラク人間ガドコカニ潜ンデイル可能性ガアル。ガラドボルグ様ノ命ニヨリ、ヒトノ形ヲ成スモノヲ一ツ残ラス捕獲セヨ。ソレ以外ノ下等生物ハ、殺シテシマエ！」

先程レーザー光線を放った機械兵が他の機械兵に向けて命令する。通常の機械兵の目が青色に対して、よく見るとその機械兵だけ赤色である。恐らく、小隊のリーダーなのだろう。

リーダーがそう言うと、他の機械兵はそれぞれバラバラの方向へと飛び去っていった。

「セリーヌ王女サエ殺セバガラドボルグ様ノ計画モ達成サレ、アノオ方ノ計画モ達成サレル……。絶対ニ探シ出シテヤル……」

セリーヌの過去を知り、自分の本当の過去を知るためにセリーヌとキスをしようとしたら、香織に蹴られて「決闘！ 決闘！」と騒ぎ出した。

仕方なくフィリア城の中庭で決闘をする事にしたんだが……。

相手は女王、女王は強いと相場が決まっている。このままじゃちよんけちよんにやられて終了だ。

服装もちやっかり、煌びやかでいかにも動きにくそうなドレスから、質素で動きやすそうなＴシャツにジャージ姿（彼女の希望により仕方なく用意した）

香織には傷付いて欲しくない。香織に説得を試みるが……。

「本当にやるの？ 決闘」

「あつたりまえでしょう？ あそこまでバカにされて黙っていられないわよ」

「でも女王の大半はメチャクチャ強いぜ？」

「私のプライドに関わるの。あんたは黙って私の応援をしてなさい！」

ダメだこりゃ……。香織の闘争心に完全に火が点いちゃったよ。

香織の説得を諦め、俺は両者共に傷付かないようなルールを提唱する。

「分かったよ……。でも俺のルールには従って貰うからな！ ルー

ルは基本的に何でもありだ。しかし大怪我だけはさせるな。させた瞬間試合を終了させ、大怪我させたヤツの負けにする。それでいいな！！」

「分かったわ」

「流石はたっちゃん、優しい……。たっちゃん！ 待っててね！ すぐキスするから！」

そう言いながら投げキッスをたつぷりと俺に振り撒く。
恥ずかしくなって、目を逸らしてしまった。

「媚び売ってんじゃないわよ！」

「弟に何をしようと私の勝手よ」

「いつ、いざ尋常に……、試合始め！」

『やあああああッ！』

最初に二人は各々武器を作り出し、ぶつけ合った。
香織は薙刀をセリー又は二振りの剣を……、って二刀流！？

「ふふん、覚えてないだろうけど、たっちゃんに二刀流を教えたのはこの私なのよ？ ふふふ、67代目宮本流剣技師範、おおはらせりな大原芹奈の実力を見せてあげるわ」

師範！？ 俺は確か……、68代師範だから……、前代師範！？
おいおい、俺は一度セリー又、もとい芹奈お姉さん（仮名称）を一度でも負かせた事があるのか！？

宮本道場の師範は現師範が負けた時点で負かせた人が師範となり、負けた人は師範という肩書きを剥奪された上、宮本道場を去らねばならない。

この掟があるから、芹奈お姉さんに本気で戦うことが出来ないはず……。

「あら、戦闘中に余所見なんてナメたマネしてくれるじゃない……、ほんつとうにム力つくわね！ あんた！」

「ふふふ、怒りは視野を狭くするだけよ？ 私が本当の剣技を教えるてあげるわ」

すると、芹奈お姉さんは急に後ろへ飛び退き距離を取る。

罅迫り合いの状態で芹奈お姉さんは飛び退いたものだから、香織はバランスを崩す。芹奈お姉さんはそれを待っていたかのように一瞬で距離を詰めて袈裟斬りを繰り返す。

確か攻式六ノ型、「手の平返し」だったはず。

しかし、香織も黙って斬られる程バカじゃない。香織は咄嗟に体を気化し、芹奈お姉さんの後ろで体を再構築、薙刀も装備して芹奈お姉さんを斬りつけた。

「きゃあああああつ！」

「おい、バカつ、香織！」

「大丈夫よ、服を斬り裂いただけ、本当に痛くも痒くも無いんですよ？」

「あれ、バレてました？」

「あのねえ……、当事者が分からないわけ無いでしょ？ あんたは重度の天然？ それともタダのバカ？」

「言ったわね！！ 私はバカでも天然でもないっ！ 喰らえ！」

直後、芹奈お姉さんは香織の服を目掛けて二本の剣をX字に振り下ろす。結果、香織の服にインペリアルドラ○ンの進化前、パイルドラ○ンにジョグレス進化する際の片割れ、エクスブイ○ンみたくX字の切れ込み（スリットと言っべきだろうか？）が入った。

その際、芹奈お姉さんの服から何かが落ちた。

瞬間、芹奈お姉さんの胸のサイズが一回り大きくなった。

その数秒後、今度は香織の服から何かが落ちて、胸のサイズが一回り小さくなった。

え？ 嘘でしょ？ 香織の日々大きくなっていく素晴らしいと信じて止まない胸は実はパットで偽造していて、芹奈お姉さんのちよつと残念だなあと思ってた胸は、実はそれ以上に大きいブラジャーがバストレボリューション無いため無理矢理押し込んだ、現実に顕現した胸革命だったのだ！

「な……、何よ！ その胸は！ 反則じゃないの！？」

「アナタこそ、その胸は何ですか？ 貧相過ぎて逆に同情したくなりますわ」

「胸……、デッカイ胸……、食べたい……、揉みたい……、むしろぶりつきたい……、メチャクチャに揉み拉きたい！」

香織曰わく、あの時の俺の足取りは夢遊病者のように覚束なく、とても危険な顔だったらしい。

芹奈お姉さんの胸を見てから香織に疾風の一撃【ウィンドブレイク】で吹き飛ばされるまでの記憶が抜けてるため後々香織に聞き、自分が何をしたかを確認したのだ。

その後俺は香織の制止を無視して芹奈お姉さんを押し倒し、服を引き裂いて芹奈お姉さんの胸を揉んだり舐めたり、拳げ句の果てには、芹奈お姉さんの乳首に赤ん坊のように吸い付き、芹奈お姉さんをイかせた後、ズボンを脱いで、行為までしようとしたらしい。

香織も流石にいけないと感じ、疾風の一撃を放ったそうだ。

ここからは俺の記憶だ。

俺は吹き飛ばされて正気を取り戻すと、芹奈お姉さんが倒れている事に気付く。

俺は、「誰がこんな事をしたんだ！」と叫びたかったが、その前に「アンタがイかせたのよ！」と香織の疾風の槍【ウィンドスピア】を放って叫ぶことは出来なかった。

すぐさま愛子の魔法、覚醒の雨を発動、芹奈お姉さんは頭をさすりながら起き上がりこちらを向くと、ふふふっと口を隠しながら笑う。

「たっちゃんてば……ズボンを脱いで、私にえつちいことして貰いたいよね？ 決闘中なのに……、はあん！！ イイ！！ その視線が私を狂わせるっ！」

「あ、あ……、うう……」

「ああ……、恥ずかしがるたっちゃんの顔も魅力的い！！ あゝん
！！ 今すぐその妖しい体を奪い尽くしてあげるわ！」

そう言った直後、芹奈お姉さんは思いつきり飛びついてきた。

このまま抱きつかれれば、原始の本能が理性をぶつ飛ばして決闘しているのにも関わらず生殖活動をしてしまっただろう。

もちろん、それを良しとしない香織は、疾風の一撃で吹き飛ばす。
数メートル吹き飛ばされた芹奈お姉さんは怒りのオーラを滲ませながら、それでも冷淡な声で香織に語りかける。

「へえ、私とたっちゃんの恋路を邪魔するんだ……、どういう事がお分かりになります？」

「ごめんあそばせ、アナタの常識は私には通じないみたいです」

「私とたっちゃんの恋路を邪魔した人は痛い目にあわせる！！ 妖魔の幻想曲【ファンタジア】！！」

芹奈お姉さんはそう言って指を弾く。

次の瞬間、五十体を超える騎士の亡霊が芹奈お姉さんを囲むように配置される。

「さあ、私の騎士よ、彼の者をこてんぱんに叩きのめしなさい！」

『うおおおおー！』

「なんて禍々しい魔力なのよ……、これ。でも負けない。拓真の唇は……ううん、拓真の体は私が全て奪い尽くす！」

香織の口から何か恐ろしい言葉が聞こえた気がするが、きっと気のせいだろう。

槍を持った三体の乗馬騎士の亡霊は香織に向かって突進を仕掛ける。香織は空気の弾【エアブレット】を放ち、二体の乗馬騎士の亡霊の心臓部を吹き飛ばし破壊する。

しかし、三体目の騎士の亡霊は弾が逸れて、首にぶち当たり吹っ飛ばすも、それだけだった。

「嘘！？ 首をぶっ飛ばしただけでは消えないの！？」

香織は感嘆しながら横に一閃するも一切通じず、香織の胸には無慈悲にも騎士の亡霊の鋭い一撃。

香織は抵抗する間も無く、心臓を貫かれてしまった。

「がっ……………！？」

「香織！！」

「大丈夫、本当に貫いてないわ」

突き刺さった槍を乱暴に引き抜かれぐったりと手を付き噎せる香織。その胸は衣服に穴が空いたものの、地面に赤い斑点が落ちる事は無かった。

「がはっ！！ ごほっ、ごほっ……………！！ 何コレ、確かに胸を貫か

れたはずなのに……………！」

「あなたは本当に貫かれたのかしら？」

「どうということ！？」

「そもそも、この騎士達は皆実体ではなく虚像。もっというと電気信号の塊。これに貫かれると、貫いた箇所には痛みの電気信号を沢山送り込み、あたかも貫かれたかのように激しく痛むの。でもまだまだ序の口よ、弩弓兵用意！」

芹奈お姉さんは地面と垂直になるように手を上げる。

香織も「アレしか無いわね」と呟き、静かに精神力を体中に循環させている。

「放てえ！！」

「遅い！」

その瞬間、香織が常人には決して捉えられぬスピードで芹奈お姉さんの眼前に移動し、かめ●め波の構えを取った。

「早いっ……！？ 重装歩兵、私を守れ！」

芹奈お姉さんはその一言で分厚い鎧に身を包んだ騎士の亡霊を芹奈お姉さんの真正面に配置し、防御を固めたつもりでいるが、香織は不敵な笑みを見せた。

離れていようが問答無用で引き寄せるような、香織を中心とした空気の流れが生じ、手の内に集められて凝縮されていく。

「無駄よ！！ その程度の壁なんて無いも同然、全て吹き飛ばすわ！ 出力300%！ 風属性最強魔法、風翔爆空砲【エアリアルバーストフレア】！」

次の瞬間、香織はか●はめ波の型に構えた手を突きだし、蓄え凝縮していた空気を球状にして一気に放出する。

重装歩兵はもちろん芹奈お姉さんどころか、周りの全ての騎士の亡霊達をも飲み込んで吹き飛ばした。

今や体中泥まみれで守る障壁も無い芹奈お姉さん。しかし、これだけ絶望的な状況にも関わらず、余裕の表情を崩さない。

「なっ、なによ！？ まだやる気なの？ その表情は何？ 今どんな状況かわからないとでも言うの？」

「いいえ、分かりますわ、貴方の危機、私の好機が」

「あんたの周りには身を護る物が一つもないのよ？」

「貴方こそ、そろそろ虚勢を張るのを止めたらどうです?」

芹奈お姉さんのその一言で、香織の表情が焦りで揺らぐ。

「ど……、どういう事よ!!」

「もう既に精神力はほとんどすつからかんの状態なんですよ? 膝がちよっとガクガクしているわ? 精々薙刀を五分留めるのが精一杯なはずよ?」

「それくらいあれば疾風の一撃【ウィンドブレイク】が放てるわ」「無理ですわ、五分留めるのが精一杯と言えば聞こえが良いけど、薙刀を維持するには精神力なんてさほども必要ないの。薙刀が1として、ウィンドなんたらは100は要るの、撃とうとした瞬間、貴方は昏倒するわ」

「……………そうね、確かに私の精神力は風翔爆空砲を放ち、精神力はほとんど残っていないわ。疾風の一撃を唱える事もかなわない。でも五分あれば充分あんたを倒せるわ。仕切り直しと行こうじゃない」

「生意氣言っちゃって……、お仕置きが必要のようね」

二人は各々得意とする武器を装備する。

一触即発の雰囲気は二人を包み込み、耳が痛くなるほどの沈黙が二人に重い足枷を付ける。

俺が固唾を飲み込むのを合図に、両者は同時に駆け出す。

まるで重たい足枷を無理矢理引きちぎったみたい。

「うおおおおおっ!!」

「はあああああっ!!」

二人は雄叫びと共に獲物を打ち据える。両者の獲物は激しく打ち据えられたはずなのに刃こぼれ一つなく、未だに現役だと獲物が語り

かけているようにも思える。

「あんた、なかなかやるじゃない。拓真ほどじゃないけど」

「貴方こそ、たっちゃんとは三角以上の戦いが期待出来ますわね」

二人は同時に飛び退く。香織は着地した瞬間、風の力を少し使って
芹奈お姉さんに飛びつき薙刀を振り下ろす。

着地後、刹那の時間だが生まれる硬直の時間を狙ったのだ。

芹奈お姉さんは驚くが、不敵の笑みを浮かべる。

「でもまだ甘いわ!」

薙刀は芹奈お姉さんの二振りの剣に止められ、真上に弾かれる。
その際、がら空きになった香織の腹に渾身の蹴りを喰らわせる。

「がっ……、はあああああっ!!」

吹き飛ばされた香織は雄叫びを上げながら薙刀を滅茶苦茶に振り回す。

それによって激しい風の刃がいくつも生まれて芹奈お姉さんを襲う。
服が所々派手に切り裂かれる。しかし、付いたのは小さな切り傷だけだった。

お陰で芹奈お姉さんの服から所々肌が露出して……、コラ! 鎮まれ俺の息子よ!

……なんて考えていたら香織も再び接近し、決死の表情で打ち合いを始めた。

芹奈お姉さんが右手の刀を振り下ろし、香織が薙刀の刃の付いている方で受ける。

間髪いれず、芹奈お姉さんが左の刀を振り下ろすも、右手の刀を弾

き返して左の刀も弾く。

逆に香織が攻勢に出れば、芹奈お姉さんが二つの刀で翻弄し、すぐさま右の太刀を喰らわせる。

この繰り返しが延々と繰り返された。

しかし、その繰り返しも突如として終焉を迎えることになった。

「もうそろそろ決着付けなきゃね」

そう言って芹奈お姉さんは突然剣を一閃させる。

その衝撃か、風の魔法が発動したかは定かではないが、香織の体が遙か上空に浮かび上がったのは確かなようだ。

「これで……、止めよ!!」

「ナメるなあああ!!」

芹奈お姉さんは二振りの刀を香織に向ける。その間に激しく爆ぜる閃光が見え始める。

香織も最後の力を振り絞り、空氣の槍【エアスピアー】を放とうとしたが香織の魔力、精神力、体力共に尽き果てようとしていた。

やんぬるかな、香織は間もなく芹奈お姉さんの二降りの剣から放たれし極太のレーザー光線に包まれた。

数秒後、香織はドサリと重たい音を出して背中から着地した。氣絶しているようだ。

「……勝負あったな」

「やったわっ! たっちゃん!」

王室の間の時と態度があからさまに変わっている。

頬擦りしたり、抱き締めたり、首筋から耳朵まで妖しく舐めたり……。

こんな所を司法卿なんかに見られたら……、懲罰房なんかじゃすまねえよな……。

「その時は司法卿を殺してでもたっちゃんを助けてあげるから」

「これまた、物騒な……」

「それでも本気よ……？　じゃあ、約束のキス。たっちゃんからちゅうちゅうする約束だったよね？」

そんな約束した覚えねえよ！？　——って言いたかったよ、本当は。でも、芹奈お姉さんの吸い込まれそうな瞳、芹奈お姉さんの頭髮から醸し出される魅惑的な香り、何より、芹奈お姉さんのふっくらとした唇に魅了されていた。

かつて香織とぶつかった時もこんな感じだった。俗に言う、一目惚れというやつだ。

そのため、俺は「……うん」と答えてしまう。

芹奈お姉さんは頬を朱色に染め唇を突き出して「んっ！」と可愛く鳴く。

その動作一つ一つが可愛くて、俺はとてもドキドキしていた。

香織とのキス以来の出来事だ。

鼓動が早くなると共に体中が熱くなり、気付けば香織とキスをしていた。

芹奈お姉さんの時もそうだ。芹奈お姉さんを見ると、体が熱くなり、知らず知らずの内に唇を近づけていた。そして――

「んちゅ……」

静かに唇を重ねた。

その時、脳裏に数多の映像が浮かび上がった。

これは、孤児院だろうか？ 俺の隣には兄貴が倒れていて、正面には憎き元教頭。

額には傷があり、既にぐったりしている。

元教頭は手に持ったサバイバルナイフを振り上げる。

その瞬間、横からの閃光が元教頭を吹き飛ばした。

数分後、女の子が入り口から現れ、俺にキスをした。

場面が変わり、これは民家の玄関だろうか？ 俺と当時の俺より小さい女の子、恐らく稜が民家に入るのを躊躇っている。

『どうしたの？ ここはもう、私とたつちゃんと稜ちゃんの家なのよ？』

『分かつてはいるんだけど……、お邪魔しますでいいのかな？ っ
て』

『違うわ、たつちゃん。我が家に入る時はただいま、よ』

『じゃあ……、ただいま』

『お帰りなさい！ たつちゃん！！』

俺よりも大きな女の子、恐らく芹奈お姉さんは駆け寄って来る俺をとてもキツく抱き締めた。

『じゃあ、稜ちゃんも』

『……ただいま！』

『お帰りなさい！ 稜ちゃん！』

芹奈お姉さんは俺と同様に稜をキツく抱き締めた。

『いい？ 今日からここがあなたたちのお家よ。したいことは遠慮しないでいいし、欲しい物は何だってあげるから』

『じゃ、じゃあおねえちゃん』

『なあに？ たっちゃん？』

『おねえちゃんのキスをちょうだい？』

『もう！ たっちゃんてば甘えんぼちゃんなんだからあ！！ そんなにせがまなくても、大好きなたっちゃんにはいっっぱいキスしちゃうからねっ！！』

『やったあ！ おねえちゃん大好きっ！！』

そういつて、俺と芹奈お姉さんはとても濃厚なキスをした。

他にも、砂場でお山を作ったり、公園でキャッチボールをしたり、授業参観にて芹奈お姉さんの前で手を上げたり、それはもう沢山の思い出が頭に流れ込んできた。

そのどれもが、最終的にはキスをしていた。

「んちゅ……はむちゅ……」

「んく……ペろ……ぷあ……、記憶が戻ったのね？」

「うん、ありがとう、おねえちゃん」

俺を甘えたそうな目で見る芹奈お姉さん（以後おねえちゃん）
二つの唇は互いに引き合い――

「そこまでよ、二人とも」

香織に止められた。

「あんたら、いつまでチュツチュツチュしてんのよ、腹立たしいことこの上ないわ」

「あああ、悪い……、香織」

「ええ！？ まだ五年間のブランクは埋まってないわ」

そう言いながら再び抱き締めるおねえちゃん。
抱き締められると世間一般よりも大きな胸が派手に潰れる……。
気付けば鼻血をだしていた。

「いやらしい……、で、結局、アンタは拓真の何なの？」

「私はたっちゃんの姉よ。姉とは言っても、エッチした仲間なんだけ
ど」

「おねえちゃんは何でも教えてくれる。勉強も、性の知識も」

「ふーん、そう。私は負けたから今日の所は見逃すけど、拓真に変
なコトやったら、姉弟共々犯し尽くしてやるからね？」

香織はそう言い「ふん！」と踵を返して城へと戻っていった。

その後ろ姿が妙に嬉しそうだっただのは、きつと気のせいなのだろう。

「じゃあ、邪魔者もいなくなったし、さっきの続きを……」

「その前に、俺とも戦ってくれないか？」

「えー！？」

明らかな拒否反応、やっぱりか……。俺は使いたくなかったが、条
件を付けることにした。

「じゃ、じゃあ、おねえちゃんが勝てばキスだけだった予定にエッ
チも組み込んであげる。どんなに激しいこともするから。もし俺が
勝てば……、メイド服に着替えて、俺にご奉仕」

おねえちゃんの顔が凄く綻んだ。

恐らくエッチで凄く反応したんだと思う。

「いいわ、やりましょう、たっちゃん。でも何で私と戦いたいと思
ったの？」

「力試しだよ。おねえちゃん、俺が勝てなかった、いや、今は分らないけど、香織に勝っちゃったもん、だから、おねえちゃんに力試しを頼もうかなって」

「ふふふ、手加減は無くていいのよね？」

「うん、おねえちゃん、あの時と変わらずに大好きだよ」

「私はあの時以上に大好きよ、たっちゃん」

おねえちゃんは俺を慈しむように抱き締める。

ヤバい、また息子が暴れだした。鎮まれ！ 我が息子！

「お、おねえちゃんのおっぱい、おつきく柔らかくなったね」

「たっちゃんだって、アソコがガチガチよ？ あの時よりも遅しくなっちゃって……」 いやらしいんだからっ、ちゅっしよっ」

そう言つて、おねえちゃんは俺の唇を無理矢理、獣が獲物を貪るようなキスをしてきやがった。

ああん、そんなに乱暴なキスをされたら下半身がかなり反応しちゃうじゃないか！！

……ヤバい、そろそろヤバい、頭がイかれ始めた。

既に俺のおねえちゃんのアソコにこすりつけているわけで……、おねえちゃんの顔が朱に染まっている。

「んふ、んっ、んんふうっ……ぷあ……、いやらしすぎ……、ハアハア……戦うよりも、エッチしたい……」

「でも、力試しはしたいんだ……、ハア……、ハア……」

「分かつてる、おねえちゃん頑張るから、たっちゃんも頑張つて」

おねえちゃんはぎゅっと抱き締めると、五メートル離れていった。俺は深呼吸をして心を鎮める。えっちいことならこの後いつでもやれるだろう？ 俺。

「…………心の準備はできたか？」

「…………ええ、いつでもどっからでも掛かってきなさい」

俺は例によつて右手に聖剣エクスカリバーを、左手に魔剣ラグナロクを装備する。

「よう、相棒。久しぶりのねえちゃんとちゅっちゅできたか？」

「まあね、狂わされるかと思つたよ」

「我が主よ、戦に私情は無用。心得てはいるであらう？」

「戦つてほど大きくはないよ、練習試合だ」

「意思剣を二本も……流石はたっちゃんね!!」

「ありがと、行くよ!! おねえちゃん！」

俺はおねえちゃんに向かって突進する。

おねえちゃんも二本の剣を装備し、迎え撃つ準備をする。

宮本流57代目師範と58代目師範の激しい剣劇の嵐が巻き起こる。

第三章 女の闘い（後書き）

次回、機械兵との戦闘再来！！

拓真が連れてかれる……！？

第四章 闇魂の目覚め（前書き）

お久しぶりの更新です！

仕事し始めてから時間が無くて……。

ついに拓真が狂います！

さらにえっちくなります！

……いいのかなあ？

第四章 闇魂の目覚め

結果から言おう、ボロ負けだ。

姉ちゃんの目に見えぬ程の剣劇は反撃を許さず、あっさりと降参。やっぱり姉ちゃん強い。

うううっ、ん……、すずめ…… っばい何かが爽やかに朝を教えてくれる。

今日は最高の一日になりそうだ。

久々に芹菜姉ちゃんと寝たからか、ぐっすりと眠れた。

久々の行為の後だからというのもあるのか？

溜まりに溜まったブツを芹菜姉ちゃんに注ぎ込んだからか？

とにかく、やっぱり姉貴がいるのといないのでは全然違うんだな。

「……っ！ 何だ？」

ああ、芹菜姉ちゃんが寝た振りして俺のアレを握り締めているんだな。あれほどお腹いっぱいあげたのに、まだ足りないというのか？

しょうがないなあ、とりあえずこの手を解かせようか、なんとうかアレなんだよな。

俺は自分のアレに手を伸ばし芹菜姉ちゃんの手に触れる。

瞬間、何か湿ったものがぺろっとなめられた！

その後も手を放さずにいると、チロチロチロチロとなめられているのがわかる。

左手で布団を持ち上げると、案の定香織と稜が下着姿で潜んでいた。俺は芹菜姉ちゃんを起こさぬよう、小さな声で叫ぶ。

「何してんだっ！」

「見て分かるでしょ？ おにいちゃんフルトを食べてるんだよ？ すりすり。ほら、はむっ！」

はむっ！　って所で俺のアレを口に含みやがった！　瞬間、えもいわれぬ快樂が脳天を突き刺し、くらりと視界が一瞬黒に染まる。

「れろれろ……、れろれろ……、ちゅうつつ……！」

「舐めるなあっ！　吸うなあああっ！　姉ちゃんに全部あげたがら出ないって！」

「嘘ばかり。おっぱいで包み込んだらガッチガチになったよ？　妹だからかな？　稜に責められるの嬉しい？」

「そりゃあ嬉しくないといったら嘘になるけど……」

「じゃあいっぱい我慢してね？　とっても濃厚なのを飲みたいから」

稜は胸でアレを挟み込んだままちゅうちゅうと舐めながら吸い始めた。

すぐに頭の中をスパークが埋め尽くし、いつ心が折れても不思議じゃなかった。

それでもしばらく耐えていると、稜がニヤリと笑い思い切り吸い上げた。

「そんなっ、思い切り吸い上げてんじゃ……、うああああー！」

情けなくて悲痛な叫びと共に脱力感が腰周辺を襲う。こくっ、こくっと音を立てながらナニかを飲み干し、稜が恍惚とした表情になる。

「ぶはあ……、とってもおいしかったよ、おにいちゃんフルト。肉汁もたっぷり飲めたし……」

「勿論、稜だけにこつくんさせるなんて不公平な事、しないよね？」
「もう、好きにしてくれ」

香織はその言葉で喜び勇んでモノにむしゃぶりつく。

ちゅうちゅう吸いまくる香織のスタイルは敏感なモノを容赦なく刺激し、呆気なく二度目の絶頂……、香織は例に漏れず恍惚とした表情になりながらごくごく飲み干す。

「ぶはあ……、最高……（はあと）、これより美味しい飲み物なんて絶対ないわね」

「そんなに俺のソレは美味しい飲み物なのか？」

「もちろん。疑わしいなら拓真が飲んでみればいいじゃない、拓真の濃厚ミ・ル・ク（はあと）」

そう言った瞬間、香織は濃厚なディープキスをして来て、粘り気のある何かを舌で押し込まれる。

「どう？ 自分の濃厚ミルクの味は」

「言われてみれば、確かに美味しい……かも」

「くふふ、朝だからこのくらいで自重するわ。ダメねえ、夜のテンションが抜けないわ、これも拓真が中に出さないからね、本当に」

「気持ちよかった？ 稜と香織ちゃんどっちが気持ちよかった？」

「さ、さあ、朝食を作ろうじゃやないか、芹菜姉ちゃん早く起きて、朝ご飯取られちゃうよ？」

俺は芹菜姉ちゃんを揺り起こし、パチンと指を鳴らして下着や服を生成、着用後実にぎこちない動きで厨房へと向かおうとする、が。

「ダメ、おにいちゃんの濃厚ミルク、まだ中にどぴゅどぴゅされてないもん。少なくとも三回どぴゅどぴゅしないと離してあげないもん！」

「ダメよたちちゃん、妹だけにいい気持ちさせちゃ。お姉ちゃんに

もいっぱい注ぎ込んでね？ 三回分は欲しいわ（はあと）」

「この淫乱使い魔！」

「別に使い魔じゃねえよ！？ 俺は！」

朝からお盛んな三人に犯され、今日も最悪な一日が始まった。

『いただきます！』

明朗な声が王室内に響き渡り、今日も賑やかな朝餉が始まる。

喋りながら食べるもの、黙々と目の前にある食べ物を飲み食いするもの、ただがむしゃらにがつつくものなど、食べ物の食べ方も千差万別だな。

「ところで芹菜姉ちゃん、姉ちゃんの魔法って、火、風、水、土の四大元素に当てはまらなければ、火、水、土、木、金の五行の魔術式でもないし、増してや光や闇でも無さそうだけど、姉ちゃんは一切何の属性を使うんだ？」

「さあ？ お姉ちゃん、属性なんて考えた事無いから……。私が使える魔法なんて、ほんの少しの治癒魔法と妖魔の幻想曲【ようまのファンタジー】、それとこの武具の輪舞【ぶぐのロンド】だけだもの」

パチンと指を弾く芹菜姉ちゃん。間もなく華美な装飾が付いてない銀色の細身の剣が現れる。レイピアと呼ばれる類なのだろう。

「あら、良い剣じゃない、護身用に頂けないかしら？」

「ええ、どうぞ。無銘ですが、名剣並みに鋭い光を湛えていますわ」

芹菜姉ちゃんは先程呼び出したレイピアに鞘を付け、楓に手渡す。楓は抜刀する動作も見せずにレイピアを俺の首筋に押し当てる。

「お、お見事……」

「それでも私、レイピアの扱いも長けているの。一番は二丁拳銃だけだ」

納刀しながら楓は自慢げに話す。

もしかしたら俺や芹菜姉ちゃんよりも剣の扱いに長けているのかもしれない。

「さて、とみんな食い終わったみたいだな。じゃ、片付けるぜ」

指をパチンと鳴らし、お皿と机を上にごぼれた料理もろとも一掃する。

最近指パチンで大概の事が出来るようになったのは冥王の魔力が馴染み始めたからなのだろうか？

「ふー、拓真の料理めちやくちやウマイなあ、なんでそんな料理上手いん？」

「本当だよ、拓真君の料理はまさに絶品と呼ぶに相応しい料理だと思うよ。誰に教わったレシピ何ですか？」

「姉ちゃんのレシピを俺なりにカスタムしたんだ。料理の腕は姉ちゃんに扱かれてできた一級品さ」

その言葉に機嫌を良くしたのか、芹菜姉ちゃんが後ろから抱き付き頬擦りをする。

香織が顔を真っ赤にして戦慄く様子で調子に乗ったのか、首筋をちゅっとキスをし、さらに舌を這わせ耳朶に甘噛みした、その瞬間に轟音が俺の耳をつんざき、激しい揺れがフィリア城を襲う。

「げこげこ！ げこげこ！ ……げこおおお！？」

「ちゅうちゅう……、あ、どうしたのです？ カリユーナ、変身を解かずに駆け込んで」

突如扉を開けて入ってきたカリユーナというカエルがこちらにぴよんぴよん跳ねてくる。

その内にカリユーナは人間になり、俺を跳び蹴りで蹴飛ばして芹菜姉ちゃんに抱き付いた。

「おかっ……、女王殿下！ どうしてどこの馬とも知らない男の子にちゅうちゅうしてるんです！ 女王殿下はおとっ……、大原拓真としかちゅうちゅうしないって言ってたじゃないですか！」

「カリユーナ、さつき蹴ったその男の子こそ、大原拓真、私達のお父さんよ？」

え、お父さん？ 芹菜姉ちゃんの言葉に耳を疑う俺。

かなりパニック状態である俺をさらに追い討ちを掛けるように、芹菜姉ちゃんは俺にカリユーナを紹介する。

「紹介するわ、この子はカリユーナ。もつともカリユーナはこの世界での名前で本当の名前は大原佳奈。私とたっちゃんの間生まれの娘よ」

「い、いつ妊娠したの？」

「たっちゃんと初めて交わり、この世界に落ちてしばらくしたら妊娠した事を知ったわ。私は佳奈を拓真のように愛したわ。愛を有りつ丈注ぎ込んで育てた佳奈はとても純真無垢に育ってくれたわ」

大山四姉妹から黒いオーラが立ち込める、殺気だ。

「なんでお姉ちゃんだけ子供が出来て、私達には子供が出来ないのかしら？」

「私達は拓真さんの子供なら喜んで孕みたいと思っていますのに…」

…」

「よし、今日から俺達全員が孕むまで逆レイプな！」

「子供が出来ればわいらは一層愛し合える関係になれるはずなんねや！」

黒いオーラが顎門あでんを開いているような幻覚に襲われる。

本当にごめんなさい、今晚からちゃんとお相手しますから、許してください。

そうネガティブに考えていると、佳奈が芹菜姉ちゃんから飛び降りてトコトコ、トコトコこっちに向かって走ってきた。

「えっと、お父さん。さっきはごめんなさい……、その——」

佳奈はゆっくりと目を瞑る。

これからする事を安易に予測出来るが、あえて何もせず、目を瞑っておこう。

「——ちゅっ！」

一拍の間を挟み、佳奈の小さくて柔らかい唇が重ねられる。

……まあ、五秒だけでも。

嗚呼、黒の顎門あでんが頭からがりごり噛み砕いていくような幻覚に襲われる……。

ごめんなさい、本当にいつか孕ませるから許してください。

「今日は緊急事態だからこれでオシマイ！ またゆっくりチューしよね！ おとうさん！」

そう言つて佳奈は可愛げなウインクをかます。
その瞬間に体中の血液が沸騰するくらいに熱くなり結果的に浮かされてしまう。

「俺と姉ちゃんの娘はこんなにも可愛いんだな……」
「浮ついてんじゃないわよ！　ロリコン！」

完全に虚を付かれた上からの一撃に舌を嚙んだ。それはもう景気良くガリツと。

「今ね、リディア大通りにて数体の機械兵が猫ちゃんを追っているの！」

「猫を追う？　遂にポンコツの奴らも歯車が狂ったか！」

「そんなはずはないわ。ガラドボルグの考えることだから、何か裏があるに違いないわ。獣人とか」

猫の獣人……、俺は猫耳と尻尾が生えたむちむちの巨乳美少女を想像した。

……………。

「ヘンな想像しない！　……で、そこまでどうやって行くの？　場所的には遠いみたいだけど」

「佳奈が案内します！　佳奈はとある能力を持っていて……、じゃあん！」

言下、佳奈は自らのスカートに手を掛け、そのままめくり上げる！
俺と一樹と海斗は固まって動けなくなつた！

「かつ、か、カエルのプリントが入ったかばちゃはぱ、パンツがどうしたって言うんだ？ 佳奈君」

「どきどきしてる！ 海斗さんもりりこんなんだねえ、うふふっ！ 佳奈はねえ、このぱんつの動物さんと同じ動物さんに変身する事が出来るんだよ！ スゴいでしょ？ それでカエルさんの姿の能力はあるところとあるところのいたりきたりする事なの！ じゃあ、行くよ！」

眩い光が佳奈を包み込み、カエルの姿になる。

よく見るとカエルがプリントされた女兒パンツを穿いている。

カエルの姿になった佳奈から眩い光が漏れだし、気付けば大通りに出ていた。

目の前には怯えた様子の黒猫。

それを取り囲むように三メートルはあろうかという二足歩行の巨大な機械兵十数体が機銃を構えている。

その内の一体が奇抜な形のレーザー砲を構える。

「佳奈、身のこなしが良い動物のパンツは持ってないか？」

「うーん、チーターはどう？」

「よし、大至急穿き変えてくれ」

「拓真、レーザーにエネルギーが充填され始めたわ！」

佳奈はカエルがプリントされたパンツを脱ぎ捨て、どこからかチーターがプリントされたパンツを取り出し、足を右左と順に通す。

「穿けた！ で、どうするの？」

「こうするんだ！」

俺はチーターのパンツを穿いた佳奈を抱き上げ、そのまま濃厚なキスをする。

「まさか、佳奈と魂の架け橋【スピリットリンク】をするつもりなの！？」

「ちゅぱっ、出来ないかもしれないけど、迷っている時間はないんだ。父子の絆を俺は信じる！」

「おとうさん……、おとうさんのチューはとってもえっちなね、ろりこんおとうさんだ。でもね、佳奈はそんなろりこんおとうさんがとっても大好きなんだよ♪」

その瞬間、佳奈の体が粒子化し俺の中に取り込まれていく。

魂の架け橋【スピリットリンク】成功だ。

その内に頭とお尻がムズムズして来て間もなく丸い耳が頭から、細長い尻尾がお尻から生えてきた。いずれも黄と黒の斑点模様だ。

「拓真！ レーザーのエネルギー充填が終わったわ！ 早くしないと撃たれちゃう！」

「わかってるよ！ おりゃっ！」

俺は右足に力を込める。チーターの能力のお陰が一瞬で黒猫の目の前に移動し、黒猫をひよいと抱き上げてすぐにその場から離れる。次いで緑色のレーザーが発射されるが、そこには生命体はおらず、光が弾けて消えたのみで終わった。

「ふう、危なかったなあ、猫ちゃん」

「ふにゃあお」

黒猫は俺の言葉に反応するかのように一鳴きし、鼻先をぺロぺロ舐め始めた。

俺の事を覚えていてくれたようだ。

「ははっ、こら、やめろ、くすぐったいだろ！　もう……！」
「にゃあ？　ふにゃあ？」

本気でくすぐりたいのを知らん顔して舐め続け、遂には首筋をもペロペロ舐めてきやがった！

「お、おい！　こら！　そこはダメだって、ぷあはははっ、やめろ、やーめーろー！」

「拓真！　後ろ！」

香織の声に首筋を舐められてることも忘れ、後ろを振り向く。そこにはチェーンソーの刃を模した刀剣を振りかざした一体の機械兵が、今まさにその刀剣を振り下ろそうとしていた。

「ぎにゃあああああ！？」

猫は迫り来るチェーンソーの刃を見て心底驚き、パニック状態に陥りじたばた暴れ出した。

それをなだめるのに手間取り、避けるタイミングを逃す。

「マズい、効くかどうかは分からねえけど、牽制するしかない！

火炎【ファイア】——」

「拓真さん！」

楓の声と共に幾百もの細かな光が機械兵を包み込む。

迫り来るチェーンソーの刃は額の上30センチで止まり、ギューインとチェーンの駆動音を虚しく響かせている。

そのうちに楓が目の前にシュタツと着地、先程貰ったレイピアを鞘に納めると、機械兵は見るも無惨に無数の金属片へと化した。

「拓真さん、お怪我はございませんか？」

「あ、ああ、見ての通りピンピンしてるぜ？」

彼女を怒らせてはならない。

俺の中の生存本能がそう警鐘を鳴らしていた。

大山家の娘達はどれもこれも曲者揃いだよ、全く。

「何者ダ！ 貴様等！」

「猫ノ獣人、ローズ・フィレンヌガイマセン！」

「それがっ！ どうした！」

詩音が最寄りの機械兵に棍棒を振り下ろし、叩き付ける。

叩きつけられた機械兵は見事に真つ二つとなり、爆ぜ飛ぶ。

「一樹、海斗、猫は任せるぞ」

「え、あ、ああ……、うん」

「大人しくしていてくれよな、え……つとローズ」

「うにゃああ！」

元気よく鳴いて顔に頬擦りをする黒猫、ローズ。

俺は愛おしそうに頬へと軽く唇を押し当てる。

ローズは目を見開き、耳と尻尾をピンと立てる。

「んじゃ、頼んだぜ」

「うん、責任持つて保護するよ」

ローズを一樹に預け、機械兵の元へと駆ける。

その際、エクスカリバーとラグナロクを両手に装備し、香織の元へと急ぐ。佳奈の能力が幸いしてか二秒で行けたぞ、二秒。

そこでさっきから敵の攻撃を受け止めている香織がいたので、とりあえず挨拶だけはしておこう。

「待たせたな！」

「どこ行つてたのよ、穀潰し！」

「……別に遊んで無いんだけど、猫預けてただけなんだけど、ってか穀潰しって意味分かって言ってるの？」

「っ！ そんなことどうでも良いじゃない！ 早く助太刀なさい！」

「へいへい、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

俺の伸ばした手から炎が迸り、機械兵の胸を貫く。

押し付ける刀身から解放された香織は先程まで受け止めていた薙刀を振り、風の刃で機械兵の頭を跳ね飛ばす。

そのまま機械兵は機能を停止し、後ろへ倒れる。

「これで三体目だな！」

「残りも片付けるわよ！」

「ワイらも忘れたらアカンでえ？ 激流の飛弾【トーレントトマホーク】！」

そう聞こえた瞬間、目の前の機械兵が水飛沫と共に砕け散った。

水のミサイルで金属が砕けるってなかなか異常だと思っぞ。かなりの水量を圧縮しているんだ。

「そうだぜ、いちゃらぶなお二人さん！ 俺達だって暴れたいんだ！ 少しくらいは残しとけ！」

そう言いながら詩音は四体の機械兵の頭を叩き壊し、詩音の目の前の機械兵に岩石の爆弾【ロックボム】をお見舞、見事に砕け散った。

「俺様最強！ お前ら全員俺に跪け！」

「バカっ、詩音！ 後ろにまだ一体いるぞ！」

は？ と詩音が惚けた声をだす間にも、機械兵は詩音に飛びつき手に持つ剣で切り裂こうとする。

しかし、それも楓の二丁拳銃によって失敗に終わる。

「では私も一頑張り致しましょう。武具の輪舞【ぶぐのろんど】、ミステリアブレード！」

芹菜姉ちゃんがそう叫んだ瞬間、機械兵の周りに剣が次々と現れては機械兵に襲いかかった。

「ナンダ！？ コノ猪口才ナ剣ハ！？ エエイ鬱陶シイ！ 壊シテクレル！」

二、三本機械兵に壊されるが、剣が現れる勢いは留まることを知らず、パーツを挟り突き刺さる。

その内に機械兵の動きも鈍くなる。

「今よ！ 稜ちゃん！」

「うん！ 聖光の泉砲【ホーリーガイザー】！」

言うが早いか機械兵の足元に真っ白な穴が出現し、一瞬の間を経て真っ白な光が機械兵を包む。

数秒後光が収束し、機械兵も何故か消えていた。光に浄化されたんだ、きつと。

「佳奈も活躍したいよおっ！」

「ははは、大丈夫。加奈は俺の中でしっかり活躍してるよ」

「お父さん……」

俺と加奈が精神の中で言葉を交わす中、機械兵は俺達から離れてざわざわと騒ぎ出した。

「ソナナ！ 十体モノ活用型機械兵ヲアンナニモアツサリト破壊シテシマウナンテ！」

「ア、アイツラ八人間ノ皮ヲ被ツタ悪魔ニ違イナイ！」

「ソナナワケガ無いダロウ！ アイツラ八確力二人間ダ、アナライザーニモソウ出テイル」

「イ、イズレニシテモ、コノママデハ全滅デス！ ナニカ対策ヲ！」

「各員ニ告グ！ 全テノ弾倉ヲ空ニシテデモ奴ヲ駆逐セヨ！ 機械ガ人間如キニ屠ラレルナドアツテハナラナイノダ！」

直後、赤い目をした機械兵以外は機銃を装備し、一斉掃射の隊形に入る。

即座に二対の剣を粒子化し、極炎の城壁【インフェルノランパート】を展開。迫り来る鉛玉を溶かし無力化する戦法を取ることにした。そして銃声が響き渡る。しかし烈火の堅壁を打ち破る鉛玉は一つたりともない。

鉛は鉄に比べて融解点が低い。だから鉄をも溶かす紅蓮の炎を前に鉛玉は蒸発し、跡形も残らない。

「撃テ！ 撃テ！！ 弾倉ガ尽キルマデ撃テ！」

「ウオオオオオオオオ！」

「蜂ノ巣ニシテヤルウウウ！」

炎の外では相も変わらず銃声が鳴り響く。その中ではぴちゃ、ぴちゃと水の音、そして……、

「ん、ふう、ふう……っ、んふうふうふう……！」

芹菜姉ちゃんの淫猥な吐息。

極炎の城壁は相当な精神力を要する。

途中で途切れたら蜂の巣になることは避けられないだろう。

そうならないために芹菜姉ちゃんの唇を吸い、精神力を供給してもらっていたのだが、さっきので芹菜姉ちゃんがイってしまったのだ。困ったな、後継ぎがいないと二分で炎にムラが吹き始めてその三十秒後には所々穴が開き始める。蜂の巣確定だ。

「お姉ちゃん、もうダメ……、骨の髄までとろけちゃった……」

「って言うことは遂に私の出番ね？」

へなへなと座り込み、足元に水溜まりを作る芹菜姉ちゃんとニヤニヤ笑いながら近寄る香織。

どちらも頬を朱に染めている。

「覚悟なさい？ 私はキスだけでイクような柔な作りしてないから」

「はあ……、はあ……、今日は結構……、積極的なんだな……、香織」

「っ！ 勘違いしないで！ あんたがあまりにも妹や姉と反社会的交尾してるもんだから……」

「頼むよ……、俺にとつて一秒の遅延さえ死活問題なんだ……」

「あ、ああ、そうね！ 私のキスはスゴいわよ？ せいぜい脳みそが溶けちゃわないう気を付けることね！」

脳みそ溶けるってどんな感じだよと心の中で突っ込みながらじっとその時を待つ。

「ふむ……ちゅ」

そして唇が重なる。その瞬間に今までの疲れが吹っ飛んでいき、炎の勢いが数段上がる。

ああ、畜生。香織の唇はいつ吸っても柔らかい。なんかドキドキする。えっちいぞ、自重しろ俺。

そう思ったちようどその時、銃声がパタリと止んだ。

極炎の城壁を解除し香織を放して一言、ありがとと礼を言う。

香織は再びキスをして、そのまま引き倒す。その瞬間、真横に巨大な槍が突き刺さる。

「無粋な鉄クズ共が……この上なくいいムードを台無しにして、ただで済むと思わないことだな」

「さっきのでスゴくラブラブな気持ちじゃなかったじゃない……、覚悟は出来ているわね？」

『塵も残らず消し飛べ！』

見事にハモった声と同時に放たれる赤と白のおめでたいコントラスト。

それは五体全ての機械兵を塵のように吹き飛ばした。

「ふう、拓真。この続きはこの夜にしましょう？」

「そうだね。……香織」

「拓真……」

「そこまでよ、二人とも」

再びキスをしようとしたら、芹菜姉ちゃんに止められた。

「あらあら、芹菜さん。いった割りには復活が早いのねえ？」

「いえいえ、貴方も魔力融合もせずに二重詠唱【ハイブリッドスペル】を成功させましたわよね？」

「私達は奥の奥で繋がっているからねえ」

「まあ、いやらしいこと」

それから二人は黒い笑みを浮かべながらうふふふとか、おほほほなどど明らかにどす黒いオーラを滲ませる。

俺はとりあえず二人から離れ、魂の架け橋【スピリットリンク】を解除する。

「やったな！ 拓真！」

「お見事です！ 拓真さん！」

「お前ら……、少しはこつち来いよ」

「おかあさんたち、怖い……」

「佳奈はああいう人間に絶対になるなよ？」

「うん……、わかったよ、おとうさん」

俺は再び香織達に近づき、間を割って不気味な睨み合いを止めさせる。

「止めろ、佳奈が怖がつてる」

「あらあ、拓真さん。すっかり父親気分で……、あなたならきつといい父親になれますわよ、おほほほ……。私の子供なんか産ませずに……」

ああ、ダメだ。完全に卑屈モード全開だ。

こういう時は何を話してもマイナスな解答しかない。暫くそっとしておこう。

そう思ったその時、胸に小さな赤い点が浮かび上がる。

思考が追い付く間もなく、芹菜姉ちゃん俺と香織を突き飛ばす。何故芹菜姉ちゃんが俺達を突き飛ばしたか、その真意は次の瞬間、嫌という程鮮烈に思い知らされる。

芹菜姉ちゃんが撃たれたのだ。

乾いた音と共に芹菜姉ちゃんが吹き飛び、鮮血が俺の頬を濡らす。

「う……そ、姉ちゃん……」

「いやあああああ！ おかあさん！」

「ステルスかつ！ 草花の舞、そうかのまい桜花！」

佳奈が叫び、俺がうなだれる中、海斗が叫ぶ。が気にも留めず芹菜姉ちゃんをひたすらに見つめる。

「芹菜姉ちゃん……、せっかく再会出来たのに……、俺なら心臓撃ち抜かれたって平気なのに……！」

「弟が危険にさらされているなら、身を捧げてでも、守り抜く。それが、姉の、し、めい……なの」

「もういいよ、喋らないで、直ぐに治癒魔法で——」

「さ、いご……に一つ、だけ……誓って、二人とも。私の、後を追って、死なないで……」

芹菜姉ちゃんの声は時間が経つほどに掠れていく。最後の一言、「私の分まで生きて」は完全に聞こえず、読唇術で推測するしかなかった。

「いやだ！ しなないで！ しんじやいやだ！ おかあさんっ！」

「許さない……、絶対に許さない……っ！ 壊してやるっ……一つ残らず！ 全て壊してやる！ 芹菜姉ちゃんの敵を討つんだああああ！」

瞬間、胸に激痛が走る。目の前には先程までいなかった機械兵が数十体。銃弾が胸を穿ったんだ。

しかし、そこからは真っ赤な鮮血は流れてこず、真っ黒な瘴気が流

れ出し、俺を包んでいく。

気付けば理由も無く笑っていた。

「あはははははははっ！！ あはは、あははは、あははははははははっ！！」

黒い瘴気が顎門^{あぎと}を開き、竜の形を成す。その竜が強靱な顎門で俺の体に食らいついた瞬間、意識が闇に堕ちた。

「なんなのよ……、あれ」

香織は目の前の状況に愕然としている。

拓真の周りに真っ黒なオーラが纏わり付き、その拓真は狂ったように笑っている。

いや、実際狂っているのだ。拓真が声を出して笑う事自体非常に稀なのに、ましてや大声で笑うなど香織達や真理亜達総出で攪りでもない限り有り得ないのだ。

「黒魂の開花【ダークネススピリット】……」

「何か知ってるの！？ 楓！」

「闇魔法の補助魔法よ、魂の架け橋【スピリットリンク】が誰でも使える光魔法なら、黒魂の開花はごく一部の人が使えない闇魔法よ。自分の心の闇を強制的に引き出して全ての能力を格段に上げるわ」

「心の……闇？」

「そう、スピリットリンクよりも強大な力を得ることが出来るけど、リスクが付きまとうわ」

「リスク……」

楓は普通の楓からは想像も出来ないような真剣な眼差しを香織に向ける。

香織は心臓をバクンと高鳴らせ、拓真にどのような危機が迫っているか、一字一句聞き漏らさんと楓を凝視する。

「まず、闇の人格に吞まれたら二度と元の人格には戻れない。次に効果が長続きしない上、終了後しばらくは精神力も力も殆ど無いような状態になるの。でも、それよりも危険なことが……」

「勿体ぶらずに言って！ 拓真の身に何が起きようとしてるの！」

「怒りや憎しみと言った、負の感情に捕らわれたまま発動すれば、確実に暴走して敵味方関係なしに無慈悲な程の破壊をもたらすの」

ちょうどその時、獣の雄叫びが香織達の耳をつんざく。

また新たな脅威が自分達を襲うのかと身を強ばらせるが、雄叫びの出どころは意外にも拓真だった。

見てみれば、拓真の体は真っ黒に変色し、多少の獣毛や耳、尻尾まで生えている。いずれも真っ黒だ。

「最悪の事態だわ……」

「どうということなんや！ 楓！ 説明せな分からへんて！」

「黒魂の開花には七つのカテゴリーと無数のパターンがあって傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲といった《七つの大罪》。それと生存、闘争、破壊、殺人、生殖などの《本能・衝動・欲望》なんかがあるわ。私のは心の闇は《強欲・征服》といったもので、サドスティックな振る舞いで周囲の人達を一時的に言いなりにすることが出来るの」

「拓真は！？ 拓真はどのパターンなんだよ！」

「拓真さんの心の闇は《憤怒・野生・破壊》。怒りや野生本能のまま、無惨なまでに標的を破壊するの。結果的に魔獣のようになって

しまったのよ。理性の一片もない、ね」

楓が喋り終えたと同時に爆発が起こる。それは魔獣化した拓真が機械兵を一つ破壊したために起こったものだった。

「始まるわ……、魔獣の宴が」

「グルアアアアッ!!」

拓真は再び雄叫びを上げ手に持っていたラグナロクを真上に掲げる。両の手足にもわもわした闇がへばり付き、闇が三つの爪が付いた籠手へと形を変える。

香織達が頭上にクエスチョンマークを浮かべる中、心臓を撃ち抜かれたはずの芹菜が何食わぬ顔で説明を始めた。

「あれは鉤爪ですね。中世日本の忍者が壁などを登るために使われた登器の一つですが……、武器にも使われたようですね」

「何で知ってるの？ ってか何で生きてるの？」

「武器については武具の輪舞が情報をくれるから。何故生きているのかについては……、たっちゃんと奥の奥まで繋がったおかげで、不老不死の体を手にしたのですわ」

芹菜はそう言つて胸の谷間を覗かせた。そこには小さいがとても奇抜で真つ黒な魔法陣が浮かび上がっていた。

「あんたも？ 良かったじゃない、永遠ににやんにゃんわんわん出来るんだから」

「おかあさん！ おとうさんがっ!!」

佳奈の叫びで一同は再び拓真に注目する。

拓真は三度雄叫びを上げ、機械兵の首を噛み砕いた。が、体自体は

生身の体であるため、口の周りが血で真っ赤に染まってしまっている。

「おとうさんがヘンだよ！　まるでライオンさんだよ！　佳奈の能力で落ち着かせて——」

「ダメよ！！　今の佳奈ちゃんじゃ捌ききれない！　いや、今の拓真は猛獣師【ビーストマスター】が捌けるようなものじゃないわ！」「びーすとますたー？」

「佳奈ちゃん的能力よ、今はまだ未熟だからきつかけとなる何かが必要なんだけど、成長すればちゃんと使えるようになるわ」

そう楓と佳奈が喋っている間にも、拓真は次々と和製の武器で機械兵をなぎ倒していく。忍者刀で首を刎ね、鉤爪でボディを引き裂き、手裏剣でコアを貫いては日本刀で一刀両断。さらには辺りの建造物まで漆黒の尖爪【ダークネスクロウ】で破壊したりして今の拓真はまるで壊す事を楽しんでいるようだった。

「アハハハ！　華麗に散るは穢れた金属片！　ハハハハハ！」

「キャ、キャプチャーレーザー充填開始！」

そうして残った最後の一体が先程ローズに向かって放ったレーザー砲を充填し始める。

拓真も鉤爪を装備し、真上に掲げて負のエネルギーを貯める。

そして……。

「キャプチャーレーザー発射！」

「漆黒の尖爪【ダークネスクロウ】！」

機械兵は緑のレーザーを、拓真は三本の真っ黒な飛刃で標的を切り裂く漆黒の尖爪を放つ。

2つの攻撃は交わる事無く突き進み、それぞれ互いに命中する。

「ウワアアアア！」

「グルグアアア！」

最後の機械兵が爆散し拓真が緑の光に包まれる。

その時、拓真を覆いつつあった黒い体毛や漆黒の耳、尻尾も粒子と化して、数秒の間を経て拓真は奇声ではなくちゃんとした言葉を発する。

「俺は……、一体……」

「……拓真？」

「解析【アナライズ】……。そうか、俺は捕まったのか」

「拓真！？ 拓真なの？ ねえ拓真ってば！」

「……うるせえよ、香織。頭が痛いんだ」

その一言を受け、香織は満開の笑顔を咲かす。が、頬には涙が伝っていた。

「良かった……、闇に、闇に呑み込まれて無かったのね？」

「なんだよ、それ。まあいいや、こうなったら城ががら空きになっちまうな、エクスカリバー！」

「あいよ、ようやくのお目覚めか、……本当にオメエは相棒か？」

「エクスカリバーも疑うのか？ 時間がない、香織を任せるぞ、…

…受け取れ！ 香織！」

拓真はそう叫びながらエクスカリバーを放り投げる。エクスカリバーはくるくる回りながら放物線を描き、香織の目前に突き刺さる。

「何するんでえ！ 相棒！ とっても痛てえじゃねえか！ まあ、

香織を任せるぞって言うんだからアレなんだろう。あいわかった、香織達は責任持って守ってやらあ！」

「どういうこと？ エクスカリバーに私達を任せるって、どういうことなのよ？」

「俺は多分、この後どっか別の所に転送されると思う。でも心配しないでくれ、いつか必ず戻るから。そしたら香織の手料理でも振る舞ってくれよ」

そう言っている間にも、拓真に纏わりつく光が輝きを強めていく。その時、一樹の腕からするとローズが抜け出し、一心不乱に拓真の元へと駆け寄り飛び付いた。

「そうかローズ、あんたもついて行ってくれるのか、これで寂しくないな。……じゃあな香織、行ってくる」

その言葉を最後に、拓真の周りを閃光が包み込み、閃光が消えた頃には既に拓真の姿は見えなくなっていた。

「そんな……、イヤ、イヤよ、戻って来なさいよ……！！ 拓真！ 拓真あああああ！」

香織の悲痛な叫びが虚空に吸い込まれていく。

拓真はエクスカリバーを残して何処かへと消えていってしまった。

第四章 闇魂の目覚め（後書き）

次回は拓真のワイルドな脱獄劇！

猫ちゃんとの濡れ場もあるよ！

第五章 獄中の出会い（前書き）

今回は前半かなりエロいです！　ってかあんなにエロいの書いたこと無いってくらいスゴいです！

まあ、暴走モード全開で突き進んだ結果っす。

更に新キャラ続々登場で、獄中でもハーレムな拓真！　どうなる、彼の精神！？

……とりあえず、『シャイニング・ハーツ』のシャオメイというキャラクターを痛く気に入ったあげく、自分の小説で似たキャラクター（ってか殆どパクったようなもの）に散々なことをさせてしまったので、セガさんにごめんなさいを言います。

第五章 獄中の出会い

気付いたらそこは真っ黒な空間だった。

何かの留置場かと思っただが、それはあり得ない。

なぜなら一筋の明かりすら遠くに見えないし、機械音は疎か周りの人の話し声や呼吸が聞こえないからだ。

もしここが留置場だったとしたら真っ暗という程暗くはないはずだし、微かに人の声が聞こえるはずだ。

冥界だったとしても、もうそろそろ目が順応してくるはずだ。

そう考えを巡らせていると、突如として何処からか挑発的な声が聞こえてきた。

「よう、後付けのオレ！ 10年振りだなあ」

「誰だよ、あんた」

「オレは本能の大原拓真、生まれた時からお前の中にいた本当の大原拓真さ」

その瞬間、目の前に全身が軽く黒ずんだ俺が笑いながら現れる。

「理性というしがらみに絡まれて自由に行動出来ない哀れなオレ、代わってやろうか？」

「アホか、パツと出の人格が代わってやろうかだなんておこがましいにも程があるんだよ！」

右手に豪火の矢【フレイムアロー】を作り、闇の俺に向かって投げつける。

豪火の矢は見事に命中し闇の俺を燃やし尽くした。が直後、後ろに気配を感じて火炎の剣【ファイアソード】を後ろに回りながら斬り掛かると、案の定闇の俺がラグナロクのような真っ黒な剣で受け止

めていた。

「オメエ、なかなかやるじゃねえか、闇に溶け込んでいるオレに斬りかかるなんてなあ」

「気配を辿るくらい造作もねえんだよ、いいから消えろよ、二セモノの俺」

「ハッ！ 調子に乗りやがって！ まあいい、今日の所はこれで勘弁してやるよ、でもなあ覚えておけよ？ これからのオメエは闇に侵されていくんだからなあ！」

その直後、視界がボヤケて再び真っ黒に塗り潰される。

その時からかな、少女の声が聞こえてきたのは。

「ねえ、起きてよ。起きてつてば」

そう声を掛けられながら左右に揺さぶられる俺、ゆっくりとその目を開ければ……、

「あつ、起きた。おはよ、気分はどう？ えっと、ディカーニャ……だっけ？」

大胆に胸を開けた黄色いフリルのドレスを着た黒髪セミロングに猫耳と尻尾が生えた少女がなんと、俺の股間に跨っていたのだ。

「拓真だ、大原拓真。ディカーニャってなんだよ、元々の名前の面影が全然残ってねえじゃねえか」

「ありゃ？ ゴメンね、猫の記憶力はかなり乏しくて……。私はローズ、ローズ・フィレンヌ。よろしくね」

水色の下着が丸見えってこと分かってるのかな？ 分かってないだ

ろくなぁ……。

「よろしくな。ところで、なんで跨っているんだ？」

「特に意味はないよ。それとも、レディに『重たい』って言うつもりなのかな？ ん？」

「そういつのはないけど……」

さつきからローズが吐息が掛かるくらいに顔を近づけている。

そのせいでそこそこ大きな胸が……。

……意識しなけりや良かった。

「あれ？　なんか固くなってる？　それにそそるようないやらしい匂いも……、どうしたの？　そんなに顔を赤くしてさ？」

「んっ……く、今すぐに俺の股間から降りてくれないか？」

「どうして？　やっぱり重たいって言いたいのか？」

「そうじゃない、そうじゃないんだが……、あんたの腰が……」

ローズはその一言を受け、いやらしく振り続ける腰を見た。五秒後、また俺の方を向いたけども目の色が違っていた。

「気持ちいい？」

「違うだろ！　止めようとしろよ！」

「ふふーん？　じゃあこうしてみようか」

そう言ってローズはベルトを外して、ズボンを下ろした後、下着を少し下ろして俺のイケナイペットを露わにする。

「ちよっ、なにしてんの！？　俺がどういう状況で、これからどういう事が起きるのか、分かってんのか！？」

「ぜーんぶ分かってるよ？　大丈夫、服は別次元に避難させたから」

「い、いつの間に下着姿に!？」

「泥棒猫【シーフキャット】、まばたきしてる間に私の衣服を異次元に飛ばしちゃった、あなたも含めて……、ね」

視線を徐々に下げると、自分の素肌。

一瞬の間にここまでするとは彼女の所業は神業と呼ぶに相応しいだろう。

と、コメントしてる間にもローズは腰を動かし、心身共に余裕を奪っていく。

「いけないなあ、刺激を与える度に少しずつ固く、大きく、熱くなっていくこの物体、こういう風にこすりつけると……んふう、気持ちいい♪ 拓真も気持ちいいでしょ？ ほら、えいつ、そりゃ!にゃん! ほら、私の胸揉んで! ……意外と素直なんだねえ、とつても気持ちいいよ! 拓真♪」

「うつ、ぐう、あぐつ……! ちよつ待って、はひっ! ローズつ、むにむにさせないでっ、にゅあっ!」

「ヘンな鳴き声。それだけ切羽詰まってっ! 来てるのね? 私もいきそう、だからさ、一緒にイこ? 私も! 本気を! 出してあげるからさ! にゃああああん!」「ろ、ろろろ、ローズっ! ひぎっ、あああああっ!」

絶えず快楽を与続けるローズの腰使いに堪えきれず、快楽の渦に呑み込まれた俺、真っ白な液体を下腹に吐き出して、目の前が真っ白く染まっていく……。

「どぴゅどぴゅ出たねえ、それほど気持ちよかったんだ? アタシの、ア・ソ・コ♪ えへへへへ。……ん? まだ泣いちゃダメよ? まだこれ以上の恥辱を用意してんだから。あ、この白いのいいし

そー」

ニヤリと笑った後、ローズはさっき吐き出した白い液体を飲み始める。

その姿なんといやらしい事が、またイケナイペットがぎゃんぎゃん騒ぎ出しちまった。

「どう？　ぐにぐにされてマナ……精神力の塊の事ね？　を放出させられて、しかも放出させた張本人に飲まれるなんて、とっても恥ずかしいよね？」

「今なら死ねる程だよ。ああ、恥ずかしい」

「へへへ、その割りにはまた固くなってるじゃない？　あ、服返すね」

そう言った瞬間、下着姿だったローズは一瞬で桃色のワンピースに身に纏い、俺の服も元通りに帰って来た。

「……んもう、拓真はいけないことをしちゃったわね」

「は？」

「盗賊から物を盗むなんて……どういう事が分かってる？　盗賊から物を盗んだら同じ物を盗まれるのよ。拓真は私の心を盗んだから私も拓真の心を盗んでやる」

ローズがニヤリと笑う。怖い……とは思わなかったよ、だがそれでも体が一ミリたりとも動かない……、なんで？

「狩獵猫【ハンティングキャット】、弱者は強者に睨まれると動けなくなるでしょ？　このスキルはその現象を強制的に起こさせるスキルなの。……何よ、あんたの唇、見れば見るほど舐めたくなくて

くるじゃない……」

そう言つてローズはゆっくりと顔を吐息の掛かる距離まで近づけて唇を舐める。

主にチロチロ舐めてくるが、たまにベローンと舐めたり細かなキスを織り交ぜながら少しずつだが確実に俺の理性をすり減らしていく。そうしてペロペロ舐めたあと、ローズは次に頭を動かさないようしっかりホールドし、舌をねじ込みながら唇を吸い始める。

それはもう、かなり手練れた舌使いで、俺の頭を真っ白に染め上げるのにさほどの時間も掛からなかった。

「じゅる……、どう？ 私の舌使いは？ 他の誰よりも気持ちよかつたでしょ？」

唇を吸われすぎたかな？ ハンパない脱力感に襲われて口が利けない……、とりあえず肯定の意を込めて首を縦に振る。

「えへへ、でしょでしょ？ ご褒美としてさ、頭撫でてよ」

強力な脱力感の中、体を動かさせていうのも辛い話だが、辛うじて動く右手を使いぎこちない動きで頭を撫でる。

ローズは目を細めて喜び、頬擦りをする。

これは猫の習性……つてのは分かつてる、分かつてるけど人の状態でされても困る……。

「私、拓真のことが好きになつたの。……交尾しない？」

「な、何故に？」

「ここに捕らわれた人間や獣人は直に機械兵にされるの。そうなれば元々の感情を消されて代替えの感情を埋め込まれて何時終わるか分からない生涯をガラドボルグに服従しながら生きていかなきゃな

らないの。だから……、私が私である最後の時までに来ることはしておきたいの」

「……分かった。でもな、これが最後だなんて軽々しく口にするなよ。このままじゃ絶対に終わらせない。俺達はここを抜け出すんだからな」

「うん、分かった……。だから……さ、優しくシて？」

そう言いながら、ローズは足をいやらしくM字に広げ、下着をずらして誘惑する。

俺はゆっくりと近づき、それにむしゃぶりついた。

「ふにゃああああん！　すご、スゴく気持ちいい！」

「……まあ、とりあえず弱点はイヤと言うほど教え込まれたから……」

……

ぴちゃっ、ぴちゃっ、……といやらしい水の音がローズの嬌声と相俟って更にいやらしく聞こえる。

香織には無いいやらしさが……、なんでかなあ？

「にゃっ、ふうう、あっ！　わ、わたっ、私も、拓真の準備したいっ……にゃっ！」

「ん？　俺の準備？　何をするのさ？」

「とととと、とりあえず舐めるの止めて、少し離れてっ、そうしないと私がっ……、ひにゃああああん！！」

甘ったるい叫び声を上げた瞬間、ローズがのけぞりビクビクつと震え、目の前からちよつと白く濁った水が噴き出す。

その水からはいやらしいフェロモンがぶんぶん匂ってきて、今すぐにも飛びかかって種を蒔きたい衝動に駆られそうになるがせっかくローズが準備してくれるんだ、ここはじつと我慢して一時の快楽を

楽しもうじゃないか。

「もう、拓真のばか。気持ち良すぎて頭が変になりかけたじゃない。すーはー……、気を取り直して、私とキスした時拓真はどう思った？」

「なんか舌がやけにザラザラしてるなあ……って」

「そう、正解よ拓真。猫の舌ってなかなかザラザラしてるモノなのよ。そんな舌でこの先っちょを舐めたら拓真はどうなるのかなあ？」

意地悪な、あるいは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、楽しそうな声で話し掛けるローズ。

知ってるよ、その答えは痛いくらいに分かるよ。

「分かる、分かるよ！ 拓真の思考回路がショートしてるのが！ 実演してあげるから、しっかりとそのダメダメ海馬に刻みつけておくのよ？」

そう囁くローズに突き飛ばされ、態勢を完全に崩した俺は、見事に尻餅について両足をばたーんと上に向ける。それを待ち望んでいたかのようにローズは手早く動き、両腕で両足をがっちりホールドして満足げな笑みを浮かべる。

ローズの眼前にはパンパンに腫れ上がった我が半身、それを慈しむかの如く頬擦りをし、目を細めて喜ぶ。

「不用意に女盗賊の心を奪うと、困るのはあんたの方なのよ？ 大原拓真くん。さあ、盗賊の誇りにかけて甘美な報復をしてあげる。

拓真は私の魅力に負けて私のモノになるの」

語り終わると同時に半身の先っちょを舐め上げるローズ。

その瞬間に背筋が焼け付いたと幻覚する程の刺激を感じて思わずの

けぞる。

それを見て満足したローズはさらにペロペロ舐めて俺を悶えさせる。

「ふああっ！　ローズっ！　マズい！　それはかなりマズい！　出
ちやうつ！」

「出しちゃダメ。男の子ならそれぐらいガマンしなさい」

満面の笑みを浮かべ、ローズはさらに腫れ上がった半身にちゅうちゅう吸い付く。既に視界の焦点が定まらなくなって周りがボヤケて見える……。

「イきそう？　止めて欲しい？」

「はあっ、ぐ……ちよっと待って！　ストップ！　また出そうなん
だけど！　気が変になりそうだ！」

「……ふーん？　はい、止めた」

「……へ？」

それはあまりにも突然の事だった。今までちゅうちゅうと吸い上げていたローズがいきなり唇を放し、んんっとなんて猫のような欠伸をする。

その時見たのは、かなり濡れそぼった下着とか、ローズの挑発じみた笑みだった。

俺はすべてを悟った。ああローズ、すべては君の手の平の上だった訳か……。

その瞬間、なんとも言えない感情が込み上げてきて、全身がゾクゾクと身震いした。

「どうしたの？　私の下半身をじつとみて……？　分かった、私が欲しいんですよ。分かるわ、あんたも私と同じ発情期の肉食獣の目をしてるのが。あんたの心に潜む肉食獣を開放しちゃって私を貫い

てみなさい？ 『私はローズの事が大好きなイケナイ雄猫です！』
って言いながらね」

そんなことを嘯きながら、四つん這いの状態でお尻をこちらに向けながら下着を横にズラすローズ。……そうだよな。遠回しに求めているんだよな。

「……私はローズのことが大好きなイケナイ雄猫です。……これでいいのか？」

「へへへ、お顔真つ赤にしてえ、かわいい！ いいよ、私のお腹で気持ち良くしてあげる。だから……キテ？」

下着をズラして丸見えのアレをさらに広げてこれでもかと誘惑する。俺はゆっくりと近づき……。

プツンと小さな音がしてローズはのけぞり絶叫を上げる。

「ひあああつ、あつ、ひにやあつ、んふう、スゴイ、予想外の肉食つぷりいつ、ひやあつ、アタマ、アタマがヘンになるっ、にやあつ！」

「う、はあ、ゆ、油断したっ……！ こんな、こんな気持ちいいものなんて！」

パチュツ、パチュツといやらしい音が俺の理性を徐々に壊していく。理性を捨てたらただの盛りのついた犬だぞ、俺。

「はあつ、はあつ、こ、この、野性味溢れるような、そんな感じがスゴく良いの！ もっと、もっとと激しくして良いんだよ！ 私ならもう大丈夫、だからさ！」

「ろ、ローズがそう言うなら……、本気だすからな！ 後悔するなよ！」

「ひにゃああああ！ 拓真の、拓真の暴れん坊にい！ めちゃくちゃにされてるうつつう！」

ローズとの交尾は時間という概念を忘れるくらいに気持ちよく、夢中で快楽を貪り続けた。

気付けば二人とも顔を真っ赤にして喘いでいた。

「もつと奥までっ！ 突き上げていいんだよっ！？ むしろ突き上げて欲しいっ！ ひゃあん！」

「こ、こんな感じか？」

「最高っ、にゃ！ あん！ いっそのこと、子宮まで貫いて子作りする、にゃあっ！」

「そうしたいのは、あぐっ……、もう、ダメ！ 気持ち良すぎて頭が痺れてきた！」

「それならなおさら！ 奥の奥で出して、もつと気持ち良くなるうよ！ そこを、っあ！ 貫くだけなんだからあっ！」

肌と肌がぶつかり合い放つ音も俺にはいやらしく聞こえてしまう。

……ここまで来たらもう何も考えられなかった。

我慢の限界に達した俺は蠢く何かの中に突き入れた後、ゾワゾワと下半身が痺れ盛大に種、あるいはマナを注ぎ込んだ。

「っにゃあああっ！ お腹の中がスゴく熱いよっ！ 好き！ 拓真大好きっ！ ひゃああああ！」

……ローズもご満悦のようで何よりだ。

つくう、今までの精神的ダメージが積み積み目の前が真っ黒だ。

俺は無理に起きることを考えず、ただただ眠りについた。

頬にむずがゆさを覚え、重たい瞼を再び開ける。

最初に見たのはローズの情欲した顔、呆れるのと同時に軽く目眩がした。

「おはよ、拓真……。ゴメンね、私発情期真っ盛りなだから……。
頭、大丈夫？」

「ああ、なんとかな」

頭よりも顔の方がヒリヒリするんだけど……。

ふと手鏡を作り出して自分の顔を見てみれば、顔中ローズが付けたキスマークで赤くなっていた。

尚も抱き付き吸い付こうとするローズを引き離し周りを確認、めばしいものは黄緑色の電気が流れていそうな光の帯、恐らくは現実世界の檻が正面にあるだけ。後は鉄かプラスチックがよくわからない材質の壁が残り三方と床や天井を囲んでいるだけの監視カメラも便所もない、完全に人間様をバカにしている造りだ。

檻の向こうにも機銃どころか警報装置すら伺えず、機械の連中は人間様をナメきっている様子である。

「過去に脱獄したとかの情報は聞いてないのか？」

「よく分からないけど、脱獄は絶対不可能らしいよ。ほら、目の前にある電気の檻があるでしょ？ それがあるから脱獄は絶対に出来ないんだって。なぜならフォトンを分解して魔法の効力を殺すから」

「いや、フォトンって何だよ！？」

「え！？ 知らないの！？ これ、魔法使いの常識なんだけど……」

「知ってる前提で話を進めないでくれよ、この世界の常識はまだ分からないから！」

その瞬間、ローズはハッと口を手で押さえて驚く素振りを見せる。
記憶力の乏しさは本物らしい。

「そうだった！ 拓真は別世界から来た異世界人だった！」

「そうだよ、だからフォトンについて分かり易く説明してくれ」

「分かった。魔粒子と書いてフォトンは空気中にふわふわと漂っていて、誰かが魔力を集中するとサーッと集合してそれに応じた魔法に変換されるの。魔法を放つほんのちょびつと前で、一瞬何か丸っこいものを見なかった？」

「たまに蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放つ時に少し見るなあ」

初めて落ちた魔法の世界ではもちろん見たし、ロームラルカ（死神の世界編もしくはREDEXさんの作品、黒き翼≠BLACK WING≠参照）でも見た。

さらには魔法なんて使えるはずもない、元々暮らしていた世界でも赤い丸っこい物体が確認出来たのだ。

前々から気になってはいたのだが、香織に聞くのも野暮と言うものなので聞かないで放っておいていたらこれほどまでに重要な役割を果たしていたとは……。

このことを香織は知ってんのかな？

「どんな世界にも魔法使いの一人や二人はいるものよ。魔粒子は魔力を持つ人間が呼吸をする事で放出されるの。魔粒子は一つが数百万なんかに分裂したりするから、魔粒子不足で魔法が使えなくなるなんて事はある得ないわね」

「待て待て、それじゃ空気中魔粒子だらけになるじゃねえか！ 特に魔法が世間的に認知されてない世界なんか消費も追いつかないんじゃない……！？」

「さあ？ そもそも魔粒子の出どころも諸説あるわけだし、消費さ

れなくても三日で自然消滅するらしいし……。まあ、人畜無害なわけだからそこらへんは気にしなくてもいいんじゃない？」

「はあ……。と曖昧な返事をして今からぶち破る檻と向き合う。

どうにか壊せないか……。そう思いながら蜥蜴の尻尾を放つべく手を檻に向かって突き出す。しかし、肝心の炎が小さい。

しかも大きくなるペースがカメ並みに遅いとなれば、放つ気にもなれねえ。

炎を消してその場にどつかと座り込み、盛大に溜め息を吐いた。

「……………遅え」

「仕方ないよ、あの檻は完全じゃないけど外からの魔粒子も殺しちゃうんだもん。ま、それをものともしない桁外れの精神力があればどうにかなるかもね」

精神力かあ……。そこそこ自信はあったんだけどなあ……。まだ足りねえか。

……。となると、取る行動は一つ。

「ローズ、ちょっと手伝ってくれ。とっても簡単なことだからさ」

「なにに、私の助けがいるの？　ちなみに、私は潜入専門だから攻撃魔法は全然ダメだし、防御魔法も必要最低限しか覚えてないから」

「だと思ったよ。大丈夫。女に肉体労働をさせるほど鬼じゃないから。その、あれだ。キス……。してほしいんだよ……。ね」

そう言った瞬間、ローズの顔が怖いくらいに綻び、まるでネズミでも見つけたかのような威圧感ある笑みだった。

「私に？　キス？　ふふーん、まさか拓真から心を差し出してくれ

るなんてね」

「どゆこと？」

「私はね、キスのイメトレだけは毎日欠かさずに行っているんだ」

言下、認識しきれない速さですぐそばまで近づき、頬を胸元に当てる。

それだけならまだしも、上目使いで挑発的に見つめてきたり、軽く胸が当たったりと色々頭が痛くなる要素ばかりだ。

「ドキドキしてるね？ 拓真って分かりやすいんだよね。でも……」

ローズは軽くにやけておもむろに上着を脱がすと、唾液で濡らした指を使って胸元にハートマークを描き、その中心を強く吸い上げた。どこまでも挑発的で扇情的なローズの行動に胸のあたりがキュンと痛み出す。

「またドキドキしちゃって、これじゃあ拓真の心、保たないかもよ？ 衝動に駆られて、にやんにやん、わんわん」

「っ、しねえよ！ とにかくここを抜け出すために必要なんだよ！

……キスが」

「ふーん？ キスがねえ……、仕方ないなあ、してあげるよ」

そう言った瞬間、ローズ頭をがっちりホールドしてそのまま唇を押し付ける。

それだけではなく、舌を無理矢理ねじ込まれて口内を蹂躪し始めた。少し下ではむにゅんと推定Eカップのそこそこ大きな胸が派手に潰れて、頭がヘンになりそうだ。

「ちゅ、くちゅ……、ふぁ……、どうしたの？ 拓真、顔が真っ赤だよ？ まさか、キスだけでかなり興奮してるわけじゃないよね？」

「う、うつせ！……ローズの舌使いが上手すぎるんだよ……」
「えっへへ！嬉しい事言うじゃない」嬉しいから、もちっとしてあげようかな！んちゅっ！」

そう言つてローズは再び口内を蹂躪し始める。

力が湧いてくるのは確かなんだ……が、何か奪われている気もしな
くはない……。なにを吸われているんだ？

「ぶあ……。ごちそうさま」最っ高においしかったよ、拓真の唇。
ついでにハートも貰っちゃったし！」

「なっ！？あ、ああ……。そりやどうも、そんじゃあ離れてくれ。
危ないから」

「いや。このままギュッてしてたい」

「いや、危ないから……。ね？」

「むう……。ばかあ」

ローズは可愛らしく頬を膨らました後、首筋に軽く噛みついた。
まあ、猫の歯は鋭いからそれだけでもかなり痛いけどね。

そのまま数秒間静止、その後、すぐ上に強く吸い付いて離れていっ
た。

どこまでも挑発的な猫耳娘だよ、全く。おかげでドキドキしてきや
がった。

「見てろよ、ローズ。これが俺の魔法だ！」

両手を眼前に突き出し、そのまま両手をかめはめ波の要領で後ろへ
持つて行く。

次の瞬間、赤い粒子が次々と両手に集まり、あっと言う間に両手か
ら溢れんばかりの大きさに膨れ上がる。

「古より伝説として伝えられし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を与えよ！」

溢れんばかりの炎の粒子は詠唱終了と同時に大小様々な無数の魔法陣に変わり、くるくるとその場で回り続けている。

「蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

両手を突き出した瞬間、くるくると回っていた無数の魔法陣は一つの巨大な魔法陣と化し、真紅に光り輝き膨大な量の炎を吐き出す。しかし、檻を破壊するにはまだ力不足らしい、バチバチとスパークしながらなおも原型を保っている。

「ローズ！ どうにかできないのか！」

「ならないことは無いけど……」

「なんでもいい！ とにかくコイツを攻撃してくれ！」

「ええい！ イチかバチか！ コピーキャット 複写猫！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

ローズは先程の俺と全く同じ動作を繰り返し、少し小さい蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を繰り出した。

ローズの蜥蜴の尻尾は俺の蜥蜴の尻尾と混じり合い威力を高め、その結果として檻をぶち破った。

威力を増した蜥蜴の尻尾はなおも壁を破りつつ突き進み、ついには見えなくなってしまった。

「うわあ、ハンパないね、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】って」

「ああ、俺の世界じゃ最高クラスの攻撃魔法さ」

俺とローズは再び向き合い頬を朱に染める。

そして再び、キスをしようとした瞬間……、

「これ以上ローズ様に近づくならば、命の保証はせんぞ」

殺意の籠もった迅風を引き連れて、鋭き刃の切っ先が首筋に押し当てられた。

すぐさま飛び退き、鈍く輝く閃光から逃れると、ラグナロク（ver. 忍者刀）を装備して身構える。

「遅い！」

「見えた！」

ジャッキイイイン！ 金属音が響き渡る。だが二対の切っ先が触れることはなく、大柄の獣人が二対の切っ先を掴んでいた。

「二人とも、これ以上続けるなら剣を折るよ？」

そう言つて大柄な熊の耳を生やした獣人は二対の剣を突き飛ばし、俺と犬耳の獣人を吹き飛ばす。犬耳の獣人は剣を鞘に収め、ローズの側へと駆け寄る。

よく見たら左目にドクロの眼帯を付けているが、左目の視力が悪いのだろうか？

とりあえず、俺もラグナロクを粒子化しよう。

「ほらほら、二人とも殺気立っちゃダメだよ、ソフィアちゃんも眼帯を取ってえ」

「う、うわ、何を！？ 止める！ 止めてくれ！」

ソフィアと呼ばれた獣人は熊の獣人に無理矢理ドクロの眼帯を外される。

その瞬間に先程までの鋭い眼光が嘘のように円らになり、欠伸をしたあと目をごしごしこすってぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい！ 争う気はなかったんだけど、あまりにローズ様といちやいちゃしてたから……、それにいやらしい匂いが二人の局所から漂ってきたのであなたがローズ様を手込めにしたのかと……」

犬ならではのとんだ勘違いだな。

黒髪ロングで犬耳生やした着物姿の大和撫子はスレンダーな体軀で乳もぺったらなわりには妄想は激しいらしい。

俺より少し背が高くてスタイルのいい、谷間を強調したカウガールルックの熊耳茶短髪少女はニヤニヤ笑ってるし……、とりあえず紹介だけでも……。

「お、俺は大原拓真、アンタ達は？」

「ジュリア・コレット、ツキノワグマの獣人だよ。で、ローズの近くにいろのが——」

「ローズ様の右腕にして護衛役、ソフィア・デュヴァリエだ」

「それは、違うでしょ、ラブラドルの獣人ソフィア・ローレンでしよって、いつの間にか眼帯まで着けてるじゃないのお、外してよ仕事じゃないんだからぁ！」

何をする！ 止める！ とか、かわいくないから外してえ！ などと騒ぎながら押し合いへし合いを繰り返す。

楽しそうだな。そう思ったとき、不意に後ろから声がした。

「お前が大原拓真か！ なるほど、確かに尻に敷きやすそうだな」「め、メロディアちゃん！ 、そんな事言っちゃ、拓真さんに失礼でしょ！」

振り向いてみれば、メイド服を着た、黒髪ショートの兎耳に赤色の目をしたそこそこ肉付きのよい四肢に真理亜並みの胸をした女性が幼い女の子を肩車していた。

「私はウサギの獣人のシルヴィア・コレットです、メロディアちゃん
のメイドです」

「メロディア・ベアトリス・ド・リシデアだ。私はこのフィリア王国より西のリシデア王国の王位継承者なんだぞ、頭が高あい！」

メロディアはシルヴィアから飛び降りて声高に言い放つ。

俺は「そんなの国が潰れば意味ないもんなあ」とみんなに同意を求めるために辺りを見回したら、みんながみんなメロディアに跪いていた。

「あ、あれ？ みんな？」

「さあ、拓真も跪くと良い。我がメロディア親衛隊の仲間に入れて上げようじゃないか」

何が跪くと良いだ、バカじゃねえの？

俺はこういう偉ぶるだけで何も出来ねえヤローが大嫌いなんだよな！

「やなこつた、人に物を頼むときはそれなりの態度を見せやがれつてんだ」

「な、拓真！？ メロディアを怒らせちゃダメだって！」

「そうだよお！ メロディアちゃんは、拓真ちゃんが思っているほど非力じゃないよお！」

「ふふ、ふふふ。そうか、そなたは私の命令には従わぬと言うのか、なら！」

そう言っと、メロディアは俺の肩に飛び付き肩車の体勢を取った後に俺の頬に吸い付いた。

幼い……、ってかまんま少女の可愛さを利用したおねだりかと思っただがまるで見当違いのようだ。

ちろつと舌で頬を撫でられた瞬間、常人なら軽く気絶しかねない程に激しい電撃が体全体を揺さぶり、なおもちゅうちゅう吸い続ける唇に体全体がゾクゾクと身震いするのだ。

……決して興奮しているわけじゃねえからな！

「ちゅうつうつ……、ちゅぱ……。ふむ、上出来だな」

「ぐっ……。何しやがった！」

「そなたが命令に従わぬから、そなたの頬に忠誠の印を刻ませて貰った。いわゆるキスマークだ。これでそなたは私が思うがままなのだ！　によほほほほ！」

思うがままだと？　ふざけるな！

俺は頭上にいるメロディアに掴み掛かろうと手を伸ばすが、ひょいと避けられ飛び降りる。どんだけ身軽なんだよコンチクショウ。

「てめっ、調子に乗るのもいい加減にしやが——」

「うるさい、大人しく跪いて」

その瞬間、メロディアを掴み掛かろうとした体は直立、硬直して数秒間の間を経てゆっくりと跪いた。自らの意志関係なしにだ。

「によほほほほ！　これが私のスキル、絶対命令【コマンド・オブ・アブソリューション】なのだ！　私が付けた忠誠の印から微量の電気を流して電気信号を操り私の思うがままに操る、エレクトネスミ専用のスキルであると同時に王族である私にふさわしいスキルなのだ！　によほほほほ！」

エレクトネズミって何！？ ピ・チュウ！？

しかしまいったな、意志と関係なしに体を自由に操るスキルか……。

「どうやら、あんたをちと見くびっていたようだな」

「当然よ、私だって自己防衛の仕方は心得てるわ。だが今の時世それでも足りないのだから、ローズ達の仲間になって足りない分を補ってもらっているのよ」

「威張り散らすだけのわがまま姫ってわけじゃ無かったのか……。
わかった、俺もメロディア親衛隊に入隊してやるよ。それがアంతの望みなんだろう？」

「えええええ！？」

俺がそう言った瞬間、周りが一気にガヤガヤ騒がしくなった。俺がメロディア親衛隊に入ることがそんなにマズい事なのかよ。

「意外、わがままメロディアに進んで忠誠を誓う人がいるなんて……、私達以外にはいないと思ったのに」

「すごい決断です、拓真さんは凄い人です」

まあ、その半分がメロディアに向けての中傷だったが……。

「俺は自分では何もしない、権力だけを振るって自分の思い通りに人を操る形だけの偉いヤツが大嫌いなんだ。あんたもそういう人間かと思ったが、……あんたは違うみたいだな」

「当然でしょう！ 今や世界の危機に女王も能動的に動かねばならない時代なのですから！……では、忠誠の口付けをしようか。私と口付けを交わせるなんて世界一の幸せ者なんだからな！」

メロディアはにやっと笑った後、目を瞑って軽く顎を上げた。これ

が意味することは一つ……、だよな。

「そのままの状態で二、三質問に答えてくれ」

「うん」

「一つ、王族の口付けって普通手の甲じゃないのか？ 二つ、もしそれがリシディアの口付けだったとして、同性同士だとしてもそうするの？ 三つ、大好きになったから舌入れていい？」

「その一とその二は、拓真とだからキスなのよ。いつもは手の甲にするのよ。その三については、私とケツコンしてくれるなら入れても良いよ」

ひとしきり言い終えた後、メロディアは再び目を瞑り軽く顎を上げた状態で静止する。

その姿はとても可愛らしくまるでそこに天使がいるかのような佇まいだった。

見とれて動けずにいる俺を急かすように見つめる蒼碧の瞳は何処までも穢れない光を湛え、覗き込むことさえ罪とならん生まれながらの高貴さを物語るようだった。

俺はそれを壊さぬようゆっくり慎重に唇を重ねて少しずつ舌を入れようと思ったのだが、メロディアは唇が重なった瞬間に両腕で頭をがっちり掴んで乱暴なくらいに舌を入れてくちやくちやといやらしい音を立てながら見せ付けるように口内をなぶっていく。

それから何分だっただろうか、満足したメロディアは俺を突き飛ばし、尻餅を付いた俺に間髪入れず抱きついた。

その拍子にメロディアの腰まで掛かる長い黄金色のストレートヘアが顔に少し当たり、ふわっと甘い香りを醸し出して俺の鼓動をドキンと高鳴らす。

……俺は重度のロリコンなんだな、きつと。

「初めてにして濃厚なディーブキス、婚約成立だね　ふふふ、し

あわせ♪ たくまだあいすき（はあと）……おほん。今、我がメロディア親衛隊に一人の同士が生まれたわ！ 名を大原拓真、みんな意地悪やイジメのないように迎え入れてあげること！」

一同、はあいと無気力な返事をメロディアに返すんだけど、俺の体の安全は守られるのか？

「尚、拓真はなかなかの男の子だから、欲求不満のないよう一滴も残らず搾り取るようにい！」

えええええ！ 今天国から地獄へと突き落とされた気分だよ！ 何？ 意地悪やイジメは無いけど、無理矢理や無限地獄は大ありってヤツか！ うわー、やっぱ入らなけりや良かった！ ってかみんな既に頬を真っ赤に染めながらにじりよって来るんだけど！

……と、ひとしきり心の叫びを並べ終えた、まさにその時激しい爆音と振動が俺やローズ達を襲い、直後照明が全て爆ぜて周りを一瞬で真っ黒に塗り潰す。

「なっ、何！？ 爆発？ 地震？」

「みんな！ メロディア殿を守りながらローズ様を守れ！」

「おー！」

「ねえ、普通逆じゃない？ ローズを守りながら私を守るんじゃないの？ ねえ、無視しないでよ！」

「きゃああああ！ 助けて下さい！ 拓真さん！」

「わーっ！ だからって後ろから抱きつくな！ 分かったから胸を押し付けるなあ！ ってか大きくてむにむにしてて幸せ……」

きつと、俺とローズの蜥蜴の尻尾がコントロールルーム辺りで炸裂したんだろう。

各々が混乱に陥り、口々に叫ぶ中、突然に頭が痛み出す。

「ぐっ……！ あ、頭が！」

「この感じはあ、あのコが助けに来てくれたんだねえ」

「たーくーまーさーまー！」

頭痛だけでなく耳鳴りまでしてきたな、と思つた途端に強烈な衝撃と共に引つ付いていたメロディアとシルヴィアが吹き飛び、俺も何者かに抱き付かれて壁まで吹き飛んだ。

「恋する暗殺者、フランシア・ダークネス！ よもや生きる伝説殿が我らが義賊団《黒猫の舞》に所属していようとは……」

へえ、ローズを初めとするこの場にいる獣人はみんな義賊団《黒猫の舞》に所属しているのか……、つて俺は義賊団に入団しちまつたのか！？

「そつか、ソフィアは入団してからあまり日が経たないから分らないよね、後で紹介するね。それよりも、ヤッホー！ お久しぶりだね、フランちゃん」この周辺地形はバツチリ頭に入ってるよね？」

「ええ、脱出経路までこの頭の中にインプットされてますわ。ああ、愛しの拓真様、お怪我はございませんか？」

自分から猛烈に突っ込んで来てよく白々と怪我は無いかって訊けるよな、大丈夫な訳ねえだろバカヤロー。

「まあ！ 肘を擦りむいていらつしやるじゃありませんか！ 一体誰がこの様な無礼な事を！」

「アンタだよ、アンタが突っ込んでさえいなけりゃ怪我なんかしなかったよ」

「流石は天然少女フランだよねえ」

「お黙りなさい！ 次言いましたらあなたの血液を一滴残らず吸い尽くしますわよ！ それよりも愛しの拓真様、せめて私めが傷を舐めて消毒だけでも……」

「いいよいいよ！ こんな傷唾でも付けてりゃ治るから——」
「たたたあっ!？」

こいつ……、人の話をまるつきり聞いてねえ！

しかも目が爛々と輝いてるし、めちゃくちゃに舐めまわしてくるし、これじゃあ傷口を抉っているようなもんじゃねえか！

「わかったわかった！ 舐めてもいいからもう少し優しく舐めてくれ！ たたたたた！」

「はっ!？ ごめんなさい、私一応コウモリの獣人ですので、血を見たら興奮のあまりむしゃぶりついてしまうのですよ!」

と、鼻息荒く雄弁するフランシア。尚もベロベロむしゃぶりつくのは一種のイジメだろうか？

そう思った瞬間、爆ぜ落ちたはずの照明が光を取り戻し、眼前には吐き気がするほどにおびただしい数の汎用型機械兵が待ち受けるように犇めいていた。

「フランシア！ 後ろ！ 機械兵が!」

「ぺちゃ、ぺちゃ、ぺちゃ……。ん？ アレは……。愛しの拓真様の命を脅かす不届きな機械兵！ 成敗します!」

「その前に離そうな、右腕を。危険だから」

こんな状況に陥っても右腕を離そうとしないその根性は賞賛に値すると思うぞ。

「愛しの拓真様がそう言うなら……」

「んー、さて拓真どうする？」

「とりあえず蜥蜴の尻尾で突破口を開く、後はなんとか囲まれないように牽制し続けてくれ」

「そのような適当に見繕ったような作戦で大丈夫なのだろうか？」

「ソフィアちゃん、囲まれた時はねえ、作戦よりも純粋に力が強い方が勝つんだよ？」

「むー、奴らは私の電撃が効かんからキライじゃ」

「あ、あの、私達はどうすれば……、いい……んですか？ 私達じやあの機械兵達には太刀打ち出来ません……」

「……お前らくらいおぶってやるよ」

そう言った瞬間にシルヴィアは背中に抱きつき、その肩にメロディアが跨った。

シルヴィアの胸はスレンダーな癖に真理亜並みに大きいから、おんぶしたら健康的な四肢に絡まれながら魔性の果実が派手に潰れて……男の夢だよな！ うん！

「脱出経路は私めにお任せを！ 愛しの拓真様！」

「よし！ 役者は揃ったことだし、プリズン・ブレイクといきますか！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

一筋の炎が機械兵を包み込み、次々と爆ぜゆき、目の前の通路が開かれて俺達はただひたすらに走り抜ける。

目指すは牢獄の出口、生半可な覚悟じゃ決してたどり着けようのない場所。

しかも、今の俺はシルヴィアとメロディアを背負っている、かなりのハンデになるはずだ。庇わなきゃいけないし。

だがそれを差し引いても余りあるのが頼りがいのあるローズを始めとする義賊団《黒猫の舞》の皆さんと、何よりもシルヴィアの胸！

この胸の感触を知ったら、死ぬわけにはいかない！　いつかシルヴィアの大きな胸に抱かれるために！

……まあ、ローズ達とシルヴィアの大きな胸があれば、何が来ても負ける気がしないもんね。

覚悟と希望とほんの少しの邪心を胸に秘めてシルヴィアの胸に酔いしれながらも、俺とローズ達《黒猫の舞》のメンバーは長い長い脱獄への第一歩を踏みしめる。

第五章 獄中の出会い（後書き）

次回、ホントのホントに脱獄劇を見せる拓真！
ただ、道中に思いがけない出会いをします！
そして、義賊団黒猫の舞の実力や如何に！

第六章 脱獄と再会、そして惨状（前書き）

今回は拓真が脱獄するお話となっております。

出口目前にして待ち伏せ、絶体絶命の拓真達が見たものとは！？

バトル、バトルの第六章（通算第39話）です。

第六章 脱獄と再会、そして惨状

「蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！……くっ！」

「わわっ、きゃあ！ きゅ、急にしゃがみ込まないでくださいよお、拓真さん……」

「またマナ切れか……、これで三度目だぞ。全く、拓真の精神力の回復方法がキスだなんて……性のケダモノ。で、次は誰がキスをするんだ？」

非常に困った事になった。この牢獄、名をディシア第一留置場は迷路のように入り組んでいて長いため、例え電気の檻をぶち破ったとしても心身の疲弊と迫り来る機械兵が脱走者を死に至らしめるといふ。

いつもならフランシアが間違ふことなく出口までの最短ルートを機械兵に出会うことなく突き進めたのだが、盲目のフランシアを哀れんで視力を与えたのがいけなかったのか、フランシアは最短ルートが分からなくなり、結果として迷い込むことに繋がったのだ。

「ごめんなさい、私が最短ルートを見失ったために愛しの拓真様を疲弊させてしまうなんて……、やはり私が視力を求めたから……」

「気にするなつて。出口は俺に任せて、フランは今目に見える世界を堪能しなよ」

「ああ、なんと御心の広い愛しの拓真様。これからは拓真様のお顔だけを見て、拓真様の唇だけに愛の接吻を捧げ続けますわ」

そう言つて目を瞑り唇を近づけるフランシア。

さつきからフランシアのことをフランと呼んでるのは、そう呼ばないと噛みつかれるからである。

つてか、フランシアはさつきから鬼気迫る勢いで目をギラギラと輝

かせて近付いているんだけど……。
そんなフランスに気圧されて俺もキスしようと唇を近づけようと
するが、慌ててローズが制止した。

「あわわわ、だっ、ダメよフラン！　あなたとキスしたら間違い無く
拓真は眠るから！　ま、それはそれとしてさー、バカ正直に正面
突破しても、得るものは少ないでしょう？　ま、拓真にキス出来る
んだからこれ以上なんにも言わないけどね♪」

「いけません！　ローズ様！　ローズ様の唇は何時如何なる時も私
のものと口が酸っぱくなるほど申しているはず！」

抱き付こうとしたローズをムリヤリ引っ剥がして抱き締めるソフィ
ア。

「ご、ゴメンね、私そういう趣味は——」

「異性も同性も偉大なる愛の前では等しく同じです！　彼のような
下賤な男と接吻なさる前に私と激しい愛の接吻を！」

「いや、だからそういう趣味は——ふうん！？」

ソフィアは抗議するローズの唇を無理矢理奪って、頬を真っ赤に染
める。

本物のレズビアン、ガチレズだ。

「……ハア、ハア、なんと柔らかい唇でしょうローズ様の唇は」

「あ、いや……、うん、それよりも拓真、キスしようよ！　キス！」

恍惚な表情をして立ち尽くしている隙にソフィアから離れるローズ。
そのまま抱き付き眼前で舌なめずりした後桃色の柔らかな唇を押
し付けた。

——やっぱり可愛いよ、ローズ。俺は黒猫の舞のメンバーみんな好

きだけど、やっぱりローズが一番好きだ！

「私の極上キッスで元気出た？」

「ああ、大好きだよローズ！」

「えへへ……私も好き、かな。拓真」

「うわぁ！ 敵がうじゃうじゃ出てきたよぉ！」

その声と共にガシャガシャと音を立てて、砲台にそのまま足の付いたような機械兵が前から後ろから次々と現れる。

「脱獄者発見！ 直ちに始末せよ！」

「作戦コードZ、一斉掃射にて目標ヲ駆逐せよ。我等局地防衛型機械兵ノ実力ヲ見せ付ケテヤロウゾ」

小隊長の局地防衛型機械兵の命令と同時に照準を合わせてエネルギーを貯め始める。

このままでは四方八方からバズーカ砲を撃たれて、俺やローズともかく他のメンバーは呆気なく吹き飛んでしまう。

「拓真！ オマエの力、見せつけてやれ！」

「了解、俺から離れるなよ！ 詩音、アンタの魔法借りるぜ。大地の巨壁【ガイアウォール】！」

右手に茶色の粒子が集まる。そのまま右手を地面に叩きつければ前後にいる機械兵の目前に鉄製の床から鉄の壁が盛り上がる。

ただただ床を盛り上げた訳じゃない、土の魔力を練り込み強化した鋼鉄の壁！

無論、それを貫ける弾丸は存在せず、大地の巨壁に挟まれたこの空間は完全に安全地帯となつたわけだ、かなりうるさいけど。

「す、凄い！ お前、少し見直したぞ！」

「そうか？ 全員いるな？ ……よし、じゃあ機械兵のヤツらを撒くとしますか」

「天井に穴を開けるのね！？ 義賊らしいわよ！ 拓真」

「義賊らしさって……。まあとにかくこの狭苦しい空間じゃ直ぐに酸素なくなってみんなお陀仏だからな。上に穴開けて脱出する、フランも分らないなりに階段見つけては上へ上へと上がって行ったからな。上に上がれば脱出ルートも見つかるだろう」

言い終わる頃には天井の一部分を消滅させて上階に上がれるように浮遊の魔法陣を描き終えていた。

「よし、俺にくっつけー、魔法陣からはみ出るなよ色々と面倒だからなあ」

「はい！」

「……だからといって抱きつくなよ、胸が当たってむにーってなってるんだけど、ワザとなの？」

「そうだよ？ 分からないの？ ……おお、カタくなってますねえ」
「触るな！ 俺を男として見てるか？ 俺を思春期の青年として見てるか？」

「思春期は動物で言う発情期だと聞いたのだが、私達と同じようにムラムラしてしょうがないと聞いたのだが」

「それただの変態の戯言！ サラツと聞き流しちまえよ！ つか、お前ら全員発情期かよ！？ ……だっああ！ だから触るなってソコ！」

大小様々な胸をむにーって押し付けられ、いろんな所で熱く濡れた感触を味わい、ハアハアとねっとりした吐息を浴びせられながら上階へと上がっていく。

……早くローズ達の発情期終わらないかなあ、と思いながら。

「俺の服が……、濡れ鼠なんだけど」

「発情期だから…… とつても濡れやすいんです。許してくれませんか？」

「いいよ、俺も幸せだったし」

「拓真つてえっちい」

「うるせえ、加害者が語るな」

辺りを見回すと、エタノール臭漂う白ベースの部屋に様々な色をした液体の入ったフラスコが大小様々な幾つかの棚に飾られていた。恐らくは研究室か実験室なんだろう。

部屋の中央には実験台、その側にはこれまた白ベースの機械兵の残骸。実験台の上の人でも改造してたのだろう。

上階に上がった瞬間、人をいじくっていたから壊してやったわ。

「愛しの拓真様！ 実験台の上に人間の男がタオル一枚で気絶していますわ！」

「分かってる。……いや、やっぱりコイツどつかで見た顔だな」

「知り合いなのか？ 拓真」

「そんな気がするだけ。ただの他人の空似かも知れないし……、起こして確かめてみるか。覚醒の火炎【ウェイクファイア】」

左手に火炎弾を作り実験台の上の人に向かって投げつける。

実験台の上の人はビクンと小さく跳ねたあとに一瞬赤く輝いて、ゆっくりとその臉を上げた。

「うう……、ここは？ お前……もしかして……」

「大原拓真——」

「そう！ 拓真！ 覚えていないのか？ 小学六年まで一緒に過ごした龍ちゃんだよ！」

「龍ちゃん……？ ああ！ 龍之介か！ メカニック担当の龍ちゃんか！」

そう、思い出した。アイツは小学生時代の友達、伊藤龍之介^{いとうりゅうのすけ}。先生達の大事な機械をことある度にバラしては改造する、学校で一二を争う問題児だったっけな。

そんな龍之介も卒業寸前に行方知れずとなったが、まさか別の世界に飛ばされていたなんてな……、しかも龍之介の四肢はなんか機械になってるし……、さっきの機械兵にでも改造されたのだろう可哀想に。

「覚えてくれていたか！ あっはっは！ と、それよりもここはなんか寒いなあ、……うおお！ いつの間にこんな姿に！ すまないが拓真、なにか服を貸してくれないか？ あ、そこにいる奥様方は後ろ向いててくれないか？ さすがに男の裸なんて見たくないだろう？」

そういう龍之介に黒のワイシャツと青いジーンズを投げ渡した。

龍之介は衣類を宙に投げると一瞬でその衣類に身を包んだ。

龍之介は仮面レスラー顔負けの早着替え名人だっけなあ。

「で、さっきから気になってはいたが、この両腕両足は何なんだ？ ん？ 右の手のひらに発射口らしき穴があって腕の部分に可動部分があるが……」

始まったよ、メカオタク龍ちゃんの機械解析。

この状態になったら自分が満足するまで機械を弄くり回すぞ、例えば自分の体の一部でもな。

「ねえ、龍之介って人、なんかブツブツ言ってるんだけど、いいのかしら？」

「気の済むまで言わせてやれば良いと思うよ」

「拓真、なんか弾丸みたいなのないか？ バズーカ砲の弾丸みたいな」

「こんなの？」

「そう、それだ。これを可動部分の内部にセットして、可動部分を閉じる……、で前に腕を構えて、放つ！」

次の瞬間、轟音と共に扉が吹き飛び近くにいた機械兵をも誘爆させて消し飛ばした。大した威力だよ全く。

「うわぁ……。ハンパないな、そのバズーカ砲」

「ああ、機械の軍団に捕まった時はどうなることかと思ったが、こんな凄いものを付けてくれるとは！ おっと、空になった弾薬を装填部から取り出してつと、不思議と違和感もないしコイツをバラして内部構造を見てみたいぜ！」

「そんな暇はない！ いつ追撃が来るか知れぬからな！ とにかく今はここを脱出する事を最優先に考えるべきだ！」

「脱出ルートは分かるか？ 龍之介」

「ああ、ここに運ばれる時うつらうつらはしてたが出入口口的位置は把握してる。さっき壊した扉を抜けてまっすぐ行けばすぐだ。：

…しかし、月日が流れれば呼び方も変わるものなんだな、虚しいぜ

……」

ははは、と切なげに笑う龍之介。しかし切り替えが早い龍之介、すぐに扉をまっすぐ見据え、「やっとの自由かぁ！」と拳を打ち合わせて気合いを入れ直す。あの様子じゃ両腕の痛覚は完全に消え去っているのだろう。

「ああ、牢獄なんて息の詰まる場所、俺には似合わねえよ！」

「お、随分やる気だな、拓真。まるで小学生時代とは別人だな」

「小学生時代はどんな人だったのさあ、龍ちゃん」

「かなりの根暗シャイボーイだったよ、昔の拓真は。あの惨劇の後じゃ仕方ないか」

十年前の惨劇が脳裏にフラッシュバックする。

口内に広がらんとする胃液をなんとか飲み込み、ラグナロク（ver・日本刀）を右手に装備するが、その瞬間に激しい激痛が右手を貫いてラグナロクを取りこぼす。

「どうした！ 拓真！」

「ゼエ、ハア、いや……、何ともない、痛みは収まった」

痛みに耐えかねついた膝を再び上げて、先程取りこぼしたラグナロクを拾い上げた後に腰に出来た漆黒の鞘に納める。

「拓真、何事も体が資本なんだぜ、もつと体をいたわりなよ」

「そんな時間がありや良いんだけどな。行こうぜ、出口はすぐそこだ」

「無理は禁物だぞ。捕獲される危険性がない今、私達だって戦力になるんだ。無理だと思ったら遠慮せずに私達を頼れ」

「肝に命じておくよ」

ラグナロクを再び抜き、警戒しながら壊された扉に近付く。

異常がない事を確認するとローズ達を手招きし、再び警戒しながら歩を進めていく。

「凄いいねえ、足取りや仕草はまるでプロの傭兵さんだね」

「愛しの拓真様に守られる……、ああ！ 今最高に幸せです！」

「モテモテだな、拓真様」

「もうこの件については余り語らないでくれ、頭が痛い」

そうして歩を進めていく内に、俺達は広間らしき天井の高い大部屋に辿り着いた。

「見る！ あそこが出口だ！」

「ふええ、拓真さん……。歩いてないのにヘトヘトですう」

「もうちょつとだ、辛抱してくれ。負担の無いように駆け抜けるからさ」

「はい、ご迷惑かけてすいません……」

右足に力を込めて地面を蹴り、風を掻き分けひたすら出口へと走る。ローズ達も後を追いかけて、俺が広間の中腹へと差し掛かった瞬間、来た道と出口を塞がれ、周りに様々なタイプの機械兵が現れる。

「まんまと敵の思惑に寄せられたってわけか」

「仕方ないな、ヤツらを風潰しに壊していくか！ シルヴィア、すぐ終わるからちよつと降りててくれない？」

「分かりました。頑張つて下さい、拓真さん……。その、キスしませんか？」

「え、あ、よろしく頼む、シルヴィア」

先刻のようにシルヴィアを落としてしまうことのないようゆっくりと腰を下ろし、シルヴィアを何事も無く降ろす。

そしてゆっくりと立ち上がりながら振り向き既に立って目を瞑っているシルヴィアの唇を奪う。

その際、両手でシルヴィアのメロンを包み込みように掴んで、優しく

くしつかりともみもみ。

すごく幸せな気分になり、シルヴィアの吐息にもいやらしさが見え始める。

「ん、ふう、くちゅ、ふむ、ぷあ……。そんな、拓真さんっ……。感じちやうじやないですかっ、ああん……」

「あ、その、ゴメン」

「下着が濡れちゃいましたよう、責任……。取ってくださいますよね？」

「お楽しみの所悪いが二人とも、今置かれている立場をもう一度考えてみような」

おっと、シルヴィアとお楽しみは機械兵を全滅させてからだな。精神力も回復したし始めますか。

俺はまず始めに無数の小さな火種を作り、正面の機械兵にぶつける。素早い火種の連撃、火炎の銃弾【ファイアバレット】だ。

正面の機械兵は見事に爆裂し、周りの機械兵は次々と戦闘準備に入る。

そんな機械兵を嘲笑うように俺は次の手を、そこそこ大きな火炎弾を真上に放り投げて爆散させることで周囲360度の機械兵を爆散した火炎弾片で吹き飛ばす。

烈火爆散弾【プラスチックブレイズ】だ。

これで機械兵の大半が塵と化しているはずなのだが何故だろう、一体たりとも破壊出来てない。

「なによ、大規模な魔法繰り出したくせに一体も壊れて無いじゃない」

「いや、残骸が散らばっているから壊れてないはずはないんだが……」

「無駄口を叩くより身構えろ！ 反撃が来るぞ！」

龍之介のその言葉と同時に次々と大小種類様々な銃弾が視界を埋め尽くす程に乱れ飛ぶ。

あんなに銃弾が乱れ飛んでいたらどんなに躲そうとしてもどれか一つは必ず当たるぞ……！

「この程度の弾幕なら……！ 超電磁防御壁【エレクトロニックシールド】」

数多の弾丸が俺達に迫る中、メロディアのか細い声が辺りを優しく包み込んだかと思ったら、黄色い稲妻の網が俺達を取り囲んで迫り来る弾丸を相殺し始めたのだ。

爆音が耳をつんざくも体への被ダメージは一切ない、……これがメロディアの実力、小さいくせになかなかの使い手だな。

「いやああああ！ ……あれえ？ 生きてる？」

「エライ！ エライよメロディア！」

「そうでしょ！ もっと褒めていいのよ？ でも、想像以上にすごい弾幕、一分保つかどうか分からないわ」

「それで充分だよ、ありがとなメロディア。非弾丸領域【アンチバレットフィールド】」

右腕を真上に掲げて紫の粒子を大量に集めて一気に放出、一つ一つが微細な重力となり弾丸に纏わり付いて地面に引きずり落とす。

いつしか爆音も静まり返り、超電磁防御壁を解除した時、そこには無数の弾丸が地面に釘付けにされている様子が見て取れた。

俺は指を弾くことでそれを放ったヤツの真上にテレポートさせる。非弾丸領域は弾丸をただ地面に縛り付けるだけで、推進力や爆散性能を削ぎ取らない。

だから弾丸を真下に向け、非弾丸領域を解除すれば……。

「ナツ……！ バカナアアア！」
「理解不能！ グアアア！」

銃弾は推進力のまま機械兵の心臓部を貫き、榴弾は炸裂し機械兵を木っ端微塵に破壊する。

ま、軽ーく本気出したらこんなものさ。

「凄いですわ！ 愛しの拓真様！ たった一手であれほど多くの機械兵を破壊するなんて！」

「ゼエ、ハア……、くっ！ うぐううう！ がああっ……！」

「拓真！ おい、拓真やつぱりなんか調子が変わだぞ！」

「大丈夫だ、痛みは直に収まる……っく！」

——これからはテメエを闇が蝕んでいくんだからな！

闇属性の魔法。それだけじゃなく闇に関連するもの、ラグナロクとかまだ分からないけど暗闇とか、眠るために瞼を瞑ったとしても浸蝕されていくのだろう……。

ただ、ラグナロクを三度掴んで闇属性の魔法を使ってもまだ表面に現れないことから、浸蝕のスピードは極めて遅いんだろうな。

「拓真、機械兵のヤツらは壊した後から次々とテレポートで補充されていくようだぞ」

「ああ、だからさっき一体も壊されてなかったように見えたのね」

「関係ねえ！ だったらそれも壊すまでだ！」

俺はラグナロクを鞘に納めたまま一番近くの機械兵に接近、武器を構える間も与えずに抜刀逆袈裟斬りで一刀両断。

それでも武器を構え、切り裂き、殴打し、貫こうとする機械兵の攻撃をひらりと軽く躲し、次々と切り裂いていく。

「くそ！ 埒が明かねえ！ ……くっ！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

「きゃあああ！」

シルヴィアに機械兵の凶刃が迫る、対する俺は蜥蜴の尻尾を放ったばかりでシルヴィアのいる方向に蜥蜴の尻尾を放てない。

迂闊だった、目の前の機械兵を殲滅する事に熱を入れすぎたがために後方のローズ達を疎かにしちまった、情けねえぜ。

凶刃がシルヴィアの眼前まで迫りもうダメだと思った、その次の瞬間、刃が機械兵ごと爆ぜ飛ぶ。

「女の子達は俺に任せな！ あんたは気にせず一体でも多く機械兵をやっつけてくれ！」

ありがとう龍之介！ そう言った瞬間、胸から黒い刀が飛び出る。

次いで乾いた銃声が俺の体に無数の穴を開けたかと思えば、機械兵が次々と突っ込み剣を突き刺して爆発。

当然、俺の体は完全に吹き飛び塵も残らず、その爆風はローズ達や龍之介に及び、ローズ達を天井近くまでブッ飛ばした。

「ぐっ……、う、拓真！」

「拓真が……死んだ？」

「いやああああ！ 拓真さあああん！」

「勝手に殺すな、生きてるから。まあ体が吹き飛んじや誰だって死んだなっと思うだろうけどさ」

そう言い終わる頃には黒い粒子がローズの近くで人の形を成し、俺の体が形成されていく。

「拓真！ 生きてたのね！？」

「だから死んでないってば。死ぬかとは思ってたけどな。しかし、本当に埒が明かないな。壊しても壊しても次から次へと現れる。この猛攻じゃ精神力回復もままならないし、これじゃあ全滅は時間の問題だぞ」

「くそ、何かこの状況を打破する一手はないのか……！」

「ふふふ……、なら私たちに任せなさい！」

突如として上空から謎の音がする。何事かと思うが早いか、どこかで聞いた音楽と共に、氷槍や炎弾、さらには岩塊が降り注がれた。

「な、なんだ？ この怒涛の魔法攻撃は……、夢でも見ているのか？」

「すごい……、拓真でも手こずった機械兵の軍団をいとも簡単に……」

「この魔法は間違いない！ アイツらだ！」

「ダーリン！ 助太刀に来たわよ！」

聞き慣れた声にこの呼び方、間違いない！ 真理亜が助けに来てくれたんだ！ 愛子も桜もいる！ ……いずれもなんか凄い露出度の高い衣装を身に纏っているが……。

「みんな、あの決め台詞いくわよ！ ……燃え盛る魅惑の赤い情熱！ ローブレッド！」

「こ、こんな服装にあんなポーズ……、恥ずかしすぎる。でも拓真のため……。い、凍てつく蠱惑の青い神秘！ コスモスブルー！」

「真理亜さん、この衣装はスレンダーな私と愛子さんを侮辱しているんですか？ 真理亜さんはスリングショットで最大限に魅力を引き出しているし、愛子さんはブルーのビキニだからまだいいものの、私は白のスクール水着ですよ！？」 魅力の一欠片もありませんじゃ

ないですか！ でも拓真さんのためなら仕方ないですよ……。純潔無垢の白い純情！ リリーホワイト！」

これまた聞いたことがある決め台詞を口にし、いやもう俺、殆ど分かつちまつただけだね。

「ふたりはグラビア！」

ほら、どうりで見たことある服装だと思った訳だ。

あれは十年もの間変わらない人気を誇り、今も女兒アニメの定番として君臨している、『ふたりはグラビア』シリーズ第二作目のコスプレなんだな。

奥様方からは非難中傷が耐えないが、それでも数多くの人気とその面白さから未だに打ち切られてないのだが、あんな過激な服装でどうして日曜の早朝7時30分からはじまるアルティメットヒーロータイムとして仮面レスラーシリーズやハイパー軍隊シリーズと同じ枠内に君臨出来ているのか分からないのは、俺だけじゃ無いはずだ。つてか、愛子が顔を真っ赤にしてまともなポーズ取れてないぞ。

「大丈夫？ 怪我はないわね？ ダーリン」

「ああ、こっちは大丈夫だ、それよりも愛子の心配をしたらどうだ。精神に大怪我してるぞ。大丈夫か？ 愛子」

「ダメ！ ……こっちは見ないで、こんなフリルが付いた水着なんて恥ずかしすぎる」

「拓真さん！ ……私の水着姿はどうでしょう？」

「……ゴメン、コメントのしようがない」

「すごいショックです！」

そんなやり取りを交わす間にも大量の機械兵が飛び付き様々な武器を振りかざす。

こんな危機的状況にもかかわらず、真理亜達は落ち着き払って呪文を唱え始める。

そんな慌てない程の自信が……、どこに？

「劫火よ、全てを貫き焼き尽くす槍となれ！」

「猛る雪風より具現せし、凍てつく刃の乱舞を」

「大地より現れよ！ 全てを打ち砕く巨大な大砲！」

機械兵が眼前に迫る、このままじゃ間に合わない！

俺は急いで稜の防御魔法、光の聖域【ホーリーサンクチュアリ】の呪文を唱えようとする。

呪文を唱え終え、後は光の聖域を発動するだけとなった、次の瞬間に驚くべき出来事が起きたのだ。

「爆穿槍炎！」
ばくせんそうえん
ひょうじんそうとう

「氷刃霜雨！」
きよがんせんほう

「巨岩戦砲！」

三つの魔法が合わさって一つの巨大な弾丸となって近くの機械兵に着弾して炸裂、飛びかかる機械兵を一掃したのだ。

「す、すげえ……、これが真理亜達の実力。あんなに手こずった機械兵を一蹴しやがった！」

「なんとデタラメな力なんだ……、敵に回したらかなり厄介な相手になる事は間違いない！」

「ヒ、怯ムナ！ ナントシテモ討ち取ルノダ！」

「もう、粘着質な殿方は嫌われますわよ！ みんな！ 例の必殺技やるわよ！」

「気が進まない……、でも、やる」

「アレですね！ 了解です！」

真理亜達は互いにアイコンタクトを取った後、真理亜の右手は愛子の左手を、愛子の右手は桜の左手を、桜の右手は真理亜の右手を握り締め、互いがしっかりと握ったのを確認するとそれを天に向けて掲げた。

——何か巨大なものを受け止めるには1人足りないぞ。

「拓真あ、今から何やるのかな？」

「知ってるような、知らないような？」

「穢れし魂に縛られた肉体よ！」

「今、聖なる光に照らされその呪縛を解放せん！」

「今、咲き誇れ浄化の花！」

『グラビアドリームズブルーム！』

真理亜達が決め台詞と共に必殺技を放った時、その足元に赤、青、白が規則的に並んだ花卉が現れて次々と機械兵を飲み込んでいく。遂には機械兵も現れなくなり、機械兵は完全に消滅して広場には俺とローズ達と龍之介、それと『ふたりはグラビア』のコスプレに身を包んでいる真理亜達だけとなった。

「……嘘でしょ？ 拓真ですら手こずった機械兵を全滅させるなんて……」

「すげえよみんな……、真理亜はすごく魅力的だし、愛子はすごく素敵……。桜は、とっても可愛いよ」

「ありがとうございます！ 拓真さん！ では、あの邪魔な岩、壊しますね」

壊せるのか？ と訊ねる前に桜は両手を前に出し、そのまま黙っていると岩がひとりでに崩れていった。

「さ、行きましょっか」

「お、おう……」

斯くして、機械兵の襲撃を真理亜達の協力を得て潜り抜けた。

……が、なんであんな過激な服装で現れたのか理解が出来ないのは俺だけじゃ無いはずだ。

「へえ！ そのコスプレにはそんな能力があるのか！？」

「ええ、ダーリンの情欲を刺激して何度でも私の中にどっぴゅんできる能力が！」

「違う。魔力と精神力を増強するパワードスーツ」

出口に通じている廊下にて、俺は真理亜達に今着ている水着の事をレクチャーしてもらっている。

真理亜が言うには世紀の発明家にして、大山財閥の近未来的技術を支えているらしい平賀源之介の伯父である発明の父と名高い平賀奇跡が作り上げた欲情刺激装置だと、愛子が言うには平賀源之介が紅音の協力を得て作り上げた筋力や魔力、精神力の増強装置だと言う。真偽の程は彼女達にしか分からない。

——まあ、きっと真理亜の言っていることはデタラメなんだろうな。

紅音が協力してるならこんな過激なデザインになるのも頷ける。

こんな戦場のド真ん中に水着というド派手な服装で助けにきたのもこれで納得がいく。

……ただ、俺のいた場所が戦場のド真ん中だったということを知らなかっただけかもしれないけど。

「おっ、そろそろ出口みたいだぜ」

龍之介の言葉に安堵した俺は抱き付こうとする真理亜を振り払い前方に見える光へとひたすら突き進む。その先で見たものは――

「ああ！ やつと出口だ！ って……、んだよ……これ……」

「待ってダーリン！ ……ふふふ、捕まえたわよ！ さあ、二人の熱いアバンチュールを……、って言うてられないわよね」

「おーい、拓真あ！ はあ、はあ……急に走り出してどうしたんだ？」

「うつ、わー……、噂には聞いてたけど、想像以上にヤバい感じなのねえ」

そびえ立つ鉄の城、その周りには同じく鉄製の建物、そこから人が出てきては機械兵により惨殺される。

眼下は一面血の海と化していた。

「うつ……、真理亜、離れて」

「え、あ、分かったわ」

「そんな……、このような事が……、現実……」

「まさしく地獄絵図」

十年前の惨劇が脳裏にありありと思い出される。

腹を抉られた死体、四肢を切り取られた死体。

陵辱の果てに望まぬ子を孕まされ、人生を狂わされた人もいれば、全く楽しめないからと言うだけで見るのも厭わしいような骸に変えてしまったりと、いつしか周りは死体が散乱して今と変わらないような惨状だった。

ムナクソ悪いぜ、胃袋をひっくり返された気分だ。

「大丈夫か？ 拓真？ 何か忌まわしいものでも見たような勢いで

吐いてるな」

「大丈夫、心配には及ばないから。優しいんだな、メロディアは」
「部下の管理は上に立つものの義務だからな」

「どうやら昔の事を思い出しちまったみたいだな。無理するなよ、拓真。見るに耐えない物なら目を逸らしてもいい、どんなにすごいヒーローでも全てを救うことは出来ないんだからさ、力があるからって全て背負い込む必要はないんだよ」

「……ダーリン」

水の入ったペットボトルを作成して開封、少量の水を口に含んで口を軽く漱ぐ。

そんな俺を真理亜は優しく立たせて優しく抱き締める。

「あなたにどんな過去があったかなんて私には分からない。でも、私はあなたにどんな過去があってもこうやって抱きしめてあげるから」

「真理亜……」

「帰りましょう、香織の所へ」

俺は感慨のあまり目を瞑る。

次に目を開けた瞬間、そこにいたのは真理亜ではなく、ローズだった。

「え？ ローズ？」

「真理亜達には助けてもらって悪いんだけど、拓真はもう少し借りてくね」

「どういうことよ！ ちゃんと説明して！」

「今の義賊も、こういう機械兵を倒せる戦力が欲しいのよね。しかもカッコいいしなかなかの肉食だし」

「うんうん、機械兵に殺されたらお宝をゲットしても意味がないか

らねえ」

「突然ムラムラしだしても、拓真がいれば安心してわけね！　ローズ！」

「そうよ、ソフィア！　眼帯外したアンタは良いこと言うじゃない！　……ま、とにかく拓真には道中の護衛役として働いて貰おうかなって考えてるのよね。フラン、拓真にぶちゅうといっちゃっていいわよ！」

少し前にフランシアがキスしようとしたら慌てて止めたばかりじゃないのか？　そう思う間にもフランシアは頬を赤らめて抱きついてきた。

この世界にはブラジャーという概念が無いらしい。興奮しきったフランシアの胸の先っぽがモロに当たってとても生々しい。

「あなたに接吻できるこの時を首を長くして待ち望んでいましたのよ。さあ、今度こそ愛の接吻を！」

「拓真から離れて！　氷連槍^{ひょうれんそう}」

「ジュリア、頼むわよ」

「了解。滅魔の咆哮【アンマジカル・シャウト】！」

愛子は自分の身長くらいの氷で作られた槍を三つ作り、まとめてフランシアへと投げつける。

一方、ジュリアは決して慌てることをせずにはただがおー、と威圧感のまるつきりない雄叫びをあげただけだ。

これほどに勝敗の見え透いた勝負が他にあるだろうか、あろうはずもない。なぜなら愛子は害をなすモノを排除するのに何の躊躇もないからであり、フランシアには悪いが串刺し決定だろう。

しかし、結果は予想を180度裏切って見せたのだ。

複数本の氷槍はフランシアの数メートル前で爆砕し、その破片すら飛来しない。

さつき発動した滅魔の咆哮が働いたのだろう、ジュリアの滅魔の咆哮【アンマジカル・シャウト】恐るべし。

愛子に命を狙われたフランシアは爆砕する氷槍を気怠げに見て、関係ないという風にこちらに向き直り、まるで愛に飢えた狼のように食らいつくようなキスをする。

舌をねじ込まれたりしている内に抗いようもない睡魔が襲いかかる、まるでクロロホルムでも嗅がされたみたい。

「あ、あれ……、どういう……事だ？ 力が、入らない……？」

「ごめんなさい、愛しの拓真様。私は嘘をついていましたの、確かに大きなカテゴリーの中では私はコウモリの獣人です。しかしながら、厳密に言えば私は一般的なコウモリとは似て非なる存在、獲物の生き血を一滴残らず吸い尽くす為に体内にクロロホルムの生成器官が作られたクルムコウモリの獣人です。そのため熱い接吻の際に交わした私の吐息の大半は、クロロホルムで出来ていますの」

どうりで……、時間経過と共に力が抜けていくわけだよ。

フランシアとのキスはクロロホルムの入った瓶を直接嗅ぐようなもののだから。ローズがあの時フランシアを制止したのもいまでは分かる。

ヤバいな、こう考えている内に意識が混濁してきた……。思考能力もかなり低下してるだろう。

「大原拓真は私たち黒猫の舞が確かに頂戴したわ。ごきげんよう、黒猫に翻弄されちゃった哀れな子鼠ちゃん」

ローズがそう言い終えた瞬間に俺の意識は完全に闇へと落ちていった。

——俺、今度はどこに連れて行かれるんだろう……。せっかく龍之介や真理亜達と再会出来たのに……。

香織のいる所へ戻れるのはまだ先そうだな……、うん、頑張ろう。

第六章 脱獄と再会、そして惨状（後書き）

次回！ 拓真がローズ達にさらわれて、手ぶらのまま香織達の所へ向かうが……。

そして、ローズ達にさらわれた拓真の命運は……！？

第七章　フィリア城攻防戦開幕

「もう！　何なのよあの猫耳娘！　ダーリンを一瞬でかつさらっていつちやって！」

「まあまあ、ローズって言ったっけ？　アイツの魔法は大したものだよな。誰にも気付かれずに物体を転移させるなんてな」

「あーもう！　憂さ晴らしに下のロボットやつつけてこようかしら」
「パワードスーツを着ているからってそれはさすがに無謀すぎる」

先程まで拓真がいたディシア第一留置場は電力コントロールシステムが破壊されたり脱獄者排除などと騒がしかったが今は静寂を取り戻している。留置場に備え付けられていた機械兵が真理亜達の手によつて全て破壊されたからだ。

そんな静かな留置場に騒がしい人間が一人。

名を藤宮真理亜、拓真を前世から定められていた運命の人と豪語する自称婚約者である。

「なあ、アンタらはそんな服装をして恥ずかしー分かった、この話はもうしないからそんなおっかないものは飛ばさないでくれ愛子」

疑問がすぐさま恐怖に変わり、震える龍之介の足元には氷の楔、愛子は顔を林檎のように真っ赤にし、涙目で龍之介を睨みつけている。

「……ふう。でも、よりによつて水着でここに来るなんてな……」

「いくら空間魔法を使いこなせてもその地の気候までは分からないわよ！　　ーくしゅん！」

ディシアは10月の秋葉原と比べて寒冷な気候である。真理亜は比較的可愛らしい部類に入るくしゃみをして体をブルブル震えさせる。

淑女も寒さにはかなわないようだ。

「悲惨な光景です……、どれくらいの罪のない人が殺されてしまったんでしょうか……」

「分からない。でも元凶を潰さないと増え続けるのも確か」

桜と愛子は遙か下の地獄絵図を覗き見る。

苦痛と恐怖で歪んだ顔をした凄惨な死体が視界の果てまで散在し、所々に血の池が出来ていた。

「……真理亜さん、さっきのように拓真さんのいる場所に瞬間移動したらいいんじゃないんですか？」

「出来てたらとづくにしてるわよ！ でもダーリンのいる場所を特定しようとするのと急に頭が痛くなつて特定どころじゃなくなるのよ！ 今までこんなことなかったのに……。きつとあの生意気な猫耳娘がダーリンとの秘め事を邪魔されないようにジャミングを掛けてんのよ！ きつと！」

考え方がトコトンいやらしい真理亜は自分の生殖器に指先をあてがい自らを慰め始めた。愛子曰わく拓真が近くにいないときはよく見かける行為なんだとか。

「私というものがありながら……、アつ、ダーリンのぱかあ……」

「ま、まま、真理亜さん！？ ダメです、男の子がいます！ 龍之介さんがいます！ 男の子の目には毒です！」

「本当だぜ全く……、せめて隠れてしてほしいものだよ」

「そういうあなたはまじまじと見ている」

「ほつとけ！ 俺だつて男だ！ 拓真だつてまじまじと見るぞ、なぜなら俺と拓真は12才の頃エロ本を読みあつた仲だからな！」

胸を堂々と張り、自慢気に語る龍之介。端から見れば『ふたりはグ
ラビア』のコスプレをした小学生に高校生が下衆な話をしているよ
うに見えて、事情を知らない人が見れば間違いなく龍之介は白眼視
されることだろう。

「ねえ、とりあえず香織達の所へ行きませんか？ 真理亜さん」

「もつと深くう、私をめちゃくちゃにしてえ……！」

「ダメですね、全然聞いていません。愛子さん、付き合いの長いア
ナタならどうします？」

「以前なら気が済むまで放っていた。でも今は魔術で強制的に止め
させられる」

桜は実に興味深いといった眼差しを愛子に向ける。そんな中、愛子
が一言呟いて真理亜の真上に小規模な雨雲を作り出す。

程なくして雨雲から霧雨が降り注ぎ、真理亜の双眸が鋭い光を湛え
始める。数秒の内に真理亜は戯言を言わなくなりこめかみを押さえ
ながら立ち上がる。

「あうう……。この様子じゃまたシちゃったみたいね。手間掛けさ
せちゃったわね、でどんな話だったけ？」

「拓真さんを確保出来なかったけど、とりあえず香織さん達の所
に行きませんか？ 話です。このままじゃいつロボットに奇襲されて
もおかしくありません！」

「そうね、じゃあ気乗りしないけど香織達の所へ行きましょう。そ
この坊やも一緒に来るかしら？」

「その格好で近付かれたら目のやり場に困るんだが……」

「あら、残念。まあいいわ。異次元の扉よ、その戒めを解き我を導
け！」

目を瞑り集中し、空に魔法陣を描くイメージを固める真理亜。

イメージが十分固まるや両手を前に勢いよく突き出し、数分もかかずに二メートル大の桃色の魔法陣を作り出す。

「出来たわ、行きましょう」

ふう、と一息ついて真理亜が魔法陣を潜り抜ける。桜や龍之介もその後に続く。

最後に愛子が入り込もうとしたとき、後方に気配を感じ振り向く。確かに気配は感じる……、しかし物影は見当たらない。

その内に愛子も確実に存在する気配を気のせいだと割り切り魔法陣の中に入り込む。

この後、愛子は激しく後悔する事になる。あのとき氷の楔でも投げつけて隠し切れてない気配を確かめるべきだった、と。

今、愛子の十数メートル後方でキラキラと何かが蠢いた。

――――――――――

「おはよー、拓真姫。ジュリア王子のディープキスで目覚めた可憐で可愛い王女様」

次に目覚めて最初に見たのは、ジュリアの間近に迫った顔面だった。まあ、そんなくらいじゃもう驚かないけどね。

「獣人って無防備な人にキスするのが当たり前なのか？」

「拓真じゃなかったらしてないなあ。拓真って寝顔すごく可愛いんだもん、ほっぺにちゅっ、ちゅってしたくなるのは仕方ないよねえ。姫え」

「俺は、男だ！」

再びキスをしようと迫ってくるジュリアの顔を制止し、突き飛ばす。

熊なのになにやあ！ と悲鳴を上げるジュリアをほつといて現状を確認しないと。

ここはどこかのホテルのこぢんまりとした一室のようだ。黄緑をベースとした彩色で、まるで自然に溶け込んだ錯覚に捕らわれてしまいそうだ。

で、今俺が座っているのがこれまたこぢんまりとした部屋には全然そぐわないキングサイズのベッド。俺や長身のジュリアが寝転がっても全然余裕だ。

だが、このホテルは女性への気配りが足りてないな、化粧台がないま、俺は化粧した女性よりかはノーメイクないしはナチュラルメイク辺りで済ませている女性の方が好みだがな。

「ところでジュリア、ここはどこだ？ 俺をどこに飛ばしたんだ」

「ここは我々黒猫の舞の秘密アジト、デイスシア支部だよお」

黒猫の舞？ そうだった、俺はなんだかんだ言って義賊団に入っただった。

デイスシア支部って事はこの他の地域にもこの隠れ家のような場所があるのか？

「そうだよ！ メンバーは拓真姫含めて七人しかいないけど秘密アジトはワールディア中に点在してるんだよ！」

「いや、ワールディアって何だよ？」

「北東に位置する人間族の大陸エレディアと北西に位置する獣人族の住まう大陸ジャンディア。南西に位置する蟲人族が生息する大陸ガラディアに南東に位置する龍人族の聖地、大陸ドラゴディア。それと天空にプカプカ浮いてる鳥人族の住処ヴァーディアと魚人達が暮らす海底大陸アトラディア。そして、四つの大陸の中心に存在するって話の魔人族の故郷である大陸パンディア。この全部をひっくるめてワールディアって言うんだよお！」

色んな種族が様々な大陸に住んでるんだなあ、そう思いながらパタリと後ろに倒れる。

ふと気づけば、俺の隣で真っ黒のウサギがにんじんスティックを食べていた。

「真っ黒なウサギ……、可愛い」

たしかウサギは首の後ろを撫でてやるといいんだっけな。

……よしよし、気持ちよさそうに目を細めてカチカチ歯を鳴らしてる。嬉しいみたいだな。

そのまま手を胴体からお尻へと優しく動かす。お腹は嫌がるから触らないようにしないと。

「いーなー、ウサギちゃんとっても気持ちよさそう。私もなでなでして？」

「しょうがないなあ。ほら、なでなで」

「わあい、しあわせえ。拓真大好きい」

「きゅう、きゅううう」

ジュリア、ウサギ共々幸せそうだ。特にジュリアは幸せのあまり抱き付いて来るほどに。

先程も言ったとおり、ジュリアは俺の身長をもつてしても胸あたりしかない程に長身であり、さらにそこそこ胸が大きい。

それで抱き付かれるということは豊満な胸が思いつき押し付けられるということであり、ウサギを目視出来なくなったということである。

先程からウサギがきゅうきゅう鳴いているみたいだが、何が起きているのだろうか？

俺もさっきからずっとお尻を撫で回してはいるが、どうも手触りが

おかしい。

「今の状況、知りたい？」

「そりゃあ、もちろん」

「それじゃあ、いくよー！」

さーんにーいち、と間の抜けたカウントダウンの後にジュリアは軽く突き飛ばす。突き飛ばされた先にも柔らかい物体、しかもジュリアより大きい、ってことはまさか……。

「あうう、拓真さあん、さっきからお尻を撫で回したり、胸に飛びついたりしてくれちゃって……、おかげですごい濡れちゃったじゃないですか」

スーハー。よし、心を無にして対応しよう。そのまま、ゆっくりと距離を取って首だけを後ろに向ける。

そこには顔を真っ赤にしながら荒い息遣いで目を潤ませ、下から見上げるように俺を見て明らかに『何かしてくれますよね？』と目で訴えているシルヴィアの姿があった。

「あ、ああ……つとさっきの黒ウサギは？」

「わ、私です」

「撫でられるの嫌じゃなかった？」

「正直言って獣化が解除されるくらいに気持ちよかったです」

「じゃあ、その真っ黒な翼と長い尻尾は何？」

あ、これですか？ と尻尾をくねらせ翼を軽く動かして見せる。シルヴィアの今の服装はへそ出しタンクトップ（ブラジャー着けてない）に丈の短いスカートと（いずれも黒色）という明らかに誘っているような服装だ。

そんな服装で尻尾を動かされたらどうなるか。スカートが軽く捲れて黒色の下着がチラツとこんにちはするのだ。

その見えそうで見えないチラツとがとも色っぽくていやらしくて、顔が真っ赤になってるのが自分でもわかる。

茶々を入れられまいと俺は備え付けの枕にダイビングして顔を隠す、耳も忘れない。

「ご、ごめんなさい！　うっかり催淫フェロモンを放出してしまいました！」

「うわはー、枕が鼻血まみれだあ」

「んな危険なもん垂れ流すな！」

俺は自らの鼻血で汚してしまった枕をとりあえず異次元に放り投げ、愛子の魔法『沈黙の雨』で高ぶった感情を鎮める。コイツ、ある意味危険人物だ。エロテロリストだ。

「スーハー。で、その尻尾と翼は何だ。ただのウサギじゃないな？」

「はい、わたしは夢魔種と兎人種の混血種で、夢魔種の特徴を色濃く受け継いだ兎人種です。よくムマウサギって呼ばれてます。メロディアちゃんやフランシアさんと同じレヴォノンですね」

「ちよつとまで、知ってるのが当然のようにファンタジー用語使うな。レヴォノンについてちゃんと説明してくれ」

「分かりました。でもキスしたくなってしまうました。キスしながら説明してもよろしいですか？」

「程々にな？　俺の意識飛ばすなよ？」

シルヴィアが言うには大昔に全ての動物は一度絶滅の危機に瀕したんだとか。

人間も例外ではなかったが、当時の技術を惜しみなくつぎ込みシエ

ルターを作り、一部の有力な貴族と科学者だけが入ることを許され、貧しい人は貴族に奴隷として扱われることを許された人間ののみが入ることができ、それ以外は皆抗えぬ運命の瞬間を待つ他になかった。そして、人間以下の中等から下等生物が生き残る術は、残された人類と交わり人の姿を得るか、生物には敵しすぎる死の世界に適応していくしかなかった。

かくして全種族がそれぞれ多種多様な方法を使い、絶滅の運命を乗り越えて今に至るんだとか。

その時、人の姿を得た者をヒュマノン、新世界に適応、進化した者をレヴォンと呼ぶらしい。さらにレヴォンが後に獣化したヒュマノンと交尾し人の姿を得たレヴォンをシルヴィアやメロディア、フランシアと同じレヴォノンと呼ぶんだそうだ。

人類が作り出したシエルターに紛れ込み、何の変化も無く生き残った種族をオリジンと呼ぶらしいが、新世界の厳しい環境に適応しきれず今やほとんど絶滅状態なんだとか。

これは余談だが、ジュリアが言うには百年前まで獣人族の大陸、ジャンディアでヒュマノンとレヴォノンの勢力争いがあつたらしいが、はぐれた一体の龍がジャンディアをめちゃくちやにして勢力争いどころではなくなり和解、今ではジャンディアも完全に復興し、そこかしこで協力しあう姿を見るようになったのだという。

「なるほど、そういうことがあつたんだな」

「はい。あと、これはメロディアちゃんにはナイショなんですけど、メロディアちゃんはエレクトネズミではなくてサンダーラットっていう個体名なんですよ。このことを言われると可愛げが無いってぶりぶり怒るんですよ」

ふふふ、とシルヴィアは優しく微笑む。その瞬間、俺の中に二つの感情が生まれた。

一つはなんかこう、歓喜にも似た心が満たされる感情。もう一つは

言葉にしづらいな、何かこそばゆい感じ。……まさか。

「シルヴィア、正直に言うんだ。吐息に催淫フェロモン含んでたろ」
「ごめんなさい、でも仕方ないんです。唇同士重なり合う時に自然とそうなるんです、習性なんです」

はあ……、ここまで直接的に催淫フェロモンを吸ったら、沈黙の雨も焼け石に水というやつだろう。

溜め息を吐いてベッドに倒れ込む。

とりあえず寝よう、寝れば何とかなるさ、きつと。

「あの、拓真さん。一つお願いしても良いですか？」

赤い顔でにじりよってくるシルヴィア。何気に真理亜と付き合いが長い俺はこの後何がしたいか容易に予想出来た。
俺は目蓋を閉じて視界を封印する。そして今からシルヴィアに何をされても絶対に動じないことを心に誓う。

「あー、うん。俺は寝る。煮るなり焼くなり襲うなりすればいい。
夢魔だから精気が欲しいんだろ？」

「あ、は、はい！　ありがとうございます！　では早速」

数秒のインターバルの後、唇に柔らかくしつとりとした感触が押し付けられる。それがシルヴィアの唇だというのは明確で、舌を入れられるのも当たり前で、唾液を飲まされるのも日常茶飯事だ。

数分後、シルヴィアは一度離れたのか、近くで荒い息を浴びせている。催淫フェロモンは……出てるだろうな。

俺に何をさせたいんだよシルヴィア、なんて思っていたら首周辺からチュッて音が聞こえ、全身に落雷を受けたような錯覚に襲われて思わず軽く飛び跳ね目を見開く。

「あ、起きてた」

「あんな刺激を受けりゃ誰だって飛び起きるよ！」

「どんな事情であれ、嘘はいけませんよね。悪い子にはお仕置きです」

とても楽しそうな口調で喋るシルヴィアにとっても嫌な予感しかしない俺。

その予感は呆気なく現実のものとなり、首周辺からちゅううつと音がして歓喜と羞恥と屈辱と快楽に体をわななかせるしかなかった。数分後、シルヴィアが吸い付いた後にはキスマークがくつきりと残っていた。

「うわあ、まるでエッチしたあとみたいだねえ、いつそのこと本当に可愛がつてあげる？」

「もちろんですよ！ ではジュリアちゃん、いつものようにお願いしますね」

「了解！」

「被害者を置いて話を進めるな！」

叫んだ瞬間、Ｔシャツが引き裂かれる。それがジュリアの仕業だと気付くのに二秒要した。

「ちよつ、さっきの俺の一張羅なんだぞ！」

「ごめんね、後で似たようなの持ってくるから」

いや、いいよ。復元出来るから。ひらひら手を振りそう伝える。しかし、さっきの一撃は油断していたとは言え本当に見えなかった。敵に回したら相当厄介だ。

……そんな心情を見透かしてかジュリアがニヤニヤ笑っていた。

「良いお体されてますね。筋肉の付き具合がちょうど良いです」
「そうだねえ！ ムキムキじゃないけどガリガリでもない人が一番
オイシイんだよねえ！ ああ、今からの事考えたらヨダレ出てき
ちゃったよお！」

もうたまらないと言った様子で胸部から腹部を舐め回すような目線
を送る。

夢でツキノワグマに追われた時と寸分違わぬ恐怖が心臓を握り潰さ
んとしている。

シルヴィアも舌なめずりしながら下着姿になる。華奢だと思ってい
た体は夢魔種の血を引いているからか、そんじょそこの街娘より
も魅力的でグラマラスに思えた。

「私の素肌に見とれましたね？ だめですよ、悪魔に魅せられた人
はただ堕ちるだけですから」

チュツ。頬にシルヴィアの柔らかい唇が触れる。その瞬間に心臓が
バクンと高鳴り、今までかろうじてせき止められていた感情が爆発
してシルヴィアを力任せに押し倒す。さすがはキングサイズ、枕と
逆方向に押し倒しても全然スペースがある。
シルヴィアは満足げな顔をしている。

「私のカラダ、拓真さんにはどう見えますか？」

「とても……魅力的に見える」

「堕ちたねえ。この子はどう料理してあげましょうか」

「私に任せて下さい、私も拓真さんもジュリアちゃんも楽しめる最
高のプランを提供しますから。……おいで、拓真さん。気持ち良く
しますんで、私に精気を下さい」

それから次に目覚めるまでの記憶は一切残ってはいないが、多分俺はシルヴィアやジュリアにこっぴどく搾り尽くされたんだろうな。

—————

一方香織達のいるフィリア城、その謁見の間では――

「では、引き続き弟の所在を探し出しなさい」

「御意のままに」

フィリアセリーヌ近衛隊の隊員二名が謁見の間から退室していくのを見計らってセリーヌは盛大に溜め息を吐いて肩の力を抜く。
弟ラブの大学生、大原芹菜に戻るのだ。

芹菜は側近に料理の支度をするよう伝達し、王族が座するような豪華な椅子に腰掛ける。

「心配だわ……、たちちゃんに何もなければ良いんだけど」

「大丈夫だよ！　だっておにいちゃんなんだよ？　機械兵なんてぶっ飛ばしているに決まっているよ！」

「当然よ！　拓真は女以外には絶対負けないわ！　だから私達もお義姉様の城をこの何が伝説か分からない剣で守らなくっちゃ！」

「……せやけど、捕まったら間違いなく豚箱……やないな、牢獄みたいなところに連れてかれるんやろ？　きつと脱獄防止の仕掛けやらなんやらがあるんとちゃうか？」

「それもぶち壊すのが拓真じゃねえのか？　俺に勝ちやがったアイツだぜ？　きつとそれくらいはしてる！　じゃなきゃアイツの頭ん中を花畑にしてやる！」

「そうね、あの拓真さんが死ぬ訳ないわ。帰って来たら三日三晩“ご奉仕”してもらいましょう」

芹菜を含め、皆それぞれ拓真の身を案じ、紅音でさえ深刻そうな顔をしていた。

その時、謁見の間と回廊とを繋ぐ扉から聞き慣れた空間にヒビが入る音が聞こえてきた。

真理亜達が発情した拓真を手土産にやってきた。香織達はそう思い空間のひび割れの前に集結する。
そして――

「ここはどこだ？」

空間のひび割れが砕けて穴となり、知らない男が素っ頓狂な声を上げてくぐり抜けて来た。

「あんただれ？」

「俺か？ 俺は伊藤龍之介。小学六年まで拓真の友達やってた、いわば幼なじみってやつだな」

「違う、自己紹介しろって言ってないわ。なんで発情した拓真じゃなくてお前みたいなムシケラが出てくんのよ」

「あれ？ 皆さん反応が冷たい。もしかして俺、お呼びじゃないのかな？」

可愛げに首を傾げる龍之介。香織は一言も喋らず無表情で引き倒し地面に叩き付ける。

紅音達もこれまた無表情で龍之介を囲み上げて一斉に踏みつけ始める。

「うわ！ がッ！ 止める！ 止めてくれ！ 止めて下さいッ！
許して下さい！ お願いですから！ すぐに立ち去るからッ！」

龍之介の意味を成さぬ哀願は虚空にただただ吸い込まれて消えていく。

マシナリーのように規則的な足裁きは時に体全体をまんべんなく痛めつけ、時に急所を的確に貫く。

龍之介は既に声も出せぬほどに弱っていた。

「あ……、くう……」

「ちよつとちよつとちよつと！ それ以上はいけませーん！」

耳をつんざく叫び声と共に土石流が龍之介を踏みしだく香織達を押し流す。桜の砂岩砲【さがんほう】である。

取り残された龍之介は真理亜の介抱（デ IPPキス）を受け、なんとか一命を取り留めた。

「たまにはダーリン以外の唇もいいものね。まあ、ダーリンの唇が一番興奮するんだけど」

「すまない、手間をかけさせてしまったな、真理亜」

「お礼は相手を見て言うものよ？」

「そんな過激な格好をした女性直視出来ません」

龍之介があさつてを見て真理亜に礼を言う間にも桜と愛子が異次元の穴から這い出て、フィリア城に大山財閥とその傘下が集結する。しかし、這い出て来たメンバーの中で愛子だけが緊張した表情で、その右手には冷気を宿していた。

「ん？ どうしたの愛子」

「伏せて！ 氷槍【ひょうそう】！」

真理亜達が言われるがまま地面にうずくまる中、愛子は右手の冷気を振りかざして氷の槍を窓に向けて放つ。

窓は見事に凍り付き、どう考えても使い物にならなくなった。

「あつ……ぶないわね！ 放つ時は放つって言いなさいよ！」

「本当だぜ、どうしたんだよ愛子、珍しく感情を表に出しちゃまってよ」

「気配がした。姿は見えないけど、確かに気配がした」

「なるほど。ま、念のために草木達に訊いてみるか」

海斗は先程凍り付いた窓とは別の窓から何かキラキラ輝く物を放り投げた。その後、振り向く海斗を待ち受けていたのは悲しいくらいに期待感のこもってない目だった。

「本当に役立つの？ あんたのその魔法。いつつも失敗するから全然信用出来ないんだけど」

「そりゃ都市の草木なんてたかが知れてるからな。だがここは全方位360度草木に包まれているからな、失敗は絶対にあり得ないし、つてか簡単な攻撃魔術なら失敗しねえし！」

「ふーん、ま、期待せんで待つとるでええわ。にしても、よう出来とるなあ、似合つとるで三人とも！」

言下、真理亜以下『ふたりはグラビア』のコスプレをした三人は顔を（特に愛子は今にも倒れそうなほどに）真っ赤にして体を手や遮蔽物を利用して隠した。真理亜を除いては。

「流石に真理亜は体に自信があるんやなあ。ま、冗談や。自分が開発に協力して忘れるわけがあらへんやろ？ でも流石は發明王の孫、平賀源次郎や。惚れ惚れする完成度やね」

平賀源次郎【ひらがげんじろう】。稀代の發明王と名高い平賀奇跡

の孫である彼は数多の近未来的な発明品を作り上げ、大山財閥の技術を密かに支えている。大山第一高校の地下広場もすべて平賀奇跡、源次郎の設計の元完成されたものである。

「それはそうと、真理亜。なんであんなん連れてくるの？ 拓真はどこに行つたのよ！ 答えなさいよ」

あんなんって……、と扱いの酷さにがっくりとうなだれて嘆息を漏らす。

一方、先程から肩を揺さぶられている真理亜はサジを投げたように「知らないわ」と言い放った。

「はあ！？ 拓真はあんだのダーリンじゃないの！？ あんだのダーリンが知らない女に種付けしててもいいの！？」

「良いわよ。私にも同じ量を注ぎ込んでくれれば。それにダーリンは既に十人も女性と関係を持つてるじゃない」

「言われてみればそうね……、もう、姉様達だけならまだしも、綾ちゃんや芹菜にも近親間でいちゃいちゃしたり、あんだとかハーピ―三姉妹なんかといちゃいちゃしてるし……。あ！ そうだバカ剣！ 拓真を知らない？」

ようやく拓真から渡された剣の事を思い出した香織は拓真がいつも呼び出すようにくすみのない白銀の刀身に黄金色の装飾が施された、円卓の騎士王が携えた聖剣エクスカリバーを手元に呼び出す。意思を持ち、人の言葉を理解する聖剣はとても拗ねた口調で、

「知ってるけど教えてやんないもんね。教えてほしけりや目の前に俺を突き刺して、『気高きアーサー王の携えし偉大なる勝利の聖剣エクスカリバー様、どうか愛しの拓真様の所在を教え賜え』と乙女チックにかしずくんだな」

その瞬間に香織はエクスカリバーを目の前に思いつ切り突き刺し、柄をギリギリ締め上げながら『気高いアーサー王とやらが使ってたっぽい安物の聖剣サマ、どうかあの女誑しのバカ犬の居場所をさつさと教えないとこの柄をへし折るわよ？』とどこまでもどす黒いオーラを醸し出しながらあくまで優しく囁きかけた。

「わ、分かったから。今相棒の居場所を割り出したから。え、ええっと、今相棒は、ウサギと一緒にアンアン言ってる！」

エクスカリバーを締め上げる強さが段違いに上がった。それは『早く本当の事を言わないと本当にへし折るわよ？』と香織の無言の主張だった。

「ほ、ホントだって！俺たちはバカ王子が主人だった時から嘘は吐いたことないんだぜ？ホントなんだぜ？」

「信用出来ないわ。あ、そうだ紅音、ダライにいっぱい海水を貯めて来なさい。きつと海水で洗えばどんな汚れもたちまちキレイになるでしょう。例えば性格の汚れとか」

「香織……、そんなことしたらエクスカリバーが可哀想やで」

「そう！紅音の姐さんは分かってるねエ！ぺちやぱいも紅音の姐さんの百分の一でも慈悲の心つてもんが……ってチヨットチヨット！折れちまうって！」

「誰が、誰が、だあれがぺちやぱいよオオオオオオ！」

がつん、がつん、がつん。鼓膜を破かんばかりの金属音を奏でながら激昂した香織はエクスカリバーの横っ腹を床に何度も叩きつける。見かねた真理亜は「いい加減にして！」と香織を怒鳴りつけた。

「なによ真理亜、今バカ剣の調教中よ。あとにして」

「ダーリンは女誑しじゃないと思うわ！」

「いやいや、ツッコむとこ違うって」

「どういうことよ！　と香織は叫ぶ。真理亜は遠い目をして語り始めた。

「確かにダーリンは誘惑に弱いかも知れないけど！　でもダーリンは手当たり次第に行為をしないし、したとしても責任はきちんと取るわ！　女誑しするのは責任も取れないくせに女っ気だけは1人前の低俗な人間の事をいうのよ！」

「そうなの？」

「そうなのよ。それにダーリンは好きな人には一生懸命なのよ？　12人に等しく一生懸命。他の人にはなかなかできないわね」

「一生懸命、か……、私にも一生懸命になってくれるかしら」

「もちろんよ。ダーリンは一生懸命に好きな人を守って、一生懸命に戦って、一生懸命に愛してくれるのよ」

そこまで語り終えた後、先程料理の支度をするよう伝達した側近が手負いの騎士団長を引き連れて大変に慌てた様子で扉を開け放った。

「ご、ご報告申し上げます、セリーヌ殿下。機械兵【マシナ・ソルズ】が城内に侵入した模様です」

謁見の間に緊張が走る。芹菜はすぐさま女王セリーヌの顔になり、現状確認を始める。

「対機械誤動障壁の状態は！？」

「発生装置が破壊されてます。エネルギー弾の痕跡から、機械兵の仕業と考えられます」

「住民の状況は！？」

「90パーセントの住民は無事に地下シェルターに避難させました。しかし、残りの10パーセントは捕縛されたと考えられます」

「シデール卿！ 勝利の騎士団【ヴィットーリア】は何をしてるのです！」

「我が勝利の騎士団【ヴィットーリア】はつい数十分前に全滅、見えぬ敵に次々と斬り殺され、私も殿下にご報告申し上げようと、命からがらここまで……ぐッ……！」

「見えない、敵……」

「そんな……機械兵相手でも常勝無敗を誇っていた勝利の騎士団が……全滅!?」

勝利の騎士団【ヴィットーリア】。植民地だったフィリア王国を独立させた、精鋭十数人で結成されるフィリア王国最強の騎士団のことである。

とはいえ、植民地時代は二百年前の話であり、現在はその子孫達が勢力を拡大しながらフィリア王国最強の騎士団という称号を引き継いでいる。

その最強の騎士団が壊滅したのだ、その強さを今いる中で最も知る芹菜にとってショッキングな出来事であるのは言わずもがなというやつだ。

「なら！ 僕達が立ち向かおう！」

「無理だわ、勝利の騎士団ですら歯が立たないのよ？」

「いいや、立てられなかったんだ。姿が見えなかったからな」

ごちゃっ。海斗の腕の中から無力化された小さな機械兵が出てきた。よく見れば体が半分消えかかっている。

「最強の騎士団の目をごまかせても、この海斗様の目はごまかせねえぜ！」

「成功したのね。珍しいことも起こるものね」

「だから失敗は無エつつてんだろぅが」

「やっぱり……、ステルス機能を持っていた」

「え、心当たりがあるんですか？ 愛子さん」

「異次元の扉を潜り抜ける直前に気配を感じた。ステルスを持ち合わせていた事くらい少し考えれば分かることだった」

愛子が苦虫を噛み潰したような顔で己の失態を恥じる最中にも、遠方の轟音が謁見の間まで響き渡り地面が揺れる。機械兵の侵攻は既に始まっているのだ。

「つまりコイツは真理亜の異次元の扉に紛れ込み、このフィリア城へ忍び込んで詳細な位置情報を垂れ流しつつナンタラの発生装置を壊していったと」

「でも、なんでここに来た瞬間、私達を殺さなかったのかしら。後々障害になることはわかりきった事なのに」

「優先順位があっただろう、ここに来て一番にする事はナンタラって装置の破壊だった。だから俺達に目もくれなかったんだろぅな」
「私も仕留めようとはした。でも逃してしまった」

若い男の断末魔、そして爆煙がこの謁見の間に流れ込む。近くに機械兵が迫っているのは言うまでもなく、香織達は戦闘の準備に入る。

「有機生命体ノ存在ヲ確認。速ヤカニ排除セヨ」

そして対峙する香織達と機械兵一個小隊。

開戦を告げるかのように遠方で十時を知らせる鐘が鳴り響いた。

第八章 ディアズの夜明けより科学を込めて（前書き）

ルーン文字を満を持して投入しました。

第八章 ディアズの夜明けより科学を込めて

「やっと起きたな」

次に起きたら目の前にメロディアの顔があつた。頭感覚から恐らく膝枕されてたんだな。可愛いやつめ！

「てかこの世界に来て何度目だ？ このパターン。――（正：三度目）

とりあえず起き上がり、先程ジュリアに引き裂かれた服を元に戻し、感謝の意を込めてメロディアの頭をぐしぐし撫でてやる。

「何時間寝てた？」

「ちゃんと時計を見てた訳じゃないから分からないけど、一時間と二十五分くらいかな？」

「寝た内に入らねえよ」

「あつちの部屋でローズ達が待つてるよ。姫も黒猫の舞の一員なんだから、作戦会議にはちゃんと出なきゃ」

俺は言い切った後にクスクスって笑って離れようとする、不届きな呼び方をしたメロディアの頭を軽く驚掴みにした。

メロディアはうにゅうーなどと言いながらじたばた暴れている。

「はなせー！ ふにゅー！ ちゅーつー！」

「誰が『姫』と呼ぶことを許容した？」

「じゅ、ジュリアちゃんだよ！ ばんばん呼んじゃって！ って言つてたんだよ！」

「俺の許可を取れよ。許可しないけど」

「分かったよ拓真！ だから放して！ 痛い！」

盛大に溜め息をついてメロディアの頭を放す俺。暫くローズ達から姫って呼ばれるんだろうなあ、なんて思っていたらメロディアが頬を可愛らしくぱんぱんに膨らませて近づいてきた。

「拓真、そこに座りなさい」

「もうすでに座ってますが？」

「とにかく！ そこに座るの！」

「は、はあ……」

これ以上口答えしたら危険だ。俺はメロディアが指差す所へと移動する、途端にいたずらっこが悪巧みしているような笑みを浮かべた。

「にひひ……。おしおき、おしおきっ」

「凄まじくいやな予感しかないんだけど」

その嫌な予感はあるにつけなく現実の物になる。

メロディアは俺の服の中へ潜り込み、首にしがみついたのだ。足はしっかりと背中に戻され、俗に言う『だいしゅきホールド』というなんか非常にマズい状況に陥った。

「ちょっと、止める！ 頼むから！ マズいって！」

「によほほっ！ これがおしおきなのだ！ さらに……」

なんだ？ メロディアの奴、急に黙りやがった。上目づかいで見つめるメロディア。そのまま膠着し数十秒、ああ可愛いなコノヤロー、食べちまうぞコノヤローとか思っていたその時、メロディアがいきなり首に顔を近付かせて首筋に吸い付き、比喻ではなくリアルに電流が全身に走った。

「これで、三人分のキスマークがついた。しかも消えない」

「真理亜達に見られるんだぞ。どうしてくれる」

「知らないもんね」

はあ……、どこかでスカーフでも買って首元を隠すか。とにかく、メロディアはやることに責任を持つことを覚えた方が良さだろう。

「よし、最後のおしおきね」

「なにされるんですか、事前に知ることが出来れば心構えが出来ますが」

「んー、じゃあキスしてよ、キス」

「はい、キスするのねー。って、え？」

あれ？ 今、この小娘、とんでもないこと言いやがったよな？ キスがどうだのって。

「早くう、キスしないとおしおき終わらないよう、作戦会議始まっちゃおうよう」

「なあーっ！ 分かったよ、分かったから首に吸い付こうとするな！」

再び首筋に近付かせるメロディアの顔を両手で挟み込み、半ば無理やり唇を奪った。メロディアは満足げににやついている。

「よし、おしおきプログラムしゅーりょー！ じゃ、ローズ達のところに行こっか」

「待て待て、このまま行くのか？」

「そうだけど、何か問題でも？」

いや、問題だらけなんだけど。まずローズ達に白眼視されただけ。しかし、メロディアの上目づかいを見ると、どうしても『NO』と

は言えない……。俺は静かに頷き、メロディアはきやつきやとまさしく子供のように喜んだ。

「によ！ やっぱり拓真は器が違うよね！」

「はいはい、さっさとローズ達んどこ行こうぜ」

「うんー！」

俺は覚悟した。ローズ達に嫌われる事を。とりあえず、黒猫の舞をクビになったらメロディアの婿さんになってやろうかな。

――――

いざローズ達のところに行ってみれば、反応は良好だった。

シルヴィア曰わく、メロディアが心底氣に入った存在じゃなければ絶対にしない行為らしい。

黒猫の舞のメンバー内でも、シルヴィアとローズしかしてくれないくらいにすごいことなんだそうだ。

シルヴィアとローズの服の中……羨ましすぎるぞ。

「それにしても、あのメロディアまでオトしちゃうなんて……。

やっぱり私が認めただけはあるわよね」

「これで拓真と交尾出来てないのは私とフランシアだけか。いいなあ、私も拓真と交尾したい！」

いや、してないから。勝手に犯罪者に仕立て上げるな。

「今は作戦会議の時間ですから、発情するのは避けて下さいね？」

「なによ！ 自分は拓真にじっと見つめられるだけで濡れるくせして！」

「な、何を言ってるんですか、ソフィアさん！？ そんな訳ないじ

やないですか！ …… そんなに見つめないで下さい、拓真さん」

シルヴィアは頬を染めてもじもじし始めた。とりあえず危険を感知した俺はシルヴィアの正面に座ることにした。

「んじゃ、全員揃ったところで始めますか」

満面の笑みで立ち上がるローズ。その他のメンバーも次々と立ち上がる、シルヴィアもハツとした顔をして慌てて立ち上がる。何を始めるって言うんだ？

「あーあ、もうおしまいなあ。いつそのことこのまま服を脱いじゃおうかな？」

「マジで止めてくれ、抑えられなくなる」

はい、と気の抜けた返事をして服の中から這い出るメロディア。その頬は軽く赤みを帯びていて、メロディアもシルヴィアほどではないが、もじもじしている。フランスアが退室して再び2人つきりになった時にはもう顔を真っ赤にしている。何でなんだ？

「どうした？ メロディア、具合でも悪いのか？」

「ち、違う！ これは風邪だぞ、興奮しているわけじゃないんだからな！ ゴホゴホ！」

メロディアはもっともらしく咳をして自分は風邪をひいてるんだぞとアピールする。でも、さっきまでの言動と俺の膝あたりに感じる暖かく湿った感触が、さっきの言葉を嘘だと言っているぞ？

「そりゃいけないな。で、どうすりゃ治るんだ？」

メロディアはさっきのシルヴィアのようにもじもじし始める、もはや悶々としていると言った方が正しいくらいのもじもじだった。そして数十秒後、メロディアは意を決したかのような表情をし、もじもじの原因を囁くように伝えた。

「キス……したい」

その瞬間に心臓がバクンと高鳴り、衝動に任せてメロディアを抱きしめて頬擦りしてやった。

「ああ、いっぱいしてやる！ 何度でもしてやる！ 舌も入れてやるからな！」

「にゅうう、拓真あ……。好き」

ひとしきり頬擦りをした後、すっかりメロディアと向かい合う。頬は軽く赤らみ、目には涙が滲んでいる。

ーバクン、バクンと心臓の音がやかましい。鎮めようと意識しても鼓動はなおさら高鳴り、思わず目を背けそうになり、気を確かにしてメロディアを見つめ続ける。

そして、俺とメロディアはお互いに目を瞑り、ゆっくりと顔を近付かせ合う。

と、ここまで完璧なムードを奇声が完膚無きまでに叩き潰す。

誰だよこんなムードをぶち壊す無粋な奴は……と思つて気怠げに目を開き、声が聞こえた方向、前方斜め上を見る。そこには両腕をクロスして構えているローズがいた気がした。

と、言うのもローズが見えたのはほんの一瞬だったのだ。

真後ろから物音が聞こえ、振り向いてばローズが真後ろでクロスしていただろっ両腕を広げていた。その両手には血が少し付いていた。そこまで認識した時、視界が真っ赤に染まり顔中に劇痛が走る。

「があああああ？！」

「メロディア！」

「ひゃうっ！！」

ローズは鬼の形相で睨み付けてメロディアを怯ませ、そのまま顔に掌打を食らわせメロディアをノックアウト。よく見れば顔面に肉球の跡があった。

「抜け駆けは禁止よ、一つはみんなで分け合っのが黒猫の舞の掟よ、忘れたの？」

「俺は物ですか？ 人ではなく物扱いですか？」

「人であろうと物であろうと分け合っのが黒猫の舞の掟なの。分かった？」

「はい……、分かりました」

メロディアは既に気絶していて、返事が無かった。

—————

先程の部屋は心臓の音すら聞こえそうなほど静まり返った部屋だった。しかし扉の外は先程の部屋とは打って変わって非常に騒がしかった。

所々で見る露店から、ここでお祭り騒ぎでもしてるんだろうか？

「ここはディアズの夜明けって言う数多くのレジスタンスの一つが拠点とする秘密基地よ。ディアズの夜明けは多分、ワールディアで一番の勢力を持つレジスタンスなのよ」

「へー、そうなのか。じゃあ、このお祭り騒ぎは一体？」

「祖国を失った喪失感とか絶望感とかを紛らわす為のフェスティバルのようなモノだよ。ただ反撃の期を持っただけの生活じゃ、心が潰

れちゃうからね」

そうか、ここにいる人達はみんな機械兵【マシナ・ソルズ】に故郷を奪われた人達なのか……。確かに、そう言われてみれば笑顔の中にちよつと陰りが見え隠れしているような気がする……。

「おい！ そのオマエら！ 見ない顔だな、名を名乗れ！」

そんな感傷に浸っていた俺を現実に呼び戻す、やかましい声が後ろから聞こえる。

俺やローズ達は黙って振り向くと、そこにはメロディアと同じかそれより少し上の年齢だと思われる、狐耳の男女の姿があった。

「見るからに怪しげな人！ さては機械兵の新型スパイだな！ 覚悟なさい！ 侵入者はこのリズムとスコア兄妹がやつつけるのです！」

まるで理不尽なまでに容疑を押し付けられているのだが……。

周りの人達もなんだなんだと騒ぎ出し、すぐに俺達を中心とした野次馬の

リングが出来上がってしまった。

「私達は前に申請した黒猫の舞よ」

「だが、黒猫の舞には男は存在しない！ なりすます人間を間違えたな！ スパイ共！」

「悪かったな、男がいて。俺は黒猫の舞の新メンバー、大原拓真だ。分かったら黙ってそこをどけ、萌えない狐耳」

俺は威圧的な自己紹介をして、威圧的な眼で男の狐耳を睨み付けた。しかし、男の狐耳は怯むことなく牙を剥き出しにして威嚇までし始

めた。

「お、やるのか狐耳。後悔するぞ?」

「狐耳って呼ぶな! 僕はスコア・ブレアってちゃんとした名前があるんだ! 食らえ! フレイム・クロー!」

先手を取ったのは男の狐耳、スコアだった。彼の攻撃は爪に炎を纏わせてひっかくようだ。俺はスコアのフレイムクローを難なく見切り、右手首を掴んで背負い投げ。そのまま叩きつけられたリズムは苦しそうに呻いている。

「お兄さま!」

「くるな! リズム! つく、これは、男と男の真剣勝負なんだ!」

おいおい、なんでそんなことになっている? 俺はただお前を背負い投げしただけだぞ。スコア。

「一対一の意地と意地のぶつかり合い! ここで助太刀を借りるなんて、男が廃るってやつだぜ!」

「お兄さま……」

「はいはい、熱いねえ。本当、暑苦しいくらいにね」

「うるさい! 男の格言をバカにするなあ!」

先程までうつ伏せで呻いていたのが嘘に思えるような大ジャンプを見せつけるスコア。

そのままリズムは両手に炎を纏い、エネルギーを放出させて俺の前で爆発させる。

フレイムクローにこんな派生技があるなんてな。後で俺も火炎球【ファイアボール】の応用技でも編み出してみようかな。

「どうだ！　これが僕の必殺技！　インパクト・フレイムクローだ！」
「下らねえ。こんなヌルい炎じゃ屠るところかヤケド一つ負わせられねえよ」

スコアには黒い物体が襲いかかって来たように見えただろう。俺はラグナロクを抜き、峰打ちでスコアを打ち上げたのだ。無抵抗なままスコアは上へ上へと吹き飛ぶ。

「俺を本気にさせたことは誉めてやろう。でも相手を間違えたようだな！　冥王の恐ろしさ、その身に刻みつけてやんよ！　蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

「ナメるな！　シューティング・フレイムクロー！」
「やめてえええええ！」

蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放つ直前、リズムに体当たりされ、仰向けに倒れたことで照準が狂い、スコアをかすって飛んでった。対するスコアの放ったシューティング・フレイムクローは突き飛ばされた瞬間、カクンと向きを変えて再び俺に襲い来る。それに気付いてないのか、リズムは俺の首筋に短刀を押し当てて動きを封じている。

「お、おい、後ろ、後ろ危ないよ」

「騙されませんよ！　そうやって逃亡を図ろうとしているんですよ！　息の根を止めますよ！」

「なんでそうなる、脅しかよ……」

「バカっ！　リズム！　追尾性能を忘れたのかッ！！」

スコアの怒号でようやく後ろを見るリズム。そこにはすでに目前まで迫っている炎の軌跡。

とつさの判断、つてのはこついつのを言っただよな。俺は身を翻し、リズムにのしかかる形になった。

その後、リズムが抗議する間もなく、背中に炎がぶち当たり、X字の傷が刻まれる。

焼け付くような痛みが背中を伝わり脳髄に突き刺さる。俺は歯を食いしばって激痛に耐えるのだ。

「がっ……ぐうう……!!」

「拓真!!」

「え、なんで……?」

「レディが傷つくのを黙って見てるほど、人間腐ってねえからな」

「コラー!!」　ウチの妹といちゃつくなあ!　ってわああああっ
「!」

わめいている割には情けない落ち方をしているスコア。ほんの片手間に空気のマットを作り出し、直後ぱすつと鈍い音を立てて着地した。高いところから落ちて死にそうになったのもあってか、軽く放心状態に陥っているようだ。

野次馬共はザワザワ騒がしくなり、「まさかあの紅焰の旋律が本領発揮する間もなく負けるなんて……」とか聞こえてきた。あれでも相当な実力の持ち主らしい。

俺は何がなんだか分からないといった様子のリズムを立たせ、スコアの所へ行くよう勧める。リズムはボケツとしているスコアを揺さぶり起こす。

正気を取り戻すや否やスコアは飛びつくように近づき、俺ですら見えない程のスピードで手を取る。よく見れば目が輝いている。どういふ風の吹き回しなんだ、スコア。

野次馬共も戦闘が終わったと同時に散り散りとなり、ローズ達も安全を確認したらすぐさま駆け寄ってきた。

「お見逸れいたしました！」

「は？」

「うわー、なんか大昔のヤンキー映画っぽいセリフ」

「お、お兄さま！？」

「あなた様の混じり気のない純粹な炎！ かすっただけでも大火傷なのに直撃したらどうなっていたことか！ 師匠様、いえ、アニキと呼ばせて下さい！」

「あ、いや、その……」

「是非に！ 是非に！」

鬼気迫る表情でアニキ、アニキと繰り返すスコア。そのあまりの勢いにうん……とうなずいてしまう俺。

その瞬間にスコアは満面の笑みで喜び、跳ね回って足を挫いた。仕方ないから、ヤケドも含めて治してやった。

「感激っス！ 流石はアニキ！ あ、ちゃんとした自己紹介がまだだった！ 自分はフレアホクスのスコア・ブレア。こっちが妹のリズム・ブレア。兄妹共々よろしくっスアニキ！」

「お、おう……」

あまりの嬉しさに周りが見えてないのか、スコアはアニキと言いなからノリノリでどこかへ行ってしまった。

一方、リズムはあのバカ兄……とつぶやきながら明らかな疑いの目を俺に向けている。

「バカ兄のことはともかく、大原拓真といましたね？ あなたは誰の許可を得てこのディアズの夜明けリシデア支部に足を踏み入れ、無事でいられるのですか？ 許可無きものがここに忍び込めば警備トルーパーに即座に排除されますよ？」

リズムはある一点を指差す。そこでは丁度血塗れの悪人顔した人間
がかなり重装備の獣人にエネルギー弾を受け跡形もなく消し飛んだ。
恐らく、受付の人を殺してまでここに入ってこれたのは良いが、許
可なんて当然取れるはずもなく、警備トルーパーに殺されただろ
う。

「知らねーよ、大体なんで俺がこんなおっかない所にいるかわから
ないんだぞ!？」

「許可なら私が取ったぞ」

言下にメロディアが肩車の要領で飛びついてきた。いきなり肩に重
量が掛かったんだぞ？ 本当にあらゆる意味で心臓に悪い小娘だよ、
全く。

それになんだかりズムも信じられないといった顔をしているが……。

「ベアトリス殿下！ ご無事でしたのですね！」

「心配かけたなリズム。でも大丈夫、心強い騎士たちが私達を助け
て守ってくれたから」

「ま、俺の魔法が偶然左右の壁を溶かしたただけなんだけどな」

「もー、照れちゃって！ このこの〜！」

ポンポン、と俺の頭を軽く叩くメロディア。なんだか嬉しそうだ。

「てか、メロディアとリズムってどんな関係なんだよ」

「私とブレア兄妹は主君と護衛騎士の関係なんだよ」

「護衛騎士は私とお兄さまだけなのです！ 私が言いたいこと、分
かりますよね？」

「あんたらはかなりの実力持ちってわけか」

「ま、結局一度は捕まっちゃった訳だけど、こんなに素晴らしいオ
スを仲間に出れたから結果オーライってことで。んじゃ、とんだハ

プニングがあつたけど、大原拓真の社会見学inジャンディア大陸をスタートさせますか！」

歓声を上げるリズム含む黒猫の舞のメンバー。俺も戸惑いながらも歓声を上げようとした瞬間、ふとちよつとした疑問が浮かぶ。

「なあ、確かジャンディア大陸って獣人族が主に生息してんだろ？」

「そうだよお。私の話をちゃんと覚えていてくれるなんて、拓真はえらいねえ」

「それはともかく、芹菜姉ちゃん……じゃないセリーヌ女王が治めてる、フィリア王国ってどの大陸にあるんだ？」

「そりゃ人間族の大陸、エレディアだよ」

え？ 俺、香織達と違う大陸にいるの？

「リシディアはジャンディア大陸屈指の都市……だったんだよ？ しつてる……わけないよね」

「まあ、都市と言ってもエレディアの未来都市、メトロンと比べたらかなり原始的だな」

俺は心の中で軽く落胆した。空間移動魔法は使えない訳じゃないが、どこに飛ばされるか分からない。いや、今となつては成功する確立は50：50って所まで上がってる。でもなるべく使いたくない。フィリア王国に来たは良いものの、戦火の中心にいるかも知れないから。

「じゃあ、空間移動魔法を使わずにエレディアまでいくにはどれくらいかかるんだ？」

「そうですね……私のように空が飛べれば3日と半日でエレディアに行けますが、船を使うとなれば、7日はどうしてもかかります

よ、愛しの拓真様」

「ま、そんなことは絶対にさせないし、そもそも船なんてこの状況じゃ出せるわけ無いもんね。でも大丈夫。拓真の恋人達の中がどれくらい気持ちよかったか分からないけど、私達の中もなかなか気持ちいいから、バンバン盛って良いからね？」

心の中の小さな落胆が、表面に浮かび出た巨大な絶望に変わった瞬間だった。香織達としばらくは絶対に会えない……。その事実が心に重くのしかかる、もうダメそうだよ俺。香織とキスしたいよ。

「泣いているのか？ 拓真」

「慰めてあげましょうか？ 拓真さん」

「泣いてなんかないよ、慰めはいらないよ、ニュアンスが違っ気がするから」

こんなにハートブレイク中の俺を見て発情出来るお前はある意味賞賛に値するよ、シルヴィア。

—————

その後、くよくよしてても仕方ない！ とソフィアに励まされ、なんとか元気を出した俺は、一人歩きから帰って来たスコアとそんな兄を咎めるリズムと共に、社会見学を開始する。

歩を進めながらローズはこの世界の魔法体系を教えてくれた。

「まず、魔法には三つの種類があつてね」

「三つの種類？」

「そ、拓真が使ってるような、威力は低いけど、魔力と魔粒子を引き寄せる力があれば誰にでも使えて無限の汎用性を持つ“口語魔法”、ごく少数の人が使いこなすことが出来る、威力もバリエーシヨ

ンもそこそこある“ルーン魔法”、魔人族にしか使いこなすことが出来ないといわれてる、未だ謎が多くて威力は絶大だけでも数多くの制約があって決して豊富とは言えない“陣中魔法”の三つよ」

「へえ、ルーンか。見てみたいな、ルーン魔法」

「私にお任せあれ、拓真様」

自ら名乗り出たフランシアは両手を前に突き出し、精神を集中するために目を閉じた。

「ウル・カーノ……炎よ、ファイア！」

瞬間、フランシアの手から小さな炎が発生した。フランシアはすごいどや顔をしている。

「どうです？　これがルーン魔法なのですよ、愛しの拓真様」

「すげーよ！　もっとデカいの出せねーのか！？」

「これ以上の魔法を発動したらもれなく私は排除されます……愛しの拓真様」

「あー、悪かった」

俺たちは再び歩を進める。しばらくはたわいのない会話が続いた。その途中、様々な色の石を売っている露店を見付けた。

露店内では筋骨隆々な簡潔に言って暑苦しい中年男性が声を張って客を呼び込んでいた。

「いらはい、いらはい！　ルーンストーンはいらんかね！？」

「ルーン……ストーン？」

「坊主、ルーンストーンも知らねえのか？　さてはオマエ、龍人族だな？」

「龍人族ってそんなに魔法に疎いのか？　ちなみに俺は人間族だ」

「こりや驚いた！ お前さん、ワールディアの常識も知らんのか？
こりや相当の箱入りか、訳アリの人みたいだな。ま、客は客なんだからいいんだけどよ」

がはははは！ と筋骨隆々な中年男性は豪快に笑う。このオッサンは奇異の目を向けられてもてんで気にしない性格らしい。

「じゃ、長くなるかも知れんが、我慢して聞いてくれよな。ルーンストーンってのは、読んで字のごとく石にルーンを刻みつけたものだ。だがよ、普通の石にルーンを刻んでもしよばい結果に終わるからこのようにフォトンストーンに刻みつけるっちゅうわけよ」

「ちよつと待った、フォトンストーンについて教えてくれ」

「そんなもんも知らんのか？ ま、教えてやるけどよ。フォトンストーンってのは特定の条件がいくつか揃って出来る、魔粒子【フォトン】がたくさん集まるフォトンフィールドにできる、フォトンの凝縮体だ。で、フォトンストーンには赤が火、緑が風というように属性があつてな、その色にあつたルーンを刻まないと反作用が起きて爆発するんだ。使用法はこいつに魔力を注ぎ込むだけ。カンタンだろ？ 魔粒子を自力で集められない人間族の生粋の科学力が生み出した魔導具よ！」

科学力？ 今、科学力がどうだのって言ったよな？

「なあ、ローズ。ワールディアでは科学が発達してるのか？」

「発達してるも何も、魔法は科学が作り出したような物なのよ？」

なるほど、この世界は魔法を科学する世界なのか。

魔法を科学で再現させるくらいだから、エネルギー砲とかあってもいいか。

「で、あんちゃん、なんか買っていくんかい？」

ムキムキのオッサンがフレンドリーな笑顔を見せて言い寄って来た。この露店では左端から右端に向かって強さの段階分けがされてるみたいだ、段階の高さに比例して値段も上がっている……みたいだ。

「急かさないでくれよ、今選んでる。んー、これは何？ 長ったらしいルーンが刻まれてるけど」

俺は一番右端に位置する、長いルーンが刻まれた赤い石を指差した。恐らくこの露店で一番強いルーンストーンの一つなんだろう。

「お、あんちゃんお目が高いね！ そいつはな、ウル・カノ・ベオーク・シルズ・ハガラースと刻まれているんだ。内容は無数の炎が相手の頭上に降り注ぐ、フレアレイン！ パワーレベルは5だから、500ルチアだ」

500ルチア……。ルチアなんてお金はもちろん持っている訳がない。俺は代わりに日本円である五百円玉を差し出した。

その差し出された五百円玉を見て、笑顔だったムキムキのオッサンは驚愕の表情に変わる。

「お、おお！ こ、これは、五百年前に二ホンと言う国で使われた、五百円金貨でねえか……！」

ムキムキのオッサンは盛大に声を荒げる。それはまさしく鶴の一声となり、周りから物凄い目で見られるようになってしまった。ローズ達を含めて。

「ウソ……、これってちょうど五百年前に消えたお金……、なんで

拓真が持つてるの?!」

「いや、俺の世界じゃ普通に流通してるんだけど。ってか、これってそんなに価値があるのか?」

「当然じゃない! それはルチアに換算して500万ルチアよ!

500万ルチア!」

「ご、500万ルチア!?!」

な、なんだ、その馬鹿げた値上がりようは!?! 文庫本もろくに買えない500円玉が500年も経てば凄い金になるんだな。ってか、今って西暦何年なんだ?

「西暦!?! それって昔の年の数え方じゃない!?!」

「心読んだな?」

「聞こえたんだよ。私、鼻と耳は凄いんだから。今は大陸歴150年になるんだけど、もし西暦が続いていたとしたら、2635年になつていたのかもね」

「……2635年……か。この世界は俺たちの世界から625年未来の世界なのか……」

「なんか言つたあ?」

「いや、なにも」

このことは伏せておこう。これ以上の混乱は避けたい。

そう思つたその時、ムキムキのオッサンは身を乗り出してきた。

「で、買うのかい? 買わないのかい?」

「買うよ、この縦列のルーンストーンを一個ずつ。お釣りはいいや」

「まいど! ちょっと待つてな、坊主、俺の取つて置ききのルーンストーンもオマケしといてやつからよ」

「い、良いのか? そんなの貰っちゃつても」

「良いつてことよ! 500万ルチア貰うんだからそれに釣り合う

物が無エとな！」

500円玉を受け取ったムキムキのオッサンはそう言って露店の奥に消えていった。

取り残されたブレア兄妹含む黒猫の舞はただ沈黙を共有し、ムキムキのオッサンが露店から出てくるのを待つしかなかった。

……と思われたが気まずい雰囲気はローズの俺に対する抱き付くという行為で呆気なく打ち砕かれる。

「スツゴいじゃん！ 拓真！」

「え？」

「小さな買い物を大金で払い、お釣り無しで良いって言うその心意気！ スゴく義賊的！」

「まあ、500円玉なら幾らでも持つてるから……」

「ウソ！？ それじゃあ拓真がいれば私達億万長者じゃない！ もう、拓真と出会って正解だったわ！」

ローズは愛しさを込めるように何度も何度も頬や首筋、唇に吸い付く。たまに唇に吸い付くとき、舌も入れてくる。

満足してローズが離れる頃には、頬は真っ赤に染まり、満面の笑みを浮かべていた。

「もう、放さないよ。拓真は私や黒猫の舞にとって王子様なんだから」

周囲から拍手喝采が波のようになだれ込む。今なら切腹できそうだし、いや、今すぐ切腹したい。

ムキムキのオッサンもヒューヒューと口笛もどきで冷やかしかかる。腰に帯刀しているラグナロクを一瞬抜きそうになった。

「お熱いねえ、俺も若いときはすごかったんだがなあ、がはははは！」

このままじゃムキムキのオッサンの思い出話を延々と聞かされそうだが、俺は早くルーンストーンをみたい！ と、ムキムキのオッサンの意識をルーンストーンに向けさせる。

「おう！ パワーレベル5のルーンストーン6つと、オマケだ」

そう言つてムキムキのオッサンはルーンが五つ刻まれた赤、青、緑、茶、白、黒の六色のルーンストーンと、これまた長つたらしいルーンが刻まれた六色のルーンストーンがガラガラと鈍い音を立てて露店の小さなテーブルにばらまかれた。

シルヴィアがその内の一つを手に取り、じっくり見回した途端、笑顔が一変、驚愕の表情を取る。

「な、何ですかこれ！ パワーレベル10の最上級ルーンストーンじゃないですか！！」

「それって凄いの？」

「当たり前です！ その威力の強大さから、プロテクトをかけるようお偉方から命令が下りるほどに凄いんですよ！？」

なるほど、そりゃ凄そうだ。

「おうよ！ さらにこのルーンストーンもオマケしといてやるよ」

そう言つてムキムキのオッサンは一瞬黒にみえたが、よく見ると紫色のルーンストーンを差し出した。

俺がそれを手にした途端、脳内に三首の番犬、ケルベロスの姿が鮮明に浮かび上がり、気付けば額に冷や汗をかいていた。

「凄いプレッシャーだろ？ これは俺の渾身の一作、サモンレベルは10、ルーンはアンサズ・シゲル・ティワズ・エオロー・ギョーフ・カノ・スリサズ・ラグズ・シルズだ。内容は三首の番犬を召喚するケルベロス！」

「け、ケルベロスうううう！？」

叫んだのは俺を除く黒猫の舞のメンバーとブレア兄妹である。さつきはパワーレベルがどうだのと言っていたがサモンレベルってパワーレベルと何か違うんだ？

「これはねえ、ただのルーンストーンじゃないんだよ。これはある特定の動物、魔物を召喚するルーンストーン、サモンストーンなんだ。しかも、サモンレベル10なんてサモンストーンの最高レベルで、これほどのサモンストーンはワールディア中にいくつもないんだよ？」

「そんなに貴重な物を……。ありがとう！ おやつさん！」

「良いつてことよ！ 俺はこのジャンディアーのストーンマスター、ジャンゴ・ギルバートだ。フォトンストーンさえ揃えてくれりゃあ、いつでもルーンを刻んでやるからよ！」

ムキムキのオッサン、改めジャンゴはとびきり暑苦しいウインクをかましてみせた。ブレア兄妹含む黒猫の舞のメンバーは引きつった笑顔のままその場を去っていくのであった。

—————

「ふいー、いっぱい買ったねえ。これも拓真のおかげだね！」

数時間後、黒猫の舞秘密アジトに戻ってきた俺たちはリビングのよ

うな一室にて一つのテーブルを囲むように座っていた。

こういう類のアジトは結構狭苦しいイメージがあったが、案外広々としていたみたいだ。

そもそも、ディアズの夜明け内に点在する個室は申請すればマンシヨンの一室のような団体でも余裕に暮らせる部屋に変わり、親切にもメンバーの人数分の部屋を用意してくれるというシステム付き。お金はもちろんタダ。素晴らしいものだ。

ってか、ここには誰一人としてローズ達黒猫の舞を蔑むような目をしていなかったみたいだが。

「このレジスタンスにいる全ての人が平民ないしは貧民、元奴隷の人達なんだよ」

「だから私達は威張り倒してる貴族の人間からお金や貴金属を徴収して、ここの人達にばらまくワケ。弱きを助け強きを挫く、これが黒猫の舞のポリシーなのよ！」

「まるで鼠小僧だな」

「呼んだか？」

「いや。遙か昔に活躍した鼠小僧っていう伝説の義賊がいるんだ、知ってるか？」

知らないいとメロディアは無関心だと言わんばかりに返事する。

ちなみに、メロディアが今いるところは俺の服の中であり、なんと衣服を着用して無いのである。まあ、ちよつと生々しいカイロなんだと考えをシフトしよう。じゃないとすぐにでもメロディアを襲っちゃいそうだ。

「で、次のターゲットなんだけど……」

室内に緊張が走る。ローズはブレア兄妹を含むメンバー全員を見回し、何やら黒い鉄板をテーブルの上に置いた。

なんだこれとはローズに訊けば、ローズはニヤニヤしながらローズから見て右下端のスイッチを押した。

瞬間、ブイーンと起動音を立てながら色とりどりの半透明な物体が生えてきたのだ。SF映画でお馴染みのホログラムというやつだろ
う。

……なにやらヨーロッパ周辺が切り離されて少し形が変わったような大陸が大きく描かれてるようだ。

「ここは？」

「ジャンディアよ。で、目的地が……」

ローズは再びスイッチを押した。すると緑一色だったホログラムに城らしき建築物や家の群とか港など主要な施設などが浮かび上がり、最後に森らしきところにボタン印がついた。ここが目的地なのか？

「今回のターゲットはシルニドの森の主、獄炎龍【インフェルノドラゴン】から灼熱のルビーを奪い取ることよ！」

その瞬間、俺とローズを除く全員が顔を真っ青にする。そんなに恐ろしいのか？ 獄炎龍ってヤツは。

「恐ろしいってものじゃないよ！ 凶暴性こそ無いものの、単純な力だけなら、混沌龍【カオスドラゴン】のそれを上回るんだよ！？」

勝てつこないよ！」

「上等！ ルーンストーンとかケルベロスとか色々試せるじゃん！」

「流石は黒猫の舞の戦闘員だね」

獄炎龍がどんなに強いかはイマイチよく分からなかったが、負ける気はしない！

「今回はリユーイチからの指令です。もし出来ないと判断したら棄権することも出来ます」

「冗談じゃない！ 獄炎龍が何か知らねえけどな、逃げることだけは絶対にしたくねえ！ 行こう！ みんな！ 獄炎龍は俺一人でやってやる！ ドラゴンスレイヤーになって、ついでに灼熱のルビーもゲットだ！」

「さっすが拓真！ その調子で目指すはワールディアーの義賊よ！」

嬉しそうな表情をしてローズが飛び付く。俺はそんなローズの顎をくいと上げて一瞬だけ唇を押し付ける。一度はやってみたかったんだよなあ。これ。

これで獄炎龍周辺の座標は手に入れた。後は瞬間移動の魔法陣を展開して、その座標とここを繋げ、転移させる対象を選んで発動するだけ！

眩い光が床から迸り視界を真っ白に染める。

真っ白な光が収束を始め、数秒経って完全に消えたとき、何者かの咆哮を耳にする。

よく考えれば遠くは日光が差し込んであたりに光を撒き散らしているが、ここだけはなんだか暗い。

俺はゆっくりと目線を上げる。そこで見たのは、体長5メートルはありそうな赤い鱗を持つ西洋の龍だった。まさかこいつが獄炎龍？ だとしたら……。

「なあ、みんな。これは……言わずもなあってヤツだよな」

「ああ、最悪のスタートだな」

いつの間にかソフィアが眼帯を付けて仕事モードになってる。なんて思ってたなら、再び咆哮を上げる。

「立ち去れエ！ ここは我が獄炎龍【インフェルノドラゴン】の聖

域なり！　ここを侵す者、全て灰にしてくれよう！」

大きく息を吸い込む紅龍、その隙に俺はラグナロクを抜き、地面に突き刺す。

そして紅龍がぐわつと口を開けた瞬間、猛烈な風が吹き荒れ、ロース以下八名を紙切れのよう吹き飛ばす。

「今のは警告だ！　次は我が誇りたる獄炎の息吹【インフェルノブレス】を放つだろう。森もろとも灰になりたくなくばとつと何処かへと逃げ果せるが良い！」

「放つて見るよ！　本当は森もろとも自分が燃え尽きるのがイヤなんだろ？　ヘタレ龍め！」

「姫！　いくらなんでもそれは無茶だよ！」

「ほお、度胸だけは一人前だな小童。良いだろう、この獄炎龍を挑発した愚かさ、己が身に刻みつけるが良い！」

獄炎龍は再び息を深く吸い込み、今度は炎を吐き出す。

流石は獄炎龍なだけあって視界一面を巨大な炎が埋め尽くす。

すぐ後ろにいるローズは慌てふためく中、俺は慌てずに腕を前へ垂直に突き出す。

数秒後、獄炎の息吹が俺の手にぶつかった瞬間に炎が収束し、吸収されていく。が、獄炎の息吹をナメてかかっていたみたいだ。じりじりと押されてしまう。でも負けてられねえ、負けたくねえ！　俺は重心を低くして押し返す態勢に入る。

獄炎の息吹も終わりに向かって勢いを増してくるが、なにくそと叫びながら力を込めて押し返す。

その内に炎の勢いが弱まり細くなって、遂には消えてしまう。

「ウソ……、獄炎龍の獄炎の息吹を受け無傷なんて……。スゴすぎる！」

「フン、息巻くだけの事はあるな、小童。ここに足を踏み入れた理由を聞こうかな」

「お前を倒して強くなる！ ついでにその灼熱のルビーを頂く！
それだけだ」

「はっはっは！ 面白い！ ここまで真っ直ぐな人間はいつ振りだろうか！ 良いだろう！ ドラゴンスレイヤーの証と灼熱のルビー、欲しくば私に打ち勝ち、認めさせてみる！」

獄炎龍は思い切り右前足を振り上げる。瞬間、俺とローズの間に炎の障壁が発生する。その炎の障壁に注目し過ぎて、獄炎龍がその手を振り下ろした事に気付けなかった。

そして、獄炎龍の右前足が俺ごと地面を穿った。

第八章 ディアズの夜明けより科学を込めて（後書き）

オリジナル文字説明。

シルズ：世界がワールディアと呼ばれるようになった未来で使われるようになった、闇を意味するルーン。ルーツは闇の精霊を意味する英語の s h a d e （読み：シェイド）

後々どんなルーンなのか別の機会に挿し絵として掲載するかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573m/>

Doors To The Another World

2011年11月7日23時08分発行